

522-146□



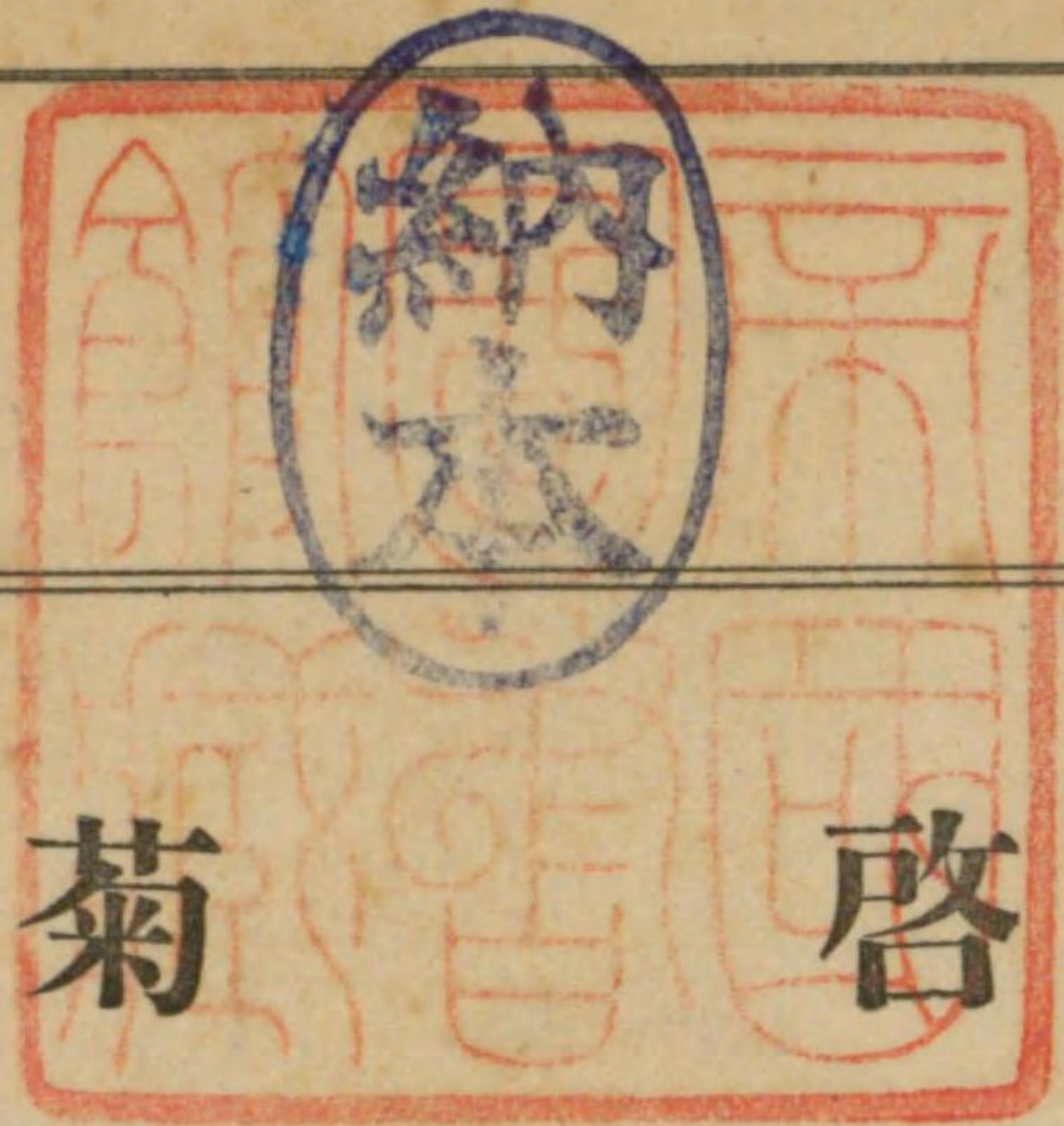
1200501491646

22

1469



7.7.28



菊 啓

池 吉

寛 物

著 語



522-1460

短篇集「啓吉物語」目次

盗	み	一
まどつく先生		六
青木の出京		三
祝	盃	三
将棋の師		三五
天の配劑		三九
從	妹	四三
無名作家の日記		五四
葬式にゆかぬ譯		七四
大島が出来る話		九二

父の模型		一〇一
盗人を飼ふ		一一五
R		一三三
盗者被盜者		一四〇
出	世	一五四
我	鬼	一六三
妻の非難		一六八
啓吉の誘惑		一七一
肉	親	一八九
跋に代へて		(了)

改造社縮刷版

啓
吉
物
語

題
句
並
に
題
字

芥
川
龍
之
介

盗
み

私は、十三のとき、昔の制度で、高等小學校の二年生のとき、友達から盗みをするのを教へられた。

その友達は、香川と云つて、才ばしつた少年であつた。どんな機會に、どんな風に教へられたのか覚えてゐない。とにかく、香川は私に、商店の店頭にある品物を、盗むことを教へて呉れた。そして、それをマイナスと云ふのだと教へて呉れた。マイナスと云ふのは、即ちその頃、覺えた、算術の符號で、引くと云ふことなのである。つまり、店頭にある品物を引き取ると云ふ意味なのである。

私は、マイナスと云ふ言葉と、その仕事とをどんなに珍しがつたか分らない。マイナスと云ふことが、つまりあの家庭や學校で、蛇蝎のやうに卑しむ盗みと、同じであるなどは、私は考へつかなくつたやうである。

私は、早速そのマイナスをやつた。今でも、私の郷里の町にある宮崎と云ふ大きな書店で、一冊の「日清戦争實記」を、マイナスした。明治三十三年頃のことだから、「日清戦争實記」も古本であつたに違ない。私は、店のはづれに置いてある、

その本の堆積の上に、上半身を掩うて、一番上の一冊を見るやうな風をしながら、その下の一冊を、私の膝の方へ滑らした。そして、それを着物の膝の下へかくすと、素早く店頭を離れた。私は、直ぐその足で、香川を尋ねて報告した。香川は、私の大膽さを賞めてくれた。私は、非常にそれが面白い冒險的な仕事に思はれた。

私は、直ぐその面白い冒險を、私の家の近所の遊び友達に教へた。私の親類に當る計太や、東京から來てゐた中學校の先生の息子の敏夫や、町の工藝學校の小使の息子の保吉に教へた。みんな、この新しい遊戯をどんなに、面白がつたか知れない。それは、その仕事その物が、冒險であるばかりでなく、ちやんと貴重な收穫があるからだつた。私は、銘々その技に熟練を競うた。計太が、五錢のものを取ると、私は十錢のものを取つて、彼に見せびらかした。すると、その翌晩は、計太が二十錢のものを取つて、私に見せた。世の中が、今ほどは世智がなくなつたのだらう。私は、町中を遠慮なく横行することが出來た。一の玩具屋の同じ棚から、私達の仲

間が銘々に同時に、一つ宛獲物をさらつて出て來たりした。丁度、その頃私の町に、あの深川言葉が、流行つて來た。深川言葉と云ふのは、一つの音の下に、それと同じ段の力行なり、ナ行なりの音を加へて話をする方法で、「お前」と云ふのを、「オコマカエケ」と云ふの類である。私達は、その言葉を、早速私達の黨類の隠語にしてしまつた。

私達は、その隠語で、盛に我々の仕事の話をした。毎日、夕方になると、私達は此方の辻、彼方の辻に寄り集つて、その晩の手管を、隠語で話し合つてから、その夜の襲撃に出かけた。ほんとうに、襲撃だ、冒險的で、ロマンチックで、不安と希望とで心が躍るのだから。

私は、ある晩、町の水神さんのお祭りに行つて、露店の果物店で、桃をマイナスしようとした。私が、その仕事に掛つてゐると、私の横に並んでゐる私と、同じ年位の美しい少女が、私と同じやうにモチ／＼してゐる。蛇の道はへびで、私は直ぐ、その少女の舉動不審を感じた。私は、自分の仕事を忘れて、その少女を注視してゐた。すると、その少女の白いしなやかな腕が、一つの大きい桃を掴んだかと思ふと、鼠が物を曳くやうに、徐々にそれを白い浴衣の上前の後へかくした。私は、それを見て何う感じたか、思ひ出せない。美しい少女の同類が居るのを知つて、微笑を洩したか、それとも、自分のする事を、人がして居るのを見て、あさましく思つた

ぶされた父は、火のやうに怒つて、玄關に立つてゐる私を、つゞけざまに殴つた。玄關には體操用の銃器を並べてあつた。私は、父に小突かれたために、その銃器の金物に、いやと云ふほど、頭をぶつつけたので、その方が可なり痛かつた。

家へ歸つたとき、父はまた煙管で私を殴つた。

「萬引をしてゐたんぢや此奴は、萬引を」

さう云つて、父は口惜しさうに、母に報告した。私は、小さい時から、小説や講談が好きなので、講談などで、毒婦などがよくやる萬引と云ふことを知つてゐた。私は、自分のしてゐたことが、その下品な怖しい言葉で、説明されたので、ハツと思つた。母は泣きながら云つた。

「お前は家では、一錢のお錢だつて、だまつて持つて行かんのぢやから。こなゝ事しようとは、夢にも思ふとらなんだ」私は、自分がやつてゐたマイナスと云ふことを、父や母の云ふやうな賤しい怖しいことゝは考へられなかつた。いな少くともそのときまでは、考へてゐなかつた。

その日から、四五日私は學校へ行けなかつた。そのあくる日の朝、私はよつほど、氣が轉動してゐたと見え、母の手鏡を踏み割つた。母は何時になく險しい眼で、私を見た。

その後、私は自分の行爲に對する罰を、いろ／＼な形式で、受けた。私の親類の計太は、私と同じ教室であつた。習字か何かの時間に、彼は悪戯をして、先生に叱られた。強情

か、前のやうであつたやうに思ふし、後のやうに感じたやうにも思ふ。とにかく、何だか怖しくなつて同じ店で桃を取らなかつたこと丈は記憶してゐる。

私達のマイナス行は、一年近くもつゞいた。殊に、工藝學校の小便の息子の保吉は、單獨行動を始めて、だん／＼金高の嵩む品物を取つてゐた。その頃、珍らしいハイモニカを取つたり、櫻井鷗村の冒險小説のシリーズを揃へたりした。私達は、何だか恐くなつた。

「保吉のやうな事をしたらいかん。あんな高い物を取つたらいかん」

私達は、そんなことを云つて非難した。何だか保吉丈が、悪人のやうな氣がした。

私達の非行が、學校へ知れたのは、私達があまり、マイナスをやらなくなつてゐたその年の秋の終りであつた。私達の仲間の敏夫丈は、師範の附屬小學校へ通つてゐたが、何か別な事を調べられたとき、喋べらないでよいマイナス行を喋べつたのである。

附屬小學校からの通牒があつたので、私達の犯罪は直ぐ分つた。私は筆と紙とを與へられて、自白を強ひられた後、學校の玄關へ立たされた。筆紙を與へられたので、何だか大罪が發覺したやうな氣がして怖しかつた。

私の父は、當時その小學校の事務係をしてゐた。面目を潰な彼は、二言三言口答へをした。先生は怒つて云つた。

「何を云ふんか。お前は、コレをした人間ぢやないか」

さう云つて、先生は右の手の人指し指を曲げて見せた。計太の直ぐ、近所にゐた私は、カツとなつて暫くの間は、顔を上げるものが出来なかつた。

三年になつて先生が變つたが、その先生も絶えず、私に侮蔑の眼を送つた。「盗みをした子だ」そんな意味が、絶えずその眼の裡によめた。

その先生は、生徒の行狀を一等、二等、三等に別けた。名札を三等に別けて、教室の壁にかけた。三等丈は、黒札に朱で名前をかいてあつた。そればかりでなく、運動場へ出るときは、三等者は、その札を首に吊つて出る規則だつた。私は、前年の非行のために、三等に編入された。そして、當分の間であつたが、安達ヶ原の宗任のやうに、札を首に吊つて運動場をかけづり廻つてゐた。

その先生は、何かのときに云つた。

「人間は氏より育ちと云つて、士族の息子だつて性根の曲つてゐる奴は曲つてゐるのだ」

田舎の町では、まだ士族と云ふことが問題であつた。私は、それを自分に對する攻撃であると解せずにはゐられなかつた。

さうした侮辱は、私の小さい心には可なり徹へた。私は、

マイナスと云ふことを、そんなに悪いことゝは、思へなかつたが、その罰の怖しさにこり／＼したのである。

たゞ、私の級の少年達は、みんな寛大で自由であつた。彼等は、私の行爲に對して、大人が持つてゐるやうな概念的な非難などは、少しも持つてゐなかつた。黒札を吊つてゐる私を、喝采こそすれ、侮蔑するものなどは一人もなかつた。私は級の中では、人望もあり何かの場合には、肝煎役などになつてゐた。

私は、中學時代を大過なく過した。たゞ、青年時代を通じて「盗み」と云ふことが、人並以上に怖しかつた。私はその嫌疑のかゝることさへ怖しかつた。だから、私は小學校以來、書店の店頭などに立つたことは決してなかつた。私は他人のものなどには、指も觸れないやうにした。そんな意味で、破廉耻罪の關する限りでは、何人よりも身を慎しみ通したと思ふ。

二十年近く経つた。四五年前の事だ。新聞記者をしてゐた私は、本郷三丁目の角の長島と云ふ洋物店で、手袋を買つたことがある。店員は、私が選んだ手袋を紙に包んで、私に渡すと、私の渡した紙幣につり銭を呉れるために、奥へ引つ込んだ。

氣短で、ムラ氣の、いつも何かしてゐたい私は、一旦包んで呉れた手袋を、また包み紙から、取り出して見て、それを

今度は紙に包まずに、無雑作にズボンのポケットに押し入れた。その途端に他の店員が、私の方をチラリと見た。彼は、險しい眼付をしたと思ふと、いきなり私の前に置いてあつた幾つもの手袋を、手荒くしまつた。

「早く品物をしまはなけりや駄目ぢやないか」

彼は、つり銭を持つて来た小僧を叱りつけた。私は、顔を逆さまに撫でられたやうに、カツとした。

「何だ！ 僕が、手袋を盗つたとても云ふのか。調べてくれ。これは、今買つたんだぞ。見ろ！ 見ろ！」

私は、眞赤になつて手袋を突き付けながら、怒鳴つた。

主人や、奥に居た店員が、出て来て詫びを云つた。人だかりがしたので、私はさう／＼に其處を出た。私は、口惜しさと、ムカ／＼した。が、冷靜になつて、考へると、やつぱり二十年前の古傷が、血を吹いたのだと思つた。

それから、二三年経つた。私は、新聞記者をよしてゐた。

私は、ある日、本郷の大學の正門前の古本屋で、日本文學全書の「榮華物語」を初め四五冊古本を買つた。私は代價を拂つてから、それを一まとめにして、脇にはさむと、自分の家の方へ二三町歩いた。其ときに、ふとその一まとめの古本の一番下に、自分の買ひもしない本が、交つてゐるのに氣が付いた。私は、あわてた。それは「韓非子講義」と云ふ表紙のとれてしまつた本だつた。

私は、先刻金を拂ふときに、自分の買った本を、まともに店に並べてゐる本の上に置いた。そして、今度持ちあげるときに、餘計に一冊取り上げたのである。私は、何かの本で、東京の不良少年が、パクリをするとき、それと同じ方法を用ゐることを讀んでゐた。私は、無意識の裡に、同じことをやつてゐたのだ。

私は、その本屋の主人とは、一面識があつた。私は、ひき返して行つて、

「間違つてこの本を持つて行つたよ」と云はうかと思つた。が、それが妙に、こだはつて出来なかつた。まさか、本屋の主人だつて、二三十錢もしない汚い「韓非子講義」を、私が盗んだとは思ひはしない。さう思ひながらも、私は恬淡に返しに行くことが出来なかつた。私は、思案をしながら、店頭その本を、自分の家へ持つて歸つた。持つて歸つたものゝ、その本を持ち扱つた。私は郵便でそつと本屋へ送り返さうかと思つた。が、そんなことをすると、却つて本屋が不思議がるに違ないと思つて、さうすることも出来なかつた。

私は、机の上へ置いたり、本棚の上へのせたりしても、何うしても氣が落付かなかつた。

私は、押入を開けて、そして反故や古雑誌が、亂雑に積み重つてゐるのを、掻き分けて、一番下へその「韓非子講義」を置いた。かうして置けば、誰もが「韓非子講義」を、私が

取つたことに氣が付くまい。さう、自分の心を休めたが、一月位は、その二三十錢しかしない古本が氣にかゝつて仕方がなかつた。

まどつく先生

「今私が電車から降りる時、擦れ違ひに乗つた西洋人があるでせう。あれが、まどつくと云つて、私達が高等學校時代に教はつた先生です。一寸押し出しのいゝ立派な西洋人でせう。脊が思切り高くつて、色が白くつて、ピカ／＼銀のやうに光る鬚を貯へて居る所など、仲々立派な風采でせう。英國人——と云つても、嚴密に云へば愛蘭人です。何でも愛蘭土の名門の出だとかで、純粹な英國人に見るやうな冷めたい敏捷な所はなく、何處かおつとりとした上品な所があつて、人格上から云つても立派な紳士です。」

「愛蘭人ですから、従つてバアアアドシヨオヤオスカアワイルドなどと同郷なのです。何時かも教室でワイルドの話が出た時でした。何でも私が、自由會話の時間か何か、つい讀み了つたばかりの『サロメ』の筋を、得意になつて喋べつたのです。すると、もう六十に近かつたまどつく先生は、その薄緑色の老眼を、活々と輝しながら、(お、オスカアワイルド。私はダブリンで、ワイルドを見た事がある。もう、三十年も昔の事だ。彼は胸に向日葵の花を付けて、往來を潤歩

して居た)と、云つた事がありました。恐らく、同郷の天才作家の名が、異郷の學生の口の上つたのを聽いて、餘程嬉しかつたのでせう。その頃ワイルド崇拜に囚はれて居た私は、ワイルドの傳記や評論を、手當り次第に讀んで居ましたが、此のまどつく先生の、*"I saw Oscar Wilde in Dublin."*と云ふ數語ほど、ワイルドに就ての靈活な印象を僕に與へたものはありません。

「今、お話ししました通り、上品ないゝ先生ですから、その時間には定めし神妙にして居たやうとお考へてせうが、何うして何うして、随分惡戯をしたのです。こんな懺悔話がある位です。お話しませうか。」

「元來私は、學生時代には教室破りの惡太郎でした。語學の時間など、來ては詰問係と云つたやうな格で、虎視眈々として、先生の思違や誤譯を狙つて居たのです。それで、先生が少しでも蹙くと、鬼の首をでも取つたやうに、眞面から詰問——と云ふよりも、寧ろ詰問に——かゝつたのです。それが、又内心得意であつたのですから、今から考へると、

冷汗ものです。が、さうした詰問の機會のない時間などになると、又頭から全然先生を茶にして居て、時間潰しに教室へ顔を出して居るのに、過ぎませんでした。まどつく先生のやうな、濃厚優雅な老先生でも、その頃の私にかゝつては堪りません。尤も、惡戯と云つても、中學時代のやうに教室でワイ／＼騒ぐとか黒板のチョークを隠すとか、そんな形而上の惡戯は、やらないのです。たゞ、先生に對する心掛が、極端に不眞面目なのです。殊に、私なんかは、次の時間が、まどつく先生だと分ると、よく同類の近藤哲夫と云ふ男に、「おい頼んだぜ」と、目くばせをすると、グン／＼寄宿舎の方へ歸つて來て、其處に敷き放してある床の中に潜り込みながら、ボンヤリ一時間を過してしまふのが、好きでした。尤も、後に踏み止まつて居る近藤が、出席を調べられる時に、二人分の返事をするとは無論です。所が、近藤と私とは、三番に五番と云ふ近所ですから、自分の返事をした後で、僅かに一人隔いて、直ぐもう一度他人の返事をする云ふ事は、一寸際どい藝當です。可なり膽力と機敏とを要する仕事です。が、近藤も私に劣らぬ教室の猛者ですから、仲々心得たものです。何時かも近藤が、

「僕は、自分が、呼ばれた時は、ヒアサアと云ひ、君の時には、プレゼントサアと云ふんだよ」と云ひましたが、そんな臨機應變の處置には、随分馴れ切つたものでした。

「が、幾何私が怠け者だと云つて、まどつく先生の時間は、何時も教室に姿を見せなかつたと云ふ譯ではありません。私と近藤との仲は、對等な互助關係でしたから、近藤が一時間返事をして呉れれば、其次ぎの時間には、私が出席して近藤の返事をしてやらなければなりません。尤も、私が出席する時には、近藤のやうにヒアとプレゼントの使ひ分けなどはやりません。もつと、圖々しく遠慮なしに、堂々と二人分の返事をしてしまふのです。何に、判つたつて、外國人の事だ、何うにでも胡麻化しが付くと、高を括つて居たのです。」

「が、一人で二人分の出席をして居ると云ふ事から、偶には色々な不都合な事が起つて來ました。夫は私が出席する順番に當つて居た時間でした。何時もは、生徒を指名して質問する事などの極めて稀な、まどつく先生が、その日は珍らしく出席簿に依つて、生徒の名を呼んで起立させました。私は、自分の名が呼ばれるのは、平氣でしたが、若しや近藤の名が呼ばれはしないかと、内心少しはビク／＼して居ました。が、呼ばれたら替玉になつて、起立してやらうと思つて居ましたから、それ程狼狽もしませんでした。」

「出席簿から、彼方此方と、氣紛れに指名して居たまどつく先生は、四五番目に『ミスター近藤!』と到頭近藤の名を、呼びました。私は、案外平然と起ち上りました。級の人達も、我々不眞面目な連中のかうしたトリツクには、馴れて居るの

て、さう騒ぎはしません。二三人の人が、振り返つてジロジロ僕の顔を見る丈でした。

「温厚優雅なまどつく先生は、その時起ち上つた僕が、近藤哲夫である事に就て、少しの疑念も挟みませんでした。何時ものやうにおつとりした口調で、

『君は文學志望か、それとも哲學志望か』と、訊きました。お断りして置きますが、無論英語で訊いたのです。

『哲學志望です』と、私は落着いて答へました。すると、何と思つたのか、まどつく先生は、ニコ／＼笑ひながら、

『なるほど、君のお父様は、生れた時から、君に哲學を學ばしめる積だつたのですね。君の名前が、夫を語つて居る』と、云ふのです。私は、夫を聞いて一寸面喰ひました。私の父親は軍人で私が嫌だ／＼と云つたのにも拘はらず、危く幼年學校へ押し込めようとした事はありますが、息に哲學をやらせようなど云ふ意志は、夢にもなかつた筈です。それに、私の名前の木村健吉と云ふ字の何處に、哲學らしい匂が、含んで居ると云ふのです。私は、全く面喰つてしまつて、常から會話には、内心得意であつたに拘はらず、その時ばかりは、グウの音も出ないのです。するとまどつく先生は、もどかしさうに、

『何故つて、君の名前が哲學志望を語つて居る』と、かう繰り返すのです。健吉と云ふ名前が、何處に哲學志望を語つて

其時は、まさか替玉ではなかつたと思ひますが、やつぱり會話の時間で水泳の話が出ました。私は（自分は瀬戸内海の漁夫の子に生れたのだから、水泳がうまい。一時間に、八哩は泳げる。）と出鱈目を云ひました。どんな水泳の名人でも、一時間八哩は、さて措いて、その半分の四哩も難しいでせうが、まどつく先生は、スツカリ本當にしてしまひ、

『君は駭くべき泳手だ』とか、何とか云ひながら、頻りに古い記憶を辿るやうにして居ましたが、

『さう／＼、世界のオリムピックの記録は確に、一哩十七分だ。夫に比べても駭くべきほど早い』と、云ひながら、その大きい眼を刮きながら、無條件に感嘆してしまつたので、道の私も恐縮してしまつた事がありました。

「かう云ふ譯で、私は上品な紳士たるまどつく先生を、頭から茶にして居たのです。その裡に、この懺悔話の本筋である次のやうな事がありました。

「夫は二年の三學期の事でありました。何でも六月の初で、もう試験が一週間の後には始らうと云ふ頃でした。或る日、まどつく先生は何時もより元氣の無さうな顔で教室へやつて來ましたが、出席簿を調べて濟むと、直ぐ『之から三學期の試験をするから』と、云ひながら、豫ねて用意してあつたらしい問題と試験用紙とを配り始めたのでした。私達には、全く意外でした。何時も、ちゃんと學期試験

居るかなあ？と、私が自分の頭の中で急しく反問しながら、ボンヤリ立つて居ますと、僕の横に机を並べて居る村松と云ふ男が、

（馬鹿、馬鹿。貴様の名は近藤哲夫ぢやないか、音痴／＼）と、云ふのです。音痴と云ふのは、僕達の仲間では、馬鹿の同意語であつたのですが、如何にもその時の僕は音痴に相違なかつたのです。やつぱり、人間は根が正直なもので替玉に立ちながら、何時の間にか本當の自分になり切つて居た譯です。如何にも、近藤哲夫と云へば哲學に關係のない譯はありません。教室では、日本語などは囁にも出ませんが、その方面に深い造詣を持つて居ると云ふまどつく先生が、考へさうな事なのです。が、私は先生の質問の意味がハツキリと解ると、間髪を容れずと云ふ敏捷さで——と、云つて最初から時間を入れると餘り敏捷な返答でもありませんが——

『Yes, I have had a philosophical tendency from my childhood.』云うです。私は子供の時から哲學的傾向を持つて居ました』と、突嗟に答へました。私が、替玉として間違付きながら、而も鮮かに此の難關を切り抜けたことに對して、級の連中は、わつ／＼とばかり賞讃の哄笑を擧げました。私は、内心得意でしたが、其爲に、私はまどつく先生に近藤哲夫として覺えられてしまつて随分後で困りました。「まだ、まどつく先生を馬鹿にした記憶は、外にもあります。

の時間割の中に挟まれて、十日も前から豫告されるまどつく先生の試験を、不意にやられると云ふことは全く意外でした。尤も、英語の自由試験ですから、何も豫習する必要などはないのですが、やはり十日も前から豫告して呉れると、氣が落着く上に、毎日二課目宛の試験があるとして、まどつく先生と歴史などが組合せになつて居ると、まどつく先生の方は、すつぽかして全力を難物の歴史に注ぐことが出来るので、甚だ都合合なのです。つまり、まどつく先生の試験が時間割の裡にあると、其處丈は名義上閉がつて居て、其實は明地になつて居るので、他の學課に對する準備などに都合合なのです。其上、日頃から茶にして居るまどつく先生から、かう壓制的に不意に試験などをされて堪るものかと云ふ不満、夫は實質上の不満でなくて名分上の不満——とんだ名分ですが——、ありましたので、我々は猛然と反對したのです。かう云ふ時の急先鋒は、大抵私でした。級の總代たる首席の山川君は、根が温厚な君子ですから、丸で駄目でした。野次で圖々しく、其上まどつく先生を平素から茶にして居て、大膽に喋べれる私が、適役たることに、誰も異存はなかつたやうです。私たちの同類の意け者たる平田や杉村などは、『おい木村！しつかりやれ』など、盛んにけしかけるのです。私が圖に乗つて、強硬に出たことも勿論です。

『先生！』と私は疍高い聲を張り揚げました。『此の學校の規

則では、學期試験は、必ず豫告されることになつて居ます。従つて我々は豫告を受ける権利があります。何時の場合にも一週間の豫告を與へられることになつて居ます。私達は、今日先生が、突然試験をなさることを不當だと思ひます。平素のやうに、學期試験の中に入れて下さい。でなければ我々は白紙を出す外はありません」と、堂々と述べました。學校の規則など云ふことを、擔ぎ出せる義理ぢやないのですが、その頃は全く出鱈目で始末に了へない學生でありました。同類の平田や杉村などは、

「ヒアヒア」などと頻りに贊意を表する始末でした。まだつく先生の顔が急に蒼ざめたやうに思ひました。が、先生は黙つたまゝ問題と試験用紙とを配つてしまふと、教室の方へ引返しました。が、私の云つた事に就ては、一言も返事しないのです。私は、大に癢に觸りました。私は一段と聲を荒ら

らげて、
『先生は、私が申した事がお解りにならないのですか。何うしても延ばして下さいませんか』と、追窮しました。又、私の追窮に贊意を表した聲が聞えました。

「見ると、まだつく先生は、如何にも當惑したやうに、蒼ざめた顔をうなだれたまゝ黙つて居ましたが、今度揚げた顔を見ると、碧色の眼が涙に潤るんで居るやうに思はれました。『お氣の毒です。が、延ばすことは出来ません』と、如何に

も氣の毒さうに云ひましたが、少し聲を落して『私の娘は

病院で死にかゝつて居る my daughter is dying in the hospital.』と、附け加へました。その刹那に、この濃厚な優雅な老外人の面に、何とも名状しがたい悲痛な表情が閃きました。電火に打たれたやうに、級の連中は、ヒソソリとなつてしまひました。たゞ引込みの付かないのは、威丈高に突立ち上つて居た私でした。戯けてはならない嚴肅な者に戯けかからうとしたやうな、お葬ひの席で都々逸をでも唄ひ出さうとしたやうな、何とも申譯のないやうな心持ちになつて、私はスゴ／＼と腰を下しました。平田や杉村などさへ、私の方は振向きはしませんでした。靜まり返つた教室の空氣の裡には、鉛筆の走しる音丈が聞えて居ました。

「その事があつてから、間もなくでした。まだつく先生の愛嬢が死んだと云ふ噂が傳はりました。先生とは、親一人子一人で、二十になるかならない美しいブロンドでした。娘が、危篤になるに連れてまだつく先生は、早く學校を切り上げて、愛兒の病床に、付き切りに付いて居たかつたでせう。夫を思ふと、試験を邪魔しようとして、此の老紳士の心を少しも傷けた自分の行動を今でも氣耻しく思はずには居られせん。

「夫に懲りて教室で少しは温しくなつたかと云ふのですか。いや、相變らず出鱈目を續けて來ましたよ。尤も時々まだつ

く先生の (my daughter is dying in the hospital) を思ひ出すので、以前ほどは烈しくはありませんでしたが」

青木の出京

銀座のカフェ×××で、同僚の杉田と一緒に晝食を済した雄吉は、其處を出ると、用事があつて上野方面へ行かねばならぬ杉田と別れて、自分一人勤めて居る△町の雑誌社の方へ歸りかけた。

夫は六月には入つて間もない一日であつた。銀座の舗道の行路樹には、軽い微風がそよいて居たが、塵を立てる程強いものではなく、行き交うて居る會社員達の洋服は大抵白っぽい合着に更へられて、夏には適はしい華美な色のネクタイが、その胸に手際よく結ばれて居た。又、擦れ違ふ外國の婦人達の、初夏の服装の薄桃色が、快い新鮮フレッシュネスを與へて呉れた。

雄吉は、食事を済した後ののんびりとした心持に浸つて居た。其上、彼は此頃漸く自分を見舞ひかけて居る幸福を意識し、享樂して居た。長い間認められなかつた彼の創作が、漸く文壇の一角から採り入れられて、今迄は餘り見込の立たなかつた彼の前途が、明るい一筋の光明に依つて照され始めて

居た。彼の心にはある一種の得意と、希望とが混じりながら存在して居た。殊に、彼は、自分の暗かつた青年時代を回想すると、謙遜な心で今の幸運を享受する事が出来た。

彼は、兎も角も晴やかな浮揚ウツク的な心持で、歩き馴れた舗道の上を歩いて居た。彼の心には、今の處何の不安もなければ憂慮も存在して居なかつた。全く安易な、のう／＼とした心易さであつた。他人が見たら、彼は少し肩を聳やかして居たかも知れぬほどの得意ささへ、彼の心の裡に混つて居た。彼が、銀座で有名な、△△時計店の前途来た時であつた。彼は、ふと自分の方へ動いて来る群衆の流の裡に、ある一つの顔を見出した。見覚えのある顔だと、彼は思つた。夫はホンの一瞬時だつた。青木だ！と氣が附くと、彼の脚はピツタリと舗道の上に、釘付けにされたやうに止まつてしまつた。が、釘付けにされたものは、彼の脚ばかりではなかつた。彼の凡ての感情が、その瞬間動作を止めて、心の裡が化石してしまつたやうに思つた。彼のその時迄、のんびりとして居た心持が、膠のやうに、急に硬着してしまつた。彼の心全體が、

その扉を悉く閉ぢて、武裝してしまつたと云ふ方が、一番此の時の心持を、云ひ現はして居るかも知れなかつた。雄吉は、身體にも心にも、スツカリ戦闘準備を整へて、青木の近よるのを待つた。

初て青木を發見したのは、ホンの二三間前であつたのだから、青木が雄吉に近よるのは、二三秒も懸らなかつた。雄吉の心持にも劣らない程の大きい激動が、青木の心の裡にも、存在しない筈はなかつた。その上、青木は雄吉の殆ど仇敵に對するやうな、凄じい眼の光を見ると、心持眸を伏せたまま、近よつた。

二人は眼を見合はした。雄吉の眼は相手に對する烈しい道徳的叱責と、ある種の恐怖とに燃えて居た。青木の眼は、夫に對して反抗に輝きながら、而も不思議に屈従と憐憫を、乞ふやうな色を混へて居た。二人は夫でも頭を下げ合つた。

「やあ！」雄吉は、硬ばつたやうな聲を出した。

「やあ！」青木は、しわがれて顫へる聲を出した。雄吉は、先刻から青木に對して、何んな態度を取るべきかを、必死に考へて居た。青木の出京！夫は彼に取つて、夢にも豫期しない事だつた。而も、その青木の不用意に、銀座で出會でくわすなど云ふ事は、彼の豫想すべき最後の事であつた。彼は狼狽してはならないと思つた。彼は過去に於て、青木と交渉した事に依つて、自分の人生を棒に振つてしまふ程の、打撃を受

けて居た。その打撃を受けてから六年の間に、彼は、その爲に何程苦しみ、どれほど不快な思をしたか、判らなかつた。が、その苦痛と不快とに堪へた爲に、彼は今ではその打撃を悉く補ふ事が出来た。今では、青木との交渉に依つて、負うた手傷を悉く癒す事が出来たと思つて居る。併し、今でも、過去に於ける苦痛と不快との記憶は、兎もすれば彼の心に蘇つて、彼の幸福な心持を掻き擾して行つた。そして、その打撃から、起因する凡ての苦しみを苦しみ、凡ての不快を味ふ毎に、彼は青木を憎み且つ恨んだ。そして、今漸く夫等の打撃から立ち直つて、稍光明のある前途が、拓かれようとする時に、昔の青木が、五六年も見た事のない青木が、彼の平穩な安易な生活を脅す如く、彼の前に出現したのである。

彼は、相對した敵の軍隊同志が、偵察戦を試みるやうに訊いた。

「何時来たんだ！」

「もう一週間ばかり前に来た。」と、青木は答へた。その力強い聲が、昔の青木をつくりである。彼は過去に於て、その力強い魅力のある青木の聲に、幾度威壓されたか知れなかつた。而も、今自分は可なり得意な、自信のある位置に立ち、青木は、數年前失脚した儘、田舎に埋れて居た筈なのに、その青木の聲から、ある種の威壓を受けるのが不快だつた。彼はその威壓を意識すると全身の力を以て、反撥せねばならぬ

と思つた。

「何をしに、上京したのだ？ 一體君は！」と彼は訊いた。夫はある意味の宣戦に近かつた。彼は、青木が上京して、その儘滞在するのを、何よりも怖れて居た。非常識に大膽で、人を人とも思はないやうな性情と、ある種の道徳感に缺陷のある青木は、雄吉に對して、又何んな事をやり出すかも知れなかつた。而も、雄吉は青木の不思議な人物に對して、ある魅力と恐怖とを同時に感じさせられて居た。昔の通の青木が、その持ち前の圖々しきで、自分の生活を掻き擾し始めたら、堪らないと思つた。

「何をしに上京したのだ？」と、訊いて置いて若し青木の返事が、若しも彼の東京に永住する事を意味して居たら、雄吉は、即座に「僕は、君とは生涯何の交渉も、持ちたくない」と、斷言する意志であつた。

「何をしに上京したのだ」と、云ふ言葉は、夫丈では、普通な在りふれた挨拶を、少しく粗野に云ひ放つたに過ぎなかつた。併し、雄吉がその言葉に籠めた感情は、青木に對する全身的な恨みと憎悪とであつた。雄吉は、後でその瞬間に、自分の眼が、何んな悪相を帯び居たかを、想ひ出すさへ不快であつた。まして、その眼を眞向に見た青木が、名状すべからざる、表情をしたのも無理はなかつた。その顔は、憤怒と恥辱と悲しみとが、先きを争つて表面に出て來ようとするやう

な、顔付であつた。夫は凄じいと云つても、いゝ程の恐しい顔だつた。

彼は生涯に、此の時の青木の顔に似た顔をたゞ一つ丈記憶して居る。夫は、彼が、脚氣を患つて品川の佐々木と云ふ病院に通つて居た頃の事であつた。彼はある日、多くの患者と一緒に、控室に待ち合はして居ると、四十ばかりのデツプリと、肥つた男に連れられて、やつて來た十八ばかりの女が居た。雄吉はその男女の組合せが變なもので、最初から好奇心を持つて居た。すると、其處へ醫員らしい男が現はれた。その醫員はその四十男と、兼てからの知合であつたと見え、その男に「何うしたのです、何處か悪いのですか」と、訊いた。すると、その男は丸切り事務の話をするやうに、一寸連れの女を振り返りながら、「いや之が娼妓になりますので、健康診断を願ひたいのです」と、云つた。夫はその男に取つては、幾度も云ひなれた言葉かも知れなかつた。が、娼妓になる爲の健康診断を受ける事を、多くの患者や醫員や看護婦達の前で、披露された女——恐らく處女らしい——その女の顔は、何んな暴慢な心を持つた人間でも、二度と正視する事に堪へない程のものであつた。

女は心持顔を赤めた。その二つの眼は血走つて爛々と燃えて居た。夫は、人の心の奥まで突き徹さねば止まない限附であつた。雄吉は、その限附を今でも忘れて居ない。夫は恥ぢ、

怒り、悲しんで居る人間の心が、悉く二つの眸から、ハミ出して居るやうな限附であつた。もう、夫は三四年も前の事であつた。が、今でも意識して眸を閉ぢると、その女の顔が、彼の親の顔よりも昔失つた戀人の顔よりも、如何なる舊友の顔よりも、明確に彼の記憶の裡に蘇つて來た。

然るに、今青木の蒼白い顔の上部に、爛々として輝いて居る眼は、此娼妓志願者のその時の眼と、あらゆる相似を持つて居た。彼は青木を恐怖し憎悪した。が、その深刻な、烈しい人間的苦惱の、現はれて居る眸を見ると、彼はその心の底迄、その眸に貫き徹されずには居なかつた。然もその青木は、つい六七年前迄、彼の畏友であり無二の親友であつた。雄吉は、その眸を見ると今迄の彼の構へが、タヂ／＼となつて、彼は思はず何かしら、感激の言葉を發しようとした。が、彼の理性、夫は彼の過去六年間の苦難の生活の爲に、鍛へられた彼の理性が彼の感情の盲目的感激を、グツと制止して呉れた。彼の理性は云つた。「貴様は青木に對する盲目的感激の爲に、一度半生を棒に振りかけたのを忘れたのか。強くあれ！ 何んな事があつても妥協するな」彼は、やつとその言葉に依つて踏み止まつた。

「僕は、一週間ばかり前に上京したのだが」と、青木は云つた。彼の限附とはやゝ違つて、顫を帯びた哀願的な聲であつた。が、雄吉は思つた、青木のこんな聲色は、もう幾度でも

聞き飽きて居る、今更こんな手に乗るものかと思つた。が、青木は又言葉を繼いだ。

「實は明日の四時の汽車で歸るのだ。今度僕は北海道の方へ行く事になつてね。今日實は君に逢はうと思つて、雑誌社の方へ行つたのだが……」と、云ひかけて、彼は悄然として言葉を濁した。雄吉は、明かに青木が彼の憐憫を乞うて居るのを感じた。雄吉と同じく、極度に都會讚美者であつた青木が、四五年振りに上京した東京を、何んなに愛惜して居るかを雄吉はしみ／＼感ずる事が出來た。が、一人も友達になくなつた彼は、深い憎悪を、懷かれて居るとは知りながらも、尙昔親しく交はつた雄吉を訪うて、カフェで一杯のコーヒををて、一緒に飲みたかつたのであらう。雄吉は、青木のさうした謙遜な、卑下した望みに對して、好意を感じずには居られなかつた。が、さうした好意は、雄吉の心の裡に現はれた體裁のよい感情であつた。雄吉の心の底には、もつと利己的な感情が、儼として存在した。

「明日の四時に歸る。而も北海道へ」と、聞いた時、彼は青木の脅威から、スツカリ免れたのを感じた。明日の午後四時、今は午後二時頃だから僅に二十六時間だ。その間丈、十分に青木を警戒する事は、何でもない事だ。今茲で、手荒い言葉を云つて別れるより只二十六時間丈、彼の相手をしてやればいゝのだと思つた。否、或はその一部分の六時間か七時間

か、相手をしてやればいゝのだと思つた。
「ぢや、茲で立話も出来ないから、つい其處のカフェ×××
×へでも行かう」と、雄吉は意識して穩やかに云つた。が、
初てさうした世間並の挨拶をした事が、全く利己的な安心か
ら出て居る事を思ふと、少からず氣が咎めた。
雄吉が、先きに立つて、カフェ×××へは入つて行くと、
其處に居た二三人の給仕女は、皆クスツと笑つた。今出て行
つたばかりの雄吉が、五分と経たぬ裡に、歸つて来たからで
ある。併し雄吉は、夫に對して、ニコリと笑ひ反す事は出来
なかつた。彼の心は、大なる脅威から逃がれて居たとは云へ、
まだ青木と云ふ不思議な人格の前に於て、ある種々の不安と
軽い恐怖とを、感ぜずには居られなかつた。

二

過去に於て、青木は雄吉に取つて畏友であり、親友であり、
同時に雄吉の身を滅さうとする悪友であつた。

雄吉は、初めて青木を知つた頃の、彼に對する異常な尊敬
を、想出す事が出来た。彼の白哲な額と、その澄み切つた眼
とは、青木を見る誰人にも、天才的な感銘を、與へずには居
なかつた。彼の態度は、極度に高慢であつた。が級の何人も
が、意識的に、彼の高慢を許して居た。青木は傲然として、
知識的に級全體を睥睨して居たのだ。雄吉が、初て青木の威

つて行つた。

その上、青木の行動は極度にロマンチックで、天才的であ
つた。雄吉は、ある晩十一時頃に寄宿舎へ歸らうとして、大
きな闇が湛へて居る運動場の縁を、辿つて居ると、ふと自分
と擦れ違ひざまに闇の中へ、吸ひ込まれるやうに、運動場の
方へ急いで居る青年があつた。その蒼白い横顔を見た時に、
雄吉は直ぐ夫が青木である事を知つた。

「青木君？ 何處へ」と、雄吉は思はず聲をかけた。月夜で
もない晩に、夜更けて運動場の闇の中へと歩を運ぶ青木の心
が、その時の雄吉には、一寸解らなかつたからだ。

「一寸散歩するのだ」と、云ひながら雄吉の存在などには、
少しも注意を拂はずに、瘖きすな肩を聳やかせて、何かしら
瞑想に耽ける爲に、闇の中に消えて行く青年哲學者——雄吉
はその時、そんな言葉を必ず心の裡に浮べたに違ひない——
の姿を、雄吉は何れほど淑慕の心を以て見送つたか分らな
い。

又その頃の青木は、教室の出入に、キツト教科書以外の分
厚な原書を持つて居た。雄吉などが、その頃、初て名を覚え
たシヨペンハウエルだとか、スピノザなどの著作や夫に關す
る研究書などを、殆どその右の手から、離した事がなかつた。
而も、夫を十分の休憩時間などに、拾ひ讀みしながら、所々
へ青い鉛筆で下線アンダーラインを引いて居た。

壓を感じたのは、高等學校に入學した一年の初て、何でも哲
學志望の者のみに、課せられる數學の時であつた。數學では
學校中で、一番造詣が深いと云はれて居る杉本教授が、公算
論を講義した時であつた。中學に居た頃には、首席を占めた
事のある雄吉にも、その聴きなれない公算論の講義には、ス
ツカリ參つてしまつた。すると、雄吉のつい傍に坐つて居た
青木——その時、既に彼の名前を知つて居たのか、夫ともそ
の事があつた爲に、名前を覺えたのか今の雄吉には判らない
——兎も角、青木がスツクと立ち上つたかと思ふと、明晰な
濕のある聲で、何だか質問をした。夫は雄吉には何の事だか、
ちつとも判らなかつたが、飽く迄明快を極めた質問らしかつ
た。夫を聽いて居た杉本教授は、我意を得たりとばかり、會
心の微笑を洩しながら、青木の疑問を肯定して、夫に明快な
答を與へたらしい。すると、今度は又、青木がニコリ微笑
して肯いて見せた。頭のいゝ先生と、頭のいゝ青木との間に
は、靈犀相通レイセイトウツウすると云つたやうな、微妙なる了解があつた。
級全體は地上に取殘されて居て、たゞ青木丈が、杉本教授と
同じ空間迄昇つて行つたやうに奇蹟的な感銘を、雄吉達に與
へずには居なかつた。殊にその頃は、ロマンチックで、極度
に天才崇拜の分子を、持つて居た雄吉は、一も二もなく青木
に傾倒してしまつた。杉本教授が生徒としての青木を、尊重
する度合と正比例して、雄吉の青木に對する尊敬も、深くな

さうした青木の、天才的な知識的な行動——それを雄吉は

後になつてからは、街氣マヱキの伴つた可なり趣味なものと思つ
たが、その當時は全く夫に魅惑されて、天才青木に對する淑
慕を、いやが上に慕らせてしまつた。無論彼は意識して懸命
に青木に近づいて行つた。彼の友人と云ふよりも、彼の絶對
的な崇拜者として、彼の從順なる忠僕としてであつた。

青木と雄吉との交情が、何事もなく一年ばかり續いた頃で
あつた。其處に、雄吉に對する大なる災難——夫は青木に對
しても矢張災難に相違なかつた——が、萌芽し始めて居た。

夫は、確か雄吉等が、高等學校の三年の二期の事だつた
らう。赤煉瓦の古ぼけた教室の近くにある一株の橄欖が、小
さい眞赤な實を結んで居る頃であつた。二三日前から、蒼白
な顔を、愈々蒼白にして、雄吉が話をしかけても、鼻で扱扱
つて居た青木が、到頭堪らなくなつたやうに、教室の壁に身
を投げかけるやうにしながら、

「さあ！ 愈々田舎へ歸るんだぞ！」と、吐き出すやうに叫
んだ。夫は雄吉に取つては、全く意外な事であつた。雄吉は、
自分の君主の身の上にも、災難が襲ひかゝつて来たかのや
うに、狼狽しながら、

「君が國へ歸る！ 何うしてだ？」と訊いた。
「何うもしないさ、俺の親父が破産したと云ふ丈さ」と、青
木は沈痛な、而も冷靜な調子で云つた。

青木の家は、雄吉の知る限りでは、田舎の可なりの資産を持つた商人らしかった。青木が、級の中で最も多く、原書を買込む事實から云つても、彼が其時迄給與されて居た學費は、可なり豊富であつたらしかつた。

「ぢや、學費が来なくなつた譯なんだね」と、雄吉は、此の場合に、もつと適當した言葉が、外にあると思ひながら、到頭こんな平凡な事を云つてしまつた。青木は、雄吉の質問を如何にも下らないと云つたやうに、

「まあ！ そんな譯さ」と、云つた儘黙つてしまつた。

センチメンタルで、ロマンチックで、感激家であつた雄吉が、突然青木の身の上に、振りかゝつた危難を知つて、極度に感激したのは、無論の事であつた。彼は、何んな事があつても、青木を救つてやらねばならぬと思つた。雄吉に取つて、青木を救ふ唯一の手段は、やつぱり、今自分が世話になつて居る近藤家の金力に、頼るより外はなかつた。雄吉は、さう考へると、その日學校から歸へると、自分が家庭教師兼書生と云つたやうな、役廻りをして居る近藤家の主人に、涙を流さんばかりに、青木の救済を頼んだ。

「本當にその男は天才なんです、教授連がスツカリ、舌を捲いて居るのです、將來屹度日本の學界に、獨歩する程の大哲學者になりさうです」と、自分で云つて居る事に、十分確信を持ちながら、青木の効能を長々と述べ立てた。すると、主

親切などを眼中に置いてない青木の態度を、雄吉は怒るよりも、むしろ呆氣に取られて、見詰めるばかりであつた。

「ぢやまあ！ 近藤氏の世話にでもなるか、學校なんか何うだつていゝのだが、好き好んで廢すにも當らないからな」と、何時ものやうに、傲岸に云ひ放ちながら、ニヤリと青木に特有な、皮肉な、人を頭から嘲つて居るやうな、苦笑を洩した。雄吉は、自分の全心を、投じた親切を、青木の爲にこんな、手酷く扱はれながら、夫でも青木が、自分の親切を受け入れて呉れて、自分の崇敬措く能はざる青年哲學者の危急を、救ひ得た事を、無上の光榮のやうに欣んで居た。

青木が、近藤家に寄寓して、雄吉と同室に起居する事になつたのは、夫から間もなくの事であつた。今迄もさうであつたが、かう二人の生活が、事毎に交渉する事になつてからは、雄吉の生活は、悉く青木の意志の支配を受けて居た。近藤家から命ぜられる凡ての仕事は、悉く雄吉の負擔であつた。夫と反對に近藤家から與へられる恩典の大部分は、青木が獨占した。が、雄吉はさうした自分の從屬的の生活を、少しも後悔しては居なかつた。思索家、青年哲學者としての青木に對する彼の崇拜は、少しの幻滅をも、感じなかつたばかりでなく、青木との交情が進むに従つて、益々擴大され、かつ深められて居た。殊に、青木が三年になつて以來、校友會の雜誌に續け様に發表した數篇の哲學的論文は、彼の青木に

人の近藤氏は、實業家に特有な宏量な態度で、

「俺は、哲學と云ふ事は、何んな學問だか、一向心得んが、孰れ國家に有用な學問に相違なからうから、その方面の天才を保護するのも、決して無用な事ぢやなからう、君がさう迄云ふのなら、青木と云ふ人も、家へ来て貰つて一向差支へがない」と、かう云ひながら、何か掘出し物の骨董をでも買ふやうな心持で、青木を世話する事を引受けて呉れた。雄吉は、此時程、近藤氏を偉く思つた事はなかつた。

雄吉は、自分の手で、青木を救ひ得た事を、何れ程欣んだか、知れなかつた。雄吉は、その翌日その吉報を齎して、いそぐ登校した。その途中でも、彼は、青木がその報知に接して、何んなに欣ぶか、何んなに自分の親切を、感謝するだらうかと考へると、自分の心がわく／＼と、鼓動するのを覺えた。

が、雄吉が、寄宿舎の窓に靠れて、霜柱の一面に立つて居る運動場を、放心したやうにボンヤリと、見詰めて居る青木を見附けて、近藤氏の厚意を話した時——大なる興奮と感激とを以て、話した時、青木はその起きてから間もないと見え、極度に蒼白い顔の筋肉を、ピクリともさせずに、ただ一言、

「さうかい！」と云つたばかりであつた。雄吉は、青木の冷靜な、殆ど無關心な態度を、ある種の驚異を以て見た。自分の身の上に、湧いて居る危難を、物の數ともせず、雄吉の

對する尊敬を、極度に迄煽り立てねば、止まないものであつた。一つは「ベルグソン哲學の缺陷」と云ひ、一つは「實在としての神」と、云ふのであつた。その二つの論文が學校中に起した感動は、可なり素破らしいものであつた。天才青年！ 夫は、雄吉の級丈での合言葉ではなくなつて、殆ど學校中全體にさへ、承認を求めらるやうに迄進んで行つた。雄吉は、青木の天才が、かうした輝やかしい承認を受け始めた事を、何んなに驚喜したか分らなかつた。かうして、多くの人々から、認められるに附けて、青木の自信と傲慢とは、正比例して増進して行つた。確か彼が、近藤家へ移つてからの事であつた。その頃、京都大學の哲學教授で、名聲噴々として、

思想界の注目を惹いた北田博士が、珍らしく上京して大學の講堂で講演をした。夫を聴きに行つて、歸つて來た青木は、雄吉の顔を見ると、何時ものやうに、吐き出すやうな調子で「北田博士から、あの哲學者らしい顔附を除けば、跡には何も残りやしないぜ」と、云つた儘、口を緘んでしまつた。雄吉は、北田博士に對しても、十分な尊敬を、持つて居たが、彼の崇拜する青木が、天下の大學者たる北田博士を、一言の下に片附けるその大膽さを、痛快に思はずには居られなかつた。

雄吉の青木に對する尊敬は、少しも變らなかつたが、近藤家に來てから、青木の生活は、妙にグレ出して居た。彼は無

論、實家が破産したと云ふ事から、随分大きい打撃を受けて居た上に、日常の生活に於ては可なり、享樂者であつた青木は、何と云つても不自由な寄食的生活と、月々與へられた五圓と云ふ小額な小遣との爲に、その生活を可なり虐げられて居るらしかつた。彼は見る見る裡に藏書——高等學校生としては極度に豊富な藏書を、賣拂つてしまつた。彼には、他人の家に寄食してからも、その享樂的な生活を更改する事が、苦痛らしく見えた。彼は藏書を賣拂つた金で、やつぱり本郷邊のカフェで、香と味の強烈な洋酒の杯を、享樂して居た。その裡に、青木の身邊から、消滅するものはその藏書ばかりではなくなつた。何時の間にか、彼の懐中時計は彼の机上から、影を隠して居た。

そんな事が起つて居る裡に、段々雄吉と青木との二人を、襲ふ災害が近づいて来て居た事を、雄吉は少しも氣附かなかつた。雄吉は、青木のさうした放逸な生活も、天才な性格には有勝な放縱として、寧ろ好意を以て彼を見守つて居た。

三月の試験が、眼前に迫つて来た頃であつた。雄吉が何かの用で少し遅れて、學校から歸つて来た。すると、餘程前から歸つて来たらしい青木は、雄吉の前に、いきなりある小さな紙片を擴げて見せた。

夫は、金銭上の取引などには、疎い雄吉に取つては、可なり珍らしい小切手であつた。而も、雄吉等學生に取つては、

すのを、一個の名譽であるが如く、欣んで〇〇銀行支店へ駆け附けた。

手の切れるやうな十圓札を十枚、汗ばんだ手で握りしめながら、雄吉があたふたと、歸つて来ると、青木は鷹揚に、

「やあ御苦勞」と、肯いて、雄吉から受取つた札を、數へるとその中から二枚を、雄吉の前に差出しながら、

「ホンの少しだが、取つて置いて呉れ給へ」と云つた。中學時代から、貧家に育つた雄吉には、二十圓と云つたやうな大金を、纏めて掴んだ事は、さう度々ある經驗ではなかつた。

雄吉は、自分の尊敬する君主から、拜領物でも戴いたやうに低頭せんばかりに、

「やあ有難う」と、云ひながら、夫を押し戴くやうにした。

八十圓を懐にした青木は、線香花火のやうに燦やかな贅澤をやつた。彼は、級の誰彼をその頃有名に成りかけて居た、鑑橋際のメイゾンコーノスへ引張つて行つて、札びらを切つて御馳走した。そして、二晩も三晩も、寄宿舎へ宿ると云つて、近藤の家へは歸つて来なかつた。

が、一週間と経ち、十日と経つ内に青木は、又元のやうに愼しい生活を、強ひられて居るやうであつた。夫は、雄吉に取つては忘れられない四月の十一日の晩であつた。晩餐を済すと、青木は「一寸散歩して来る」と云つて出て行つた儘、中々歸つて来なかつた。雄吉は只一人、春の宵に在勝な不思

可なりの大金だと云つてもいゝ百圓と云ふ額面であつた。雄吉は、妙な不安と興奮とを以て、青木の手中にあるその小切手を見詰めた。

「何うしたのだ、その金は？」と、雄吉の聲は、可なり上づつて居た。

「何うもしないさ」と青木は何時ものやうに冷静であつた。

「矢部さんがね、僕の窮狀に同情して呉れて、翻譯の口を探して呉れたのさ。可なり大きい翻譯なのだ。僕が困ると云つたものだから之丈前金を融通して呉れたのだハ、ハ、ハ」と、彼は事もなげに笑つた。矢部さんと云ふのは、學校の先輩で、もう既に文壇にも十分に認められて居る新進の哲學者であつて、青木は二三度、此人を訪問した事がある。雄吉は、青木に向いて来た幸福を、自分の事のやうに欣んだ。夫と同時に、まだ學生でありながら、さうした大きい翻譯に従事する青木を、讚嘆せずには居られなかつた。

「それで、君に頼みたいのだがね、此の小切手を、一つ貰つて来て呉れないか。〇〇銀行支店と云へば、さう遠くないのだから、四時迄には行けるだらう。裏へ署名して判を捺すのだが、僕は判を持つて居ないから、君の名でやつて呉れないか」

雄吉が、青木の依頼を、唯々諾々として聽いたのは無論である。雄吉は自分が青木の代人としてさうした大金を引き出

議な憂鬱に襲はれて、ボンヤリ机に靠れて居ると、後の襖が、音も無く開かれたと思ふと、聞き馴れた小間使の聲がした、

「旦那様が、一寸御用です」と、云つた。

「ハア」と、答へると雄吉は、氣輕に立ち上つた。又、何時ものやうに、到來物の禮狀でも、書かされるのだなと思ひながら、長い廊下を通つて、主人の部屋へ行つた。何時もは微笑を含みながら、雄吉を迎へる主人が、ニコリともしないで、苦り切つたまゝ坐つて居るので、雄吉は聊か勝手が違ひながら、坐つて禮をした。すると、主人は、

「甚だ不快な用事だが」と、云ひながら、その膝の上に置いてあつた紙入から、小さい紙片を取り出して、雄吉の前に押しやりながら、

「何うだ、夫に覺があるかな」と、堅い凍つてしまつたやうな聲で云つた。雄吉は、何だか見覚えがあるやうに思つた。

彼は、怖る／＼夫を取上げた。雄吉の眼が、紙面を見詰めた瞬間に、彼の全身は水を浴せられたやうに戦いた。夫は紛ぎれもない、百圓の小切手であつた。而も自分が、青木の命令に依つて、唯々諾々として、〇〇銀行支店へ、引出しに行つた百圓の小切手に、相違なかつた。主人は、雄吉の顔面に現はれた狼狽を見済すと、以前よりもつと冷たい聲で、

「その裏の署名捺印は、お前のに相違なからうな」と、云つた。雄吉はぶる／＼顫へる手で裏を返して見た。其處には、

明確に過ぎると思はれる程、丁寧な楷書で、廣井雄吉と署名されて、捺印されて居る。

「俺はもう何も云はない。最初その小切手が、俺の文庫から紛失して居るのを発見した時、俺は女中か何かの出来心かと思つて居た。夫が俺の考違であつたことを、俺は遺憾に思ふ丈ぢや。俺は、貴君に對して、別に法律上の制裁を與へようと、云ふのでもなければ、その金を返して呉れと、云ふのでもない。只貴君が、俺の家を出ると云ふ事は、此場合、貴君が當然探るべき義務だと思ふ丈だ。只貴君の爲に一言云つて置くが、今度の事で、貴君が何の制裁をも受けなかつたと云つて、是から後も矢張りかうした事を續けて居ると、貴君は社會的に、存在し得なくなるからな」と、苦り切つては居たが、然し紳士としての自分の品格を、傷ける事を恐れるかのやうに、其の心に動いて居る雄吉に對する侮蔑と憤怒とを、飽迄も冷靜に抑へて居るらしかつた。

雄吉は、只茫然として、凡ての考察を奪はれた人間の如く、主人と自分との間にある疊の縁をボンヤリと、見詰めて居るばかりであつた。彼のこれ程迄に、尊敬して居る青木が、主人の文庫から、小切手を盗み出したと云ふ事が、彼には夢にも豫想し得ない事だつた。また盗んだ物を白晝公然と、自分に命じて、引出しにやつた青木の大胆さは、殆ど常識を備へた者としては考へられない事だつた。併し、雄吉は主人の

前に畏まりながら、此事件から身を脱するものは、何でもない事だと思つた。「あの小切手は青木が、持つて居たものです」と、云つてしまへば、自分丈は手もなく此の災難から脱する事が出来ると思つた。が、その時の雄吉は、——青木の人格的魅力に、陶醉し切つて居た雄吉は、自分に降りかゝつて來た嫌疑を、手もなく、青木に背負はせて、自分一人浮び上るのに堪へなかつた。彼はその時、ふと青木の今迄の行動から、彼の道徳性を檢べて見る氣になつた。青木は一體盗みをするに云ふ悪癖を、持つて居るのだらうかと考へた。すると雄吉の心にふと、一月前の青木に關したある光景が、浮んで來た。夫は學校の教室で、青木が、新しく古本屋から、買ったばかりだと云ふ獨逸語の辭書を見て居ると、直ぐ横に居た級の藤野と云ふ男が、「オヤツ！君は此の辭書を何處で買ったんだい」と、聞いた。すると、青木は、何を無禮な質問をと、云つた様に例の如く高飛車に、「何だつてそんな事を聞く必要があるんだ。何處で買はうと、俺の勝手ぢやないか」と、冷淡に殆ど取附く島もない様な返事をした。氣の弱い藤野は、青木の權幕に威壓されてしまつたらしく、その儘黙つてしまつた。が、雄吉はそれから暫くしてから、友達の誰かに藤野が、

つて居るのを聞いた。その事を、青木に聽かせるのは、只青木を不快にするばかりだと思つたから、雄吉は自分一人の胸の裡に止めて置いたが、今雄吉が近藤氏の前に在つて、青木の過去の行動を顧みると、此の辭書の問題が、彼の心に大なる疑念を湧かした。藤野の好意ある解釋、盗まれた本を、青木が古本屋を通じて買ったと云ふ解釋——無論雄吉はその當時夫に就いて、何の疑念も懷かなかつたが——は果して正しいものだらうか。此の小切手の事件から思ひ合はすると、其辭書は藤野の所有から、何等の仲介なしに、直接青木の所有に移つたのではあるまいか。雄吉はさう考へて來ると、もう夫は、動すべからざる事實のやうに思はれ始めた。

雄吉が、心の裡で青木の悪癖を確めて居るのを、近藤氏は、雄吉が苛責の心に、責められて居るのだと、思つたらしく、「あゝもういゝ。彼方へ行つて休み給へ。君は見た所、立派な體格を持つて居るのだから、心を入れ易へて奮闘さへすれば、一人前の人間に成れぬ事はない、さあもう彼方へ行き給へ」と、云つた。

雄吉の沈黙を服罪だと、解釋した主人は、もう此上責める必要もないと思つたのか、また此の不快な會見を、早く切り上げやうと思つたのか、頻りに雄吉を促し立てた。

「實はあの小切手は青木が持つて居たのです」と、雄吉は口迄、逆つて出ようとする言葉を、抑へ附けながら、彼は懸命

になつて、自分の採るべき處置を考へた。天才と病的性格と云ふ事を、彼は思ひ出した。盜癖のある青木が、さうした缺陷にも拘はらず、輝いた天分を持つて居る青木、かうした天才を保護し守り育て、やる事が、我等凡庸に育つたものゝ、當然盡すべき義務ではあるまいか、と雄吉は思つた。自分が近藤家から追はれる！其の事に依つて、何んな損害を受けても、夫は一人の天才の前途を暗くする事に比ぶれば、何でもない事ぢやないかと、雄吉は思つた。殊に體格の強壯な自分なら、苦學でも何でも、やれぬ事はない。之に反して青木、羸弱といつてもよい青木に取つて、苦學など云ふ事は、思ひも及ばぬ事だつた。かう考へて來ると、ロマンチックな感情と、センチメンタルな陶醉——夫等の物を雄吉は、後年何れ丈後悔し何れ丈憎んだか分らないが——とて、彼の心は一杯になつた——俺は、青木の罪を引受けてやらう、さうすれば、青木も俺の犠牲的行動に感服して、その恐るべき盜癖から、永久に救はれるに違ないと雄吉は思つた。無論青木が歸宅して、彼が自分で責任を持つて、自首すると云へば夫迄だが、兎も角、俺は一先づ青木の罪を引受けて、此の主人の部屋を出よう。主人は、俺の後影をどんなに蔑み卑しんで見送らうとも、俺は一人の天才、一人の親友を救ふと云ふ英雄的行動を、敢てした勇士の如き心持で、此部屋を出てやらう。雄吉はさう決心すると、不思議な程冷靜になつて、

「何うも相済みませんでした」と、挨拶しながら主人の部屋を辭した。長い廊下が、眼の前の闇に光つて居た。雄吉は芝居をして居るやうな、心持であつた。凡ての理性が、脹れ返つて居る感情の片隅に、小さく蹲つて居るやうな、心持であつた。その時に、雄吉の頭に、故郷に残して居る白髮の両親の顔が浮んだ。續いて、夫を圍みながら、無邪氣に遊び戯むれて居る弟妹の顔が浮んだ。雄吉は水を浴びたやうに、ヒヤリとした。お前は自分一人の感激から、責任のある身體を、自から求めて危難に陥らしてもいゝのかと、彼の良心が囁いた。が、雄吉の陶醉と感激——人生の本當の物に對する感激ではなくして、人生の虚偽に對する危険なる感激——とに耽溺して居る彼には、さうした良心の聲は、殆ど何の力さへなかつた。

彼はその夜、青木が歸るのが待たれた。青木がその小切手に對して、明快な辯解をして呉れるかも知れないと云ふ、空疎な希望もあつた。また青木が、自分の罪を自分で背負つて、主人の前に懺悔する。すると、主人は雄吉の潔白とその犠牲的行動とに、感激する。そして、雄吉の友情に免じて青木の罪をも、不問にして呉れる。雄吉はさうした馬鹿らしい、空頼みにも耽つて居た。

青木が歸つたのは、十一時を廻つて居た頃であつた。彼は、矢張り何時ものやうに、ツンと取濟した彼だつた。雄吉が、

夫を聞いた時の、青木の狼狽さ加減を、雄吉は今でも忘れない。青木は、彼が今迄裝つて來た冷靜と傲岸とが、悉く偽せ物であつたと、思はれるばかりに、度を失つてしまつた。彼の顔は、一時サツと眞赤になつたかと思ふと、以前より二三倍も、蒼白な顔に歸りながら、

「君本當かい、主人が本當にそんな事を云つたのかい」と、青木は哀願的に、殆ど顫へるばかりの聲を出した。

「本當だとも、今から主人の前へ出れば判る事だ」と、雄吉は儼然として云つた。彼はその瞬間、青木に對する自分の從僕的な位置が轉換して、青木に對して、彼が強者として立つて居るのを見出した。彼は、夫が快かつた。

「あッ！ 何うしよう、俺の身の破滅だ」と、悲鳴のやうな聲を出したかと思ふと、青木は雄吉の眼の前に顔を抱へながら、俯伏してしまつた、今迄の倨傲な青木、絶えず雄吉を人格的に壓迫して居た青木が、今や全く地を換へてしまつて、其處に哀れな弱者として蹲つて居た。

「君は何うして、あんな非常識な、馬鹿な事をやるんだ。泥棒をやるのなら、何故もう少し、泥棒らしい智慧を出さないのだ」と、雄吉は、青木と交際し始めて以來、初めて彼を叱責した。

「夫を云つて呉れるな。俺のは、全くフラ／＼とやつてしまふのだ。俺は、その爲に何時かは身を滅すと、思つて居たの

常に青木に對して持つて居た遠慮も、今ばかりは、少しも存在しなかつた。

「おい！ 青木、一寸聞きたい事があるんだがね」と、雄吉は青木のお株を奪つたやうに、冷靜であつた。

「何だ！」と、青木は雄吉の態度が、少し癢に觸つたと見え、雄吉の眼の前に、突立ちながら答へた。

「まあ！ 坐れよ、立つて居ちや、一寸話が出來ないんだ。實は、此間の百圓の小切手だがね。おれは君！ 本當に翻譯の前身として貰つたのかい」

「何だ、そんな事を疑つて居るのかい。此間君にも云つたぢやないか、僕が矢部さんと共同でベルグソンの著書を、片端しから翻譯する事になつたんだよ、その前身として矢部さんが貰つて呉れたんだ」と、青木の答は、整然として一絲も亂れて居なかつた。その瞬間、雄吉は近藤氏の云ひ分の方を、何かの間違へはないかと、思つた程であつた。

「さうか。夫なら、甚だ結構だ。實は先刻、茲の主人に呼ばれて行つて見ると、主人があの小切手を出して、之に覺えがあるかと云ふのだ。で、あると俺が答へると、主人はあの小切手は主人の手文庫に藏つて置いた物で、俺が盗んだのだらうと云ふのだ。が、君が本當に翻譯の前身として、貰つたと云ふのなら大に安心した。ぢや之から、主人の所へ行つて、辯解して呉れないか」

だ」と、さう云ひながら、彼はその蒼白な顔を擧げた。何と云ふ悲壯な顔だつたらう。盜癖と云ふ惡癖を、——意識を以ては何うとも出來ない惡癖を持つて居る人間の、苦惱と云つたものを、顔全體に漲らして居た。

「何うしやう廣井君！ 青木が雄吉に君を付けて呼んだのは之が初めてだつた。何うか、俺を救つて呉れ、俺は破産した自分の家名を、興す重任を帯びて居るのだ。喰ふや喰はずで、逼塞して居る俺の両親は、俺の成業を首を長くして待つて居るのだ。茲を追はれると、俺の此の身體で喰つて行く事さへ覺束ない。あ、何うしやう、廣井君！ 何うかして俺を救つて呉れ！ 主人は君、告發するとか、そんな事は云ひはしまいいね」

雄吉の心には、斯く迄に、參つてしまつた青木に對する同情と、今迄自分を見下して居た青木が、手を合はさんばかりに、哀願して居るのを見て居る一種の快感とが妙に混がらがつて居た。そして、その二つともが、彼が青木の罪を負はうと云ふ決心を、堅めるのに役だつた。

彼は、主人の部屋を出た時と、同じやうに得々とした心持で、

「實はね、主人の前は僕が責任を負つて來たのだ。僕は君の爲に、此の罪を背負つて此家を出ようと思ふのだ。君を罪に落した所で、僕が、君を此家に紹介した責任は逃れないし、

又僕が何も知らないで、小切手を引出しに行つたと云ふ事も、一寸辯解が立たないし、之が表沙汰にでもなると云ふのなら別問題だが、此家を出さへすれば済む事だから、僕も即座に決心してしまつたんだ。

之を聞いた時の、青木の顔が、一時に生氣を呈したのは無論であつた。が、青木は、なるべくその生氣を押し隠すやうに、涙を——それも嬉し涙であつたかも知れぬと雄吉は後で考へた——ポロ／＼と流しながら、「そんな事を！ 僕の罪を君に委せて、僕が晏然と済して居れるものか、僕は夫程卑屈な人間ではない。さあ一刻も猶豫すべきでない、さあ主人の所へ行かう。」

雄吉は、後年になつてから、何故その時青木と一緒に、主人の所へ行かなかつたかを悔いた。が、不思議な感激と陶酔とに心の底迄を、腐らされて居た雄吉は、威丈高になるばかりに、

「馬鹿な事を云つちや困る。君が、此家を出たら、何うなると思ふ。君はその弱い身體で、パンを求めろさへ大變ぢやないか。まして、學校を何うするのだ。君は自分で、自分の天分を愛惜する事を忘れちや駄目だぞ。僕は此家を出ても、何うにでもやつて見せる」と、感激に溢れた言葉で云つた。

「君が何と云つても、君に代つて貰つては僕の良心に濟まない。何うか、僕には自白させて呉れ給へ」と、青木は叫ん

だ。青木の言葉も、まんざら偽だとは思はれない程感激して居た。

「が孰ちらにしても今夜は遅い。主人は寝て居るに違ない。夫よりか、君も僕も一晩ゆつくりと寝ながら考へやう。」

青木も、夫に異存はなかつた。雄吉と青木とは、枕を並べながら、眠られない一夜を明した。

雄吉の決心は、夜があけても、動いて居なかつた。が、主人に自白すると云つた青木は、夜が明けると、その事をケロリと忘れてしまつたかのやうに、たゞ眼に一杯涙を湛へながら、「済まない」と、口癖のやうに、云ひ續ける丈であつた。

其日の午後、雄吉は、僅かな身の廻りの物を始末して、三年近く世話になつた近藤家を去つた。

近藤家を去つた雄吉は、自分の壯健な肉體に頼る外に、何等の知己も持つて居なかつた。彼は、その翌日から直ぐ激しい勞働に従事した。もう卒業迄は、僅かに三ヶ月である。學校を出て大學に入れば、自活の道も容易に見出されると思つて居た。が、さうした苦しい奮闘の裡にも、彼は青木から得る感謝と慰藉を、自分の苦闘の原動力としようとさへ思つて居た。

が、其處に雄吉に取つて喰ふべき最初の葷があつた。青木は雄吉の豫期とは反對に、雄吉を敬遠し始めた。二人が會つ

て話して居ると、其處に奇怪な分裂が存在し始めた事を、雄吉は氣が附かずに居られなかつた。青木の事を雄吉は、何時の間にか青木！ 青木！ と呼び捨てにして居る自分を見出した。彼は青木に對して、命令的な威壓的な、態度に出る自分を見出した。夫は、今迄の青木と雄吉との位置の轉倒であつた。今迄、青木に蹂み附けられて居た雄吉が、奇抜な決死的な手段に依つて、青木を征服して、上から蹂み附けられて居るやうであつた。傲岸で自意識の強い青木は、雄吉のかうした態度に、何れ丈傷けられたか分らなかつたらしい。

「俺は貴様の恩人だぞ、貴様の没落を救つてやつた恩人だぞ。俺の云ふ事に文句はあるまいな」と、云つたやうな意識が、青木に對する雄吉の態度の底に、何時も滔々として流れて居た。青木は、雄吉のさうした態度から来る壓迫を避ける爲であつたらう。教室へ出て居る時にも、成るべく雄吉と、話をする事を避けた。雄吉が、夫を怨み憤つたのは、元よりであつた。二人の間には、大きい龜裂が口を開き始めて居た。

高等學校を出ると雄吉は、學費を得る便宜から、京都の大學に入る事になつた。速に雄吉との別離を惜しんだ青木は、「もう僕も、大學生なんだから、月に十圓や十五圓の内職をする事は、何でもない事だから、僕が働いて月十圓は必ず君に送金する。夫は當然僕の爲さねばならぬ義務だ」と、青木はその大きい眼に涙を湛へながら、感激して云つた。

雄吉の京都に於ける生活は、可なり苦しい悲惨なものであつた。彼は、ある人の世話で、職工夜學校の教師をした。が、夫は彼の時間の殆ど凡てを奪つて、而かも僅かな報償を、與へるのに過ぎなかつた。彼は、ノートを購ふにさへ、多くの不自由を感じた。彼は一時の興奮と陶酔との爲に、青木の爲めに拂つた犠牲の、餘りに大きかつたのを、後悔し始めた。彼は、よく芝居で見た身代りと云ふ事を、考へ合はせた。一時の感激で、主君の爲に命を捨てる。夫は其場切りの事だ。感激の爲めに理性が、盲目にされて居る其場限りの事だ。雄吉自身の場合の如く、その感激が冷つて居るのに、まだその感激の爲にやつた一時の出來心の、恐ろしい結果を、背負はされて居るのは堪らない事だと思つた。

青木が、涙を流しながら誓つた送金は、何時が來ても實現しなかつた。雄吉は堪らなくなつて二三度督促の手紙を出した。青木からは、夫に對して一通のハガキさへ來なかつた。彼は、最後に殆ど憤に顛へて居るやうな、文面の手紙を出した。夫に對しても、青木は沈黙を守り續けた。もう、その頃の雄吉は、自分の身代りのな行動を、心から後悔し始めて居た。夫と同時に、現在の苦學生的生活の苦惱が、ひし／＼と身に喰ひ込んで來た。其爲に、彼は自分の過去に於ける馬鹿らしさと、青木の背信とを恨んだ。

が、雄吉の喰ふべき第二の葷は、もう其處に用意されて居

た。雄吉が京都に來た翌年の春であつた。雄吉や青木と、同じ級であつた原田と云ふ男が、故郷の岡山から、上京する途で、京都に立ち寄つて雄吉を訪問した。彼は、雄吉の顔を見ると直ぐ、

「君は、青木の事をちつとも知るまいな。彼奴は此頃大變だぜ。スツカリ遊蕩兒になり切つてしまつてね。友人の品物を、無斷で持ち出すやら、金を借り倒すやら大變だ。近藤さんの内も、到頭お拂箱さ。何でも、近藤さんの内の貴金屬を随分持出して、賣飛ばして居たんだつてね。彼奴のは、丸切り出鱈目なんだ、後で露顯しようが、しまいがそんな事は平氣なんだ。彼奴は悪事をやるのまでが、天才的だと云ふ評判だよ。……今だから、云つてもいいが、彼奴は君が近藤さんの内を出た時に、何か君が悪い事をやつたやうに、僕達の間布令廻して居たよ。僕達は、無論夫を、少しも信じなかつたがね」と云つた。

雄吉は、夫を聞いて居ると、青木の爲に、土足で蹂みにじられたやうに思つた。「貴様は俺に恩を施した積で居るのか、貴様から受けた恩なんか、此の通り蹂みにじつてしまつたのだ。貴様が、一身を賭して俺の爲に保留して呉れた近藤家の保護を、俺は此方から御免蒙つたのだ」と、云つて居るやうな、青木の皮肉な顔を雄吉は、マザ／＼と想像する事が出來た。雄吉の心を極度に迄傷けた事は、彼が青木の爲に拂つた犠

後は直ぐ、サツパリするのだと雄吉は考へた。

が、雄吉の前に腰かけながら、黙つて眼を落して居る青木を見て居ると、彼は六年と云ふ永い間、田舎に埋れて居た青木の生活を、考へずには居られなかつた。負惜しみが強く、アマビシヤスであつた青木が、同窓の人達が大學を出て、銘銘に、世の中に受け入れられて行くのを見ながら、無味な乾燥な田舎に、その青春時代を腐らせて行つた焦燥さや、苦しさを、残念さを考へると、雄吉は、自分自身の恨みを忘れて青木の爲に、悲しまずには居られなかつた。

が、彼に取つては、練獄と云つてよい程の、苦しい生活を嘗めて居たのにも拘はらず、青木は殆ど變つて居なかつた。雄吉のさうした憫みを受けるべく青木の顔は、昔の若さを、殆ど失つて居なかつた。殊に青木の着て居る合着は、雄吉の合着よりも新しくもあれば、上等の品でもあつた。

雄吉には、青木のさうした無變化さが、少し物足りなかつた。雄吉の悪魔的な興味は、もう少し零落して、凋び切つて居る青木を見たかつたのだ。

雄吉は、何か話題を見付けようと思つた。が、昔の生活を回想する事は、青木に取つても、雄吉に取つても苦々しい事であつたし、夫かと云つて、現在の二人の生活には、話題となるべき何の共通點もなかつた。
「君はちつとも變らないぢやないか」

牲の爲に、今尙苦しみ續けて居るのに拘はらず、青木が——雄吉のさうした苦痛に依つて漸く保留し得た保護を、夫程破廉耻に、夫程惡辣に、夫程背信的に、蹂み蹴つた事であつた。夫を聞いてから、雄吉は、全人格を以て青木を恨み、呪咀し、憤らずには居られなかつた。彼は青木に對する凡ての好感情を失ひ、滿身を彼に對する憎惡と侮蔑とで、埋めてしまつた。而も、夫は、彼の苦學生的生活が、苦しくなれば苦しくなるに連れて、深められて行つた。

青木が、大學でも不始末を演じて、除名されたと云ふ噂を聞いたのは、夫から間もない事であつた、が、その時には埋もれて行く青木の、天分を惜しむ程の好意も、雄吉の心の裡には残つて居なかつた。

三

今カフエ××××の一隅の卓を隔て、その青木は雄吉の眼前に坐つて居る。雄吉の心の裡に、ダニのやうに喰附いて離れない青木に對する惡感を、青木は少しも知らないのかも知れないと、雄吉は思つた。青木に對する昔の好意が——自分の身を滅す事をも、辭せない程の好意の破片でも、雄吉の心の裡に残つて居るとても、青木は誤解して居るのかも知れないと、雄吉は思つた。が、何う思つてもいい。もう僅に二十六時間だ。いや此會見をさへ、手際よく切り上げれば、

「あゝ變らないよ」と、青木は答へた。その聲は、昔の青木と少しも變らないやうに、雄吉に取つては威壓的に響いた。二人は又黙つてしまつた。雄吉は友達の噂でも話して見ようと思つた。が、級の内の誰も、皆立派に成功の道に辿り附いて居て、誰の噂にしても、青木に對して當て附けがましく聞えないのはなかつた。雄吉は、やつと岡本と云ふ男の事を、思ひ出した。その男は、大學を出るのも、一年遅れた上に、大學を出てからも、職業がなくてブラ／＼して居た。此男の噂なら、青木を傷ける事はないと思つた。

「君は、岡本の噂を聞いた事があるかい」と、雄吉が訊くと、
「岡本！ あゝ彼奴か、彼奴はまだ生きて居るのかい」と、
青木は突放すやうに云つた。「青木！ あゝ彼奴か、彼奴はまだ生きて居るのかい」と、云ふ方がもつと、自然らしく思はれるその青木が、かうした昔の儘の傲慢さを、持ち續けて居る事が、雄吉には寧ろ淋しかつた。雄吉が、話題に困つて居る様子を見ると、青木は、

「何うだい、君や桑野は勉強して居るかい、外國の物なんか、盛に讀んで居るだらうな」と、妙に皮肉に挑戰的に訊いた。夫は、昔の青木に殆ど變つて居なかつた。さうした青木の攻撃的な言葉に、今でも妙な壓迫を、感ずるのを雄吉は自分ながら不快に思つた。青木と雄吉との間に起つた交渉、夫を雄吉は胸に彫り附けて居るのに、青木は夫をケロリと忘れ

たやうに、雄吉に對して、夫に對する何の遠慮も、拂つて居ないらしかった。

「君の單行本はまだ出ないのかい」と、青木は雄吉がタチタチとすればする程、擲論とても取れば取れさうな、質問を連發した。まだ三四篇しか作品を發表して居ない雄吉に、單行本が出せる譯はなかつた。

雄吉は、向ひ合つて話して居れば居るほど、不思議な壓迫を感じずには居られなかつた。

六年憎み續けて來た青木、今ではもう、彼の天分を尊敬した事さへ一つの迷妄だと、自分では思つて居る雄吉に取つて、青木は尙ある不思議の魅力と威壓とを、持つて居た。久し振りに、顔を見合はした當座こそ、恥しさうに面を擧げ得なかつた程の青木が、紅茶を一杯啜つて居る裡に、何時の間にか、雄吉の上手に出て來て居るのを感じた。雄吉はその事が可なり不快であつた。青木が全然失敗の男であり、而も雄吉に對しては、トテモ償ひ切れぬやうな不義理を重ねて居ながら、一旦顔を見合はして居ると、彼の人格的威壓が、昔のやうに儼として、存在して居るのが、雄吉には堪らなかつた。雄吉は、どうかして此の不快から逃れようと思つた。が、青木と會つてから、三十分にならないのだから、體よく別れを告げる譯にも行かなかつた。

「何うだい！ 君桑野の所へ行つて見ないかい」と、漸く雄

吉は一策を考へた。桑野は、矢張り同窓の一人で、作家として一番早く、世間から認められた男であつた。

青木も賛成した。雄吉は給仕女を呼んで、勘定を拂はうとした。すると青木は何時の間にか、五圓札を持つて居て、

「いや、勘定は俺がしよう」と、云ひながら女中に五圓札を渡した。雄吉は強ひて争ふべき事でもないのので、青木の爲すまゝにした。雄吉は、青木のさうした弱味を見せないぞ、零落はして居ないぞと云つたやうな態度が、可なり淋しかつた。

二人は、尾張町から上野行の電車に乗つた。ふと、雄吉は停留所の電柱の時計を見ると、丁度三時を示して居る。明日の四時と云へばもう二十五時間だ。二十五時間経てば、青木

——雄吉にとつては、永久の苦手とも云ふべき危険性を帯びた此男は、東京に居なくなつてしまふのだ。もう少しの辛抱だと思つた。さう思つて居ると、青木は、

「君！ 雜誌記者なんて、随分惨じめな報酬だと云ふぢやないか、年末の賞與がタツタ五圓といふ社が、あるさうぢやないか。君の方は何んなだい」と云つた。

雄吉は、又始まつたなと思つた。

「僕の方は、そんなでもないな」と、答へながら、心の裡で二十五時間を繰返した。そして「桑野の所へ連れて行けば、桑野が又何うにか時間潰しをして呉れるに違ひない」と思つた。

祝 盃

久野の家を出た三人は、三丁目から切通しの方へ、ブラブラ歩いて居た。五六年前、彼等が、一高に居たときは、此の通を、もつと活潑な歩調で幾度散歩したか分らなかつた。

その時は、啓吉も久野も、今度久しぶりで、ヒョククリ上京して來た青木も、銘々それぞれに意氣軒昂たるものであつた。その中でも、青木が一番自信を持つて居た。その天才的な態度や行動のために、皆からも一番輝く未來を持つやうに思はれて居た。

啓吉や久野も、いつの間にか、青木には一目も二目も置いて居た。が、運命は皆の期待した通りには、廻らなかつた。みんなから、一番囑望されて居た青木は、大學に這入つたその年に、彼自身の不行跡から、學校に居られなくなり、啓吉や久野にも随分不義理な事をして、日の目を見ないやうな山陰の田舎に埋もれてしまつた。田舎で英語の私塾を開いて居ると云つたやうな噂を、啓吉は誰からともなく聞いて居た。その青木が何の前觸もなく突然上京して、啓吉を尋ねて來たのである。

青木が、みんなの期待を裏切つて、埋づもれてしまつたのと反對に、啓吉も久野も文壇的には自分達の豫想以上の世の中に出て居た。

「文學に志したのだから、せめて翻譯でもして、文名を成したい」

そんな謙虛な事を考へて居た啓吉は今では、思ひがけもなく新進作家として、相當な位置を占めて居る。久野などは、啓吉よりも、更に一年も早く文壇に出てしまつて居る。

久野も啓吉も黙つて歩いた。五六年前には、何の相違もなかつた三人の間に、今では社會的には、ハツキリとした區割が付いて居る。

久野敏雄と云へば、文學好きの青年は、大抵名前丈は知つて居るが、青木好男と云つても、誰が知つて居るだらう。五六年前は、同窓の間では、敬意と、かすかではあるが、驚異とを以て呼ばれたその名前が、今では何人も知らない平凡な普通人の名前になつてしまつて居る。

「僕ね。今度臺灣の方へ行くやうになつたのだよ。總督府に

調査部と云ふのがあつてね。其處へ行くことになつたんだ。三人の沈黙を破るやうに、青木は昔ながらの、美しい沈んだ聲で言つた。

「さうか。それは結構だね」と、久野も啓吉も同時に云つた。が、二人ともそれに就いて、何の意味もなかつた。思索家として、優れた芽を持つて居さうに見えた青木が、調査部とか何とか云ふ難務に、従事すると云ふことが、久野や啓吉の心を暗くした。

三人は、また黙つて歩いた。一高時代の回想談などは、今の三人の顔觸では、どれもこれも皮肉になるので、啓吉も久野も話し出さなかつた。

それよりも、啓吉は今もつと、話したいことは今度B社から出ることに定まつた自分の第一の創作集のことだつた。昨日話が定まつて以來、自分丈の胸に、藏つて置くのには、あまりに嬉し過ぎることだつた。第一の創作集が、世に出るときの嬉しさは、さうした経験のある人でなければ、分らないことであるが。

「僕の本ね。到頭定まつたよ。B社から出すことにしちやつた」

到頭啓吉は、小聲で久野に言つた。さつきから、話題に困つて居たらしい久野は、解放されたやうに、それに應じた。「うむ！ B社から、それはいいね。幾ら刷るのだ」

くなつて居た。

青木が高等學校時代と同じやうな、熱心な態度で、コーヒーを飲んだり、料理を喰つたりして居ることが、啓吉の心を暗くした。

カフェーを出た三人は、又ずる／＼べつたり本郷まで歩いて來た。まだ十時頃であつた。が、三人で居る妙な心の緊張には、啓吉も久野も飽いて居た。

が、三丁目電車が來ても、青木はまだ乗りさうにしなかつた。三人は、其處で十分ばかり、ぼんやり立つて居た。幾年振りに上京した青木には、いろ／＼な感慨が、胸の中にこみ上げて居るのかも知れなかつた。が、啓吉は青木を透つた後で、久野と二人で、青木のことについて、話して見たいと云ふ要求が、可なり強く感じられた。が、青木は自分一人丈、別れて歸りさうには見えなかつた。

「君は、この電車に乗つたら、乗換がないのだらう」

啓吉は、悪いと思つたが、つい／＼口が滑つてしまつた。

青木は、やつと歸るのを決心したやうに、

「さうだ！ ぢや失敬しようかな」と、言つたまゝ、道に、

しんみりと、

「もう會はないかも知れないよ。明日中に立つ筈だから」と、言つた。

その小柄な身體を、聳やかして、電車に乗る後姿を見て居

「二千五百部」

「さうだらう。僕のも同じだつた。装幀はやつぱり右田茂かい。あつさりしていいね」

「校正は、自分でやらなきやいけないのかね」

「B社なら、初校さへ見て置けば、再校は向うで見て呉れるよ」

B社からもう二三度、本を出したことのある久野は、先輩ぶつて言つた。

啓吉は、かうした話が、どんな結果を青木の心に與へて居るか云ふことが、分り切つて居ながら、やつぱり止められなかつた。青木が、臺灣へ行くよりも、かうした話の方が、幾分か啓吉達の興味を支配したか分らなかつた。

三人は、またこだわりのある沈黙を續けながら、池の端へ出て、そこにあるカフェーへ立寄つた。カフェーでも立寄つて居る方が、時間が過し易かつたからである。

話は、また暫らくは高等學校時代へ歸つた。どんなに、銘喰意地が張つてゐたか、カツレツ一皿を喰ふために、どんなに金の工面をしたか、教科書をまで賣拂つて、喰つたり飲んだりしてしまつたか、さうした話題は、今の場合三人が、一番安易な心で耽り得るものであつた。が、久野も啓吉も、それ以來の長い都會生活で、だん／＼趣味が洗練されて、いつの間にか、かうしたカフェーの料理などには、満足されな

ると、啓吉の心にも、舊友に對する純な感情が、こみ上げて來るのだつた。

青木を見送つてしまふと、久野も啓吉も、解放されたやうにホツとした。久野は今迄とは別人のやうな軽い口調で言つた。

「おい！ ソーダ水でも飲まうぢやないか」

「うむ飲まう」

啓吉も、久野の氣持が分つた。二人とも青木に就いての感慨を話して見たかつたのだ。

つい近くのカフェーの卓に向ふと、久野はウエイトレスが持つて來たソーダ水をお役目のやうに、すゝりながら言つた。

「青木の奴、ちつとも變つて居ないぢやないか」

「僕も、それで駭いたのだ。昔とちつとも變つて居ないね」と、啓吉も全く同感だつた。

「でも、分らないものだね。青木丈が落伍するなんて」

久野は、さう言ひながら、ソーダ水をグツと飲み乾した。

さうだ！ 高等學校の末年から、大學に移る頃には、久野も啓吉も、青木に劣らないやうな、亂暴な出鱈目な生活を續けたものだ。それなのに、危い橋を渡りながら、二人とも眞面目に學校を勉強した同窓などよりも、社會的には出世して居ると言つてもよかつた。

「俺達は考へて見ると運がいゝんだよ」
 さう言ひながら、啓吉もソーダ水をグツと飲んだ。
 それは、ソーダ水であつた。が、二人とも無意識ではあつたが、お互の幸運を祝つて、祝盃を擧げて居る譯だつたのだ。

將棋の師

俤は御所の中を走つて居た。うらゝかな春の午後である。淡く澄んだ空に、もうスツカリ緑色になつた叡山が、御所の屋根越に、のびやかに聳えて居る。

春の日を一杯に浴びた楠や梅檀の大樹や、青く萌え出でた芝生が、新鮮な感じを與へた。俤上に居る彼の心持も、暢然としたこだはりのないものになつてしまふ。

三條の宿を出た彼は、寺町を下つて出町橋に出て、其の橋の東の袂にある、床春と云ふ理髮店を訪ねようと思つて居た。

其店の主人は、彼の將棋の先生だつた。京都に學生々活をして居た彼にとつて、將棋は娛樂以上、遊戯以上の何物かであつた。彼は、その頃一人の友達も持つて居なかつた。飲食の樂しみを擅にし得るほどの金も持つて居なかつた。彼は、身を噛み裂くやうな無聊に苦しめられた。道端で會ふ犬にまでも話しかけたいやうな寂しさに襲はれた。交際下手な彼は、一寸親しく口を利く友達さへ出来なかつた。最初の一年は、彼は毎晩のやうに、白河の下宿を出て、京極まで散歩に

行つた。どんな寒い晩でも、それを缺かさなかつた。底冷えの烈しい冬の夜に、外套もなしに、一里近くの道を歩くことは、散歩でなく苦痛であつたが、それでも下宿の室で、汚い洋燈の光の下で、一人いら／＼して坐つて居る寂しさよりは勝つて居た。

彼のさうした寂しさと無聊とを、救つて呉れたものは將棋であつた。將棋を指すことは彼に取つては、新しい一つの生活であり、彼が発見した一つの新しい世界だつた。何の生々とした慰もなかつた彼の生活は、將棋に依つて、その日／＼の生甲斐を感じた、その夜の幾番の將棋に勝越して、のうのうとした心持で、歸るときは、凡てのいら／＼しさや、淋しさを忘れることが出来た。京都に於ける彼の三年の孤獨生活は、將棋に依つて、わづかに救はれて居たと云つてもよかつた。

床春の主人は、自分自身將棋が、可なり好きだつた。彼が、相手もなくぼんやりして居ると、よく仕事の合間を見ては、「學生さん、一つ行きませうか」と、云つて盤に向つた。小

肥りした大きい赤ら顔の男で、彼が少し考へ込むと、それを自烈つたがるやうに、駒で盤の腹を、パチンと叩く癖があつた。が、親切にいろ／＼な指手を教へて呉れた。彼は、最初此の主人に、二枚を落されても、勝てなかつたが、一年半ばかりの間に、一枚でも勝が見えるやうになつた。

將棋を教はる謝禮は、頭を刈つて貰ふことだつた。そして、餘計な釣銭を貰はないことだつた。彼は、將棋を教はるお禮心で、充分生えて居ない鬚を剃つて貰つたり、充分生えて居ない髪を刈つて貰つたりした。主人も、彼のさうしたお禮を欣んで受けて居ると見え、夏休みの始まる前などには、「また九月においでやしたら、頭を刈らして貰はななりまへん」

と、云ふやうなことを云つた。子なしの夫婦者であつたが、二人とも親切だつた。むろん、其處へ將棋を指しに来る定連は澤山あつた。その中でも、彼とよく指したのは、岩はんと云ふ印刷所へ通つて居る若い男と、留はんと云ふ近所の精米所の車力とであつた。

岩と云ふ男は、彼と恰度互格であつたが、床屋の主人は、彼に對するひいきから、彼の方を少し強いと云つて呉れた。留は、彼より一枚丈強かつた。鋭い指し方で、彼は幾番となく續けざまに破られることがあつた。留はんはそんなとき、主人でもが顔を出す、

「今學生はん、お腹の下げるほど、負けて居やりますのや」

と云つたやうな口の利き方をした。彼は此の男に、惨敗した盤面を、今でも目を閉ぢると一つ二つは、思ひ出すことがある。彼は、此の男が一二度精米を載せた車を引いて行く所に會つたことがある。留はんは、そんな時彼の方に顔を背けながら、通りすぎるのが常だつた。彼は、何だか濟まないやうな氣がせずには居られなかつた。

かうした連中に交つて居る彼は、學生さんとして、皆から尊敬された。お籤の文句などを、學生はんには、呼んで貰うた「え、え」など云つて頼れた。むろん主人の配慮で、彼は外人達よりも數多く盤に向ふことが出来た。皆も、彼によく順番を譲つて呉れた。

京都に於ける彼の學生々活は、金のないためや、本當の友人のないために、不愉快なことのみが多かつた。彼は、その生活が不愉快であつたため、京都その物に對してさへ、いゝ感じを持つて居ない。たゞ毎晩のやうに、將棋を指しに行つた此の床屋と、その主人など丈が、彼の頭にあるなつかしきを持つて居る。

彼は、學生々活を終ると同時に、京都を去つて以來、三四度も京都に來た。その度に、一度將棋の師を訪ねようと思ひながら、いろ／＼な都合で、訪ねることが出来なかつたのだ。

傳が出町橋に近くなつたとき、彼は手土産にする心算の酒を買はねばならないと思つた。が、酒屋の前に車を止めたととき、彼はふと考へた。あの主人は果して、丈夫で居るかしら。彼は、二三年前に流行した悪性な感冒のことを思ひ出した。あの肥つた心臓の弱さうな主人は、感冒にでも罹つたら、一堪りもないに違ない。そんなことを考へながらも、「白鶴」の一升入れの饅頭を買つた。

鴨川の河原の小石は、春の日にしら／＼と輝いて居る。出町橋は少しく短くなつて、東岸の所が埋め立てられて、其處から下加茂の方へ新道が出来て居る。

傳は、出町橋を渡り切つた。直ぐ其處の袂に立派な理髮店があつた。床春が玆へ移つて、改築したのではないかと思つた。よく、主人が、

「學生さん、もうぢきに大きくなりますぜ」

と、口癖のやうに云つて居つたのを思ひ出した。が、その店は關谷理髮店と書いてあつた。關谷と云ふのは、あの主人の姓ではなかつた。傳が、二三軒進むと、やつぱり元の所に、昔ながらの小さい店があつた。表が、りの緑色のペンキ塗など、少しも變つてゐなかつた。ただ、入口の扉丈が、それでも新しく掛け替られて居た。

床春といふ軒燈の字を見たとき、彼は云ひ知れぬ懐しさを感じた。

一升饅頭を手にして、傳から降り、そして扉を開けた。見ると、暗い店の中に客が一人居て、その客の顔を若い女が剃つて居た。

「親方は居りますか」

彼は上半身を中へ入れて訊いた。

「居やしません」

「ぢやお神さんは？」

「お神さんも居やしません」

若い女は此方を見かねて答へた。

彼は軽い失望を感じずには居られなかつた。

「何時頃歸つて來るでせう」

「何時頃だか分かりません。一緒に宿りがけてお詣りに行か

はつたのやけに、今日晩遅く歸つて來やりまするやう」

さう云つた、若い女は初て、彼の顔を見た。

「まあ、あなた木村はんやおまへんか」

と、駭いて云つた。彼は、この女が何うして、彼の名を覚えて居るかと思つた。が、直ぐあの頃、十二三の少女

が時々主婦に叱られて居たことを思ひ出した。その少女までが、自分の名を覚えて居て呉れたかと思ふと、彼は一寸涙ぐましい心持になつた。

「よく覚えて居たね、僕の名を」

さう云ひながら、彼は持つて來た一升饅頭を中へは入つて、

香水などを置いてある棚の上へ置いた。そして、自分の名刺を横へ置いた。

「親方が歸つたら、僕が訪ねて來たと云つて呉れたまへ。二三日居るから、暇があつたら來るかも知れないが、然し多分來ないかも知れないから」

さう云つて、彼は外へ出て、俵に乗つた。何處へ行つていいか、一寸方向に困つた。彼は、俵の上で少し考へた末、下加茂へ行かうと思つた。下加茂の境内は、京都の名所の中で、彼の一番好きな場所だつた。

主人夫婦に會へなかつたことは、残念であつたけれども、その頃十二三であつた少女までが、自分の名を覚えて居て呉れたことは、彼れには堪らなく嬉しかつた。あの容子では、主人も屹度彼の事を忘れないで、時々話して居て呉れるのに違ないと思つた。主人が歸つて來て、彼の訪問を知つての欣び方も、彼には想像が付いた。そして、酒好きの主人が、彼が贈つた酒をどんなに、楽しんで味ふかと考へて居ると、彼は自分自身、楽しくなつて、天地に漲つて居る、春の心の中に溶け入つて行くやうな心持がした。

その彼の眸に、鶉色の若葉を透して、下加茂の社の朱の玉垣や神殿が映り始めて居た。

天の配劑

自分が京都に居たとき、いろ／＼な物が安かつた。食費が月に六圓だつた。尤も朝が六錢で晝と晩が八錢づゝだつた。一日二十二錢の譯なのだが、月極めにすると二十錢に負けて呉れるのだつた。素人の家の間を借りて居たが、間代が二圓だつた。尤も、自分は大學生として、最もつましい生活をして居たには違ない。が、食と住とが僅か十圓以下で足りたかと思ふと、隔世の感がある。

二十圓足らず送つて貰つて居た學費でも、さう不自由もしなかつた。その頃の五圓十圓は、それほど有難かつた。

大正二年の十一月だつた。河合武雄の公衆劇團が京都へ來た。一番目が「茶を作る家」と云ふ狂言だつた。愛蘭土劇を、譚案したものだつた。友人の久米が、東京で見て、面白いから是非見ると云ふハガキを寄越して來た。その頃、近代劇を専攻して居た自分は、今よりも、芝居に對して熱心だつた。自分は初日が開くの、待ちあぐんで居た。忘れもしない十一月八日が初日だつた。丁度土曜日だつた。その時自分の墓口には、六圓と幾何かあつた。それがその

月中の小遣だつたのだ。京都座の前で、自分は何等を買はうかと、一寸思案した。が、その頃は極度に節儉だつた自分は、四等を買つてしまつた。三十錢の觀覽料が、初日だつたので半額の十五錢だつた。

汚い四等席の疊の上に、自分は腰を落付けた。が、自分はこんなことを考へた。たとへ、四等に蹲くまつて居ても、茲に集まつて居る見物の殆ど凡てよりも、芝居に付いては、分つて居るのだ。さう思ふと、淋しい瘡我慢が出來た。自分は、可なり熱心に見て居た。

一幕目が了つたときだつた。自分の横へ、一人の職人風の若い男が來て坐つた。青い棒縞の汚い着物を着て居た。

「これ、何と云ふ芝居だすか」と、云つたやうな調子で、狂言に對する自分の註釋を求めた。芝居に對する知識を、内心で得意にして居た自分は、さう訊かれると、得意になつて話し出した。公衆劇團の性質やら、狂言の主題や、新劇運動の主旨と云つたやうなものを、得意になつて話したやうに覺えて居る。若者は、熱心に聽いて居るやうな風をして居た。

二幕目が始まる前に、自分は便所へ立つた。席へ歸らうとしたときに、もう幕が開いて居た。強ひて歸るほどの席でもなかつた。廊下へも澤山の人が立つて見て居たので、自分も其處に立つて見ることにした。さうした方が、四等席で見るとよりも、よく見えたのである。二幕が、もう了りかけた時であつた。四十ばかりの女が、自分の背後から靠れかゝるやうにした。自分は、その容子を變に思つた。自分は拘摸ではないかと、直覺的に思つた。自分は、急いで左の袂を探つて見た。自分が怖れた通り、褻口が無くなつて居たのである。念のために、右の袂を探つた。が、其處に自分の手に觸れたのは、堅い下足札であつたのである。

自分は、てつきりその四十女が、盗んだものと確信した。「君は、僕の褻口を知らないか」と、自分はそんな風に、露骨に云ひ出したやうに記憶して居る。

「まあ！ けつたいもないこと云ひなはん」と、その女も怒つた。自分達が二三度押問答をして居る内に、相手の女は二三人の味方を得た。氣が付くと、その女は劇場のお茶子であつたのである。同類らしい女達が、見る／＼内に、七八人も集まつた。口不調法な自分は、手もなく云ひくるめられてしまつた。その中に、相手の方には、お茶子の取締らしい男まで加はつてしつた。その四十女は、可なり周囲の者から、信用があるらしかつた。自分が、幾何云ひ争つても、何も證

據はなかつた。おしまひには、自分の方が旗色が悪くなつて、謝罪までさせられさうになつた。自分は、口惜しかつた。金を取られた上に、散々云いくるめられて謝罪まで、せなければならぬやうになつたのが、残念だつた。自分は、臨場の巡查にまで訴へた。が、少しも取り上げては呉れなかつた。お茶子達の云ひ分を、信じて居るらしい巡査は、その女を調べて見ることさへしなかつた。

が、自分もその中に、ふと四等席で、自分の横に坐つて居た若者の事を、思ひ付いた。自分が、芝居のことを訊かれて、得意になつて、喋つて居るときに、まんまとやられたのだと云ふ氣がした。自分は、さう氣が付くと直ぐ、四等席に歸つて見た。其の若者は、もう其處には居なかつた。

芝居を見る氣持などは少しも残つて居なかつた。その月中の小遣を、スツカリ盗られてしまつた上、間違つた云ひが、りをして、散々やつ付けられたことが、可なり不愉快であつた。快々として少しも楽しまなかつた。他人から學資を仰いで居た自分は、他に一錢だつて算段する當はなかつた。一文も小遣なしに、その月中は辛抱しなければならなかつたのだ。自分はケチ／＼して四等には入つた事までが、不快であつた。盗られてしまふ金だつたら、十錢でも二十錢でも、澤山使つておけばよかつたと思つた。

月末まで、二十日あまりも、一文もなしに暮さねばならぬ

ことを思ふと、自分は情氣切つてしまつた。

翌日は、日曜日だつた。平素は早く起きる自分だつたが、その日は起きる元氣がなかつた。十二時過ぎになつてから漸く起き上つた。自分は、起きると下へ行く梯子段に萬朝報が置いてあるのを取り上げた。京都では東京の各新聞は丁度一時頃に配達されるのだつた。自分は、何氣なく萬朝報を取上げた。その日は、丁度日曜であつた。自分がふと四面へ目をやると其處に、自分が二月も前に投書した、懸賞小説が當選して居るのだつた。投書してから一月位は、當選するか／＼と待つて居たが、幾何待つても出ないので、もうスツカリ忘れて居たのであつた。

自分は、近き過去に於て、此時位嬉しいことはなかつた。その時に得た懸賞金の十圓位、有難く忝い金はなかつた。自分は嬉しさの餘り、思はず涙ぐんだほどだつた。その時まで、自分は運命と云ふものを、全體として悪意のあるものだと感じて居た。が、此時初めて馬琴の小説にあるやうに、天の配廻と云ふことを感じた。擲理と云ふやうなことを感じた。

自分は、其懸賞金を受取ると、盜難に逢つた六圓を補つた残りて、晩秋の大和へつましい小旅行を企てたのであつた。

従妹

従妹と私が、一緒に上京したのは、もう十二年も昔の事である。そのとき、私は廿二で従妹は十九であつた。

そのころ、私は可なり失意な境遇にあつた。私は、その夏中學卒業後推薦で入學してゐた官立學校を、除名されたのだつた。その學校にゐた頃の私は、何と云ふ原因なしに、亂暴で滅茶苦茶だつた。私は、その教員を養成する學校へ、心からの志望でなしに只一番學資がかゝらないと云ふ理由で、は入つてゐたのだ。従つて私は學校や學課に對し、尊敬も誠意も持てなかつた。羊の中に狂犬が交じつたやうに、大人しい生徒の中で、私一人わが儘一杯に振舞つてゐた。私は、教科書を殆んど持つてゐなかつた。そして、授業の時間毎に、机を傍に並んでゐる級友の方へ寄せて本を見せて貰つた。又私は、學校を休み、そつと寄宿舎を脱け出して、芝居の大入場で、半日を過して歸ることも多かつた。私の行動は教授達の眉を、ひそめさせた。その中でも、私は舍監をしてゐた歴史の教授に、一番愛憎を盡かされた。それは、春の終りの午後であつたが、私は歴史の時間に教室へ行つたとき、筆記のノ

ートを忘れて來たのに氣が付く、寄宿舎へ取りに歸つた。すると、寄宿舎の傍の櫻の若樹に圍まれたコートで、顔を見知つた人達が、テニスをやつてゐた。私が入ると、丁度三組になるのだつた。うらゝかな晩春の日を浴びて、テニスをやることが、いかにも楽しく思はれたので、私はフラクとして、ラケットを取つた。そして、私は、夢中になつて、二時間もやつてゐた。その裡にふと氣が付くと、コートに添つた道を寄宿舎の方へ歩いて來てゐた舍監が、私を見付けると、立ち止まつて、私の方を睨み付けてゐた。私は、何のために舍監が私を睨むのか、何うしても氣が付かなかつた。その日の夕方私は不意に舍監室へ呼ばれた。

「君は何うして歴史の時間を休んだのかね」

舍監は、苦り切つて云つた。私は、やつと舍監が、テニスをしてゐた私を、睨んだかゞ分つた。

「氣分が悪かつたのですから」

「うん。それによくテニスが出来たね」

私は、ハツと思つたけれど、こんな時、決して負けては

なかつた。

「テニスでもやると、氣分が晴れるかと思つたのです」

舍監は、私のへらへら口で、呆れて私を憎惡の眼で見直した。その上、私は級會があつたとき、その席上、教授達の忌諱に觸れる演説をした。それは、たゞ個人主義を主張した丈であつたのだ。その頃の、あゝした學校では、個人主義など云ふものは、可なり危険な思想であつたのだ。私は、忠實な學校大事な級友達の即座な反對を受けた。おしまひに、擔任の教授が立上り、そして雑誌などで、讀みかぢつた思想を振り廻す危険を指摘した上、共同一致の美を説き、級のために團結しようと思ふ者は、一齊に乾杯しよう云つた。忠實な學生達は、拍手してこれに應じた。私も、四面楚歌の裡に、仕方なく立ち上つて、リキエールの中の安葡萄酒を飲みほした。自分の心柄とは云ひながら、私は可なり不快であつた。

そんな譯で、私がその夏休みに歸省すると、除名の通知が、後を追ふやうにやつて來た。さて除名されて見ると、私は當惑した。一番學資のかゝらない學校を、しくじつたのであるから、學資の乏しい私には、他に選ぶべき學校はなかつたのである。折角推薦した學校を、しくじつたと云ふので、私は中學校の先生達の信用も無くしてしまつた。家では、元々嫌な學校へは入つたのが、分つてゐたので、そんなに非難されもしなかつたが、父も兄もがっかりしてゐるらしかつた。私

は、怏々として一夏を過した。

私はもう他の學校へは入ることを斷念して、司法官か辯護士の試験を受けることを考へ付いた。私は、法律などに少しの興味もなかつたのであるが、學資のない私には、それが世の中へ出る一の早道であるやうに思はれた。が、それにして、二三年の間の學資は必要だつた。折よく私の家の遠縁に、小金を持つてゐる一人者の老人が居た。私が秀才だと云ふことは、私の家の親類の間では、迷信に近いほど信用されてゐたので、この金貸してもしきやうな鄙吝な老人が私の學資を出して置けば、五年もすれば、十倍にもなつて歸つて來るやうに考へたらしい。私が將來、この老人の養子になると云ふ條件で、私はこの老人から學資を得ることになつた。私は、學資を得ることさへ出來れば、それが盗人の懐から出てゐやうと、介意ないと云つたやうな氣であつた。

中學校を出て、直ぐ上京した時には、私は級中最初の上京者であり、最初の専門學校入學者であつたので、同級生や下級生から、私は華々しい見送りを受けたものだつた。が、私のこの二度目の上京は、コン／＼と故郷を逃げ出すやうに、惨めなものだつた。私は、友人や中學の先生などにも、知らさずに、ひそかに上京しようと思つてゐた。

丁度、その時に、偶然私の従妹も上京することになつた。従妹は、その年の四月に、女學校を出たのであつた。彼女の

父は、よほど前に死んで、母と姉と三人で、私の家の近所に住んでゐた。生活費は東京にゐる彼女の腹達の兄から送つて来てゐるのであつた。彼女の婚期が近づくに従つて、彼女の兄は、彼女を東京に呼んだのである。東京の兄の家で半年ばかり家事の見習をして、彼女の厄年を過し、來年になつたら、結婚させると云ふ豫定であつた。

「若い者、同志ぢやけども、豊さんなら、信用が置けるけに」
「へえいへえ。豊さんなら、安心して一緒に行つて貰へるわ」

彼女の母や姉は、さう云つて、私と同行させることにした。無骨な寡黙な私は、そんな風に信用があつた。

十九になる従妹は、十人並に美しかつた。目が、少し窪んでゐたけれども、色白で顔立はととのつてゐた。従兄弟姉妹と云つても、親疎の度は可なり違ふものだが、従妹と私の家とは可なり親しかつた。丁度、私の妹と彼女とが、同年であつたので、彼女は毎日のやうに、私の家へ来てゐた。私とは取りわけて、仲がよいこともなかつたが、彼女は私の周圍にゐるたゞ一人の美しい異性として、私は物心づいてから、初恋などと云ふもの迄へは行かなかつたが、それに似た淡い感情を、彼女に對してずつと持ちつゞけてゐた。

「豊さんのお嬢さんには、お澄さんが、丁度えゝわ。あの方、えゝ器量ぢやけに」

の座席と一間も離れてゐる彼方へ腰を降した。私は、従妹のさうした思慮が、いやに冷たく寂しく思はれた。

新橋へ着いたとき、従妹の兄の夫人が迎ひに出てゐた。私も、最初上京したときには、この従妹の兄の家に厄介になつてゐた。そして、學校の保證人になつて貰つてゐた。が、除名されたために、従妹の兄は、私を不良學生か何かのやうに誤解してゐるらしかつた。そして、私が何かの不品行のために、除名されたやうに思つてゐるらしかつた。従つて私も従妹の兄と、その場合顔を合すのが、嫌だつたので、従妹を、その兄の夫人に渡すと、止められるのを振切つて、停車場で別れ、中野にゐた友達の下宿へ行くことにした。

× × ×

私は、その後従妹に、永い間會はなかつた。従妹が寄寓してゐる彼女の兄の家へは、前に云つたやうな理由で、私は行かなかつた。従つて、私は従妹の消息も、國からの手紙で知つたのだつた。その手紙に依ると、従妹はその翌年の春早々、彼女の兄の世話で、良縁を得たと云ふ話であつた。先方は、第×銀行と云つたやうな大銀行へ出てゐる若い銀行員で、その上、家に相當な資産があると云ふことだつた。「電燈が十一點いてゐる大きい家に住んでゐるとか、金井の伯母さんは大よろこび」私の母は、そんな風に従妹の結婚後の生活を知らせて來た。電燈が、十一點いてゐる家、それはまだ電燈が

私は十二三の時、近所のお神さんに云はれて、顔を赤くしたことを、後までもずうつと覚えてゐた。

が、その時、彼女が結婚するために、上京すると云ふのを聞いても、彼女の幸福をこそ祈れ、彼女を失ふ悲しみなど云ふものは、少しもなかつた。たゞ、私の失意な、引きたゝない上京に、若い異性の伴のあることは、その時の私に取つては、唯一の心やりであり、慰めであり、刺激であつた。

その時の出發や汽車中の模様などは、大抵は忘れてしまつた。たゞ、私は若い二人を、いぶかしげに見てゐる乗客達に對し、ある羞恥と、同時にある得意さを感じたやうに記憶する。それから、私は旅行についてのあらゆる經驗と智識とで、彼女を世話したやうに思ふ。たゞ、彼女のことを注意するあまりに、私は危く自分の財布を、神戸の驛の切符賣場へ忘れかけて、駭いて取りに歸つたことを覚えてゐる。

何でも、神戸で乗り換へたときであつた。私達の最初に入つた車室には、乗客が多かつた。私は従妹を促して、空いた車室を求めた。すると、一の車室はガラシとして、客が一人も乗つて居なかつた。私は、これ幸ひだと思つた。私はなるべく他の車室の方から見えないやうな奥へ進んで、腰をかけた。そして、従妹をさしまねいた。私は、彼女が私の傍へ並んで坐るのを待つてゐた。が、彼女は私の後について來たものゝ、傍に誰もゐないのを見ると、少しモチ／＼した後、私

點いて間もない田舎の町の十燭光一つか二つの家に、住んでゐる私の母や、伯母には、どんな驚異であつたかも知れなかつた。東京にゐた私にも、電燈が十一點いてゐると云ふことが、壯麗な大きい家を想像させたのだから、「すうちやんの仕合せ」それは、永い間、私の一族の話題になつたらしい。

「すうちやんの仕合せ」とは、反對に私はその一年間、何の希望もなしに過した。初め、法律をやるために、神田の私立大學に籍を置いたのだが、直きに飽いてやめてしまひ、中學時代から得意であつた英語で身を立てようと考へ直し、正則の夜學校の高等科へ通つたりした。私に學費を出してゐた老人は、私をその知人だと云ふ男へ紹介したが、その男は小石川區武島町の裏店に住んでゐた。私は、老人から送つてくる零細な學費で暮してゐた。ある晩、私は學校からの歸りに駿河臺下から、水道橋へ抜ける通を歩いてゐた。その時、私は咽喉が乾いて、堪らなかつた。私は、果物屋の前を通つたとき、其處の店頭の蜜柑が、喰へたくてたまらなかつた。私は、そのとき懐に一錢しか持つてゐなかつた。私は、耻を忘れて、云つた。

「蜜柑を下さい！」

「おいくらです！」

廿歳前後の小僧が云つた。

「一錢」

彼は、私を輕蔑したやうな笑を洩しながら、うづたかく盛つてある蜜柑の山の中の中から、一番小さきやうな一つを、取り出して、私の掌の中へ入れて呉れた。その頃は、今よりは、物價が非常に安かつたが、一錢の蜜柑を買ふことは、可なり氣耻しいことだつた。そんなわびしい不自由が、私にはずうとつゞいた。

四月になると、私はまた學校を變へた。同時に卒業した連中に二年も遅れたため、私はあせりぬいて、ちつとも落着けなかつたのである。やつぱり、専門學校を正當に出る外ないと思ひ、私はある私立大學の文科へ籍を置いた。元來利慾から投資してゐた老人は、私が文科へ席を置いたと同時に、學費を送ることを拒絶して來た。迷惑違ひをした彼は、私に學費を出したことを永い間後悔してゐた。それ以來、私の學費は、家の痛ましい負擔になるのだつた。私が五圓使へば五圓、十圓使へば十圓宛家の借金になるのだつた。それにも拘はらず、高等學校の入學試験が近づくと、又私は高等學校へは入りたくなつた。最初から高等學校へは入らないのが、間違つてゐたのだ。高等學校へは入れば、あんなことにはならなかつたのだ。二年遅れてもいゝ、高等學校へは入つてやらう。私は、そんな風に考へた。學費が續かないことは目に見えてゐたのだが、さう云ふ點では、吞氣で私の學費を信じてゐた父兄は、それを許して呉れた。

心細いやうな氣がした。従妹が歸つた後で、下宿の主婦は、「まあ、いゝお嫁さんですね」と、従妹を賞めてくれた。

私は其後十一年の間、従妹に會はなかつた。私は、その間どうか、かうか、永い學校生活を了へて世の中に出た。がその間に従妹は、かしま立の幸福に比べては、思ひもかけなかつたやうな不幸のどん底に落ちてゐた。従妹が嫁いだ家は最初思はれたほど、財産のある家ではなかつた。その上若い夫が、放蕩を覺え、株に手を出し、一二年の内に、財産を蕩盡してしまつた。財産と同時に職業を失つた一家は、四谷の陋巷に落ち込んで行つた。其處で、窮乏の二三年を送つた。一家が手内職で、やつと其の日その日を過して行つたらしい。その間に、従妹は零落した夫を捨てずに、貞節を盡したらしい。そして、二人の子を生んだ。其の貧民窟の差配をしてゐる男が従妹の貞節に感心し、従妹の夫のために、朝鮮の釜山にある漁業會社に勤口を見付けて呉れた。一家は救はれたやうに、朝鮮へ行つた。従妹の不幸はこれで終るかやうに見えた。が、それは空顧みて、釜山に居付いて、位置も進み、収入が殖えるのにつれて、彼女の夫は、又放蕩を始めた。そして、娼妓に深い馴染が出来、到頭會社が不首尾になつて、東京へ歸つて來た。東京へ歸つてからの不幸は、前の窮乏とは比較にならなかつた。夫は間もなく、肺を病ひ出し半年ばかり病んで倒れてしまつた。

高等學校の試験には、無事に及第した。私は、久し振で、華やかな氣持になつた。前途は遠いのだつたが、とにかく今出た峠は、明るかつた。私は、入學した欣びを胸に包んで、一年振に歸省することになつた。その時に、私は結婚後の従妹に初めて會つた。私が歸省すると云ふことを、國の母から知つたと見え、國の家へ言傳するため、私の下宿へ訪ねて來たのだつた。その頃、私は動坂近くの汚い素人下宿にゐた。

従妹は今から考へると、お召か何かの着物を着てゐたらしい。着飾つた年頃の女が、私を訪ねて來たことは、下宿の女主人を駭かせた。従妹は、まだ東京化してゐなかつた。「さうで」とか「あらまあ」と云つたやうな、私と國の言葉で話した。私は彼女の母への言傳を聞いた。親類などが、出世するといくらかでも、その恩恵にあづからうと云ふのが人情であるが、私もさう云ふ心持が動いたのかも知れない。従妹に一圓貸してくれと云つた。私は、その時一圓絶対に必要だと云ふ譯ではなかつたが、汽車賃を拂つてしまふと、辨當代もさう充分でなかつたので、十一の電燈が點いてゐる家に住んでゐる従妹に借りたくなつたのであらう。従妹は石竹色の絹レースで編んだ小さい巾着を取り出して、中から一圓札を取り出して貸してくれた。私は従妹の噂にきく裕福に比べては、何だかその巾着の内容が貧弱らしく思はれたので、私は少し

私が、従妹のかうした不幸を聞いたのは、京都の大學にゐた頃だつた。私は、幼馴染の彼女の不幸に、可なり心を痛めたけれども、無力な——他人から學費を貰つてゐた無力な私は、どうすることも出来なかつた。私はふと先年従妹に借りた一圓を思ひ出したので、従妹に返して呉れと云つて、國の伯母の所へ一圓送つてやつた。

私は、學校を出て、東京へ來た。私は、従妹のことが絶えず、氣にかゝつてゐた。が、従妹の兄とは（腹違の兄で従つて、私とは何の肉縁もないので）疎遠になつてゐたし、又その兄に従妹の消息を、わざ／＼訊くほど、私の生活に餘裕がなかつたのでつい／＼其の儘になつてゐた。私は、いつとなく従妹が、日暮里にゐると云ふことを聞いてゐた。私は、いつか知人の葬式に、日暮里に行つたとき、其處に並んだはじめな長屋の一から、従妹がひよつくり出て來さうな氣がして、何となくつかしいやうな、何かを待ちのぞむやうな氣で、その邊を徘徊した。

私が、従妹に會つたのは、大正九年の春であつた。丁度、その時従妹の姉が、その夫と上京し下谷の藍染町に家を持つた。そして「澄子も、近所にゐますから、ぜひ一度遊びに來い」と云ふハガキをよこした。

私は、従妹の姉が來たなど云ふことは、何でもなかつた。私は、たゞ十一年目に従妹に會へることを考へると、私は心

が躍つた。私は、絶えず従妹の事が、氣にかゝつてゐた。氣にかゝりながら、その時まで、探しもしなかつたのは、従妹を尋ね出してゐた所で、私は従妹に盡くしてやる丈の自信がなかつたのだ。が、今私は、多少とも餘裕が出来た。永い間、苦しみ抜いてゐる従妹に出来る丈のことはしてやらう。

本郷から、根津へ傳を走しらせてゐた私の心は、可なり興奮してゐた。あはれな従妹を救つてやれると云ふ欣びと、また救ひ得る力が、自分に出来たと云ふ得意さとして、私は二人の子供を抱へて、陋巷に苦しみぬいて來た彼女を考へると、私が彼女を少しでも救つてやるのが、私の當然爲さなければならぬ聖い義務のやうな氣がしたのだ。悪龍に囚はれてゐる女王を救ひ出しに行く勇ましい騎士の興奮と得意さ。私はそんなものゝ斷片をさへ心の裡に持つてゐたのだ。私は幼馴染の彼女と手を取り合つて、彼女の不幸を嘆いてやらう。彼女は、私の來たことをどんなに感謝するだらう。私は、そんなことを空想してゐた。

従妹の姉夫婦の家は、根津の電車通と平行してゐる裏通にあつた。格子を開けると、玄關も何もなしに、直ぐ八疊の居間から、臺所が見渡せられると云ふ變な間取であつた。従妹の姉は留守であつた。姉の亭主は、やはり私達と同郷で、工藝的な彫刻家であつた。私とは、初対面であつた。色の青白い律義さうな小男であつた。姉の亭主と挨拶を済ませると私

一年目に會ふ私に、挨拶をしない前から、丁度藝妓が馴染の客のお座敷へでも入つて行くときにも眩くやうな、たしなみのない聲を出したことで、私の彼女に持つてゐる幻影は、忽ち破れ去つたと云つてもよかつた。彼女の顔を見ない前から、私の心は冷たくなつてしまつた。

が、彼女が私の居る座敷へは入つた時、彼女に對する私の心持は、また變つてゐた。

彼女は、よごれて縞目の分らないやうな黒っぽい衣物を着て、よれ／＼になつたメリンスの帯をしめてゐた。そして私に會ふために、羽織つたらしい晴着の羽織は、もう幾度も、水に通つたらしい大島まがひの紡績だつた。彼女が、「あゝ、しんど！」と云つたのは、彼女の蓮葉から出たのではなくして、尾羽打ち枯した姿を、私の前に洒す耻しさを打ち消さうとする、テレ隠してあつたのかも知れぬ。さう思ふと、私は彼女に對する心持を努めて、元に返さうとした。

「あゝ豊さんですか。ほんとに久し振りですねえ」

顔が、ふとつて、目が、いよ／＼小さくなり、昔の美しさは、少しもなかつたけれども、色が白いだけに、それほど醜くはなつてゐなかつた。たゞ、身なりを少しも介意はないため、可なりみぢめに薄汚く見えた。

「ほんとうに暫くてした」

「ほんとうに、しばらくですわね。もう十年にもなりますわ

は二階へ案内された。二階は、だゞ廣く六疊と八疊とが續いてゐた。

「すうちやんが、この近所に居るさうですわね。私はすうちやんに是非會ひたいのですが」

と云つた。彼女は、さうした呼方でみんなから呼ばれてゐた。

「へえ居ります。直ぐ近所です。子供に呼ばせて來ませう。が、あの人もすつかり變つて居りますぜ」

私も、従妹が變つたと云ふことは、幾度も聽いてゐた。が、私は口數の少い、何ちらかと云へば、はにかみ屋であつた従妹が、どんな境遇の激變に逢つても、ある程度以上に變る筈はないと思つてゐた。

私は、其處で二十分ばかり待つてゐた。主人との話は少しもはづまなかつた。私は、十一年目に従妹と會へると云ふ心持で、胸がつかまつてゐた。

ふと、階子段を上つて來る音がした。私は、その息づかひで、従妹だと云ふ氣がした。私はなつかしい氣で一杯だつたが、梯子段を上り切つた彼女は、——梯子段は、六疊の方へ附いてゐるので、八疊の方に居る私には、見えなかつた——可なり息を切らしながら、

「あゝ、しんど！」

と云つた。私は、その聲を超越にきいてハツと思つた。十

ねえ。豊さんもお變りになりましたわねえ、立派になつて。お父様やお母様が、さぞ欣んでいらつしやるでせう。わたしはほんとうに不幸つゞきですよ……」

さう云つて、彼女は顔を伏せた。私も暗然とした。

「私もね、貴女の噂は絶えず聞いてゐたのですがね。東京へ來てからも、貴女の所を探してゐたのですがね。今日姉さんから手紙を買つたから、直ぐ來たやうな譯です。それでお子さん達は……」

彼女は、上げようとしてゐた顔を又伏せた。

「たしか、女のお子さんと男のお子さんと二人おありでしたね」

彼女は、少し口ごもつてから、

「男の方は、兄の所へ預けてあるのです」

兄と云ふのは、麹町にある彼女の腹達の兄だつた。

「それで、女のお子さんは」

彼女はうつむいたまゝ、中々顔を上げなかつた。

「今年の春、よく／＼困つたものですから、他人にやつてしまつたのです」

私は、愕然とした。

「人にやる！ ぢや、貴女は今一人身ですか」

彼女は、顔を赤くして、うつむいた。私は、彼女の現在が略々分つたやうな氣がした。

「ぢや、再婚でもしたのですか」

彼女はうなづいた。私は、先刻「あゝしんど！」と云ふ彼女の言葉を、聞いたときよりもがっかりした。子供を二人手離し、新しい男と同棲してゐる彼女を、いきり立つて救ひに來た私が、何だか馬鹿々々しく、仕様がなかつた。もう、私はこの従妹に對して、何等の義務も無いと思つた。たゞ、私は他人にやつたと云ふ女の子のことが氣にかゝつた。

「女のお子さんは、一體何處へおやりになつたのです」

「長野の方へです」

「長野と云へば、信州ですね。何うして、そんな、とつけない所へやつたのです」

従妹は、しばらくの間黙つてゐた。

「實は、近所のお神さんに勧められて、お金に困つたものから、長野の藝者屋へやつたのです」

私は、しばらくの間、物が云へなかつた。遠くても、私の肉親の一人が、藝者に賣られてゐるようななどは、今まで夢にも思はなかつた。

「それは、何時のことです」

「今年の二月です」

私は、三月遅く、従妹の住所を知つたことが、口惜しくてならなかつた。

「七十圓です」

私は、凡てが情なく思はれた。

「さうですか。たつた七十圓ですか。その位な金なら、どうにかならぬことはないでせう。僕が、どんなにでもして取り戻して上げませう。藝者屋に置いておくなんて、そんな馬鹿馬鹿しい話はありません」

私は温和しい従妹が、上京の汽車の中で、私と並んで腰をかけることをさへ、きまりを悪がつた彼女が、自分の愛子をどんなに困つたとは云へ、藝者屋に賣り飛ばしてゐることを、どんなに駭いたか知れなかつた。私は、子供を、それほど平氣に手離して、新しい男と同棲してゐる従妹には、もう多くの好意を持ち得なかつたけれども、まだ見ぬ今年十一になると云ふたいけな『又従妹』に對しては、思ひがけない新しい義務を感じた。

従妹とのその夜の會話は、私が豫期したやうな、ロマンチックな美しいものとは違つて、どちらかと云へば、幻滅的な、少しもビツタリしないものになつてしまつた。

たゞ、私は、従妹に私の家を尋ねて來るやうに幾度も約束し、又私が彼女の愛子を、必ず取戻すことを誓つて、別れて歸つた。

私は、従妹が訪ねて來るのを待つ間、私の折へ時々訪ねて

くれる法學士を訪問して、藝者屋との養女縁組を、いかにして取消したらよいか、又先方がそれに應じなかつた場合は、如何なる手續に出ればいゝかを訊いた。その法學士は藝者屋が、その養女に、不當な行爲を強ひた事實がある場合には、直ぐにも縁組を破棄することが出来るが、然しまだ商賣に出ない前だとすれば、多少面倒になるかも知れない。先方の出様では、訴訟をしなければならぬかも知れないと云つた。そんな場合には、「長野で判事をしてゐる友人に紹介してやらうと云つて呉れた。私は、従妹と一緒に長野へ出かけて行つてもいゝと思つてゐた。

四五日して、従妹は姉と一緒に私の家を訪ねて來た。私は、彼女の着物が、此間の晩と、すっかり同じであるのを見て、寂しい氣がした。私の妻の不斷着よりも、ずつとひどいを見るとき、私は何だか濟まない氣がした。

私の妻との初對面の挨拶などが、濟んでから、私は云つた。

「この間の話ですがね。私は、いつでも彼方へ行つてもいゝと思つてゐるのですがね」

彼女は一寸空とほけたやうに云つた。

「この間のお話つて？」

「芳子さんのことです」

「あゝ、芳子！ さう、さう。そんなお話がありましたわね

え。あゝ、さう／＼、妾、周旋して呉れた家へ行つて、向うの家を聴いて置くんだけ。すっかり忘れてゐましたわ」

私は鼻柱を折られて、黙つてしまつた。愛子を取り返すと云ふ事は彼女には、そんなにのんきな仕事なのかしらんと、はがゆかつた。

「ぢや、至急調べて、そして貴女の都合のいゝ時を知らして下さい。私は長野へ一緒に行きたいと思ひますから、私一人ぢやどうにも出來ないのですから」

「はあ。調べて置きます」

私は、彼女の熱のない返事がはがゆかつた。

暫くして、私は姉妹達を、妻に委せて二階へ上つて來た。すると、彼女の姉が、二階へそつと上つて來た。そして私の傍へ來て、小聲で云つた。

「豊さん。貴君が、芳子の事を、どんなに思つて下すつても、駄目ですよ。澄は、そんなに思つてゐないんですもの。廻町の兄も、芳子を手離したと云ふので、すっかり見離してゐるのですからね。澄は、あんまり、苦勞したので、性根がすっかり變つてゐるのですからね。昔の澄だと思つてゐると、間違ひますよ」

私は、實の姉からも、こんなに云はれる従妹が、かなしかつた。昔は、姉の方がお轉婆で、町中の評判娘であり、妹はそれと反對に温厚で親類中の、賞め者であつたことを思ひ出

して悲しかった。

その日、歸つたぎり、従妹から何とも云つて来なかつた。私は、一度督促のハガキを出した。が、それにも返事は来なかつた。私は薬者屋に賣られてゐる「又従妹」のことが、氣にならないうちはなかつたが、母親を差し越えてまで、私とその娘の運命に干渉して、かどうか、又私が薬者屋を引き出して、果して幸福な人生を與へ得るかどうか。薬者屋にゐても、どんな幸運で、賣色の悲しい仕事をしないで済むかも知れない。實際、十一も電燈が點つてゐる家に嫁いだ従妹が子を賣るまで悲惨などん底に陥つたやうに、薬者屋に賣られてゐるその子が、またどんな幸福で、浮び上らないとも分らないなど考へると、母親をさし越えて、私が出しやばること、段々おつくうに、考へられて、私は到頭、「又従妹」のことは、努めて考へないことにした。

所が、その後永らく打ち絶えてゐた従妹から、その年の暮に手紙が来た。それは、年の瀬を越すに苦しんで、私に六十圓丈借してくれと云ふのだつた。私は、従妹の生活には、不満であつた。が困つてゐることは、困つてゐるだらうと思つたから、六十圓送つてやりたかつた。が私は、その暮は支出が多くて、六十圓と云ふ金は、従妹のために拂ふのは、少し事すぎた。私は、ケチなことをするなと、自分で非難しながら半金の三十圓丈送つてやることにした。それに就いて、私は

こんな云ひ譯を書いた。

「貴女が前の結婚のために、陥つた不幸は、それは本當の災難ですから、私は出来る丈のことをしてもいいと思ひます。が貴女が二人の子供を手離し、そして新しい方と同棲してゐる以上、その生活から起つて来る凡ては、みんな貴女の責任です。貴女は頼るべき管の立派な良人がある管です。私は貴女に對して何等の義務をも感じません」

それは三十圓儉約するための云ひ譯だつたが、彼女の生活に對する私の非難も、少しは入つてゐた。

が、私は従妹の云ふ丈の金をやらなかつたことが、氣が咎めた。所が、一年半ばかりも経つて、彼女はひよつくり、その轉宅先を知らして来た。私は前よりもつと餘裕が出来てゐた。今なら六十圓位平氣でやれるのにと思つたので、今後月々少額宛、補助しようと云ふことを、此方から、云ひ出した。彼女は、欣んだ。そして久し振に私の家を訪ねて来た。私は快く彼女に會つたが、もう「又従妹」のことを話し出す勇氣がなかつた。もう十四になる、お雛妓にでも突き出されて、取り返しのつかない身體になつてゐるかも知れないと思ふと、私は口に出す勇氣がなかつた。私はその時前よりも少し廣い家にゐた。従妹と話しながら、自分の家の電燈の數を數へてゐた。實際、メートルにして置く家だつたから、十一の電燈なんて、駭くに當らないと思つたりした。

その後、三四月間、送金してゐる裡に、忙しさに取りまぎれて、忘れるともなく送らなくなつてしまつた。従妹の方から、催促も来なかつた。従妹のことは、私の心からだんく薄れかけてゐるのだつた。

無名作家の日記

九月十三日。

到頭京都へ来た。山野や桑田は、俺が彼等の壓迫に堪らなくなつて、京都へ来たのだと思ふかも知れない。が、何う思はれたつて構ふものか。俺は成る可く、彼等の事を考へないやうにするのだ。

今日初めて、文科の研究室を見た。思の外にいゝ本が澤山ある。蠶が桑の葉を食ふやうに、片端から讀破してやるのだ。研究と云ふ點に於ては、決して東京の連中に負けはしないと、俺はあの研究室を見た時に、全く心丈夫に思つた。

其上に、俺は京都其物が氣に入つた。殊に今日、大學の前を通つて居ると、清麗な水が涼々たる音を立て、流れ下つて居る小溝に、白河の山から流れて來たらしい眞赤な木の實が、幾つも流れ下つて居るのを見た。東京の街頭などでは、夢にも見られないやうな、その新鮮な情景が俺の心を初秋の京都に惹き付けてしまつた。俺は京都が好きになつた。京都へ來た事を決して後悔はしない。

が、俺は此の頃、つく／＼ある不安に襲はれかけて居る。

夫は外でもない、俺に將來作家として、立つて行くに十分な、天分があるか何うかと云ふ不安だ。少しの自惚れも交へずに考へると俺にはそんな物が、一寸有りさうにも思はれない。東京に居る頃は、山野や桑田や杉野などに對する競争心から、俺でも十分な自信があるやうな顔をして居た。が、今凡ての成心を去つて、公平に自分自身を考へると、俺は創作家として、何等の素質をも持つて居ないやうに思はれる。

俺は、文學に志す青年が、動もすれば犯し易い天分の誤算を、やつたのであるまいかと、心配してゐる。此の事を考へると嫌になるが、青年時代に文學に對する熱烈な志望を語り合ひ、文壇に對する野心に燃えて居た男が、何時が來ても、世に現はれない事ほど、淋しい事はない。俺も、彼等の一人ではあるまいかと思ふ。人生の他の方面に志す人は、少し位は自分の天分を誤算しても、何うにか誤魔化しが附くものだ。金の力、或は血縁の力などが、天分の缺陷をある程度迄補つて呉れる。が、藝術に志す者に取つて、天分の誤算は致命的の失策だ。茲では、天分の缺陷を補ふ、何等の資料も存

在して居ないのだ。黄金だと思つて居た自分の素質が日を経るに従つて、銅や鉛であつた事に氣が附くと、もうおしまひだ。天分の誤算は、やがて一生の運算となつて、一度しか暮されない人生を、マザマザと棒に振つてしまふのだ。昔から今迄、天分の誤算の爲に、身を誤つた無名の藝術家が、幾人居た事だらう。一人のシエクスピアが榮えた背後に、幾人の群小戯曲家が、無價値な、亡ぶるに定まつて居る戯曲を、書き續けた事だらう。一人のゲーテが、獨逸全土の賞讃に浸つて居る脚下に、幾人の無名詩人が、平凡な詩作に耽つた事だらう。無名にして終つた藝術家は、作曲家にも有つただらう。俳優にも無數に有つただらう。一人の天才が選まれる爲には、多くの無名の藝術家が、その足下に埋草となつて居るのだ。無名の藝術家でも、その藝術的向上心に於て、藝術的良心に於て、決して天才の土に劣つて居る譯はないのだ。彼等の缺點は只一つある。夫は、彼等の天分が、何んなに磨きを掛けるとも輝かない、鉛か銅である事だ。

かう考へて來ると、俺は堪らなく自分が嫌になる。俺は、何うして創作家となる事を志したのだらう。何うして、文學を志したのだらう。夫を考へると、俺は何時も、自分の馬鹿らしさに愛想が盡きる。俺が文科を選んだのは、文學者崇拜と云ふ多愛もない、少年時代の感情に支配されて居たに過ぎなかつた。もう一つ原因があつたつて。夫は、俺が中學時代に

作文が得意であつたと云ふ、愚にも附かない原因だつた。こんな、少年時代の出來心で選んだ生涯の道程を、今となつては是が非でも、遂行しなければならぬ羽目に居る俺を、つくづく情なく思ふ。

夫にしても、高等學校に居た頃は、少しは自信があつた。自信があつたと云ふよりも、自分の眞實の天分なり境遇なりを、自分で誤魔化して行く事が出來たのだ。殊に、山野や桑田などの、燃ゆるやうな文壇の野心や、自惚に近い自信が、俺にも幾分か移入されて居た故かも知れない。高等學校に居た頃、寢室で皆が一緒に、枕を並べて寢る時は、文壇に就いての話の外は、殆ど何にもしなかつた。殊に、川崎純一郎氏の活躍振が、よく我々の話題となつて居た。川崎氏は、俺達に一番近い目標であつた。あの人の眩しい程に燦然たる出世が、その頃の俺達の心を、何んなに唆つただらう。桑田は、そんな話が出ると、燃ゆるやうな眸をして、

「なあに！俺達の連中だつて今に認められるさ。誰か一人有名になれば、もうしめたものだ。其奴が、残りの者を順番に引立て、行けばいゝんだ」と、桑田は、その最初に名を成す者が、自分であるやうな自信を以つて云つた。

「さうとも、文藝部で委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るんだ。矢部さんを見ろ！小山さんを見ろ！和田氏を見ろ！近藤さんを見ろ！皆、文藝部の先輩ぢや

ないか、なあに！ 文壇なんて！ 案外譯のない所さ」と、天才的で傲岸な山野が、桑田に合槌を打つたつけ。俺は、かうした會話を聴く度に、山野や桑田などの烈しい希望や、強い自信の一部が、俺の心にも移入されて、何となく頼もしく思はれたと同時に、將來の文壇に於て、眞に名を成す者は、桑田や山野などで、自分は何時迄も彼等の蔭に、無名作家として葬られるのではあるまいかと云ふ不安に、囚はれずには居なかつた。既にあの頃にも、山野は學校中を驚かしたやうな、深刻な皮肉な小説を文藝部の雑誌に載せて居たし、桑田は桑田で、同じ雑誌に脚本を幾つも發表して居た。而も、夫は洗練された技巧と、氣の利いた構想に於いて、全く水際立つた出來榮を示して居る。そして、二人とも文藝部の委員であつた。山野が、文藝部の委員をして居た者は、皆文壇的に有名になつて居るのだ」と云ふ事は、即ち現在委員をして居る山野が、將來容易に文壇に名を成す事が出来る、宣言したのと全く同じであつた。

俺は、何時も山野が、自分の人格の強みを頼りとして、無用に他人を傷けるやうな、態度に出るのが不快だつた。が、夫にも拘はらず、彼奴の才分を認めない譯には、行かなかつた。山野でも桑田でも、確かに第一歩は踏み出して居るのだ。然るに俺は、あの頃は無論の事、今でも何もやつて居ない。その上、俺一人連中を離れて、文壇に出るには非常に不利な、京都に来てしまつた。夫には經濟上の理由もあつた。が、他の有力な原因は、俺は山野や桑田などの間にあつて、彼等の秀れた天分から、絶えず受ける不快な壓迫に、堪らなくなつた爲だと、云へば云はれない事もない。殊に、山野となると、意識的に俺を壓倒しようと掛つて居た。彼奴は、自分の秀れた素質を、自分より劣つた者に比較して、其處から生ずる優越感で以て、自分の自信を培つて居ると云ふ、性質の悪い男であつた。そして、その比較の對象となるのは、大抵の場合、俺だつたつけ。何時だつたか、芳田幹三の『潮』を讀んで感心して居ると、彼奴は「何だ！『潮』が面白い！そいつは、少し困つたなあ！」と嘲笑したつけ。彼奴の嘲笑は、人を突き放したまゝ、傍へ寄せ附けないと云つたやうな、辛辣な嘲笑だつた。彼奴は、俺が少しでも、甘さうな物を讀んで居ると、屹度前のやうに嫌がらせを云つた。夫と同時に、俺がイブセンの『ブランド』のやうに少し難解な物を、讀んで居ると、

「ほう！『ブランド』かい！君に解るかい！」と云やあがつた。こんな時、俺は彼奴を殴り附けて、やりたいと思つたが、彼奴の白哲な額と、聰明な眸とを見ると、ある威厳を感じて、肉體的には俺よりも、よつぽど弱い彼奴を、何うともする事も出来なかつた。彼奴は、桑田、俺、山野、川瀬などの創作作家志望の連中ばかりが、集まつて居る時に、よくこんな事も知れぬ見込が、瞞げながらあつた。夫は中田博士が、京都の文科の教授である事であつた。博士は、もうよほど、文壇の中心からは離れて居る。が、夫でも文壇の一部とはある種の關係がある。博士の知遇を得さへすれば、案外早く文壇に紹介されて、俺の天分を飽く迄輕蔑して居る山野などを、アツと云はせてやる事も、決して不可能でない。俺が、京都へ來た理由は、さう云ふ點にも幾何かある。

十月一日。

何となく落着けない。殊に夕暮が來るとさうだ。青い絨毯を敷き詰めたやうに、擴がつてゐる比叡の山腹が、灰色に蒼茫と暮れ始むる頃になると、俺は立つても居ても、堪らないやうな淋しさに囚はれる。俺は自分が、孤獨を求めて來た。が、その孤獨が、直ぐ俺を反噬し始めた。而も、俺の孤獨の淋しさの裏には、烈しい焦燥の心が、潜んで居る。東京に居る山野や桑田などが、一日々々何んなに、成長して居るかとか考へると、俺は一刻もヂツとしては、居られないと云ふ氣がする。俺が、研究室で、ペアナード・シヨオの全集を漁つて居る裡に、桑田は兼々、書くと云つて居た三幕物の社會劇を、もうとつくに書き上げて居るかも知れない。俺が、教室で下らないノートを作つて居る間に、山野はもう半分以上譯了して居たハウプトマンの『織工』の出版書店を、見附けたかも知

な事を云つた。

「俺達が、皆段々文壇に認められて行く。が、一人位は何だか、取残されさうだよ。皆が、新進作家として、ワイ／＼持てはやされて居る時に、自分一人が取残されて居る。一寸變なものだらうな。が、その貧乏籤は、案外俺かも知れん！」彼はさう云ひながら、自信に充ちて哄笑した。そして、俺の方を意味有り氣に、チラツと見た。俺は、可なり嫌な氣持になつた。同じく創作作家として、出立したものゝ内、その一人が何時迄も、取残されると云ふ事は、如何にも皮肉な事だ、残される當人になつて見れば、全く堪らない事に相違なかつた。が、實際さうした場合は、容易に在り得る事が天分に一番自信のない俺は、そんな場合を想像する事を、努めて避けようとして居る。然るに、山野は俺や、俺と同様に自信の薄い山野などを、嫌がらせる爲に、そんな皮肉な場合を、想像して喜んで居たのだ。

唯一人、取残される！ 夫は考へて見ても、淋しい事に相違なかつた。俺は、東京に居て、山野や桑田などと、競争的になるのが、不快で堪らなくなつた。彼奴等から間斷なしに受くる、不快な壓迫から逃れる丈でも、俺に取つて何れ丈、いゝ事か分らなかつた。京都に來て、彼等と全く違つた境遇に居れば、彼等に取残された場合にも、云ひ譯は幾何でもある。又、京都に來た爲に文壇に出る機會が、却つて早められ

れない。さう思ふと俺は、愈々堪らない氣がする。今年中に、山野と桑田とは、文壇に兎も角も、一個の足溜を築くかも知れない。俺はもう決してヂツとして居られないのだ。

俺は、彼等に對抗する爲に、戯曲『夜の脅威』を書いて居る。が、俺の頭は高等學校時代の出鱈目の生活の爲に、全く消耗し切つて居る。此の戯曲の主題には、少しは自信がある。が、俺のペンから出て来る臺辭は月並の文句ばかりだ、中學時代に、自分ながら誇つて居た想像の富麗な事などは、もう俺の頭の中には、痕形もなくなつて居る、が、兎も角此脚本を書き上げる。脚本が出来上つたら、中田先生を訪問する事にしよう。先生の好意で、俺の前途は案外明るい物になるかも知れないから。

俺は今日偶然、吉野辰三君に逢つた。高等學校では、俺より一年上で、やつぱり京都の文科に来て居るんだ。吉野君と話して見ると、文壇に出ようとして腕いて居る者は、決して俺一人でない事を知つて少しは安心した。吉野辰三！以前俺はあの人を、何んなに崇拜したか分らない。明治四十年頃の文學世界の讀者に取つて、あの人の名は何んなに輝き、何んなに魅力を持つて居たやう。田山花袋選の懸賞小説に幾度も投書して、成功しなかつた俺は、吉野君の華やかな活躍を何んなに羨望したか分らなかつた。

が、天才とまで激賞された吉野君は、その後文學世界の投

書を止してから、もう何年になるかも知れないが、杳として文壇に名を現す所がない。文學志望を廢したのかと云へば、さうでもない。現に文科に居て、文壇に出る機会を待つて居る。が、その機會は此の人に容易に與へられさうもない。話して見ると、吉野君も猛烈に焦せつて居る。が、あの人が「僕だつて、之でも新進作家と云はれた事があるんだからな」と云つた時には、俺は少し淋しい氣がした。吉野君は、昔の夢を餘程誇張して居るのだ。何でもあの頃、文學世界の當選小説ばかりを蒐めた短篇集が、世に出た事がある。その標題に、新進作家と云ふ肩書が附いて居たやうに記憶する。が、投書家として榮えた事を、一かどの作家でもあつたやうに幻想して、楽しんでゐる吉野君に對して、俺は氣の毒なやうな淋しいやうな氣がした。然し、俺は吉野君に逢つてから、何だか頼もしいやうに思ひ出した。少年時代に、十分な才華を輝したあの人が、まだ少しも出られないで居る夫を思ふと、俺は少し安心した。

が、此の大學の文科の連中は、何うしてあゝ、揃ひも揃つて救はれない人間ばかりが、集まつて居るのだらう。殊に俺のクラスの奴等はヒドい。廣島の高師を出て來たと云ふ男は、昨日教師が黒板に書いた佛の詩人ボードレルの名を、パウドレアと獨逸讀みにして、得々として居やがつた。もう、一人の男は中田博士の質問に答へて、モンナ・ヴァンナはメ

エテルリンクの小説だと答へて居た。俺は、奴等全體を輕蔑してやる。高等學校に居た頃には、教室も寄宿舎も、凡てが文藝至上主義で一貫されて居た。藝術の名に依つて、凡てが許された。藝術の名に依つて、學課や教室を無視する事が出來た。然るに茲の文科の教室の空氣は、極度に散文的だ。一人として藝術の話をする奴が居ない。高等學校出身の人達は、大抵病身の爲に文科を選んだとか、哲學科で一年落第した爲に、文科へ轉じたと云ふ連中だ。高師出身の者にも、入學資格がある爲に、彼等は學士號を得る爲に、丹念にノートを作つて居るのに過ぎないのだ。文科的な自由な清新な空氣は、教室の何處にも存在しなかつた。こんな連中を前にして、文學がどうの、藝術が何うのと云つて居る中田博士は、丸切り豚に眞珠を撒いて居るやうなものだ。俺は博士が氣の毒になつた。

十一月五日。

俺は今日偶然、同じクラスの佐竹と云ふ男と話をした。俺は今迄クラスの奴をスツカリ輕蔑して居たが、あの男丈は決して俺の輕蔑に値して居ない事を知つた。つい俺が創作の話を持ち出すと、あの男は突然こんな事を云つた。

「僕も、實は昨日百五十枚ばかりの短篇を、書き上げたのだ。が、何うも餘り満足した出來榮とは思はれないのだ」と、如何

にも落着いた態度で云つた。百五十枚の短篇！ 夫丈でも俺は可なり威壓された。俺が今書きかけて居る戯曲『夜の脅威』は、三幕物でも而も僅かに七十枚の豫定だ。而も俺は夫を可なりの長篇と思つて居る。然るに此の男は百五十枚の小説を短篇だと云つた上、まだこんな事を云つた。

「實は今、僕は六百枚ばかりの長篇と、千五百枚ばかりの長篇とを書きかけて居るのだ。六百枚の方は、もう二百枚ばかりも書き上げた。孰れ出來上つたら、何かの形式で發表する心算だ」と、云ふ事が大きい上に、如何にも落着いて居る。自分の力作に十分な自信を持つて居て、俺のやうに決して焦せつて居ない。俺は此男に威壓されると同時に、一種の頼もしさを感じた。京都にもかうした眞摯な作家が居るのだ。恐らく此の男の名前は、文藝雜誌などには、六號活字で、も出た事はあるまい。が、此男は黙々として長篇の創作に従事して居るのだ。此男の書いた物を一行も讀んで居ないから、此男の創作の質に就いては一言も云はれないが、六百枚、千五百枚と云ふ量から云つて、此男は何かの偉さを持つて居るに違ない。が、あの男はその次にこんな事を言つた。

「僕は小説家の林田草人を知つて居る。あれは僕の國の先輩だ。今度文科へ入るに就いて、ワザ／＼上京してあの人と會つて來たのだ。快く會つて呉れた上に、馬鹿に話はずんでね。よく話の解る人だよ。今度書き上げた百五十枚の小説

も、實はあの人の所へ送つて置く積りだ。多分何處かへ、推薦して呉れるから、俺は佐竹君を可なり尊敬し始めたが、之を聞くと少し此の人が氣の毒に思はれた。たゞ同縣人て一面識しかない林田草人を頼りにして、濟して居られる此人の呑氣さは、少し淋しかつた。全く無名の作家たる佐竹君の、百五拾枚の小説を、林田氏の紹介に依つてオイソレと引き受ける雑誌が、中央の文壇に在るだらうか。又門弟でも何でもない佐竹君の物を、林田氏が氣を入れて推薦するだらうか？あの人、投書家から色々な原稿を、讀まされるのに飽き切つて居る筈だ。こんな當にならない事を當にして、直ぐにも華々しい初舞臺が出来ると思つて居る、佐竹君の世間見ずが、俺は少し氣の毒になつた。實際、本當の事を云へば、文壇でズボラとして有名な林田氏が、百五拾枚の長篇を讀んで見る事さへ、考へて見れば怪しいものだ。佐竹君の考へて居るやうに、凡てがさう易々と運ばれて堪るものかと思つた。

十二月二十九日。

俺は、今日東京の山野から、不快極まる手紙を受取つた。夫は、俺に挑戦し俺を侮辱し、俺の感情を滅茶苦茶に傷けてやらうと云ふ惡意に満ちた手紙だ。文句はかうだつた。
(何うだい！ 馬鹿に黙つて居るね。京都にも、少しは文學

を飽く迄傷けてやらうと云ふ彼の性質の悪い惡戯だ。同人に加へない俺には、少しの必要もない初號の〆切期日などを報じて、俺を焦燥だたしてやらうと云ふ彼の奴の惡意が、歴然と見え透いて居る。

山野が豫期して居たよりも以上に、此の手紙は俺を傷けた。京都へ来てからまだ半年にもならない間に、俺と東京に残した友達との間に、早くもある間隔が作られつゝある事を、悲しまずには居られなかつた。同人雑誌の出版！ 夫は何んなに華々しい事であらう。文壇に時めいて居る我々の先輩たる川崎も、矢部も、辻田も初は雑誌「×××」の同人としてその若々しい名を、文壇に認められて行つたのだ。山野や桑田が認められる順番も、もう決して遠き未來ではない。山野桑田は勿論、俺とは天分に於いて、餘り相違はないと思はれる岡本や川瀬や杉野でさへ、之でもう的確に、文壇に打つて出る第一歩を踏み出して居るのだ。然るに俺は山野が手紙の中にあれ程輕蔑した「文學研究」を唯一の本領として、獨ぼつちで、捨てられて居るのだ。

俺は、山野や桑田が俺を同人から除外したにしろ、俺とは可なり親交のある川瀬や杉野迄が何等の好意を示して呉れなかつた事を、恨まずには居られなかつた。

俺は山野の手紙を、ズタ／＼に引き裂くと共に、絶望的な勇氣を振り起した。彼等が同人雑誌で打つて出るのなら、俺

らしいものがあるかい。僕達此方に居る連中は、もう今迄のやうにたゞぼんやり、外國文學の本などを、弄ぢり廻す事に飽いてしまつたのだ。僕達が、高等學校時代に神聖視して居た「文學研究」なども、考へて見れば下らない事ぢやないか。僕達は、自分で創作しなければ偽だ。創作は黄金だ。外の凡ては銀だ。否夫以下の銅か鉛かだ。僕達は、もうデツとして居られないのだ。高等學校時代のやうに、何時迄も呑氣に構へて居られないのだ。僕達の計畫は、もうスツカリ定まつて居る。僕達は、來年の三月から同人雑誌を出すのだ。同人の顔觸は、柴田、岡本、杉野、川瀬、夫に僕、此の外に僕達より一年上の井上君、芳島君が加はる。雑誌の名は多分「×××」と附くだらう。三月の一日に初號を出す、出版元は日本橋の文耕堂だ。もう、皆は初號の原稿に忙しい。締切は一月三十日限だ。まあ刮目して、僕達の活動振を見て呉れ給へ。僕達は本當に黎明が來たと云ふ氣がする。

おしまひ迄、讀み了つた俺は、烈しい嫉妬と憤とを感じると同時に、突き放されたやうな深い淋しさを、感ぜずには居られなかつた。

この手紙の何處にも、君も同人になつては何うかとか、君も書いては何うかと云ふやうな文句は、破片さへも、は入つて居ないのだ。凡ては山野の遊戯的な惡意から出た手紙だ。同人雑誌の發行を、凱旋的に報じて孤獨に苦しんで居る俺

は單獨で、出て見せる。そして奴等の鼻を空かして、アツと云はせてやらう。が、さう決心して居る裡にも、深い淋しさかひし／＼と俺に迫つて來た。俺に獨力で出る力があるか、俺は自分の天分を、夫れ程迄信ずる事が出来るだらうか。俺が、山野や桑田などに反感を抱いて、彼等に遠ざかれれば遠ざかる程、文壇に出る機會から遠ざかつて居るのではあるまいか。今度でも杉野にでも泣き附いて、同人に加へて貰ふ方が、俺に取つては得策ではあるまいか。が、俺を馬鹿にし切つて居る山野は、「富井などが、同人になるのなら、俺は差し控へた方がいゝかも知れない」位の毒言は、必ず云ふに定まつて居る。さうなれば、却つて恥をかきに出るやうなものだ。俺はやつぱり、獨立してやつて見よう。「夜の脅威」を書き上げたら、早速中田さんに見て貰ふのだ。彼等が、同人雑誌などで、もがいて居る裡に、俺の物は一躍して相當な文學雑誌に紹介される。俺は、夫を考へて居ると、手紙を讀んだ時に受けたむしやくしやが、少しは癒えて行くやうな氣がした。

其處へひよつくり、吉野君が訪ねて來た。俺は、早速東京の連中が、同人雑誌を出す事を話した。俺の口調は、全く平靜を缺いて居た。吉野君は、何時ものやうに「朝日」を悠然と吸ひながら、

「なに君！ 同人雑誌などへは、幾何書いても仕方がないものだよ。やつぱり大きい雑誌に、書かなければ駄目さ。まあ

桑田君などに、大にやらせて見るのだね。案外、さうお安くは問屋で卸さないから。僕は、同人雑誌などで、騒がないで、いゝ物が出来れば、文學世界あたりへ持ち込むよ。昔の縁で、嫌とは云ふまいから」

俺は吉野君が、同人雑誌を貶し附けるのを聞いて、幾何か安心した。そして心の裡で山野等の「×××」が一日も早く廢刊する事を祈つた。そして「×××」が、成る可く文壇から注目されない事を祈つた。實際俺は、俺の全人格で以て、同人雑誌「×××」を、呪つて居たのだつた。

一月三十日。

俺は、今宵初めて中田博士を自邸に訪うた。俺は感激に充ちて居た。が、考へて見れば、感激した俺の方が馬鹿だつたのだ。中田博士の方から云へば、たゞ一人の學生の訪問を受けたのに過ぎないのだ。

俺は、挨拶が済むと直ぐ、俺の脚本を出した。

「是非一つ御覽になつて下さい。出来は餘りよくありませんが、處女作ですから」

「なるほど」と、博士は顔の筋肉一つ動かさずに云つた。そして、一寸二三枚めくつて見てから「孰れ拜見して置きませう」と、靜かに、附け加へた。俺が、山野等の同人雑誌に對抗する爲に、懸命の力を注いだ力作を、博士は何の感激もな

しに、俺の手から受取つた。俺は夫が可なり淋しかつた。

「よかつたら、何處かの雑誌へ」と、そんな事は、口に出す勇氣さへなかつた。俺は、手持無沙汰になつて歸らうとした。そして歸り際に、

「英國の近代劇の研究には、何んな参考書がいゝてせうか」と訊いた。すると博士は言下に、「マリヨ・ポルサがいゝてせう」と云つた。俺は、夫を聞くと少々落膽した。マリヨ・ポルサは、俺が高等學校時代に讀んだ本だ。ホンの手引草に過ぎない本だ。

俺は、博士が詩に熱心で、戯曲には冷淡だと云ふ風評を、幾度聽いたかも知らない。然し、之程博士が、戯曲に冷淡だとは思つて居なかつた。俺は『夜の脅威』が、博士から受くる待遇に就いて全く心細くなつてしまつた。

二月二十日。

中田博士と、教室で度々顔を合すけれども、俺の戯曲に就いては何も云はない。而も博士は講義の時間にイブセンの『幽霊』を散々に罵倒した。俺の戯曲は、實を云へば『幽霊』からヒントを得て居るので、俺はイブセンに對する博士の罵倒から、可なり傷けられた。博士は、恐らく夫を故意にやつたのではあるまい。が、俺は兎に角不快だつた。

佐竹に會つたが、彼奴は林田草人に送つた小説に就いて、

林田から何も云つて來ないので、可なり氣を悪くして居るらしい。が、彼奴が、自分の小説が直ぐ林田の好意ある推薦を受けると思つて居るのは、彼の無智から出た自惚だ。

三月五日。

到頭、同人雑誌「×××」が出た。道に俺にも一部送つて來た。俺は、夫を開いた時、今迄にない不快な壓迫を感じた。夫は、山野から受けた夫よりも、もつと不快な而も現實的なものであつた。同人の連名を見た時に、俺は到頭奴等に捨て置かれたと思つた。俺は、何れ程嫉妬に燃えたゞらう。俺よりも、天分に於いては、劣つて居ると思ふ岡本など迄が、僕より急に偉くなつたやうに思はれて仕方がない。

俺は巻頭に載せられた山野の小説『顔』を、恐る／＼讀んだ。俺は夫が不出來で、愚作で全然彼の失敗である事を祈りながら讀んだ。が、その一分も隙のない、纏つた書き出しに俺は先づ氣押されてしまつた。殊に一句々々、蜘蛛の糸のやうに粘り氣があつて、而も光澤のある文章が、山野一流の異色ある思想を、グ／＼と表現して行く邊、俺は彼奴に對して益々強い反感を感じると同時に、彼奴の魅力ある筆致に依つて、グ／＼頭を押さへられてしまつた。殊に『顔』の主題は、今の文壇には、一度も現はれなかつたやうな、奇拔な而も深刻味のある哲學だつた。若し『顔』が、山野否俺の友人

の作品でなかつたら、俺は何んなに驚喜した事だらう。夫が、俺の競争者而も俺を踏み附けようとする山野の作品である爲に、俺は全力を盡くして、その作品から受くる感銘を排斥しようとした。が、俺は山野の作品の價値を認めぬ譯には行かなかつた。が、夫から連想される事は、山野が一躍して文壇に

認められはしまいかと云ふ事だ。俺は夫を考へると、いゝ氣はしなかつた。山野が一旦認められるとなると、彼奴は俺に對して何んな侮蔑をやるかも知れない。同人雑誌の發行を知らして來たやうな手緩いものではない。俺は夫を思ふと黯然たる氣持がする。が、俺を壓迫したのは、山野の作品ばかりではない。その次に載つて居る桑田の小説『關入者』だつて、渾然として纏つた小品だ。彼奴のきび／＼した筆致を見た時、俺は桑田にだつてとても敵はないと思つた。が、俺はその事をなるべく認めまいと努力した。が、實際俺の『夜の脅威』を『顔』や『關入者』に比べると、作者の俺が何んなに、鼻眞眼に見ても、奴等の物が段違にいゝ。俺は、夫を考へると、少し絶望的になる。が、山野や桑田の作品がよければ、杉野や岡本などの素質を、俺以下のものと見積つて、やつと安心して來たが、その安心も何うやら根柢から揺いて來たやうだ。俺は雑誌「×××」を手にしたまゝ午後三時頃から、七時頃迄夕食も喰はないで、ぼんやり考へ込んで居た。すると

其處へヒヨツクリ吉野君がやつて来た。

俺は此時位吉野君を頼もしく思つた事はない。俺は、吉野君と一緒に「×××」の悪口を云ひたかつたからである。吉野君も恐らく同じ目的で、俺を訪問したのかも分らなかつた。「やあ！ 君も「×××」を読んで居たのか、僕も今朝本屋で買つたよ。案外いゝものはないね」と吉野君は、座に着くと直ぐ、其處に落ちて居た「×××」を弄くりながら話し出した。俺は、吉野君の總括的の貶し方が、可なり氣に入つた。俺は「本當だ」とも合槌を打てなかつた。實際俺は何の作品も感心して居たのであるから、俺は恐々ながら「山野の『顔』は何うだい」と訊いた。

「輕妙だ。然しあんなものは、誰にだつて書けるぢやないか。少くとも江戸つ子には書けるね」と、江戸つ子たる吉野君は昂然として云つた。俺の良心は、吉野君の云つて居る事に全然反對した。が、俺の感情は吉野君の云つた事に満腹の賛意を表した。

「桑田君の『關入者』も餘りよくないね、古い！ まるで、自然主義から一步も出て居ないのだ」俺は段々心強くなつた。俺は、今日程吉野君を尊敬した事はなかつた。吉野君は、最後にこんな事を附け加へた。

「要するに高等學校の雜誌に、少し毛が生えた程度のものでよ。あれで、文壇に出ようと思つて居るのは、少し蟲が好過

「おい君の長篇小説は、何うしたい」と訊いた。すると、あの男は、暗い顔を一寸明るくしながら、

「四百五十枚迄書いた。もう百五十枚書けばいい。この頃は創作熱が丸切り旺盛なのだ。毎晩三十枚は缺かした事はない」と、昂然たるものがあつた。

「何うしたい！ 林田の所へ送つて置いた小説は」かう訊くとあの男は急に顔を暗くした。

「送り返して来たよ。雜誌には長すぎるからだつて。片々たる短篇ばかりを載せたつて、一體何うすると云ふのだ。だから、日本にとつしりした長篇が出ないのだ」

が、俺は佐竹君の小説が、送り返される事を豫期して居たので、少しも驚かなかつた。そして百五十枚の長篇、而も無名作家のものがさう容易に紹介されて堪るものかと云ふ氣がしたが、俺は、此の人の旺然たる創作熱には、何時もながら、敬意を表する。何時か、あの男の部屋を訪問した時、實際あの男は、もう三百枚もあると云ふ草稿を俺に見せた。その上、少年時代からズーツと書き溜めたと云ふ高さ三尺に近い原稿を、俺の前に積み上げた。

「百枚位のものなら、七つ八つありますよ。此内で、一番長いのは五百枚の長篇で僕の少年時代の初恋を取扱つたもので、幼稚でとても發表する氣にはなれませんが、と、とととと笑つたつて。俺は、あの人の多産に感心すると共に、その呑

ぎるね。やつぱり、同人雜誌なんか、幾何書いても駄目だよ。相當位置のある雜誌で、發表しなければ駄目だよ」と、吉野君は最後に自分の持論を繰返した。俺は、吉野君の辛辣な批評を聴いて、救はれたやうな心持になつた。

が、吉野君が歸つてしまふと俺は又、淋しい心持に襲はれた。見ると、吉野君に散々叩かれた雜誌「×××」は、洋燈の暗い光の裡に、放り出されてある。俺は、創作は黄金だといつた山野の言葉を思ひ出した。そして、譬ひ小雜誌にせよ、活字になつて居る以上は、夫はもう立派に完成された、表現の形式である。夫が文壇的に認められる十分な機會を備へて居た。殊に、文科大學學生の同人雜誌として、何んなに新鮮な感興を、文壇の一角に、感ぜしめて居るかも知らなかつた。俺は無名の作家達が、文壇の流行兒の悪口を、思ふ存分に云ひ會つて、自分達の認められない腹癢せをする場合を、考へる事が出来た。俺と吉野君との會話も、殆ど夫に近かつた。夫は弱者の弱い反抗に相違なかつた。さう考へて來ると、また空虚な感じに襲はれた。夫にしても中田博士は、俺の『夜の脅威』を、何時迄捨て、置くのだらう。俺は、博士の無頓着に對して、軽い反感を懷かずには、居られなくなつた。

三月十日。

俺は、今日學校で佐竹君に逢つた。

氣さにも感心した。發表する氣にはならないと云つて、若し發表する氣にさへなれば直ぐにも出版の書店でもが見附かるやうな呑氣な事を考へて居るのだ。俺はあの男のやうに、發表と云ふ事や、文壇に出ると云ふ事に就いて、少しの苦勞もない心理状態が、可なり不思議に思はれる。あの男は、只書いて居さへすれば夫で満足して居られるのかしら。

三月十五日。

雜誌「×××」の評判が、素破らしく好い。殊に山野の『顔』の評判がいゝ。俺は、なるべく新聞の文藝欄を見まいとした。「×××」が評判されるのが、癪だからである。が、何となく「×××」の評判が氣になつて仕方がない。俺は、白狀するが、もう三日ばかり續けて圖書館に通つた。そつと「×××」の評判を読む爲めにである。最初にI新聞が、六號活字ではあつたが、雜誌「×××」の創刊を祝福した。そして山野の『顔』を特に激賞した。が、夫ばかりではなかつた。夫から、三日ばかりしてI新聞の文藝欄で批評家耳氏が、山野の『顔』を激賞した。俺は、夫を読んで心の奥から、こみ上げて來る嫉妬を、何うする事も出来なかつた。到頭、彼奴に蹂み躪られたと思つた。俺は、此二三年、憂慮して居た運命が、もう的確に、實現するやうに思つた。山野や桑田が文壇の花形として持てはやされ、俺が無名作家として、永久に葬

られる事、夫はもう「XXXX」の發行で、早くも實現の第一段に、到達したのだ。

俺は、山野の天分の力に、何うして對抗しようかと云ふのか、山野の天分が認められると云ふ事が、當然であればある程、俺の反抗は、無意味で且淋しかった。俺はもう目を閉ぢて、彼奴の華々しく打つて出るのを、辛抱するより外に、何うとも仕方がないのだ。たゞ、彼奴に對抗する唯一の方法は、俺が彼奴と同時に、文壇へ出て行くと云ふ事であつた。俺は、さう考へると、再び俺の創作「夜の脅威」の事を思ひ出した。夫は餘りに、頼りにならない物に相違なかつた。が、文壇の水準以下のものとは何うしても思はれなかつた。俺は、今圖書館を出ると、直ぐ中田博士の家へ急いだ。「夜の脅威」に就いての批評を聞いた上、是非共何處かの雑誌へ、推薦を依頼する心算であつたのだ。

中田博士は都合よく在宅した。

俺は、博士と向ひ合ふと直ぐ、
「如何です、何時かお願ひしました脚本は、読んで下さいましたでせうか」と切り出した。

「あ」と、博士は一寸當惑の色を示したが直ぐ、「あゝあれでしたか。つい忙しくつて、読みかけのまゝですが、孰れゆつくり讀んだ上で、纏つた批評をさせよう」と、平素のやうに悠然と答へた。が、俺は、博士がまだ一枚も讀んでくれない氣がする。

四月五日。

「XXXX」は、第二號を發行した。山野は「邂逅」と云ふ短篇を發表した。俺は又夫を、飛び附くやうにして讀んだ。さう佳作ばかりが、續く譯はないと思つたからである。が、俺の安心は直ぐ裏切られた。手堅く然も底光りのする彼奴の技巧が又、グン／＼俺をやつ附けてしまつた。殊に主題は前の「顔」の夫に勝るとも決して劣らぬほどの光つたものだつた。俺は山野に對する反抗の角を折らうかとさへ思つた。俺の彼奴に對する反抗は、凡人が天才に對して懐く無意味な反感で、全く俺自身の心得違てはあるまいかと、思ひ直さうとした。が、山野の皮肉な笑顔を思ひ浮べると、直ぐムラ／＼とした嫉妬と反感が俺の全身を襲ふ。俺は何うしても、彼奴の作品に頭を下げる氣にはなれないのだ。

四月十六日。

山野の「邂逅」が又評判がいゝ。殊に文壇の老大家たるK氏が、彼奴の「邂逅」を激賞したと云ふ噂を、新聞で讀んだ時、俺はもう「萬事休す矣」だと思つた。もう、彼奴の聲價は定まつた。彼奴が不意に死なゝい限り、文壇に認められる

居ない事を直覺した。俺が、之程焦燥の裡に、努力して書き上げた作品を、一ヶ月半の間、一讀もしないで、置きつ放しにして置いた博士を、俺は少し呆氣に取られて見た。が、博士には、夫が、餘り不自然でないらしいと見えて、直ぐ話題を換へて話し出した。

「佛蘭西の近代劇の中にも、中々いゝものがありますよ。近代劇と云へば、北歐の專賣のやうに思つて居るから、困りますよ。何と云つても、芝居は佛蘭西が元祖で、イブセンなども、やはり作劇術の點に於ては、明かに佛蘭西劇の影響を受けて居ますよ」

俺は、佛蘭西劇の話などを聴くやうな心持とは丸切り懸け放れて居た。中田博士の手の中に在る俺の「夜の脅威」は、一體何時が來たら、日の目を見るだらうと、夫ばかりを心配して居た。俺は、一層の事、貰つて歸らうかと思つた。が實際中田博士の手を経ずして、文壇に一指を屈かす事さへ、俺には難かしい事であつた。

俺は、佛蘭西劇の話を一時間ばかり仕様事なく聴いた後、博士の家を辭した。俺は、もうスツカリ絶望して居た。中田博士を通じて、俺が文壇に望を繋いだのは、全く俺の第二の誤算に近かつた。俺は、もう手を拱ねいて、山野や桑田の華々しい出世を、見るより外に仕様がなにかも知れない。家へ歸つてから、暫くは何も手に附かなかつた。偶然の機會が突

發しない限は、俺にはもう何等の機會も、残されて居ないやうな氣がする。

のは既定の事實だ。俺は、もう仕方がないと諦め始めて居る。實際、俺の嫉妬を除いて考へれば、彼奴が認められるのは至當な事かも知れない。が、至當であるかあるまいかは、問題でない。たゞ彼奴が認められる事が不快なんだ。山野が認められたとすると、桑田の順も決して遠くはない。岡本、杉野、川瀬なども皆相當の所へ行くに違ない。たゞ一人取残される者」夫は何う考へても、俺に相違なさうだ。

俺は、今日短い原稿を今度創刊になる雑誌「群衆」に送つた。僅か七枚ばかりの小品だ。俺は此の「群衆」を主幹として居るI氏に、たつた一度逢つた事があるのだ。俺の小品が採用されたら、山野等に對して少しの反抗は爲し得た事になるのだ。

五月三日。

俺は今朝、新聞の廣告を見た時、今月の雑誌「△△△△」の小説欄に、山野の小説「癡人」が載つて居るのを見た時、俺はアツと驚いたまゝ、暫くは茫然とした。俺は鐵槌で毆くられたやうな打撃を感じながら、まだ自分の視覚を疑つた。何んなに評判がよくても、文壇の中央へ乗り出すのには、間があるだらうと高を括つて居たのは、俺の誤だつた。彼奴は俺のさうした豫想を、見事に裏切つてしまつた。もう、彼奴が流行作家で、俺が無名作家である事は、儼として動すべか

らざる事實だ。俺は眩ぶしい物を見るやうに、あの廣告を見た。山野敏夫——と云ふ三號の活字が、宛ら俺を嘲笑して居るやうに感じた。題名の『癡人』は、作家としては『癡人』に近い俺を、モデルにしたのではないかとさへ思った。が、俺は之程反感を持つて居る彼奴の作品が、一刻も早く讀みたくなるから不思議だつた。山野の作品を讀む爲に「△△△△」を買ふ事、換言すれば彼奴の作品の爲に、「△△△△」が一部でも多く賣れる事は、考へて見れば少し不快だつたが、夫でも俺は彼奴の作品が、讀みたくて堪らなかつた。

俺は、見たくもない物をオツ／＼と見るやうな心持で、彼奴の作品を讀んだ。讀んで見ると、彼奴の作品は、俺の嫉妬や競争心を押除けて置いて、俺にグイ／＼と迫つて來やがる。俺は、残念で堪らない。彼奴に對する反感が、彼奴の作品の力に押し除けられて、譯もなく感心してしまふのだ。彼奴に反感を持たない一般の批評家が、感心するのも尤もな話だ。夫を思ふと俺は情なくなる。俺は「△△△△」を手にしながら、彼奴に絶對的に打ち負かされた事を明に感得した。

俺は「△△△△」と共に、自分が寄稿した「群衆」を買つて來た。俺の小品も編輯者の好意で、二段組ではあつたが掲載されて居た。が、「△△△△」と「群衆」！夫は雑誌としての勢力に於て、無限大の隔たりが在つた。俺は山野が偶然、「群衆」を手に取つて、俺の作品に氣が附いた時、「ふん」

と嘲弄の微笑を洩す、その顔付迄が歴然と感ぜられた。もう「勝負は在つた」と云ふ氣がする。俺の負は俺自身にさへ明かだ。なあに！初から勝負になつて居なかつたのだ。「△△△△」の彼奴の小説の第一頁を、ヂツと見詰めて居ると、無念と絶望の涙が頬を傳つて流れた。

俺が「△△△△」を見て居ると、偶然佐竹君がやつて來た。そして又何時ものやうに創作の話を始めた。

「六百枚の方は、一昨日到頭書き上げてしまつた。僕は此二三日その爲に愉快で堪らないのだ。少し静養したら、愈々千五百枚の物にかゝるんだ。此方が完成したらもうしめたものさ」と相變らず元氣な事を云つて居たが、ふと「△△△△」が佐竹君の目に入ると、

「山野君の『癡人』が載つて居たね。ありやさう恐るゝに足るものぢやないね。たゞ思附ばかりのものだ。藝術としては寧ろ邪道だね」と、云つたが、俺はもう此男の罵倒から、何等の慰安をも感じなかつた。思附ばかりでもない、藝術の邪道でもない、文壇に認められる方が、何れ程いゝ事か分らなかつた。六百枚の長篇を終つて、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君よりも、三十枚ばかりの器用な短篇を書いて、一躍して認められた山野の方が、俺には何れほど羨しいか分らなかつた。

俺は、夫から意外な事に氣が附いた。俺は何氣なく佐竹君

に、「群衆」を見せて俺の僅か七枚の小品を指し示すと、夫を見た佐竹君の瞳は異様な輝きを帯びた。

「何だ！こんな短篇か！」と、彼は吐き出すやうに云つた。「此の雑誌は一體、誰が經營して居るのだ！一人として碌な奴が書いて居ないぢやないか！草田花子！あ！此奴か！こりや君！此間、山本と云ふ男と、作品の賞め合ひをしたかと思ふと、獸のやうに直ぐくつ附き合つた女ぢやないか、こんな女が小説を書いて居るんだね」と、佐竹君は、「群衆」の寄稿者を悉く罵倒した。そして「群衆」と云ふ雑誌が低級な雑誌で夫に書いて居る者が、悉く碌でもない奴等であると結論した。

俺は、俺の僅か七枚の小品が、之ほど佐竹君を激昂させた事を驚いた。此男は雑誌「群衆」を貶す事に依つて俺の作品を無視しようとかゝつたのだ。が、夫は全く反對の事實を語つて居る。俺の小品が七枚でも活字になつた事は、佐竹君に取つて決して愉快な事ではなかつたのだ。俺が山野の作品に依つて感じて居るやうな反感と焦燥とを、佐竹君もやつぱり感じて居るのだ。六百枚の長篇を書き上げて、堂々と小説の大道を歩いて居る筈の佐竹君が、活字になつた俺の僅か七枚の作品から壓迫を受けるとは、考へて見れば不思議な事だつた。

が、俺は俺の小品を無視しようとした佐竹君を、決して憎

めなかつた。俺は山野より天分が劣つて居る事を自覺しながら、尙山野の出世を呪つて居るのだ。まして、自分の作品に十分の自信を持つて居る佐竹君が、自分の作品が活字になる前に、俺の片々たる作品が活字になつたのを不快に思ふのは、寧ろ當然の事かも知れない。

が、俺は考へた。創作と云ふ事が、ある人々の考へて居るやうに絶對のものなら、何故に人は只創作する丈で満足する事が出来ないのだらう。佐竹君の如きは、六百枚の長篇を書き上げた事其物に依つて、十分藝術慾を満足して居なければならぬ筈だ。夫が、何うして發表する事に就いて、あゝした苦悶があるのだらう。殊に俺などは創作と云ふよりも、先に發表と云ふ事に就いて、悶えて居る。本當の藝術慾よりも、文壇的名聲と云つたやうなものに囚はれて居る。が、佐竹君のやうに長篇を書き上げて居る人でさへ、活字になつた俺の七枚の小品を見ると、取り擾すのだから、俺が山野の作品が出る事に血眼になるのも、或は當然の事であるかも知れない。

五月十五日。

俺は、今日久し振て山野の手紙を受取つた。何うせ俺を嘲笑し揶揄する爲の手紙だらうと思つたから、俺は一寸開封する氣にならなかつた。が、夕方になつて漸く開けて見ると、

割合に親切な文面であつた。

(君も知つて居る通、同人雑誌「×××」は、創刊以來割合世間の注目を惹いて居る。もう根氣よくさへ續けて行けば、皆ある程度迄出られると云ふ氣がする。従つて、皆油が乗りかゝつて居る。夫に就いては君だが、僕は君が京都で、獨ぼつちて居る事に對し大に同情をして居る。「×××」發刊の時にも、君を是非同人に入れなければならぬのだが、君が東京に居らぬ爲、つい色々な差支へがあつて、止むなく君を入れる事が出来なかつた。僕は、夫を非常に遺憾に思つて居る。が、此頃は僕も外の雑誌から原稿を頼まれるし、桑田も近々外の雑誌に書くだらうから「×××」は自然紙面に餘裕が出来るので、君の作品も紹介し得る機會が度々来るだらうと思ふ。だから、君もいゝ物があつたら、遠慮しないでどしどし送つて呉れ給へ。無論餘りヒドイものは困るが、水準以上のものなら欣んで紹介するから)

此手紙を讀んだ時、俺は今迄山野に對して、懷いて居た嫉妬や反感を恥しいとさへ思つた。俺が山野の世に現はれて行くのを、呪つて居る間に、山野は俺の爲に好意ある配慮を爲す事を忘れなかつたのだ。彼等に對して意地を立て、居るよりは、彼等に接近して「×××」に作品を發表した方が、何れ程よい事だか分らなかつた。山野の手紙を見た時、今迄俺には過ぎられて居た光線が、初て温く俺の身體を包むやうな

氣がした。俺は直ぐ返事を書いた。餘り興奮して、彼奴に笑はれはしまいかと思はれるほど、興奮にうち感激に充ちた手紙を書いた。そして直ぐ後から作品を送る事を云ひ添へた。俺の手紙は、明かに卑しい哀願の調子を交へて居た。俺は自分の態度の裡に征服された弱者が、強者に阿ねつて居るやうな、さもしい態度を感じた。今迄、極端に呪咀して居た彼の、華々しい初舞臺に對してさへ、賞讃の言葉を連ねた。が、俺には夫を卑しむべき事として、思ひ止まり得る程の餘裕はなかつたのだ。山野の好意に纏る事は、現在の俺に取つては唯一の機會だと云つてもよかつたのだ。

俺は手紙を出した後で、直ぐ中田博士を訪問した。俺の脚本の『夜の脅威』を、貰ひに行つたのだ。博士の所へ持つて行つてから、もう三ヶ月以上になる。博士はもうとづくに、俺の脚本の事などは、忘れてしまつたと見え、偶々俺に言葉を掛ける事などがあつても、脚本の事は、變にも出さなかつた。が、今度山野の所へ作品を送るとしても、一番纏つて居るものは『夜の脅威』であつた。考へて見れば、俺は發表の事ばかりに氣を取られて、本質的の創作には全く吞氣であつたのだ。黙々として、千五百枚の大作にかゝつて居る佐竹君の事を考へると、可なり恥しく思ふ。

中田博士は、何時ものやうに在宅した。俺が來意を述べる

「さう、君の脚本を預かつて居たつて」と、云ひながら立つて書棚の一隅を探ぐつて呉れた。そして、恐らく俺が持つて來た時の儘らしい俺の脚本を取り出して呉れた。俺は、夫でも『夜の脅威』と云ふ表題を見ると、舊知にあつたやうに懐しく思つた。俺が此の三四ヶ月間、焦慮に焦慮を重ねて居る間にも、俺の作品は中田博士の書棚の一隅で、悠々たる閑日月を送つて居たのだつた。

「愈々發表する事になつたのですか。夫は結構です。活字になつた上で、纏つた批評をしませう」

と、お世辭を云つて呉れた。俺は中田博士の、極度に無關心な態度を寧ろ尊敬した。歸つてから一度讀み直すと、直ぐ書留にして山野に送つた。

五月廿五日。

山野から手紙が來た、俺は夫を何等の感情を交へずに、此日記に再録して置かうと思ふ。此の手紙を見た時の、俺の感情は茲には、何うしても表現する事が出来ないから。

(僕は皆、君の『夜の脅威』を讀んだ。そして云ひ合はしたやうに、多大な失望を感じた。僕は遠慮なく云ひたい、世間並のお世辭を云つたとて始まらないから。僕は第一、あの作の主題に失望した。あれは全然借り物ぢやないか。君自身、本當の君自身から出たものではないだらう。僕はあの主題を、

君が何から借用したかを、的確に指摘する事が出来る。が、主題を借りたのはいゝとして、あの作品の全體に亘つて居る低級な感傷主義は、一體何だ！君は高等學校の一年生時代から、思想的には一歩も進歩して居ないね。僕は、あの頃の思想からは、もうスツカリ卒業してしまつて居るのだ。僕は君の脚本から、何等のいゝ所も見出さなかつた。然し、夫は恐らく僕一人の不公平な評價だと思つたので、君の脚本を桑田、岡本、杉野などにも讀ませたよ。が、彼等が君の作品に對した評語は、君に知らせる事は見合はせよう。夫は餘りに、君を傷ける心配があるからだ。で、僕は遺憾ながらあの作品を、「×××」に載せる事は見合はす事にした。君が、僕の此の苦言に憤慨して、折返し傑作を寄せて呉れれば幸ひだ。

畏！俺は確かに山野の掛けた畏に掛つたのだ！彼奴は自分の華々しい成功に浸りながら、その意識をもつと高調させる爲に、俺を傷けて見たくなつたのだ。彼奴は桑田などに、「何うだらう！富井の奴、京都で何をやつて居るのだらう。相變らず例の甘い脚本か何かを、書いて居るに違ない。何うだい！「×××」に載せてやるとか何とか云つて、彼奴の作品を取寄せて、皆で試験をしてやらうぢやないかと、云つたに違ない。人の好い杉野や岡本などが、心配して止めると、彼奴が尙面白がつて、實行に取りかゝつたのだ。彼奴に似合は

ない親切な手紙は、かうした動機からでなければ、書かれる譯のものではない。山野に對する憎悪、永久に妥協の餘地のない憎悪が、前よりも十倍烈しい勢で、俺の心の裡にこみ上げて来るのを感じた。が、山野のトリックに掛つて、旨々と『夜の脅威』を、得意になつて差出した俺の弱さ加減を考へると、俺は自分の身をいとはしむ涙が双頬を濕すのを感じた。

×月×日。

もう「×××」が出てから、二ヶ年半になる。「×××」はもうとつづくに廢刊してしまつた。が、山野や桑田や岡本や杉野は、作家として立派に登録を濟まして、「×××」同人として文壇を濶歩して居る。殊に、山野は一作毎に文壇を騒がして今では、押しも押されぬ位置を占めてしまつた。

俺と彼等との距離は、もう絶對的に擴がつてしまつた。却つて、かうなると、もう競争心も、嫉妬も起らない。俺は彼等が流行作家として持てはやされる事實を、平靜に眺めて居る事が出来る。一人の天才が生れる爲に、百の凡才が苦しむ事が必要だ。山野や桑田などが、持てはやされる蔭には、俺一人位の犠牲は寧ろ當然かも知れない。が、永久に無名作家として終る者は、俺一人ではあるまい。千五百枚の長篇が完成したか何うかは、訊いて見ないから分らないが、佐竹君は相變らず暗い顔をして居る。そうして、文壇に新進作家が出る毎に、

猛烈に貶し附けて居る。同人雑誌を貶し附けた吉野君も、相變らず健在である。が、あの人の創作が、相當の文藝雑誌に載つた事はまだ一度もない。

文壇に於ても、運が或る點迄、重要な働きをして居るのだ。さうでも思つて、俺は諦めて居るのだ。が、俺はもう文壇に就いて、考へる事をよさう。作家としての生活以外に、意義のある生活がないやうに思つて居たのは、俺の迷妄だ。

俺は此間、ヴェルレーヌの傳記を讀んで居ると、あのデカダンスの詩人が晩年に「平凡人としての平和な生活」を、痛切に望んだと云ふ事實を知つて、俺は可なり心を打たれた。俺のやうに天分の薄いものは、「平凡人としての平和な生活」が、恰好の安住地だ。學校を出れば、田舎の教師でもして、平和な生活に入るのだ。

流行作家！ 新進作家！ 俺は、そんな空虚の名稱に憧れて居たのが、此頃では少し恥しい。明治大正の文壇で名作として残るものが、一體幾何あると思ふのだ。俺は、何時かアナトール・フランスの作品を讀んで居ると、こんな事を書いてあるのを見出した。

（太陽の熱が、段々冷却すると、地球も從つて冷却し、終には人間が死に絶えてしまふ。が、地中に住んで居る蚯蚓は、案外生き延びるかも知れない。さうするとシエクスピアの戯曲や、ミケロアンゼロの彫刻は蚯蚓に喰はれるかも知れない。

い。何と云ふ痛快な皮肉だらう。天才作品だつて何時かは蚯蚓に喰はれるのだ。まして山野なんかの作品は今年もすれば、蚯蚓にだつて喰はれなくなるんだ。

葬式にゆかぬ譯

砂を噛むやうな無味な、不快な三年が到頭終つた。雄吉は、Kにある文科大學を卒業したのである。

最初、Kに来る時に、懐いて居た明るい華やかな希望は、一つも達せられては居なかつた。最初の希望が——それは子供らしい空想に近いものではあつたが——實現の緒にも接せずして全く蹂躪み蹴られてしまつたことは、彼の三年の生活を全然灰色な、不本意なものにしてしまつた。

Kの文科大學の教授であつたS博士に認められて、その人の紹介によつて、文壇に出ようと云ふやうな蟲のいゝ、子供らしい希望は、入學して一年経つか経たぬ間に、幻滅してしまつて居たのである。

顧みると、たゞ三年の生活を、不快な周圍の裡に、不快に暮してしまつた丈である。高等學校に居た時には、彼の周圍は凡てが文學至上主義であつた。生活は極端に出鱈目であつたけれども眼の置き所丈は、皆一分も本當の所から、側へ滑

らしては居なつた。が、Kの大學へ來てからの雄吉は、基督教徒が異端者の中へ混じつたやうな、ゴツ／＼して性に合はない周圍を見出した。

「先生！今お話しになつたヴェルレーヌと云ふ人は、何う云ふ人です」と、云ふやうな、質問が文學概論の講義の時間などに出る時は、雄吉はつく／＼教室が嫌になつた。馳け出しの投書家でも知つて居さうな名前——（尤もヴェルレーヌと云ふ名を、知らなければ文學全體が分らないとは、雄吉も思はなかつたが）——を、堂々と質問して居る文科大學生を見ると、雄吉は彼等と一緒に席を並べて居るのが、全く情なかつた。

雄吉が、彼等との交渉で一番不快を感じたある一夜を、彼は頭の中に記憶して居る。彼等の事を考へる毎に、その晩の事が、意識の裡にハッキリと浮んで來て、反感を持たずには、彼等の事を考へる事が出来なかつた。それは、彼等と一緒に雑誌を出すやうな事が出なかつた。それは、彼等と一緒に入學した當時の事で、雄吉がKの文科大學にも、又級友に

もまだ少しの幻滅をも、感じて居ない頃だつた。其の頃の雄吉は、文學的には可なり熱狂した。彼は誰かと話して居る時、少しでも文學の話が出ると、

「いや、今の日本のやうに中央集權が行はれて居る内は、トテもいゝ作品は現はれはしませんよ。東京の文壇とは質と人間とを全く異にした、少しも文壇的な因習を持つて居ない、新しい文學運動が地方に起らなければ駄目です。丁度、ダブリンを中心として、愛蘭文學の復興が行はれたやうに、日本でも東京以外の地に、新しい文學が起らなければ駄目です。日本で、さうした文學運動の根據地としては、此K市より外にはない。我々K大學に在るものが、卒先して大にやらなければならぬ。夫には是非同人雑誌を出さなければ駄目です」と、云ふやうなことを云つて居た。夫は可なり雅氣を帯びた空想ではあつたが、その頃の雄吉に取つては、割合眞面目に考へて居た事であつた。

雄吉のさうした空想氣焔に感化されたのか、夫とも彼等自身から出たのか、同人雑誌を出さうと云ふ賛成者が、六七八人級の中に出て來た。そして、具體的に計畫を立てると云ふ相談會を、K市の中心の繁華な町の、ある牛肉屋で開く事になつた。が、愈々集まつて見ると、皆は、雑誌の話などは、噁にも出さないで、肉を喰つたり酒を飲んだりした。雄吉は、最初から、かうした相談會が、妙に遊び半分になるの

が嫌であつた。が、彼等の二三人が、酒に酔つぱらつてしまつと、その内の一人が、

「何うです。之からノイグレント（之は△△新地と云ふのを獨逸語でかう云つたのだ。雄吉はこんな言葉遣ひを、聴くと嘔吐を催した）へ行かうぢやありませんか」と云ひ出した。さう云ふ方面の知識を、殆ど持つて居なかつた雄吉は、ノイグレントへ行くと云ふ事が、即ち女郎をでも買ひに行く事だと、一人極めに思ひ極めて居たので、甚だ不愉快に感じた。先刻から、眞面目な雑誌の相談なんか、少しもやらないで其日の會合が、單なる酒を飲む會に、終りかけて居るのを憤慨して居た雄吉は、

「僕は嫌だね。僕はそんな要求なんか、少しもないからね」と、直ぐ様反對した。すると、それを言ひ出した男は、少し冷笑を洩しながら、雄吉の方を見て、

「富井君！君は誤解しては困るよ。僕は、そんな低級な目的で行くぢやないんだよ。たゞノイグレントの情調を味ひに行くんだよ。文學をやらうと云ふ者が、あゝした所の情調を知らなければ駄目ぢやないか」と云つた。さうすると、外の連中迄が、

「賛成々々！富井君は大に小説を書かうと云ふんぢやないか。彼處の空氣を味つて、長田幹彦以上の傑作を書いて呉れ給へ」と云つた。雄吉は、全く助からないと思つた。彼

はかうした連中と雑誌を出す相談などを、やり始めた事をつくづく後悔した。

が、彼等は、雄吉が嫌がるにも拘はらず、彼を擁して、所謂ノイグルントと云ふ所へ連れ行つた。雄吉は、その途々で、彼等から幾度脱しようとしたか分らなかつた。が、彼等は執拗に雄吉を引止めた。人通の多い繁華な夜の街で「行くの行かぬ」と、押問答するのが、如何にも馬鹿らしかつたので、雄吉はおしまひには諦めて、黙つて彼等の後から附いて行つた。

雄吉は後にも先にも、所謂ノイグルントのお茶屋に上つたのは此時丈である。寒い晩であるにも拘はらず外套も着ないで、紡績の衣物を着て、かうした華やかなお茶屋の門を潜るのは、全く悲惨であつた。

K市の女に特有な、妙に甘つたるい「おいでやすや」と、云ふ言葉に迎へられて、電燈が明るく照した二十疊に近い大廣間に通された。雄吉は、河童が陸上へ放り出されたやうな、周囲と調和しない所在のない、不安な心持を、最初から感じた。

が、他の連中は、かうした場所には、馴れ切つて居ると見え、女中達などと、軽い冗談などを巧みに取り交はしながら、聘らしにやつた藝者が来るのを待つて居た。

自分が醜く生れ付いて居る爲に、異性からは、何等の好意

をも持たれさうにもないと云ふ、雄吉の不斷の意識は、彼を

して何時の間にか、一個の婦人嫌悪者たらしめて居た。夫は、最初には負け惜しみから出た反抗的な、反動的な心持であつたかも知れなかつたが、何時の間にか、夫は雄吉の性格の主なる部分を形作り居た。殊に、凡ての男性は必ず自分に對して注意を拂ふに極まつて居ると、思ひ上つて居るやうな女性には、堪らないほど嫌であつた。かうした、意識を持つて居る女は、容貌に自信を持つ藝者などに、多いやうに思はれたので、藝者なる階級に對して、彼は常から奇妙な反感を持つて居た。

暫く待つて居ると、仲居が麥酒とかき餅とを、持つて來た。雄吉は、お茶屋で遊ぶとすれば、何か美味しい料理でも喰べられるのだらうと思ひ、夫をセメてもの樂しみにして居た丈に、此のかき餅と麥酒を見ると、可なり失望してしまつた。

その裡に、まだ年の若い藝者が、四五人ゾロ／＼とやつて來た。雄吉は、その藝者達が本當に美しければ、その美しさは味はへるかも知れぬと思つて居たが、來て見ると、彼等が日本全國を通じて持つて居る評判に拘はらず、少しも美しいとは思はれなかつた。皆、のつべりした少しも弾力のない顔をして居た。

藝者が入つて來ると、雄吉を除いた外の者は、皆燥ぎ出し

た。皆、夫々に自分の知り合の女を聘んだと見え、先度は失禮」とか、ちつとも、來やはらしませんのどすな」など、云つたり云はれたりして居る。が、雄吉に取つては、孰の女も孰の女も皆、氣づまりな他人であつた。藝者が、一人來れば來るほど、見知らない氣づまりな人間が、一座に一人丈多くなる事であつた。彼等は交替に三味線を弾いたり、歌を唱つたりした。が、少しも音楽の解らない雄吉に取つては、三味線の音は、彼の神経を、益々苛立たせるばかりであつた。

彼は、麥酒も飲めなかつた。夫かと云つて、退屈紛らしに喰ふべきものは、かき餅の外には、何物もなかつた。彼は、自分の心持が段々孤獨になつて行くのを感じた。その孤獨は周囲に多くの人間が、居るのにも拘はらず、醸される孤獨丈に、一層堪らなかつた。一座の連中が、遊蕩の氣分の中に、は入つて行けばゆくほど、雄吉の心持丈は、一座の間から押し出されて、その縁の所で蜿いて居なければならなかつた。

孤獨に苦しんだのは、心持丈ではなかつた。紡績の羽織を着た自分の見すばらしい姿が、藝者達の金紗御召などの華美な着附と、一種不思議な對照を作つて居ることが、堪らないほど不愉快であつた。一座の調子に融合し得ないで、自分一人が油の中の水のやうに、表面にマザ／＼と浮き出して居る事が、雄吉自身にも、シミ／＼と感ぜられた。その中一座の連中は、段々興が乗つて來たと見え、その中の二三人は手拭

で鉢巻をして、手を變な風に動かしたりなどした。夫を見る

と、雄吉は益々不快になつた。そして、心の中で彼等を思切り輕蔑した。こんな連中と、雑誌を出す相談などをするのは、悪魔を巡禮の道伴れにするやうなものだと思つた。雄吉が益々不愉快になつて、一座のサークルから、二三尺後に退つて壁に凭れて、つまらなさうな顔をして居ると、藝者の一人が、夫を可哀相だと思つたと見え、貴君も何か一つお歌ひなさいな」と、云つた。雄吉は、テンで歌ふと云ふことが駄目だつた。彼は、少年時代に音階を唱へても、オルガンに合はなかつたほど、調子外づれの聲を持つて居た。殊に、藝者の三味線に合せるやうな小唄などは、半句だつて歌へなかつた。此の藝者の憐憫を買つてからは、彼は、此の一座に居ることが、何うにも不快で堪らなくなつた。夫にふと考へると、かうした遊蕩の席に連つた以上、此の費用に對する當然な割前を出さなければならぬと思つた。雄吉は、その當時藝者を聘ぶと云ふことは、可なりの大金が入る事だと考へて居た。殆ど苦學生に近かつた彼には、その宵の牛肉屋の會費を拂つた後には、幾何も懐に金が残つてゐなかつた。こんな不愉快な思ひをして、割前なんかを拂はされては堪らないと思ひ出すと、彼は一刻も早くその席を逃げ出したくなつた。さう考へると、彼は奮然として立ち上つた。「僕は先きへ失敬するから。」と、さう云ひながら、彼はグ／＼と席を立つた。彼の行動は、そ

の座席に取つては、如何にも調子外づれな、突拍子なものに違ひなかつた。

「富井君が歸るのなら、僕達も歸らうぢやないか」と、云ふ聲を聞流しにして、彼は急いで玄關へ出て來た。すると、二階から二三人舞妓らしい女が、降りて來て、ニコ／＼笑ひながら、

「貴君、まあよろしいぢやおまへんか」とか、何とか云つた。何だか、くすぐつたいやうな氣持がした。外へ出ると、雄吉は

凡てが不愉快であつた。雑誌を出すに云ふ相談會を、故意にさうした方面へ、コヂレさして行つた彼等が、不愉快であつた。自分があゝした世界の中に、は入れ切れないに就ての寂しさと反感から來る不快があつた。最後には、自分がその席を脱れ出したことが一座の者に對する反感ばかりでなく、割前を怖れると云ふ心持が、混じつて居た事が一番不快であつた。結局、凡てが不快であつた。

此の事があつて以來、彼はめき／＼と周圍を離れた。彼は周圍を輕蔑した。周圍も、彼を輕蔑しかへした。

その上、もう一つ彼の三年間の生活を寂しくした事は、S博士に就ての幻滅であつた。

S博士は、明治三十年から四十年にかけて、日本の文壇の最も目覺しい水先案内人の一人であつた。が、四十年頃から以後、文壇の殆ど全體が此の水先案内人の指す方向とは、丸

切り別な方向へ滑つて居たので、S博士は文壇とは、何時の間にか懸け離れて、大學教授と云ふ名稱のもとに、文學の少しも分らない二三十人の學生に、文學の講義をすると云ふ、博士自身に取つても、やり甲斐のなさうな仕事をして居た。日本の文壇は、今全く不良少年の手に落ちました。何等の教養も、何等の傳統もない不良少年の手に落ちました。」と

博士がその華やかであつた青年時代の、唯一の名残であるやうな、美しい眸を輝かしながら、嘆聲を洩すのを聞く時には雄吉は不良少年の手に落ちた文壇を悲しむよりも、博士自身に對して妙な寂しさを、感ぜずには居られなかつた。

でも、その當時の雄吉に取つて、博士に認められて、文壇に出ると云ふ事は、唯一の可能な道程であつた。

が、初めて開かれた級會の席で、博士が先づ最初に口を開いて、

「此中で、詩をやる方はありませんか。文學をやる以上、詩をやらなければ偽です」

と、云つた時、雄吉は可なり失望した。彼は、詩が少しも面白くなかつた。或は面白くないと云ふよりも、分らないのかも知れなかつた。(解らないのだと云はれても、その當時の彼は恥辱だとも思ひはしなかつたらうが) 詩が面白くなかつた彼は、詩が藝術の精粹であるやうに考へて居る詩人や、詩の研究者を輕蔑した。従つて、自分の文學的活動に於て、

唯一の頼りとしようと思つて居るS博士が、自分の全くは入り得ない世界の、極端な愛好者であることを知ると、失望せずには居られなかつた。彼の知つて居る同じ文科の卒業生は、「卒業論文でも、詩をやらな」と一割方損ですよ。僕は、シヨオの劇をやつた爲、いゝ點を貰へなかつた」など云つた。そんな事を聞く度に、雄吉はある種の心細さを感じずには居られなかつた。

夫でも、雄吉は自分の創作が完成する毎に、博士の所へ持つて行つた。が、幾何持つて行つても、博士からは、何の批評も聞く事が出来なかつた。

夫は、雄吉が卒業する半年位前であつた、東京に居る友人達が、發行する同人雜誌に依つて、彼は初めて自分の創作を發表する事が出來た。文學に志した者が、自分の創作が初めて活字になる時のあの大きな欣び、若い大將が初めて一城を攻陥した時に感ずるやうな、あの大きな凱旋的な欣びを、雄吉も人並に感じて居た。彼は、活字になつた自分の小説に貪るやうに通目を通すと、直ぐS博士に宛て、郵便で送つた。自分の原稿に就て、何も云はなかつた博士も、かう活字になつた上からは、何とか批評をして呉れるに違ひないと思つた。

彼は、その翌日大學へ出る時、學校で博士に逢へば、何とか云つて呉れるに違ひない。縱令、賞めて呉れないにしろ、挨拶位はして呉れるだらうと思つて居た。

その時間は、S博士がマクベスを講義して居る時間だつた。雄吉は、華美な柄の背廣の洋服を着た博士が教室に現はれると、胸をワク／＼させ乍ら(夫は決して誇張ではなかつた)博士が、自分の創作に對して、否少くとも自分の創作の載つて居る雑誌「XXXX」に對して、何う挨拶するだらうかと待つて居た。

が、博士は何時ものやうに、何事もないやうに頁をめくつた。そして、雄吉が、雑誌を送つた事などは少しも念頭にないやうに、何時ものやうに流麗な、辭句玉を成すと云つたやうな、譯し振を見せて居た。雄吉は、失望し乍ら、夫でも教室である爲に、博士が個人的な挨拶を、避けて居るのだらうと思つて居た。

その裡に、何時ものやうに一時間が経つた。鈴の音を聽くと、博士は華奢に身を動かしながら教室を二三歩出て行つたが、直ぐ歸つて來た。その突嗟の雄吉は、博士が自分を求めて、雑誌の挨拶をするのだらうと思つた。雄吉は、自分の顔が赤くなるのを感じた。が、意外にも博士は、級の特待生である村松と云ふ男を見付けると、

「やあ、村松君! 赤トンボを有難う、面白く拜見しました。」と、氣輕に挨拶すると、其儘グ／＼行つてしまつた。赤トンボと云ふのは、村松と云ふ男が經營して居る五六枚の小さい佛蘭西語の雑誌であつた。雄吉は「オヤ／＼」と思つ

た。その「オヤ／＼」は、意外な驚きの伴つた「オヤ／＼」では、無くして、深い失望の伴つた「オヤ／＼」であつた。雄吉が、可なり努力して書いた本當の意味での、處女作は元より、雄吉の友人の芳川や久野や杉野や川瀬などの、夫々に、力の籠つた處女作を満載した雑誌「XXX」も、S博士の關する限では、スツカリ「赤トンボ」に、攫はれてしまつた譯であつた。縦令、内容に就ての評言は兎も角「受け取つた」と云ふ位の挨拶は、當然豫期して居た雄吉は、スツカリ悄氣てしまつた。が、その日は、S博士が、つい忘れて居るのかも知れないと思つた。が、その以後、何度顔を合はしても、博士はその雑誌に就いては一言も云はなかつた。

第二號も第三號も、やつぱり同じであつた。雄吉は、到頭學校を出る迄、三年の永い間、S博士から彼の創作に就ては、批評も、助言も、忠言も、その外凡て何物も聞く事が出来なかつた。

博士の文學的な傾向と、雄吉のそれとが、對蹠人同志のやうに、全く相反して立つて居る爲ではないかと、雄吉は思つて居た。「君は、創作をやつて居るのですね」と、云ふ單なる承認さへ得られなかつた。雄吉は、自分の第一義的な活動に就て、博士から少しも顧みられなかつたことを、何よりも淋しく感じた。S博士を通じて、描いた空想などは雲散霧消した。

二

が、色々な幻滅や不快を懷きながらも、彼は兎に角無事に卒業する事が出来た。もう、Kの大學と縁が切れたかと思ふと、晴々したやうな、心持になつた。彼は卒業すると、兎も角も、今迄學資の給與を仰いで居た近藤氏を頼つて、上京する豫定であつた。東京で、定まつた職業が、彼を待つて居る譯ではなかつたが、東京では何かのよい事が、彼を待つて居るやうで、何となく胸がときめいた。後は、野となれ山となれだと思つた。K大學の周圍から懷かされた不快や幻滅はもう過去の事だと思つた。彼は快くK市を去る事が出来ると思つた。

夫は、七月三日の晩であつた。雄吉は、僅かの荷物を片付けた。苦學生に近い彼は、何も持つて居なかつた。彼は、三年の間着古した夜具を初め大抵のものは、永い間厄介になつた下宿の主人に、やる事にした。すると下宿の主人——夫は下手な畫工であつた——が、ホク／＼欣んで、雄吉が愈々、その家を出ようとする時、

「富井さん、一向アカン物ぢやけど、此の扇持つて行つてお呉んなはれ」と、云つて五本の扇子を呉れた。雄吉が、夫を開いて見ると、何れもこれも、達磨の繪を描いてあつた。夫が、模様化されて居て滑稽な、グロテスクな、變な感じを起

させる繪であつた。夫でも、雄吉は主人の好意を欣んだ。精神的には殆ど何等の餞別をも、獲られなかつたK市を去るに當つて、妙な飄輕な達磨の繪を描いた扇子を、贈られることは却つて皮肉でよかつた。雄吉は、荷物——と云つても夫は古い、十年も使ひ古した手携鞆丈だつたが——を持つて、大學の附近の下宿を引き拂つて、電車の停留場迄、ボク／＼歩いて居た。過去の生活を顧みると、不快の感じて充されて居たが、夫でも三年の間住み馴れたK市を去るに當つて、少しはセンチメンタルな氣持になつて居た。

大學の石壁に添うた道は、廣い暗い單調な長い通であつた。一町隔き位に、輝いて居る街燈は行き交ふ人の顔を、微かに照らす位であつた。雄吉が、丁度此道を半分位行き過ぎた時であつた。街の薄暗から、ヌツと大きい人影が現はれて來たかと思ふと、

「やあ富井君ですか」と、云つた。夫は同じ級の岡本と云ふ男であつた。雄吉が、

「やあ」と、返事するのを待ち遠しさに、

「君はSさんが死んだのを知つて居るかい」と稍々急ぎ込んで訊いた。S博士の事を、皆はSさんと呼び馴れて居た。

「何！ Sさんが死んだ。Sさんが」と、雄吉も可なり顫動して叫んだ。

「卒業試問が済むと、直ぐ東京の家へ行かれたのだが、何で

も可なり急な病氣らしいのだよ。今朝死んだと云ふ電報が來たのだ。僕は今大學の書記から聞いたのだ。何だ！ 之から上京するのか、夫ぢや丁度お葬式の間都合譯だね」と、岡本は可なり興奮して話した。雄吉も、S博士が病身であるとは、聞いて居たものゝ、是程急速に死なうとは思つて居なかつた。S博士の死は、雄吉に取つても、可なりの驚駭であつた。雄吉は、自分の創作を少しも認められなかつた事に就いて、S博士に對して心の底からは傾倒することは出来なかつたけれども、夫は餘りに個人的な事で、博士の死に對しては、可なり深い感激を懷かずには居なかつた。

殊に、自分が三年の大學生活を了へて、K市を去らうと云ふ其の晩に、何等かの宿命のやうに博士の訃報を聞いた事が彼の心を可なり感傷的にしたのである。岡本と別れて、電車に乗り、汽車に乗る間、雄吉の心はS博士の死に就ての興奮や感慨で一杯であつた。

S博士に對する感謝や感激の心丈が何時の間にか、胸の内溢れて居た。卒業試問の時の博士の瀟洒な姿などが、意識の裡に幾度も現はれて來た。随分失敗した卒業論文に、八十點と云ふ意外な高點を呉れた事などが、有難く思ひ起されたりなどした。

雄吉は、東京へ着いたら、直ぐS博士の家に、お悔みに行かうと思ひながら、興奮の爲に眠られない一夜を汽車の中で

明かした。

三

卒業をして上京したからと云つて、東京に何もいゝ事が、雄吉を待つては居なかつた。却つて、今迄學校に居た爲に、毎月定まつて、保護者たる近藤氏から、受けて居た學資——と云ふよりも夫は生活費だつた——が、受けられなくなつた丈である。一文も財産を持たない彼は直ぐにも、職業を見付けなければならなかつた。不快な三年の生活を、すり脱けて來た僅かな欣びなどは、將來の生活に對する不安の爲に、全く塗り消されてしまつて居た。

上京すると、雄吉は矢張り近藤家へ頼つて行つた。學資を出して貰つた上に、また就職の心配もして貰ふことは、如何にも心苦しい事だつたが、さうするより外に、何うともする事が出来なかつた。

上京した翌日、雄吉は早速S博士の宅へ悔みに行つた。彼は白い木綿の緋を着て居た。先生のお家へお悔みに行くのであるから、せめて紋附の羽織でも、着て行きたかつたのだが、彼には夫を何うする才覚もなかつた。袴も永い間穿き古したセルの袴で、所々に汚點や穴などが出来て居た。雄吉はかうした身装で、幾何か嚴肅に改まつて居る家へ、悔みに行くのが、如何にも不調和で恥しいと思つた。輝やかしい夏の

太陽に、明らさまに照されながら、悔みに行くのが、如何にも無様のやうに思はれてならなかつたが、何うとも仕様がなかつた。その時にも、彼はK市の下宿の主人から貰つた達磨の繪を描いた扇子を持つて行つた。その頃の雄吉には、此の扇子が唯一の装身具であつた。

S博士の家へ着いた。悲しみに閉ざされて居る家の中に、踏み入る前に、強ひてその家の調子に迄自分の心持を、合せるに就いて多少の不快を感じた。殊に彼は、自分の身装を考へると、ギゴチない不快を感じて居た。

取次に出て來たのは、紋附の羽織を着た立派な紳士であつた。彼は、その人の服装を見ると、全く夕チ／＼となつてしまつた。雄吉の僻みであつたかも知れないが、その人も彼の服装に對して、直ぐ様、當然な輕蔑を持つたやうに思はれた。

「Kの大學を出た富井と云ふものです」と、冒頭して「此度は、先生には俄にお亡くなられたさうで、何とも申しやうもございません」と、云つた。さうして妙な、因習的な挨拶を述べると、尙更不愉快になつて、直ぐにも逃げ出したくなつた。夫でも先方は雄吉が、K大學の卒業生だと聽くと、急に打ち解けたやうに、

「何うか、お上り下さい。さあ、何うか」と、云つて呉れた。雄吉は仕方なしに、奥へ通つた。

玄關の次は、直ぐ八疊の座敷になつて居た。彼が、その座敷へは入ると、十四五人ばかりの人が、亂雜に入り亂れて坐つて居るのが、眼に附いた。その人達の顔よりも、彼等の服装の方が雄吉の眼の中に、最初には入つて來た。立派なフロツクを着た人が、二三人居た。背廣を着た人も居た。その他の人は、皆紋附の羽織を着て、皆整然と行儀よく坐つて居る。洗ひ晒しの白木綿の着物を着て居るのは、確に雄吉一人だつた。彼は、勧められるまゝにS博士の、棺前に進んだ。が、自分の存在の不調和——他の人達が、かうした席に適當した身装をして居るのに、自分一人が、調子外れの服装をして居る不調和の意識の爲にS博士に對する哀悼の心なんか、何時の間にか何處かへ消失してしまつて居た。焼香を済して、片隅のなるべく壁際に、身を退けると、漸く心が落着いた。誰か知つて居る人が來て居はしないかと周圍を見廻したが、誰も知つた顔はなかつた。夫も、無理ではない。まだK市から、誰も出京しては居なかつたし、S博士の家では、雄吉が知つて居たのは、S博士丈なのだから、當人の博士が死んでしまつた以上、丸切り知らない人ばかりの家へ來て居る譯であつた。彼は、ボンヤリと其處で三十分間ばかりも、坐つて居た。博士に對する哀悼の心と、自分の服装に對する不快な意識とが、交替に彼の心を占領した。誰も彼の方を時々デロチロと見ながら、言葉を掛けるものはなかつた。彼は永く坐つ

て居れば居る程チリ／＼して來た。彼は到頭堪らなくなつて先刻取次をして呉れた人の所へ行つた。

「孰れ、晚にはお通夜に伺ふ積ですから、只今は之で失禮します」と、挨拶すると、逃げるやうに玄關へ出た。其處に、稍々亂雜に脱ぎすてられてある履物の中でも、彼の下駄丈は、直ぐ判つた。彼は、キツ下の靴や、桐の駒下駄の中に、自分の磨り減らされた下駄が、不調和に存在するのを見ると、又不快になつた。夫でもS博士の家の門を一步踏み出すと、彼は甦つたやうに息をした。やつと助かつたと思つた。彼は、晩にお通夜に行く心持などは、もう少しもなかつた。先刻、つい、口が滑つたのを後悔した。

が、彼が十間ばかり歩いた時、ふと自分の右の手が、扇子を持つて居ないのに、氣が付いた。彼は駭いて袂や懷中を探つて見たが、夫は何處にも見付からなかつた。彼は、博士の家で、手持無沙汰の爲に、二三度扇子を、いぢつて居たのを思ひ出した。餘り逃げ出すのを急いだ爲に、つい扇子を忘れてしまつた事に氣が付いた。が、彼は、取りに歸るなどと思ふ氣は、少しも、なかつた。又、扇子を惜しいとも思はなかつた。が、然しあゝしたしめやかな席に、滑稽な無様な達磨の繪を描いた扇子が落ちて居ることを思ふと、彼は又妙なくすくつたいやうな、不快な、不調和な氣持に囚はれた。自身自身が、彼處に居たことが、不調和で、ギゴチなかつたやう

に、あゝした達摩の繪が、あゝした悲しみの席に存在することも、妙に不調和に思はれて仕方がなかつた。雄吉は、自身を作つた不調和な感じを、自分が残した達摩の繪に依つて、相續させて来たことを思ふと、夫が不快であると同時に、一種滑稽であるやうに感ぜられた。が、おしなべて凡てが、イヤであつた。お通夜の席などで、誰かあの扇子を取上げる。そして軽い好奇心から、開けて見る。すると、グロテスクな、滑稽な、あゝした席には、全く不調和な達摩が遠慮もなく顔を突き出す。丁度自分が、洗ひ晒しの木綿を着て、悔みの席へ闖入して行つたやうに。さう考へ出すと、雄吉は扇子を残した事が、愈々不快になつて来た。S博士に對する哀悼の心持が全く傷けられて、彼はたゞイラ／＼するばかりであつた。

四

彼が、S博士の家へ悔みに行つてから二日目が、博士の葬送の日に當つて居た。彼は、その日の朝、近藤家の主人の紹介状を持つて、ある雑誌社の社長を、訪問することになつて居た。

その前の晩、彼は近藤の主人から、紹介状を書いて貰つた。紹介状を持つて、全く見知らない人を訪ふと云ふ事は、彼に取つて初めての経験であつた。彼は、緊張した不安な期

場合に、自分の容貌や服装が、何れ程不利に働かよく知つて居た。その彼に取つて、唯一の頼みであり武器である紹介状が、こんなに汚くなつては、相手に對して、何う考へてもいゝ印象を與へ得るとは思はれなかつた。

彼は、濡れたその紹介状を、電燈の温味で、氣永に温めて見た。が、そろ／＼乾いて行くに従つて、その乾いた後が、皺になつて行くのに氣が附いた。彼は、自分の粗忽が泣き出すほど、恨めしく思はれた。S博士の家へ、悔みに行けば、ポンヤリして、扇子を忘れて可なり不愉快な後感を得て居るのに、また紹介状に對するだらしない不注意から、取り返しつかない失策を、やつたかと思ふと、彼は自分で自分が堪らない程不愉快になつた。夫でも、一晚乾して置いたならば、翌日迄には、案外跡形もないやうに、乾き切つてしまつて居るかも知れないと思つてその晩は漸く床に就いた。その翌日は、午前雑誌社の社長を訪ひ、午後からはS博士の葬式へ行かねばならなかつた。兩方とも、妙な重くるしい物が、付き纏つて居る仕事であつた。

朝起きると、彼は怖る／＼昨夕の紹介状を、手に取り上げて見た。最初は、案外よく乾いて居て、之ならなんでもないなあとと思つた。が、よく見ると状袋の中央の所に横様に、紛れもない雲形の汚點が、あり／＼と浮き出て居るのを見た、急いで、中の書状を出して見た。すると書状の下半部は、何

待を、懐かすには居られなかつた。紹介状は、唐紙の書簡箋に書かれて居て、立派な奉書の状袋に入つて居た。夫は、雄吉に取つて護符のやうに、不思議な魅力があるやうに思はれた。彼は、最初、夫を主人から手渡された時、夫を自分に當てられた部屋の片隅に置かれて居る、細長い長持の上に置いた。彼はその長持の上を、いつも棚の代りに使つて居たのだ。暫くしてから、彼は湯に入つた。そして、久し振にゆつたりとした心持になつて、部屋に歸つて来た。孰ちらかと云へば放心な彼は湯で使つた手拭を、やつぱりその細長い長持の上に置いた。置くと云ふよりも、その上へやりつ放りに、投げ出したと云つた方がよかつた。

夫は、彼が床を敷かうと思つて、立上つた時であつた。彼は、ふと明日持つて行く紹介状の事が、氣が／＼になつて、長持の上を見た。見ると、思ひ懸なくも、彼の投げた置いた手拭の一端が、紹介状の上に覆ひ被ぶさつて居た。彼は、アツと驚いて紹介状を取上げて見た。湯から上つても、ぞんざいな彼は、手拭を充分搾つてなかつた爲、手拭に含まれて居た水分は、紹介状の下方の半分を、シト／＼に濡してしまつて居るのであつた。

夫を見ると、彼は全く悄氣てしまつた。就職運動をなす者に取つて、先方へ與へる初對面の印象が、何んなに大切であるかは、雄吉もよく知つて居た。彼は、初對面の印象を作るの字も、何の字も、幾何か滲じんで居て、而も封筒に見へる通の雲形の汚點が延々として、片一方の端から、他の一方の端迄續いて居た。夫は、ホンの薄い褐茶色の汚點であつたが健全な肉眼を持つて居る人には、直ちに眼に付くのは確かであつた。夫は聲を出して泣くには、餘りに馬鹿らしい事であつた。が、結果的には、可なり重大な事であつた。その場合、一番正當な事は、近藤の主人に事情を打ち開けて、もう一枚紹介状を書いて貰ふ事であつた。が、その時迄に随分世話になつて、恩義の深い主人の書いて呉れた紹介状を、さうした不注意から汚したとは、何うしても打ち開けられなかつた。凡てがヘマであつた。凡てが、無様であつた。自分の習慣的になつただらしない放心から、かうした愚にもつかない、然し可なり重大な結果を持つた失策をやつたことが、不快で堪らなかつた。

先方の方が紹介状を開いた時、何んなに思ふだらうと、雄吉は考へて見た。その茶色の汚點に依つて、貰かれた紹介状を見て、先方はきつとある侮辱を感じるに違ない。さうしてその紹介状の汚れて居る責任を、誰に歸するだらう。無論、その責任を負ふべきものは、雄吉と近藤の主人の、孰ちらかで無ければならなかつた。先方が、その責任を孰ちらに歸したにしろ、その結果は、雄吉の就職運動に、悪く響いて来る外はなかつた。さう思ふと、雄吉は全く情なくなつた。夫で

も、雄吉は約束の十時の間に合ふやうに、九時頃に近藤氏の家を出た。彼は、汚點のある紹介状を大切に風呂敷に包んだ。夫は、もう此の上汚しては百年目だと思つたからであつた。が、夫程怖々と行動をし始めた自分を考へると、彼は全く情なく思はれた。

彼は、矢張り羽織を着て居なかつた。が、相手の雑誌社の社長が、二宮宗の信奉者であることを、聞いて居たので、大學を出ても、質素にして居る所を買つて呉れやしないかと云ふ、賤しい迎合的な意識があつたので、S博士の家へ悔みに行つた時程、服装に就いては悲觀しなかつた。

その社長の家は、麻布の高臺に在つた。初め發行した實業の雑誌が、ウマク當つた爲に、十年になるかならぬ裡に、日本で有數な雑誌業者になつて居る人であつた。

雄吉は、廣大なる花崗石の門を、怖る／＼潜つた。何だか氣づまりであつた。見ると、左の方には宏壯な西洋館があり、右の方にも、夫丈引き離して見れば随分立派だらうと思はれる日本館があつた。雄吉は、最初立派な西洋館の支關へ行かうか、夫とも日本館の稍々質素な方へ行かうかと迷つた。主人へ面會するのだから、西洋館の方へ案内を乞ふのが當然だと思つたが、臆病な彼の心は、何時の間にか彼の足を日本館の方へ振向いて居た。彼は其處に取付けてある呼鈴を見ると、怖い物に觸るやうにオゾ／＼夫を押しした。奥の方で、

夫がほのかに鳴つて居るのが聞えた。

やがて、人の足音がしたかと思ふと、六十に近い老人が、彼の前に立ちはだかつて居た。無論、此老人は、最初から立ちはだかる意志はなかつたらしいのだが、雄吉の姿を一目見ると、屈めやうとした腰を、急に延ばしてしまつて、そこに平然と（傲然とではなかつたが）立ちはだかつてしまつたのである。

「何方？」と、その老人は、冷靜な少しも好意のない聲で云つた。雄吉は自分の名刺と、汚點のある紹介状とを出しながら、

「かう云ふものですが、御主人にお目にかゝりたいのです」と、云つた。老人は、前と同じやうな、冷淡な調子で雄吉の手から、名刺と紹介状とを受取ると、名刺には一瞥も與へずに、紹介状の裏を返して、ジロジロと見て居たが、

「ウーン近藤三造、あゝ」と、肯くと、直ぐ雄吉の方へ向いて、

「折角のお出ですが、御主人はもう先客が、二三人お在りなさつて、今朝はともお逢ひになる暇がありませんまい。又明日でも、出直しておいで下さい。お出になる前に電話をかけて下さると都合ですが」と、云ひながら、その老人は、早くも支關から、奥へ入りさうにした。雄吉の今迄の経験では、他人の家を訪問した場合、その主人が在宅であるに拘は

らず、面會を斷られたことは、一度もなかつた。然るに彼は生れて初て、さうした屈辱的な待遇を受けたのである。學校を出て、初て實世間に接觸する積で、その一角に手を觸れる、と云ふよりも一指を觸れようとする、氷のやうな冷酷さを以て剔ね付けられたやうに思つた。彼は、新聞や雑誌などて讀む、名士の門前拂と云ふ字を思ひ出した。あれだなどと思ふと、さうした事に就いて初心である彼は、心の底から押し出して來るやうな憤りを感じた。

「お待ちする譯には行かないのですか」彼は一生懸命の努力で云つた。

「お待ちになつても、今朝はトテも駄目でせう。毎朝十時半迄に社の方へお出になるのですから、トテも貴君にお逢ひになる時間はありませんまい。」

「夫なら、此の紹介状でも、お目にかけて下さい」と、雄吉は、やゝ哀願するやうに云つた。彼は、汚點の附いた紹介状を持つて居るのが、不愉快で堪らなかつたので、その結果は兎も角、早く先方に見せてしまひたかつたのだ。

が、雄吉のやうな訪問者を幾度も取扱つて、物馴れて居るらしいその老人は、

「いや、それは貴君が、自身でお渡しになるのが、本當でせう。明日でも早くいらつしやれば——」と、その老人は最後に、僅かに雄吉に對して、さうした指導的な言葉を發すると

その儘奥の方へ、は入つてしまつた。

雄吉は、仕方なしにその家を出た。不當に侮辱された憤りで、胸が一杯になつて居た。主人にも取次がないで、不當に追ひ返された事が、彼は何う考へても、残念であつた。

實際冷靜に考へて見れば、あの老人の支關番は、紹介状を持つた就職青年を幾人取次いだかも分らないのだ。そして、主人が忙しいか或は不機嫌な時に、不用意に取次ぐことに依つて、幾度も主人の叱責を受けたのに違ひなかつた。其爲に主人の都合の悪さうな時には、無斷で客を返すことに馴れて居るのだ。と雄吉は考へ直して見た。が、あの老人の方で、支關拂ひを喰はせる事にどんなに馴れて居やうとも、追ひ返された雄吉は、夫が生れて初て、世間から受けた最も冷い辛辣な挨拶であつた。

雄吉は、傷だらけな心を懷いて電車に乗つた。彼は、最初の計畫では、此の訪問を済ました後、久し振に日比谷公園でも散歩して、午後一時から、青山齋場で行はれる、S博士の葬式に出ようと思つて居た。

が、雑誌社の社長の家を、ケンもホロ、に追ひ出されて表へ出ると、心の中が色々な不快な感情で一杯になつてしまつて、葬式に出られるやうな純眞な心持は、僅かな斷片でさへ残つて居なかつた。凡てが、不快であつた。自分が世の中に存在して居る事自身が、甚しく不調和で、醜態であるやうに

思はれた。

彼は、電車にも乗らないで、ボンヤリと考へながら日比谷の方へ歩いて居た。同じ東京に居りながら、お通夜もしない上に、葬式へ出ないと云ふ事が、如何にも不徳な許すべからざる義理知らずであるやうに、心が苛まれないでもなかつた。世間的には、恩を受けた先生である。その上彼のやうな怠け者が、相當な成績で學校を出られたのも、寛大な自由なS博士の恩恵でないこともなかつた。

が、何う考へ直しても、さうした不快な心持を抑へ付けて迄、葬式に行く氣はしなかつた。無論、悔みに行つた時のやうに、服装に對する引け目な心持も、幾何か彼の心を鈍らせたのではあるが、ゴタ／＼して居る葬式の場所では、彼の羽織も着て居ない姿も、餘り人の目には附くまいと云ふ氣安めがあつた。

が、服装の問題などよりも、もつと根本的なものが、其處にあつた。彼は、何う考へても葬式に行く氣がしなかつた。門前拂ひを喰つた不愉快さの腹癢せを、先生の葬式に行かない事に依つて、すると云ふことは、如何にも不人情なヒドイ事であるかも知れなかつた。

雄吉は日比谷公園へ行つて、其處のベンチに腰をかけて、晝頃迄茫然と考へて居た。S博士の事を考へても、紹介状の事を考へても、達摩の繪のことを思ひ出して、凡てがいや

であつた。

ともかくも、教へを受けた先生の葬式があると云ふのに、色な不愉快な事が、重り合せて、何うしても行く氣になれないことが、情なく思はれ出した。Kから上京した同窓の連中などは、葬式の席で、當然列席して居なければならぬ自分を物色するに違ひない。その中の誰かと近い中に逢ひでもしたら、彼は何う云つて辯解したらよいかと思つた。

其内に、晝近くなると、雨がポツ／＼降り出して來た。雨が降り出して來ると、彼は幾何か落着いた。雨降りであつたと云ふ事が、葬式に出席しない理由の、ホンの僅かな部分でも、成すと云ふ事が幾何か雄吉の心を慰めた。彼は、到頭行かない決心をして、近藤氏の家へ歸つて來た。

が、先生の葬式に出ないと云ふ事は、又更に新しい不愉快さを産んで居た。何う行動しても、右へ動いても、左へ動いても、調子よく愉快に動くことが出来なかつた。

彼は重くするしい夫かと云つて、絶えず動揺する心を懷いて近藤氏の家へ歸つて來た。自分の部屋へは入つて見ると、机の上に一封の手紙が來て居るのを見た。裏を返して見ると、夫はKの大學の同窓生三人の連名であつた。早速開けて見ると、

「拜啓今回S先生突然逝去なされ候に就ては、我等新卒業生舉つて出京致すべき筈なれども、何分遠隔の地にて其意を

得ず候に付き、幸ひ滞京中なる貴下を、本年度卒業生總代に推薦致し候間、何卒小生等一同を代表され、通夜、葬儀の節など宜しく御行動被下度候。

尙、香奠として新卒業生一同より、金百圓贈呈致したく候に付き、割前として金五圓至急お送り下され度願上げ候」と、あつた。

彼は、その手紙を見ると、今迄の不愉快さが、見る／＼胸一杯に擴大されて、坐つても立つても居られないやうな、心持になつた。級の奴等が、俺の首つ玉を擲へて、先生の葬式へ連れ出さうとするものだと思ふと、彼は自分の心が張りさけるほど、いら／＼した反抗的な不快を感じた。宜しく御行動などは、彼にはトテも出来なかつた。彼は、その手紙を投げ付けて、其處へ茫然と坐つてしまつた。

が、葬式に行かぬことは、何うにかごまかせるとして、五圓の香奠は何うしても、出さなければならなかつた。五圓など、云ふ重い負擔は、其頃の彼には堪へ切れるものでなかつた。人の金でやつと、學校を卒業したばかりで、一文も自分の金を持たぬ彼に、五圓の金などは、何う才覺しても出来さうになかつた。が何うしても出さなければならぬとすると、彼は近藤氏に事情を話して、頼んで見るより外はなかつた。先生が死んで、その香奠に出す金を、自分で何うともするところが出来ないのを考へると、彼は全く情なかつた。彼は、そ

の晩、香奠の事で、一晚苦しい夜を明した。到頭彼は、之れ程迄、情ない思をして、香奠を出さなければならぬものかしらと思つた。人に借りて迄、香奠を出す必要はないと思ひ返した。彼は、半分自棄氣味になつて、到頭香奠を出さないことに決めてしまつた。

彼は、自分の境遇が悪い爲に、博士の死を純眞に悲しめないて、當然爲すべき義務を、果し得ないで、却つて事毎に不快を買ふのが、恨めしかつた。凡てが、云ひやうもなく不快であつた。情なかつた。

彼は、到頭葬式にも行かなかつた。香奠も出さなかつた。自分ながらヒドイ奴だと思つた。がさうするより外、仕方がなかつたのだと思つた。が、その後永い間、自分の不義理な行動から絶えず苛責を受けて居らねばならなかつた。

たゞ、さうした苛責が烈しくなる時、彼は只一つの云ひ譯があつた。夫は、S博士が、彼の創作を少しも認めて、呉れなかつた事であつた。少くとも、創作に志す雄吉に取つて彼の創作に就いて、何物をも與へて呉れなかつたのは、否夫に對して一言の挨拶をも、與へて呉れなかつたのは、その世間的な關係は、師弟であらうが何であらうが、根本的な所では、第一義的な所ではS博士は雄吉に取つて對蹠人ではなくても、少くとも路傍の人であつた。さう考へると、葬式に行かなかつたことも、香奠を出さなかつたことも、いくらか云ひ譯が

付くやうに思はれた。無論、夫は雄吉の負け惜しみから出た、甚だイゴイスチックな云ひ譯ではあつたけれど。

大島が出来る話

苦學こそしなかつたが、他人から學費を補助されて、辛く學校を卒業した讓吉は、學生時代は勿論、卒業してからの一年間は、自分の衣類や、身の廻りの物を、氣にし得る餘裕は少しもなかつた。

學生で居た頃は、彼はニコ／＼の染緋などを着て居た。高等程度の學生としては、粗服に過ぎて居た。が、衣類に對しては、無感覺で無頓着であつた讓吉は、自分の着て居る緋が、ニコ／＼であるか、何であるかさへ知らなかつた。そして豪放と云ふ看板の下に、自分の粗服を少しも氣に掛けまいとした。實際また氣に掛けても居なかつた。

が、讓吉が一旦學校を卒業してからと云ふものは、服裝を調へる必要を痛切に感じ始めたのである。彼が學生時代から、ズーツと補助を受けて居る、近藤氏の世話で、××會社に入社した當初は、夫が不快になるまで、自分の服裝の見すばらしさを感じたのである。

夫は夏の終であつたが、彼は、初て出社すると云ふのに、白地の木綿緋を着て居るに過ぎなかつた。

課長と、初對面の挨拶が済んでから、彼は同僚となるべき人々に、一々紹介された。

「岡村君に吉川君」と、課長は最初に、二人の青年を紹介した。岡村と云はれた青年は、中肉の身體にスツキリと合つて居る、琥珀色の、瀟洒な夏服を着て居た。そして、手際よく結ばれた玉蟲色のネクタイが、此男の調つた服裝の中心を、成して居た。吉川と云ふ方は明石縮の單衣に、藍無地の縞の夏羽織を着て、白っぽい縞の袴を穿いて居た。二人とも、五分も隙のない身装である。夏羽織も着て居ない讓吉は、此の二人の調つた服裝から、可なり不快な壓迫を受けた。夫は、對手が人格的に、若しくは學問的に、また道德的に、自分に優越して居る爲に受くる壓迫とは、全く違つて居る。考へて見れば下らない事かも知れなかつた。が、夫にも拘はらず、その壓迫は、可なり重苦しく、不快なものであつた。岡村と吉川との、二人ばかりではなかつた。その後から紹介された、十五六人の人々は、一人として、讓吉のやうな、見すばらしい様子はして居なかつた。

讓吉はその後、一週間ばかり、毎日自分の服装の不備に就いての、不快な意識を續けて居た。其の裡に漸く、讓吉の世話になつて居る、近藤夫人の好意になる背廣が、出來上つたのであつた。

自分の家が貧しい爲、何等の金錢上の補助を仰ぎ得ない讓吉に取つては、近藤夫人が何かにつけて、唯一の頼りであつた。讓吉が高等商業の豫科に在學中、故郷に居る父が破産して危く廢學しようとした時、救ひ上げて呉れたのは、讓吉の同窓の友人であつた近藤の父たる近藤氏であつた、夫以來讓吉はズーツと、學資を近藤夫人の手から仰いで居た。が、近藤夫人の讓吉に對する厚意は、たゞ學資の補助と云ふ、物質的の恩恵には、止まらなかつた。

讓吉に對する夫人の贈與なり注意には、常に温い感情が、裏附けられて居た。その温情を讓吉は沁々と感じて居るのであつた。學資ばかりでなく、讓吉は、衣類や襦袢や、日用品の殆ど凡てを、近藤夫人の厚意に依つて、不自由しなかつたのである。

學校を出てからも、讓吉は近藤夫人の庇護なしには何うともする事が、出來なかつた。

「富井さんも、愈々口が定まつたのなら、孰れ洋服が入るでしょうから、三越へさう云つて、調らへなさい、少しいゝのを調へた方が結局は得ですから」と、讓吉が、入社が定まつ

の資産家の娘を世話して呉れたからである。

夫に連れて、讓吉の服装も段々調つて來た。結婚の時に、近藤夫人は讓吉の爲に、フロックコートを買調して呉れたし、その外にも讓吉は、四五着の背廣やモーニングを、持つやうになつた。和服も、上物ではなかつたが、時候に相當した物を、一二着宛、調へて行く事が出來た。殊に彼の妻は、女性に特有な衣類に對する敏い感覺と、執着とを持つて居た。

「もう、セルを着て居ないと、見つともないわ」と云ひ出すと、彼の妻は、讓吉がセルを買つてしまふ迄は、五月蠅くその提言を繰返した。讓吉が金の都合で、何うしても應ぜぬ時などは、自分の小遣錢で、黙つて買つて來て、讓吉に内緒で縫つて置いた。さうして、讓吉が改まつて外出する時などは、之を着て行かない！」と、不意に彼の眼の前に、仕立下ろしの着物を擲つて見せたりした。

が、讓吉の力でも、彼の妻の力でも、何うしても、出來ない着物があつた。夫は大島絨の揃である。殊に讓吉の妻は、彼の爲に大島を買ふ、熱心な主張者であつた。

「男には大島が一番よく似合つてよ。貴方も、是非大島をお買ひなさい、夫も片々ぢや駄目だわ。何うしても羽織と、着物と揃へなけりや。是非お買ひなさいよ。一疋買ふといゝんだから、今年の秋迄には是非お買ひなさいよ。男は大島に限る

た事を報告に行くと、夫人は、祝辭を述べてから、直ぐかう云ひ出した。讓吉は夫人に金を借りても、洋服を新調したい積りであつたから、夫人のかうした好意は、骨身に浸みる程、有難く感じたのである。無論、近藤夫人の好意は、洋服丈には止まなかつた。

「色々の身の廻りの物が入るでしょうから」と、云ひながら、夫人は新しい十圓札を三枚、讓吉の前に差し出した。

讓吉は、過去に於て幾度、夫人の華奢な手から、かうした贈與を受けたかも知れない。その度に、讓吉は、夫人から受くる恩恵に押れて、純な感謝の念が、一回毎に、薄れて行かぬやう、絶えず自分の心を戒しめて居た。讓吉は、此日三十圓を受けながら、卒業してからも尙、夫人を煩はして居る事を、少しは情なく思つたが、夫人に頼らずには、實際何も出來なかつた。が、夫人から、金錢の贈與を受ける事は、もう今度でおしまひにしたいと、心の中で思つた。

夫人の好意に依る、背廣と三十圓とは、讓吉が今迄感じて居た、不快な壓迫に對する、最上の對症藥であつた。入社した二三週間目からは、讓吉も、自分の服装に相當の自信を以て、快活に働いて居たのである。

その内に、讓吉の生活にも、僅かながら餘裕が生じて來た。殊に、學校を出た翌年、近藤夫人の盡力で結婚して以來は、更に月々相當の餘裕を生じた。夫人は、讓吉の爲に相當

わ」と、彼の妻は、着物の話が出る度に、屹度大島を讚美したが、讓吉の月々の餘裕と云つても夫は二三十圓と、纏つた金でなかつた。又彼の妻としても、一度に二三十圓も出す力は持つて居なかつた。従つて一疋六十圓以上もする大島は、當然讓吉夫婦の購買力の上に在つた。

「大島を買ふ金なんかあるもんか」と、讓吉が妻のしつこい提議に對して、吐出すやうに云ふと、「だから貯金をなさいよ。貴方は喰道樂だから、お金が蓄らないのよ。毎月五圓宛貯金をなさいよ。そしたら、今年の秋迄には、大島が出来るわ」と彼の妻は、よくこんな事を云つて居た。讓吉も冗談に、「ぢや、その『大島貯金』をでもするかな」と應じた。が、一種の享樂者である彼は、着物を買ふ爲に、貯金迄する氣は、何うしても起らなかつた。が、彼は妻に依つて、大島的美點と長所とを詳細に説かれてからは、段々大島に對する執着を覺えて來た。銀座通を歩いて居る時など、よく呉服屋の見本棚の前に足を止めて、其處に飾られてある、縞柄のよい大島絨を、熟視して居る自分の姿に氣が附いて、思はず苦笑する事も屢々あつた。

その裡に秋が來て、多物を着るシーズンとなつても、大島の揃は、中々出來る様子は見えなかつた。妻はよく讓吉に、「貴君のやうに、ケチ／＼して居ては、何時が來たつて買へやしないわ。少し無理をしてよも、思切つて買ふといゝんだ

わ。買つて後で餘儀なく儉約して埋合せを附ければいゝんだわ」と、云つた。金遣ひにかけては、貧家に育つた讓吉は、可なり小心であつた。とても疾病などの準備として預けてある貯金を、引き出して迄、大島を買ふ氣にはなれなかつた。また彼の妻程大島に對して強い執着を、持つても居なかつた。

讓吉に取つて、大島の揃は出来ずに、年が暮れた。すると、新年になつて、年始旁々讓吉の家を訪ねた友人の杉野は、仕立下ろしと見える新しい大島の揃を着て居た。杉野と、もう一人の友人の荒井と、讓吉とは、高商の同窓で社會に出てからも、同じ位置に就いて居た。そしてお互の間に、意識はしなかつたが、色々な點に於て競争の感情が動いて居ないでもなかつた。三人の中で、一番早く眼鏡を金縁にしたのは讓吉であつた。すると、一月ばかりして荒井が今迄の鐵縁を金に替へて居た。杉野も亦何時の間にか、金の縁無しを掛けて居た。が、大島を一番早く着たのは、確に杉野に相違なかつた。

「何だ！ 大島を着て居るぢやないか」と、讓吉は思はず嘆賞の言葉を洩すと、杉野は、

「何うだ、全盛だらう」と、一寸得意さうな顔をした。そして、讓吉を可なり羨しがらせた。

が、冬が去り春が來ても、讓吉に大島は出来なかつた。殊

に、妊娠をして居る彼の妻の産期が、近づいて來るに従つて、色々な出資が嵩み、大島を買ふ事をあれほど強く主張した妻も、もう諦めてしまつたらしかつた。三月に入つてから、彼の妻は到頭女の兒を産んだ。讓吉は色々な出資で貯への過半を費した。妻は猿のやうに赤い赤坊を抱きながら、

「もう親の着物よりも、子の着物をこさへなけりやいけなわ。ねえ！ 美奈子！ お父さんにいい着物を澤山こさへて貰ふのね」と、赤兒に頼りながら、讓吉に大島を買ふ事は、まるで忘れてしまつて居るやうであつた。

夫は、三月の半ば頃で、讓吉の妻が、肥立してから、まだ間もない日曜の事であつた。その日は全く冬が去り切つてしまつたやうに、朝から朗かな日が照つて居た。讓吉は、久しぶりに暢然として一日を暮して見たいと思つた。朝飯が済むと、彼は縁側に寝轉んで、芽生えむばかりになつた鴨脚樹の枝の間から、薄縁に晴れ渡つた早春の空を眺めて居た。すると、「先生！」と、聲がして、いつもよく遊びに來る隣家の子供が、兄弟連でやつて來た。讓吉はもう三十に近かつたが子供とたわいなく、遊ぶ事が好きで、かうした來客を歓迎した。兄の方が、新しく買ったらしい、ピンボンの道具を持つて居た。そして、

「先生！ ピンボンを買つて貰つたから、しませう。随分旨くなつたのだから」と、云つた。

讓吉は、隣家の主人に頼まれて、此の子供達に英語を、ホンの一週間ばかり教へた事があるので、兄弟は今でも讓吉の事を、先生と云つて居た。

「あ、やらう／＼、直ぐ負かしてやるから」讓吉は實際、ピンボンには自信があつた。彼は中學時代には、ピンボンの選手であつた。

「先生！ 雨戸を一つ外せませんか、臺にするんだから」と弟の方の少年が云つた。やがて、讓吉も手傳つて雨戸が一つ、縁側の上に置かれ、そして、その中央に不完全な網が張られた。が、ボールは思ふ通りには、バウンドはしなかつた。でも、段違に上手な讓吉は、相手の少年を交る交る、幾度も負かした。

相手が下手なので、餘り興味が乗らなかつたが、夫でも勝ち續けて居る事は、決して不快ではなかつた。その時、ふと氣が附くと、讓吉の家の門の前で自轉車が、止るやうな氣勢がした。「電報！」彼は直覺的にさう思つた。彼は電報を受け取る前に、特有な不安を以て、ピンボンのラケットを持つ手を緩めて、門の開くのを待つた。果して、夫は電報配達夫であつた。が、手に持つて居るのは、電報の紙片ではなく、赤い電話郵便の紙片であつた。彼は少し安心した。彼の友人の荒井は、何かと云ふと直ぐ電話郵便を利用する男であつた。讓吉は「荒井の奴、又何處かへ俺を誘ひだすのだな」と、思

ひながら、その赤い紙片を読み始めた。が、その文句は、讓吉の夢にも、豫期しなかつた事實を報じて居た。

「コチラノオクサマが、サクバンオナクナリニ、ナリマシタカラ、オンラセシマス」彼は、かうした文句から激動を受けながら、差出人の名を探つたが、夫は何處にも書いてなかつた。が、彼が差出人を確かめようとしたのは、彼にとつては餘りに重大な、事實を承認する前の躊躇に過ぎなかつた。彼の頭には夫が何人の死を、報じてあるかどうも確に判つて居た。彼は廣い東京に於て、オクサマと云はれる人に、たゞ一人しか知人を持つて居なかつた。夫は云ふ迄もなく、近藤夫人である。近藤夫人の死！ 夫は他の何人の死よりも、現在の讓吉に取つては、痛い打撃であつた。讓吉は赤い紙片を凝視したまゝ、一時茫然として居た。が能く見ると、發信人新橋二七八一番と、電話番号が書いてある。之は、讓吉が、今迄に幾度も呼び出した、馴染の深い番號であつた。前よりも、一層まぎ／＼とした絶望が、讓吉の心を埋めた。

讓吉の顔が、重大な色を帯び始めたのを見ると、彼の妻は、讓吉の傍へ寄りながら、

「何處から來たの！ 何うしたと云ふんです、早く云つて下さい。私心配だわ」と、焦き立てた。

「近藤の奥さんが、死んだんだ」彼は故意に平靜を装つて、妻に云つた。

「へエー」と云つたまま、妻は駭いた顔をした。が、夫は夫人の急激な死に對する駭きて、讓吉の感情とは、ピッタリ合ふものではなかつた。

「困つた！ 近藤の奥さんに死なれちや」と、讓吉は立ち上つて、押入れの方へ歩いた。彼は此場合直ぐ駆け附ける事が、第一の急務である事に気が附いた。不斷着を脱いで外行きに差替へて居ると、今迄少しも出なかつた涙が、讓吉の頬を傳つた。急激な報知の爲に、掻き擾された感情が静まりかけて、其處に恩人の死と云ふ事實が、何物にも紛ぎらされずに、彼の心に喰ひ込んで來たからである。

讓吉とピンポンをして居た、兄弟の少年は、ラケットを手にしながら、讓吉が涙をこぼして居るのを、不思議さうに見て居た。讓吉は、子供に涙を見られるのを、可なり氣恥しく思つたが、涙は何うしても止まらなかつた。

「今晚は、歸らんかも分らないぞ」讓吉は袴を穿きながら妻に云つた。彼の妻は産婆の家から、歸つてまだ間もない上に、雇ふ筈になつて居る子守が、まだ見附かつて居なかつた。他人の家の離座敷を借りて居る爲に、要領はいやうなものゝ、赤坊を抱へて一晩獨りて留守をする事は、彼女に取つては、可なりの苦痛に相違なかつた。彼女は色を蒼くして、涙ぐみさうな顔をして居た。彼女に取つては、近藤夫人の死よりも一晩留守をさゝれる事が、より大きい苦痛であつた。

たのだ。が、讓吉が近藤夫人から受けてた恩誼が、何んなに大きいかを知つて居る彼女は、讓吉がその夜歸らぬ事に就いて、何等の抗議をもしなかつた。

讓吉は、電車に乗つた。が、彼は先刻からの涙が、まだ續いて居た。三十に近い男が、電車の中で泣いて居る事は、決してよい外観を呈する譯ではなかつた。で、彼は窓から外を見るやうな風をし涙を時々拭つて居た。

が、過去に於て近藤夫人から受けた、厚意の數々を思ひ出す度に、稍々センチメンタルな涙が、後から後からと出て來た。實際夫人は彼に取つて、此數年來生活の唯一の保證者であつた。彼と夫人との關係は「與へられる」と云ふ關係に盡きて居た。彼は近藤夫人に對して、何等の恩返しもしなかつた。たゞ夫人の恩恵を、眞正面から受け、夫に對して純な感謝の情を、何時迄も懷いて居たいと、思つて居た。恩返しを試むる事は、或る意味に於て恩を受けた者の、利己的な要求に基づいて居る事が多かつた。恩を受けて居る事と、夫に對して感謝して居る事に依つて、其處に温い人情關係が作られて居る。若し恩を返してしまつたら、其處に對等の關係が生じて、以前の人情關係は、消滅してしまふのだ。また恩を返すと云ふ事は、恩人に何等かの事件、災害、不幸が起る事を前提としなければならなかつた。従つて、恩返しのお機曾を待つ事は、恩人に何等かの事變が起るのを待つのと、餘り

距つた心持ではないと、彼は思つて居た。

かうした心持で、讓吉は恩返しなども、少しも念頭に置かなかつた。支那の書物にある「大恩は謝せず」などと云ふのと、殆ど同じ心持であつた。只何時迄も、近藤夫人に對し、純な強い感謝の心を懷いて居たいと、讓吉は思つて居た。其上夫人は讓吉に取つて、過去の恩人であるばかりでなく、現在に於ても、讓吉の生活の、有力な保證者であつた。讓吉は、此半年ばかり生活が順調である爲に、殆ど物質上の助力を、夫人に仰いだ事はなかつたが、讓吉は心の裡で、自分が疾病や災害で、生活の困難を來たす時、必ず夫人が援けて呉れる事を信じて居た。夫は讓吉に取つて、實生活上の一つの強みであつた。讓吉が近藤夫人に對する感謝のもう一つの中心は、夫人が讓吉に拂つて呉れた信頼であつた。讓吉は、最初高商の秀才と云ふ振込みで、近藤家の世話になる事になつたのだが、讓吉は秀才でないばかりか、可なり怠惰者に近い方であつた。そして、毎年の學年試験には、漸く及第點を取る位であつたが、夫人は何時迄も、讓吉を秀才だと考へ、頼もしい青年だと思つて居た。讓吉は夫人の死に依つて生活の保證の一つを失つたと同時に、彼の第一の知己を失つた譯であつた。

が、讓吉は餘りに、利己的な涙ばかりを出して居た。夫人の死が、讓吉に及ぼした打撃ばかりに就いて泣いて居た。が、

夫人の死に就て、讓吉よりもつと大きい打撃を受けた人がまだ澤山あつた。夫は無論近藤氏一家の人々であつた。家庭中心であつた近藤氏の家庭では、夫人は一家の太陽であつた。夫の近藤氏が、政黨の首領として、忙しい身體である爲に、夫人は七人の子女から成る大きい家庭を、自分一人で支配せねばならなかつた。そして、夫人は母たる愛情を、七人の子供に平等に頒けて居た。讓吉はまだ十六にしかならない令嬢の雪さんや、十一になつたばかりの瑠璃子さんが、夫人の死の爲めに受くる愛情生活の破産を考へると、自分の悲しみなどは恥しいほど、小さいものだと思はずには居られなかつた。

六本木の停留場で降り、龍土町の近藤氏の家の方へ歩いて居る時には、讓吉の涙は忘れられたやうに、乾いて居た。

讓吉は、一家が涙で以つて、濡れ切つて居る所へ、自分一人涙無しに行くのは何となく氣が咎めた。夫かと云つて一旦出なくなつた涙は、意識しては何うしても出なかつた。

が、近藤家の勝手を知つた讓吉が、内支關を上つて、夫人の居間であつた八疊へ行くと、其處には思ひ掛なく夫人の代りに、主人の近藤氏が羽織袴で坐つて居た。讓吉は悔みの挨拶をしようとしたが、急に發作的に起つた嗚咽の爲に彼は、暫くは何うしても、言葉が出なかつた。讓吉は、自分の過度のセンチメンタリテイが、一種誇張の外観を、呈しはせぬか

と思ふと、可なり不快であつた。彼は出来る丈け早く自分の感情を抑制しようと思つたが、不思議に彼の嗚咽は續いた。而も、その嗚咽は不思議に、深い感情を伴つて居ない軽い發作で、而も餘りに大げさな外觀を持つて居た。彼は自分で自分を卑しんだ。見ると、近藤氏は右の手を、額に加へて、新しく涙じみ出ようとする涙を押へて居た。平生殆ど喜怒を現した事のない主人の、男性的な涙を見た時は、讓吉は愈々自分のセンチメンタリテイを卑しんだ。夫でも、彼の嗚咽は尙無用に續いてゐた。

「離れに置いてあるから、直ぐ彼方へ行つて呉れ」と、主人は落着いた聲で行つた。

彼は直ぐ奥の離れへ行つた。紫色の御召を着た令嬢の雪子さんと、瑠璃子さんが、泣顔を上げて讓吉の顔をチラリと見た。

何時もは、此の二人の令嬢を、世の中で最も幸福な女の子だと思つて居た讓吉は、今日は全く反對の考を懷かねばならなかつた。夫人の遺骸は、十疊間の中央に、裾模様の黒縮緬の紋附を逆さまに掛けられて、靜に横たはつて居つた。讓吉は、徐ろに遺骸の傍に進んだ。そして兩手を突いて、頭を下げた。口の裡で夫人から受けた高恩を謝した。涙がまた新しく頬を傳つた。夫人は急激な尿毒症に襲はれ、僅か五時間の病ひで瘞れたのであつた。

に結び附けて而もロツクフェアラを大學者にしてしまつたに相違ない。讓吉は、最も嚴肅な管の、第一夜のお通夜の晩に、かうした出鱈目を、云つて居る僧侶その者に對して、憐憫を感じると同時に、軽い反感を感じるのを、何うともする事が出来なかつた。

第二夜のお通夜の人々は、第一夜の人々よりも、お通夜に相當な感情を持ち合はして居なかつた。更に第三夜になると近藤夫人とは生前には、一度も顔を合したことのないうやうな人が、眠い眼をこすつて居た。

葬式の日にも讓吉は、多少の不満を感じずに居られなかつた。讓吉と、夫人との間には多くの僧侶が介在し、多くの縁者親戚が介在し、讓吉は單なる會葬者の一人として、遠くから夫人の遺骸に訣別の涙を手向けたに、過ぎなかつた。京都からワザ／＼、上京したと云ふ御連枝が、音頭を取つて唱へる正信喝は、讓吉の哀悼の心を、無用に焦立たせたに過ぎなかつた。

夫人が、死んでから二三週間、讓吉は、自分の心に生じた空虚を明かに感じた。夫人は彼に取つて、もう替換のない人であつた。讓吉が現在の生活を享けて居るのは、殆ど夫人の力であつた。夫人の温情を想ひ起す毎に、讓吉の心の空虚は何時迄も消えなかつた。

夫人の三十五日の法事に、近藤家を訪うた讓吉は、夫人の

夫からの三日間、讓吉はお通夜の席に連つた。彼はお通夜など、云ふ佛教の形式に、反感を懷いて居たが、然し自分の悲痛や夫人に對する愛慕を、かうした形式で現はす外、何うとも仕様がなかつた。

本當に悲しんで居る人々と、社交上の義理で悲しみを裝つて居る人々との間に交じつて、讓吉は、自分一人の特有な悲しみを、守つて居た。

殊に、夫人が佛教の信者であつた爲めに、佛教の形式主義が、飽く迄もこの悲しみの家を支配して居た。坊主が、眠むさうな聲をして、阿彌陀經などを讀み上げる度に、讓吉は却つて自分の純な悲痛の感情が、傷けられるのを覺えた。殊に、初てのお通夜の晩に、菩提寺の往職がお説教をしたが、その坊主は自分の説教に箔を附ける爲か、英語を交へたりした。

「刹那即ちモーメントの出來事……」と、云つたやうな言葉遣ひが、讓吉の僧侶に對する反感を一層強めた。殊にその坊主が、

「米國のロツクフェアラ曰く、人生は死に向つて不斷に進軍喇叭を吹いて居る」と、道は米國の大學者丈あつて、眞理を道破して居るやうです……」と云つた時には、讓吉は馬鹿馬鹿しくなつて、席を脱した。恐らくこの男は詩人ロングフェロウの言葉を聞き囁じつて居たのを、大富豪ロツクフェアラ

妹に當る早川夫人から「お祝」と書いた、一の紙包を渡された。

「富井さん、之は姉が、貴君のお子さんに擧げる積で買つて來た、産衣ださうです。丁度、發病する日の朝、松屋で買つて來たのださうです。姉が生きて居れば縫つて上げるのでしようが」と、夫人は附け加へた。

讓吉は、夫人が最後のその日迄、讓吉の事を考へて居た事を思ふと、彼は更に云ひやうのない感謝に囚はれた。

彼は押し戴くやうにして、近藤夫人の最後の贈物を受け取つた。

が、夫は決して最後の贈物ではなかつた。

夫から四五日して讓吉は、社を少し早目に引いて本郷の家へ歸つて來た。そして大通を曲つて自分の家のある路次へ這入ると直ぐ、其處にある水道栓で、彼の妻が洗ひ物をして居た。彼が不意に「おい！」と、聲を掛けると、妻は「お歸りなさい」とも云はない前から、

「貴君、到頭大島が出來たわ。上下揃つてよ」と、嬉しさに大きな聲を立てた。

「何だ！俺のがかい？一體何うしてだ」と、彼は半信半疑で訊き返した。

「近藤の奥さんのお遺物よ。先刻、お使が持つて來たのよ」と、妻は洗ひ物を早々に片づけ始めた。

「えい！ 本當かい」と、讓吉は軽いシヨツクを感じた。「本當ですとも、行つて御覽なさい！ 座敷へ擴げてあるわ」彼は妻よりも、一足先に家へ這入つた。如何にも妻が云つた通り、座敷の真中に、女物に仕立てられた、大島の羽織と着物が、擴げられて居た。裏を返して見ると、紅絹裏の色が彼の眼に、痛々しく映つた。

「いゝ柄だわね、之なら貴方だつて着られるわ。直ぐ解いて、縫はしにやりませう。夫とも、一度洗張りを、しななければいけないでせうか」と、續いて這入つて來た妻は、大島を手に取つて、つくづくと眺めて居る。

讓吉も、自分達の望んで居た、大島が出來た事に、多少の満足を感じぬ譯には行かなかつた。が、一生の恩人である、近藤夫人を失つて、大島の揃ひを得た讓吉の心は、彼の妻が想像して居る程、單純な明るいものとは、全く違つて居た。

父の模型

段々妻の産期が、近づいて來ても、啓吉は何うしても、妻の身體の裡に、生長しかゝつて居る自分の子供に對して、何等の愛情をも懐く事が出來なかつた。

夫は、妻の肉體の中に、段々擴大して行つて、妻の活動を減殺し、妻の美しさを殺ぎ、夫婦の生活を翳らして行く大きな肉腫のやうにしか思はれなかつた。その肉塊が、妻の體中に宿つてから、啓吉夫婦の生活は何れ丈、乾燥になり、何れ丈不安になつたか分らなかつた。妻は、月が重なるに従つて、段々息苦しくなつて、日々の課程である家事の仕事にさへ、喘いで居た。まして啓吉に對する色々な注意や、愛情の表示でもあるべき種々な心遣ひは、少しも見られなくなつた。その上、子供が生れるに附いて、又生れてからの後の生活に於いて、當然負擔せねばならぬ生活上の重荷を豫想する事が、益々啓吉の心を暗くした。

「一體何者だらう。自分達の生活をこんな暗く脅して居る

のは」と、啓吉は思つた。其處に何の馴染もない一個の人間が、啓吉夫婦の承諾をも得ずして、彼等の間に闖入して來るとしか思はれなかつた。啓吉はその頃ある有名な作家の作品を讀んでその中の主人公が、自分で憎惡して止まない醜い關係の結果として、相手の女の體中に宿つた子供に對して、父としての大なる愛を示して居るのを見て、むしろ奇蹟に接したやうに駭いた。夫は、現在の自分の心持と、似ても似つかぬ心持であつた。自分は正當に結婚し、而も妻に對して愛情を持ちながら、何うして妻の體中にある子供を愛し得ないのかと思つたが、啓吉は幾何思ひ返して見ても、自分の心の裡の何處にも、新しく生れんとする子供に對して、少しの愛情をも用意して居ない事實を否定する譯には行かなかつた。

丁度、ある小都市に宿泊する軍隊が、凡ての民家に、強制的に、二三人の兵士を宿泊せしむるやうに、ある皮肉な大なる力が、凡ての男女の同棲者に、強制的に配分する迷惑な割當としか、妻の妊娠を考へる事が出來なかつた。

「生れた子供が口でも利き出して、馴染が出來れば兎も角だ

が、まだ動物だか、人間だか分らないやうな赤児の時は、俺は決して可愛がつてやらないから」と、啓吉は子供の出産に就いて、妻と事務的な話をして、少しイラ／＼した時などは、いつもこんな事を云つた。夫は誇張でもなければ、皮肉でもなかつたが、こんな言葉を訊いた時には、妻の感情は、甚しく傷ついて居た。啓吉の妻も、最初は心の底から妊娠を嫌つて居た。

「結婚してから、まだ一年も経たないのに、子供が出来たら、國へ歸つても、お母さんや姉さんに逢ふのが恥しい」と、口癖に云つて居た。が、夫は妊娠に對する處女としての羞恥や嫌悪が、十分彼女の心から除かれて居ない爲であつた。

が、彼女が偶然の僥倖として、期待して居た流産も起らずに、七月となり八月となるに従つて、彼女の心には母としての愛情が勃々として動き始めて居た。もう妊娠に對して、何等の羞恥も、嫌悪をも持つて居なかつた。母としての愛の爲に、出産に伴ふ凡ての恐怖や不安に打勝たうと、努めて居るらしかつた。

「子供が、出来れば可愛がつて呉れる」と、妻はよく、心配さうに啓吉に訊いた。が、啓吉は心から、夫に「ウン」と答へる事は何うしても出来なかつた。無論、妻が非常に情氣で居る時などには「心配するな、可愛がつてやるから」と、云つた。が、啓吉の心の裡では、その言葉に少しも本當の感情

が伴つて行かなかつた。その上、妻の注意が、自分に集注される事から轉じて、生れて来る子供に向はうとするのを知ると、啓吉は尙更妻の體中に、蠢動して居る未知の肉塊を、愛する氣にはなれなかつた。夫は、啓吉に取つては一個の他人に過ぎなかつた。何う考へ直して見ても、自分達二人の間に、何の挨拶もせず、闖入して来る他人に過ぎなかつた。

二

啓吉の妻は、最初から生れて来る子供の容貌に就いて、可なり大きい憂慮を懷いて居た。何んなに考へても、啓吉と妻との間には美しい子供が、生れて來さうにもなかつた。

夫でも、妻の方は、口が稍人並より大きいと云ふ事の外には、さう大した缺陷も持つて居なかつたが、啓吉は自分の容貌に就いては、致命的に自信を持つて居なかつた。いつか、啓吉はトルストイの自叙傳か何かを讀んで居た時に、トルストイのお母さんが、少年のトルストイに、

「レオや、お前は大人しくして、人から可愛がられるやうにしなければなりませんよ。お前の顔の爲に、お前を可愛がる人はありませんから」と、教訓する言葉を讀んだ時、啓吉は此の言葉を聞いた時の少年トルストイの心の淋しさが、自分の心にも、しみ／＼と蘇つて來るやうに思つた。

容貌の醜いと云ふ事は、女性に取つて致命的である如く、男性に取つても決して快いものではなかつた。容貌の醜い爲に、異性から一度も愛されずに、生涯に一度も完全に戀愛を味はずに、死んで行く淋しさを、啓吉は今迄幾度考へたか分らなかつた。彼はその淋しさを消す爲に、結婚と云ふ慣習の蔭に隠れて、漸く一人の異性の愛を得た自分の腑甲斐なさを、時々考へずには居られなかつた。

「女の兒であつたら、ほんとに何うしよう！」と、妻は臨月が近づくと、よく啓吉にかう話しかけた。啓吉は、さう云はれると苦笑する外はなかつた。顔が自分に似て醜い一人の女性が、世の中に存在する事は、確に一個の悲劇に相違なかつた。而も、さうした女を自分の子として、生長を見守るのは、夫にも劣らぬ一個の悲劇に相違なかつた。

「女の兒だつてかまふものか、女の兒の方が、却つていゝ。男の兒なんか、折角育て上げて、兩親を見向きもしなくなるかも知れない。女の兒だつたらそんな心配はない」と、啓吉は云つた。實際啓吉自身も兩親に對しては、叛逆兒に近かつたし、又その事を少しも後悔はしてゐないので彼は自分の子供がさうした行動に出るのを、是認しない譯には行かなかつた。従つて、叛逆し易い男の兒よりも、彼は優しい女の兒を、欲した。無論、その場合、妻と同じやうに、その兒の容貌に就いて、深い憂慮を懷かすには居られなかつたが。

「男の兒であつたら、顔なんか何うだつていゝけれど、女の兒であつたら、何うでしよう。父さんに似て眼が小さくて鼻が低い上に、母ちゃんに似て、口が大きかつたら、何うでしよう！」と、臨月に這入つた妻は、男女の兩方に間に合ふやうに赤い一つの身の着物を縫ひながら、口癖のやうに、自分と夫との顔の棚下しをやつて居た。餘り、しつこいので遂には、

三

「何んな顔だつていゝぢやないか、不具でさへなければ」と、啓吉は荒々しく怒鳴り附けた。が、妻の言葉によつて、啓吉の心の裡に惹き起された曇は、その當座は中々消えなかつた。

が、生れる兒の顔の醜いなどは、問題にならぬ程緊張した出産の日が來た。妻は、ホンの微かな陣痛が始まると、もう直ぐかゝり附けの産婆の家へ駈け附けて居た。故郷が遠いので、かうした場合の頼になる親戚は、一人も居なかつた。二十になつたばかりの妻は、「妊産婦の心得」と云ふ、露店を買つて來た本と、お産に就いては何の知識もない夫を、唯一の頼として、生れて初めての「生みの苦しみ」に向つて進まねばならなかつた。夫が、産室に居るのがいゝか、悪いかなどは殆ど問題にはならなかつた。妻は、何うしても啓吉を産褥

から放さなかつた。妻に取つて啓吉は、かけ替のない唯一の附添人であつた。

大きな陣痛の苦しみが其處にあつた。妻は、啓吉の手を握りしめながら、斷末魔の人間のやうに喘ぎ續けた。啓吉は、母の胎内を喰ひ破つて生れ出たと云ふ傳説の中の鬼子の事を、考へずには居られなかつた。新しき生命は、より舊き生命を唐げる事に依つて、生れ出るものとしか思はれなかつた。たゞ、二つの生命の争闘の軋りを緩和する爲に、親子の愛情と云つたやうな、機械油のやうなものが、存在すること、存在するが、妻の苦痛を見て居ると、啓吉の心は自分の子の出生を祝福する心には、何うしてもなれなかつた。

先刻から陣痛の襲つて来る間隔の段々迫つて来て居た妻は、突然烈しい苦痛の叫びを揚げながら、産床の中から、身をのけ反るやうに、押し出したかと思ふ刹那、妻の苦痛の呻きよりも、もつと強い泣き聲が、閉め切つた一室を壓倒して居た。啓吉は到頭何物かの威力に壓倒されたやうに、その威力に反感を懐きながら、而もその威力の産物を、讚美せずには居られないやうな心持になつた。

啓吉は、ふと産婆が抱き上げようとする自分の子の肉體を見た。夫は、啓吉の妻が恐れて居たやうに、女の兒に相違なかつた。

啓吉は、女の見だと知ると、直ぐ膝を、産婆の方に進ませ

具の中で、一番口が小さくて綺麗だわ。父ちゃんに似て目が小さくて、鼻筋が通つて居ないけれど、口が一番綺麗だわ」と云つた。啓吉も、妻の發見に同意せずには居られなかつた。最初泣き喚めいて居た時は、如何にも口が大きく見えたけれど、泣き止んで居る時は、さう大きい口でもなかつた。やつぱり妻の云ふ通り顔の道具立は妻に似ずして、自分に似て居る所が多かつた。

生れてから、最初の一二週間は、子供の顔全體が赤く脹らんで居て、まだ美醜の判別がハッキリとは判らなかつた。啓吉は子供が小さい鼻で、息をスウ／＼云はせながら、寢入つて居るのを見ると、

「お前が、心配して居たやうに、ちつとも醜い事はないぢやないか。おれ達には勿體ない位ぢやないか」と、妻に云つた。妻も、時々子供を抱き上げながら、

「父ちゃんよりも、よつぽど綺麗だね、美奈子」と、云つた。が、啓吉夫婦は、口ではさう云つたものの、子供が將來どんな顔になるかに就いては、生れぬ前と同様の心配を持つて居た。殊に、三四週間も経つてからは、子供の顔が段々生來の醜さを、表はして来るやうに思はれてならなかつた。子供の顔が妻よりも、段々啓吉に似て居る事が、明になり出した。啓吉はせめて目と鼻丈は、妻に似るやうにと心こころ私ひそかに思つて居たのだが、鼻の短い所や、眼と眼との間隔の左右に開

て、泣き喚めいて居る子供の顔を見た。夫は、可なり恐ろしい見物であつた。夫は生れた自分の子の宿命の一部を豫見するのと、餘り變つた事ではないやうに思つた。子供は、口を一杯に開けて泣き叫んで居る。何と云ふ大きな口だらうと思つた。が、鼻は思つたよりも、高かつた。顔全體としても豫想した程は、醜くはないやうであつた。啓吉は、烈しい疲労から恢復しようとして、微かに息を整へて居る妻の耳に、口を當て、

「おい！ 割合綺麗だぞ。が、口は大きいぞ」と云つた。妻は、一寸目を開けて微笑しながら、「勘忍して下さいよ」と、云つた。微笑したのは、割合綺麗だと云ふ言葉に、安心したのだらう。勘忍して呉れと云つたのは、恐らく口の大きいのが、自分に似た事を、謝した積であつたのだらう。啓吉は、子供の醜い點が、自分に似て居る爲でなく、妻に似て居る點であることを知ると、自分の責任の一部が、少しは輕くなつたやうに覺えた。

四

が、二三日経つて子供が段々泣かなくなり、口を閉ぢて居る時が多くなる、と啓吉の妻は、何かの大發見をでもしたやうに、

「まあ、口が大きいつて、ちつとも大きくはないわ。顔の道

き過ぎて居る所や、額の廣い所などは、啓吉にソツクリ似てしまつて居た。

妻は、時々子供の顔を、つく／＼見ながら、

「まあ、父ちゃんに、酷く似て居る事、まるで父ちゃんの模様の様だわ」と云つた。妻の云つた事はある點迄は本當であつた。子供は、母の顔からは殆ど何物をも承け繼がずに、凡てを父の顔から承けて居た。夫は、妻の云ふ通り啓吉の模様に相違なかつた。

啓吉はその容貌の爲に、生涯の運命の大半を支配される女性には、生れて居なかつたにも拘はらず、自分の容貌や風采の引立たない事の爲にどれ丈、不快な自覺や感情を、持たされたか分らなかつた。生れながら、感受性が、人並以上に、發達して居た爲に、異性に對しては、常に異常な注意と愛慕とを感じながらその青年時代を一度も異性から愛されずに過してしまつた啓吉は、自分の容貌に對して、消しがたい不快な自覺を持たされて居た。然るに、今自分の容貌が、模様に取られて、もう一つ此世に存在し始めたと云ふ事は、啓吉に取つては可なり堪らない事に違ひなかつた。

いくらか、茶目な所のある啓吉の妻は、よく子供を啓吉に突きつけながら、

「さあ、父ちゃんの所へいらつしやい。實物と模型とがどの位違つて居るか、比べて上げるから」などと、冗談を云つ

た。子供の容貌の醜くさを、ある程度迄諦めてしまつた妻は、子供の醜くさの責任をなるべく啓吉に歸せしめようとして、二口目には、

「父ちゃんにソツクリ」と云つた。啓吉は、さう云はれる度に苦笑するより外はなかつた。

生れる以前は、子供に對して、何等の愛をも感じなかつた啓吉も、さて夫が生れて、而もその顔が自分に似て居るとなると、不思議な責任感を感じずには居られなかつた。醜く、生れ附かした以上、その醜くさを原因せしめた親の責任として、自分の愛情で、その醜くさから来る不幸を成るべく、緩和してやらなければならぬと啓吉は考へ始めた。

その頃から、子供を抱いて湯屋へ連れて行つたりし始めた妻は、よく歸つて來てから、

「やつぱり、誰が見ても美奈子は綺麗ぢやないんだわ。皆よく肥つて居る」とか『大きい赤ちやん』だなど、云つて呉れても『可愛い赤ちやん』と云つて呉れる人がないわ。餘り空々しいので、可愛いとは云はれないんだわ」と、云つた。

「そんな事があるもんか、昨日俺が抱いて、門に立つて居ると、魚屋が『可愛いお嬢さんですわ』と云つたよ」と、啓吉は反駁した。が、妻は黙つては居なかつた。

「そりや、貴君！ 商賣だからお世辭に云ふんですわ。八百屋なんか、今朝も美奈子を、男の子だと間違へて『坊ちや

て何等の愛情をも持ち得ないだらうと、思つて居た啓吉も、その小さい肉塊を、自分の双手に抱きあげて、散歩などをして居ると、いつの間にか父らしい感情が、自分の胸一杯に浸み渡つて居るのを感じた。散歩にさへ連れ出してやると、子供はちつとも、無理を云はないで、その啓吉に似て細い目を一杯に刮いて、一步一步に展開して行く周囲の物象を、驚異の眼で、見詰めて居るやうに思はれた。物こそまだ云はなかつたが、さうして周囲の世界を觀照することに依つて、一日純粹な經驗の世界を擴大して行くらしい子供が、何となく尊く思はれた。三四町も歩いて行く裡には、段々眠氣を萌して、目を開きながら、眸の力が失せて行つて、寢入つてしまふ迄の経過が啓吉にはいぢらしく思はれた。さうして、啓吉の手の裡に、快く寢入つてしまつた、顔を見て居ると、その顔の醜くさなどは、もう何等の問題でもなくなつた。顔が醜く、生れて居れば居る程、愛してやらねばならぬと思はずには居られなかつた。

その頃であつた。啓吉はある日本郷に居る友人のMを訪問した。Mが折悪しく不在であつたので歸らうとして、三丁目の停留場に立つて居ると、矢張り本郷に住んで居るもう一人の友人のTに出會つた。二言三言話して居ると、無遠慮なTは、

「君は、はや子供が出來たさうぢやないか。皆がさう云つて

ん』なんて云つて居るのだから、後で、女の兒だと分つて、

向うでテレて居たわ。が、全く無理もない、誰が見ても男の兒に見えるのだから」と、容貌に就いては、啓吉よりも女性丈に鑑賞眼の發達して居る妻は、子供の容貌に就いても、露骨に過ぎる位、本當の事を云はねば止まなかつた。啓吉は、子供の顔の棚下しが、妻に依つて爲される時は、何だか自分が非難されて居るやうで、不快でもあれば、淋びしくもあつた。

子供が生れてから、二月位してからの事であつた。啓吉の友人のLが、つい一週間ばかり前に結婚したばかりの新夫人のH子さんを連れて挨拶旁々、啓吉を訪問して來た。新夫人のH子さんは、啓吉の妻と同じく口の大きい人であつた。H子さんは、啓吉の子供を抱き上げると、何よりも先に「まあ！口が小さいわ」と、感嘆した。その言葉は可なり啓吉夫婦を欣ばせた。啓吉は、L夫婦が歸つた後に、

「H子さんも、口が大きいから、やつぱり一番口が氣になるのだね。美奈子の口の小さいのを賞めて居たぢやないか」と、妻に云つた。

「夫御覽なさい！ 美奈子は一番口が綺麗なのよ。愈々私に似なかつた事が分るわ。父ちゃんの模型に違ひないわ」と、妻は斷言した。

子供は、段々大きくなつて居た。生れぬ先は、子供に對し

居たよ。餘り早いので、出來た子供が君に似て居なければ悲觀するだらうし、それかと云つて君に似て居れば尙更悲觀するだらうと云ふ評判だよ」と、云つた。啓吉は、常から無遠慮な動作や言葉を臆面もなく、したり云つたりする事を、一種の得意のやうに心得て居るTに對して、不快を懷いて居たが、その時の言葉は、啓吉の生活の内部に深く觸れて居る丈に、啓吉は夫に依つて、可なり傷つけられた。

啓吉は、子供が自分に似て居ない爲に悲觀するやうな何等の原因をも持つて居なかつたから、Tの言葉の前半の不當な推測を可なり憎んだと同時に、Tの言葉の後半をも、可なり不快に思はずには居られなかつた。子供が俺に似て居れば似て居る程愛してやるんだ。悲觀なんかするものかと、Tに云つてやりたかつた。が、さうは負惜しみを云つて居るもの、子供の容貌に對する啓吉の悲觀は、子の成長に連れて、決して薄らぎはしなかつた。

子供を、おしよぼにしてからも、啓吉の妻はよく子供の髪を梳いてゐる時などに、

「生（は）ま（ま）まで父ちゃんに似て居る。まるで、男の生際だわ。生れた時はこんなでもなかつたのに、益々父ちゃんに似て來ると、それでも、もう餘り子供の容貌に就て、悲觀はして居ないらしく、冗談半分に云ふ事が多かつた。

三月となり四月となり、順當にメキ／＼と大きくなつて、

丈夫に成長する見込が立つて来ると、啓吉は愈々自分の子の将来を考へずには居られなくなつた。つく／＼見て居ると、さう迄醜い見だとは思はれなかつたが、決して美しい顔ではなかつた。親の啓吉が、妻以外に異性からの愛を経験しなかつたやうに、妻の言葉に従へば啓吉の模範たる美奈子も、その顔の爲には、異性からの愛を到底享くるべくも思はれなかつた。異性からの愛を享くる事の出来ないと思ふことは、男性に取つては幾何かの淋しさを辛抱すれば、いゝ事であつたが、女性に取つては、夫は致命傷な缺陷に近かつた。

夫でも、まだ十か十一迄は、容貌に對する明確な自覺なしに成長するのだから、まづ幸福であり得るとして、十三四から十五六の妙齡の時代に、少女が段々自分の醜くさを意識し始めると云ふことは、女の生涯に於ては、可なり重大な悲劇に違ひないと思つた。萬金を投じた装身具が、ある女性の美醜に、少しも影響しないことを思ふと女の美しさや醜くさは、後天的にはどうとも仕方のない絶對のものに相違なかつた。さう考へると、啓吉はもう訂正や改良の餘地のない子供の容貌に就いて、悲觀的な諦めに陥るより外はなかつた。

「お美奈ちゃんは、大きくなつたら、大學を出て女理學士になるんだよ。學問をさして、一人でも喰べられるやうにして

置いてやらない」と、妻はこんな事をよく云つた。

啓吉は夫を聞くのが、淋しかつた。彼は、職業婦人の階級を常に嫌惡して居た。そして、家庭に没頭してつゝ、まじく暮して行く女が好きであつた。彼は、教鞭を取つて居るオールドミスなどを見ると、寧ろいたましいとさへ思つた。女の天性に背いて、その女性としての優しさや美しさを磨けて居る彼等を、憫まずには居られなかつた。従つて、自分の娘をさうした生活に入れるべく準備させる事などは、思ひも寄らぬ事だつた。

「女教師などをさせてたまるものか。女學校を出たら、直ぐ結婚させるのだ」と、啓吉は妻に反對したが、夫は附景氣に近かつた。

五

女中を雇つてから、家内も増したので、啓吉は、今迄住んで居た牛込の柳町から、小石川の高臺の町へ越して行つた。

啓吉の引越した家は、新築の二階建が四軒並んだ東の端であつた。そして啓吉の家の東側は、炭層が急に粗惡になつたやうに平家建の汚い家が、二軒續いて居た。

引越した翌日に啓吉の妻は、一大發見でもしたやうに、「まあ驚いた、隣には小さい子供が五人もウヨ／＼して居る。一番上の子供が十位にしかならないのに」と、多産を蛇

よりも怖れて居る啓吉の妻は、子供の澤山あることを、罪惡か何かのやうに啓吉に話した。

如何にも、妻の云つた通り、朝に晩に隣の子供はゾロリと列を作りながら、出動して、啓吉の家の向ひの塀に五人並んで、背を寄せながら、物珍らしげに新しく越して來た啓吉の家の中を、のぞき込んで居た。

一番上が、女の兒で、夫から三人續いて男で、一番下が三つになる女の兒であつた。一番上の女の兒が、洗ひざらした染緋を着て居る外は、皆ポロ／＼になつた手拭地の着物を着て居た。夫もどの着物がどの子供に屬して居ると定まつては居ないらしく、日に依つて一枚の着物が兄から弟へ、弟から兄へ、移つて行つたりして居た。一番下の女の兒は、五人の中で一番いたましく見えた。左の足が、餘程短いと見え、歩くのに骨が折れるらしかつた。そして、姉や兄の後からピヨコピヨコと、駈けつて行く姿が滑稽にも見えれば、いたましくも見えた。そして、榮養不良の爲に、腹が異常に膨れて、夫が又十分身體に合はない一つ身の着物からハミ出して居た。そして、その兒は兄弟からデコちゃんと呼ばれて居た。それは、心持ち額がおでこであつたからで、デコちゃんと呼ばれるとウンと云つて返事をして居た。デコちゃんの母親迄がデコちゃんと呼んで居た。啓吉夫婦も何時の間にか、その子をデコちゃんと呼ぶやうになつて居た。

啓吉夫婦は、日が経つに連れ、此の兒に一番同情した。妻は、その兒に就いて、色々な事を調べて啓吉に報告した。

「あのデコちゃんも鳥目で、耳が少し遠いのですつて、それにあんなひどい跛足と來て居るのだから、今の内に死んだ方が却つていゝ位だわ、でも、母親は、あの兒が一番可愛いと見え、あの兒を一番大事にするのよ。上の子供は、そらビシビシ叩いて居るけれど、あの兒は、餘り叩かないの。夫にまたあの子が、親思ひで煩さがられながら『お母さん！お母さん！』と、云つて付き纏つて居るの」と、妻は一寸言葉を切つたが、直ぐ言葉を續けて、でもあなた、あの兒でも内のお美奈ちゃんよりは、器量がいゝのよ。鼻だつて高いし、眼だつて大きいでせう」と、云つた。

妻から、露骨に比較されて見ると、啓吉も、嫌々ながら、その事を承認せずには居られなかつたが、隣のその子供と、自分の子供とを比較して、孰らがより幸福に生れ附いて居るか、問はれたら、啓吉は、夫は無論自分の子供だと答へずには居られなかつた。何となれば、俺は、自分の子供を幸福にしてやらうと云ふ意志と力を持つて居るからと、啓吉は思つた。

美奈子は、父や母がその將來に就いて、心配して居る事などは、丸切り没交渉に、グ／＼大きくなつて行つた。十分に發達した四肢には、圓い輪が幾つも／＼這入つて居た。

そして、父や母があやしてやると、細い目を尙更細くして笑った。
風邪一つ引かなかつた。お腹を一度だつて、悪くした事はなかつた。

「ほんとに丈夫な見だわ。丈夫な所も、父ちゃんに似て居ると見える」と、妻はあきれたやうに太り切つた子供を抱き上げながら云つた。

秋の初になつて、今迄居た女中が國へ歸つて、新しい女中が来た。妻は、啓吉が外出先から、歸つて来ると、

「新しい女中が来てよ。でも眼附が何だか恐いのよ。美人ぢやないわ。用心しなくつちや」などと云つて居た。

二三日して啓吉が、會社から歸つて来ると、妻は何かの大事件が起つたやうに、

「まあ大變よ、女中がお美奈ちやんに、お菓子を食べさせたのよ。よだれかけにお菓子の餡粉が二ヶ所も附いて居たのよ。それなのに、白ばくれて喰べさせないと云つて居るのよ」と、云つた。

今迄、お乳の外に何にも喰べさせた事がなかつたので、啓吉夫婦は可なり駭いて、女中を烈しく叱責した。が、女中は

何處迄も、白ばくれて、事實を白状しなかつた。

が、美奈子の腹の中は、正直であつた。その夜から、急激な下痢が始まつて、ムシ／＼苦し／＼泣き續けた。

今迄少しも躓かずに、大きくなつて来て居た丈に、かうして急激な病氣に襲はれると、啓吉の妻は蒼くなつて心配した。

常には、人中に出るのが恥しくつて、友達が訪問して来ても、滅多に挨拶に出たことのない妻も、自分の子供の病氣だとなると、耻も外聞も介意つては居られないらしく、子供にあんこを喰べさせて、發病の原因を作つた女中に、子供を負はせながら、小兒科の病院へ走つて行つた。

幸に、子供は夫程憂慮すべき程の重態と云ふのではなかつた。が、翌朝が来て、

「お美奈ちやん、お腹が小さくなるものか」

「だつて、お医者に連れて行けば、五十銭なり一圓なり入るでせう。五十銭入れば、家内が一日丈喰はずに居なければならぬのですもの」と、妻は醫者に連れて行かないことを、如何にも當然のやうに辯護した。啓吉は、助かるべき命が、不當に害はれつゝあるやうな氣がして、可なり不快であつた。彼は、

「五十銭や一圓なら、俺が出してやつてもいい」と、云つた。すると、妻は言下に反對し「そんな事を云はうものなら、また何時かのやうに怒鳴り込んで来ますよ。貧乏だと思

壯健で、ピン／＼して居る時には夫程大切だとは思はなかつた子供の存在が、さて一旦子供が發病してからは、まことに尊いかけ替のない物のやうに思はれ始めた。熱の爲に、少し上氣してうつら／＼と假睡の境を彷徨して居る子供の顔を見ると、今迄心の一角に押し詰められて居た父たる感情が、猛然として心の裡一杯に擴がつて行くやうに思つた。

今迄、子供には殆どかまつた事のない啓吉も、子供が發病

してから以來は、妻の手代りに幾度も子供を抱きかゝへた。子供が病氣になつてからは、もう顔などは、どんなに醜くてもいゝ、丈夫で大きくさへなつて呉れれば、之程いゝ事はな

いと思ひ始めた。

「でも美奈子が病氣になつてからは、父ちゃんが美奈子を可愛がつて呉れる」と、妻は欣びながら、必死になつて子供を介抱して居た。夫でも、さう悪くはならなかつたものゝ、

抄をしく恢復もしなかつた。如何にも力なさうに泣く子供の泣き聲が、啓吉夫婦の心を痛めて居た。

丁度、發病して三日目であつた。啓吉が會社から歸つて来て、

「何うだつた！ 美奈子は？」と、訊くと、妻は待ちかまへて居たやうに、

「お美奈ちやんは、もうよつぽどいゝのよ。もうあんまりうんちもしなくなつてよ」と、云ふ返事をしてしまふと、直ぐ又言葉を次いで、

「あなた！ お隣のデコちやんも、病氣なんですつて、昨日お朔日赤の御飯を炊いたのをお腹一杯に喰べたのですつて。

また喰べる筈なのよ、此頃はお米が高いので、常には十分喰べさせないらしいのよ。だから赤の御飯を炊くと皆が、おい

しい／＼と云つて思ひ切り喰べたのですつて。すると、デコちやんのお腹がいつもの二倍大きくなつて、苦しい苦しいと

腕き始めたのよ。暫くすると熱が出てうん／＼呻り出したのよ。直ぐお医者へ連れて行けばいゝものを、隣のおかみさんは、頭を氷で冷して、お腹を揉んでやつたのですつて。そんな事で、喰べ物が消化される筈がないぢやありませんか」と、妻は隣のデコちやんの病氣を、面白い話題か何かのやうに、喋べつた。啓吉も、常から太鼓のやうなお腹をして居るデコちやんが、赤い御飯を腹一杯喰べて、お腹をいつもの二倍位脹らしたと云ふことが、一寸滑稽な事として、微笑せずには居られなかつた。が、さうした喰過ぎに對する母親の無智な手當に對して、眉を擡めずには居られなかつた。

「馬鹿な。早く醫者に連れて行つてやればいゝのに。夫とも、タカチアスターでも、飲してやればいゝのに。頭をいくら冷したつて、お腹が小さくなるものか」

「だつて、お医者に連れて行けば、五十銭なり一圓なり入るでせう。五十銭入れば、家内が一日丈喰はずに居なければならぬのですもの」と、妻は醫者に連れて行かないことを、如何にも當然のやうに辯護した。啓吉は、助かるべき命が、不当に害はれつゝあるやうな氣がして、可なり不快であつた。彼は、

「五十銭や一圓なら、俺が出してやつてもいい」と、云つた。すると、妻は言下に反對し「そんな事を云はうものなら、また何時かのやうに怒鳴り込んで来ますよ。貧乏だと思

た。すると、妻は言下に反對し「そんな事を云はうものなら、また何時かのやうに怒鳴り込んで来ますよ。貧乏だと思

つて、輕蔑するなと云つて」と、云つて、啓吉の妻は、デコちやんの母親を可なり怖れて居た。夫は、かつて啓吉の家の女中に啓吉の妻が「隣へ子供を連れて行くと、内職の邪魔をするから、なるべく連れて行くな」と、云つたのを、向うで聞き付けて怒鳴り込んで来た事がある爲であつた。

が、啓吉夫婦も、さう隣りのデコちやんの事などは、かまつて居られなかつた。いつの間にか、夫婦の凡ての注意は、美奈子の上に注がれて居た。

妻は、夜も落着いては、寝なかつた。子供がむづかれば、どんなに深夜でも、起き上つておんぶをしたりだつこをして、機嫌を取つてやらねばならなかつた。

五日目邊から、美奈子は段々恢復し始めた。お腹が漸く恢復し始めた見え、下痢が止まつて来た。今迄、ムヅ／＼と機嫌が悪かつたのが、段々直つて来た。あやしてやると、微かではあつたが、笑顔を見せるやうになつた。

が、壁一重隣では、デコちやんが、段々重態に陥りかけて居た。ある日、啓吉が歸つて来ると、妻はいきなり、

「隣のデコちやんが、死にさうなのよ。もう、今日明日が危いのだつて」と云つた。啓吉は、直にデコちやんが可愛さうに思はれた。手を盡せば、容易に恢復し得る筈のものを人爲的な窮乏と怠慢との爲に、縮まされて行くデコちやんの命が、悲しまれずには居られなかつた。

「何か品物を買つたらいいでせう」と、云ふ妻の忠言を利かずに、五十銭紙に包んで隣の家の破れたすだれを持ち上げて、中へ這入つた。じめ／＼した疊の敷かれた四疊半と六疊とが、續いて居て、奥の六疊の眞中に、デコちやんは、兩手をダラリと兩方へ擴げて寝て居た。顔の色を見ると、もう生きて居るとは、思れぬほど蒼ざめて居た。

「まあ、旦那さんですか、御親切に。いつも、色々な物を戴くので、お隣の旦那が、お歸りだと云ふと、之が夕方は鳥眼で、目が見えませんが、表へ走り出ようと致しますのですよ。昨日なども、それお隣の旦那がお通りだよと云ふと、もう目が明かないのに『ウン／＼』と、領きましたよ」と、デコちやんの母親は、何時もガミ／＼子供達を叱り付ける時とは、全く打つて變つたやうに、しんみりと啓吉に話しかけた。啓吉は、此女の話の本當の事を話して居るやうにも、又お世辭の爲に、そんな事を作り出して話して居るやうにも、思はれたが、夫でも死なうとするデコちやんに對して、可なり深い憐憫を呼び起されずには居なかつた。啓吉は、今でも完全な手當さへ盡せば命を取り止める事が出来ないものもあるまいと思はれた。

「一體、お薬はどんな物を入れて居るのですか」と訊いた。すると、母親は、起き上つて棚の上から、小さい藥壘を取り下して、啓吉に見せた。

「お醫者が之をやれと云ふものですから、ズーツと續けてやつて居りますのです」と、云つた。啓吉は、ほのぐらい電燈の光で透して見ると、その壘にはグリセリンと云ふレツテルが貼つてあつた。啓吉は、夫を見ると、茫然と呆れる外はなかつた。グリセリンと云へば下痢に違ひない。喰べ過ぎて居る當座こそ、グリセリンを飲まして、便通を良くするのは適當の處置に違ひないが、その下痢を飲ましてつゞけて幾度も下痢をした後に、衰弱して死ぬまでグリセリンを飲ましてつゞける母親の無知を、啓吉は怒つてよいのか、悲しんでよいのか、判らなかつた。

「そんな馬鹿な事があるもんですか、早く醫者へ連れて行つて、手當をしておあげなさい。五圓や十圓の費用なら、私が出して上げますから」と、母親の無智に憤慨した啓吉は、かう口に迄出さうとした。が、よく考へて見ると、自分が、此の兒の運命に夫程迄干渉してよいものか、悪いものかさへ判らなかつた。デコちやんに取つて、生き延びることが幸福か、此のまゝ死んでしまふ方が幸福かさへ判らなかつた。ひどい跛足の上に、鳥眼で聾に近い女の兒の生涯が、夫程幸福だとはどうしても思はれなかつた。又たとへ、無智にしろ兩親とも揃つて居る以上、その無智と窮乏との爲に死んで行くことは此の兒の當然の運命のやうにも思はれた。その上、啓吉自身も病床に在る子供を持つて居る以上、五圓でも十圓でも、

可なり大切な金であつた。

さう思ひ返すと、啓吉は體よく挨拶を済して歸らうとした。すると、母親はデコちやんの枕元に寄りながら、

「お隣の旦那だよ」と、云つた。無論、瀕死の子供に、そんな言葉が通ずる筈はなかつたが、夫でも身體を一寸揺がせて、眼をギロリとさせた。その眼の中は死んだ魚のやうに白けて居た。

家へ歸つて来ると、

「デコちやんは、何う」と、妻が訊いた。

「もう死んだと同様だ。あれぢあ堪らない。衰弱し切つた子供にまだ下痢をかけて居るのだもの」

「へえ」と、妻も遠に駭いて居たが、直ぐでも、そんな亂暴な育て方をしても、上の兄さん姉さんのやうに生きて行く兒は、生きて行くんだわ。やつぱり、デコちやんは負けたのよ。一人無くなれば、後の四人が喰べる御飯だつて夫丈配分まへが多くなるのよ。さう／＼、デコちやんの直ぐの兄さんが、はやデコちやんの着物を着て居るのよ。まだ死なない前から」と、妻はデコちやんの死んで行くのを、さう氣にもかけないやうであつた。啓吉にも、夫程悲しむべき死のやうにも思はれなくなつた。

「まあ、あの身體ぢや、死んだ方がいゝかも知れない。あのお母さんも、五人の兒が一人減つて、内心でやれ／＼と思つ

て居るかも知れないぞ」と、啓吉は云つた。
「ほんとに、あんな不具ぢや、生きて居ても苦勞するばかりですからね。あの子が苦勞するばかりでなく、兩親迄も苦勞するのですからね」と、啓吉夫婦は、デコちゃんを、いかにも當然な、結果的には却つていゝ事のやうに決めてしまつた。そして、妻は自分の子を抱き上げながら、

「お美奈ちゃんは、死んだら駄目よ、お前はデコちゃんとは違ふのだから、早く癒つてお呉れよ。父ちゃんと母ちゃんとが心配して居るのだから」と、云ひながら頬摺りをした。啓吉も、妻の此の言葉を、ビツタリと自分の感情で追つて行つた。どんなに顔が醜くても、その爲に將來どんなに苦勞しようとも、自分の兒には何時迄も、生きて居て貰ひたかつた。親の愛で能ふかぎり、その不幸を緩和してやる、また夫丈の力と覺悟とを持つて居ると啓吉は思つた。そして、夫は又醜く生れつかした自分の爲さねばならぬ責任であると思つた。

× × × × ×

二三日すると、隣のデコちゃんやんは白骨になつて、隣の家の戸棚の一隅に置かれて居た。表を通ると、すだれごしにその前に供へられて居る蠟燭が、揺れるのが見えた。

美奈子の病氣は、もうスツカリ良くなつて居た。そして、病氣をしない前よりも、元氣がよくなつたやうに、腹這ひに

なつて居るお腹をグツと持ち上げて、まだ前へは進めなかつたが、手の力で、後退りが出来るやうになつて居た。あやしてやると、顔の相好を崩して笑つた。どんなに醜くてもよい。一人の人間がグン／＼成長して行く事はその親に取つて、美しく且つ尊い事に相違なかつた。

盗人を飼ふ

妻が出産したと云ふ報知を出すと、あたふたと故郷から上京した妻の母が、産れた子供の面倒を一人て引受けて呉れた。啓吉の目には、奇蹟とも思はれる程の辛抱強さで、子供の事を何くれとなく世話して呉れた。

夜半などは、子供が泣きしきつて、まだ年の若い啓吉の妻の手では、何うともし切れなくなると、次の間に寝て居る母はいつも、

「さあ！ 連れてお出でませ」と、云つた。すると、妻は重荷でも下したやうにホツとして、赤兒を母の床の中に置きに行つた。

洞びた乳房しか持つて居ない年寄の母は、夫にも拘はらず啓吉の妻よりも、巧妙に、泣きしきる赤兒を、何時となく眠の裡に誘ひ入れる事に成功した。

「お母さんは、何うしてあゝ子供を扱ふ事が、上手なのだらう。お乳もないのに」と、啓吉が不審がると、妻は、
「そら、貴方のやうに氣短かぢやないのだからだわ。根氣よく機嫌を取つてやるからだわ」と、云つた。

武士の娘に生れて節制的な教育を受けた妻の母は、もう六十に近いにも拘はらず、克己的で凡てに辛抱強かつた。赤兒を脊負して一時間でも、二時間でも啓吉の家の格子先に立ち盡くして居る事さへあつた。啓吉の妻は、母が來てから極度に依頼心を發揮して、子供に就ての凡ての仕事に母の助力を仰いで居た。

勞力の上で母の存在は、啓吉にも妻にも、子供にも、非常な恩恵であつたばかりでなく、小金を持つて居る彼女は、子供の着物や身の廻りの物を惜し氣もなく買つて呉れた。

「美奈子や！ お祖母さんの御恩を忘れてはいけないよ。お祖母さんが來て下さらなかつたら、お前は育たなかつたかも知れない」と、妻は口癖のやうに云つた。妻の言葉は、少し誇張は伴つては居たものゝ、大體に於て本當に近かつた。

最初は一月位滞在の豫定で來た母は、去ぬ／＼と、口癖のやうに云ひながら、妻に引止められたり、自分で思ひ止まつたりして、段々歸國するのを延して居た。所が、八月の半になつて故郷に居る妻の姉が、男の兒を産んだと云ふ知らせ

の手紙が来た。かうなると祖母の愛は、啓吉の子供ばかりが独占する譯には行かなくなつた。到頭彼女が歸國する日が定められた。

母が歸るとなると、今迄母を堅固な支柱として倚りかゝつて居た妻は、俄に落膽と不安とに襲はれて居た。夫でも、母を引き止める事は何うしても不可能であると云ふ事が分ると、妻は、

「お母さんが、歸る迄に、きつと女中を探して下さいよ。新聞に廣告して、屹度見附けて下さいよ」と、妻は幾度も繰返した。

世間の狭い啓吉夫婦に取つては、かうした場合、新聞にても廣告するのが、一番簡単な方法であつた。

新聞に「求女中」の廣告を出す、直ぐ二人の申込があつた。一通は本所からのハガキで小娘が自分で書いたものらしかつた。他の一通は麻布から来たもので、「行儀作法見習旁々娘を遣したい」と、云ふ趣意であつた。

「行儀見習は困つたな。三間か四間かの借家住ひて行儀も作法もあるものか」と、啓吉は妻と顔を見合して笑つた。「そんな積で来て呉れたら、困るから十分此方の家庭の状態を知らさなくちゃ」かう思つた啓吉は、自分の収入や家族の様子を可なり精しく述べた上に「自分は中流以下の家庭ではあるが相當の教育はあるものだから、その點では出来る丈の事はし

たい」と、云ひ添へた。啓吉は十分誠意を披瀝した積であつた。夫から本所の小娘の方は、先方で自身目見えに來たいと云つてあるのを幸に、電車切符を封入して一度來て見るやうに返事をした。此の手紙にも啓吉は先方で此方を買ひ被らないうやうに家庭の様子を精しく書いて置いた。

が、此の二つの手紙に對する返事を幾何待つても來なかつた。電車の切符を封入して置いた小娘の方からは、セメテ斷りの返事でも來るかと思つて居た。が、何とも云つて來なかつた。啓吉は自分が餘りに叮嚀に正直に、返事をしたのが馬鹿らしくなつて來た。

「貴君が家の様子なんか精しく云つてやるから、誰も來なくなるのですわ。女中など云ふものは、矢張り門構へのお屋敷へ奉公がしたいものだわ。こんな借家ぢや女中に來手がなないのかも知れない」と、妻は如何にも悲觀したやうに、囁いた。啓吉も、夫を聞くと何だか淋しかつた。

出鼻を折られたやうな心持で、その四五日は、女中の事は、妻も啓吉も一言も云はなかつた。

夫でも、母の歸國する日が段々近づくに従つて、女中を雇ふことは一日も捨て置かず事は出來なかつた。

ある朝、啓吉が出動しようとする、玄關迄送つて來た妻は、

「貴君、もう一度新聞に廣告して下さい。昨日近所の桂庵へ

行つて見たのですが、十七八の女中は、今の所トテもありませんと云つて居ましたから」と、云つた。

「ぢやもう一度、出して見ようかな」と、啓吉は答へたが、何だか今度も駄目らしいと思つた。

丁度その廣告が出た日は、日曜に當つて居た。啓吉は、申込のハガキを心待ちしながら、二階で寝ころんで本を讀んで居ると、階下に訪問者があつた氣勢がしたかと思ふと、妻が二階へトーンと上つて來た。

「貴君！一寸來て下さい。今女中になりたいと云ふ人が來たのよ。貴君が逢つて色々の話を決めて下さいよ。私は嫌だから」と、人馴れのしない妻は、他人との交渉と云へば必ず啓吉に負擔させるのであつた。夫でも、啓吉は、ある女性を初めて見ると云ふ軽い好奇心で、二階から下りて行つた。見ると、玄關の上り口に、十八九ばかりの色白の娘が、横向きに坐つて居た。顔立も割に整つて居る上に、着物もちやんとして居て、啓吉の家の下女などには勿體ないやうな女であつた。その女は、啓吉を見ると叮嚀に會釋した。

「僕が主人ですが、こんな家でも來て呉れる積ですか」

「はい」と、その女は如何にも溫和しく答へた。「夫婦と今年生れた子供です。尤も今母が居りますが、之は貴女が來て呉れれば國へ歸る事になつて居ます。そんなに仕事は多くない積です」と、啓吉は叮嚀に、努めて本當の事を云はうと思

つた。

相手は黙つたまゝ背いて聽いて居る。直ぐにも約束が定まりさうである。

「お給金は、四圓五十錢で何うでせう。貴女さへ辛抱して呉れれば半年毎に上げます」

「結構で御座います」と、その女は十分満足したやうに答へた。

「夫なら、愈々來て呉れるでせうか。一度歸つてから、考へて出直して來ますか。夫とも、今から直ぐ居つて呉れますか」

「何方でも」と、女は軽く頭を下げた。啓吉は、もう安心だと思つた。案外手軽に話が定まつたのが嬉しかつた。

「ぢや貴女も仕度があるでせうから、一度出直して來て貰ひませうか」と、啓吉が半分迄云ひかけると、今迄啓吉の横に黙つて坐つて居た妻は、啓吉の耳に口を寄せながら、

「貴君！そんな事を云つて一度歸すと、もう歸つて來ない女中があるのですよ。風呂敷包を持つて居るのですから、先方だつて今から直ぐ居ても差支へないでしょう」と、云つた。

如何にも、妻の云ふ通り小さい風呂敷包みを持つて居る。妻に云はれて見ると、啓吉も出直させるのが何だか不安だつた。

「よければ、直ぐ上つて貰ふことにしませうか。もう、晝飯

時だから、上つて御飯でも喰べたら何うです」
 「さうさせて戴きませうか」と、先方が云つたので、啓吉は裏口へ廻つて上つて貰ふことにした。
 「さあ之で一安心した。もうお母さんが何時歸つてもいい」と、啓吉が云ふと、妻も、
 「案外早く見附かつたわね。夫に品のよい温和しさうな女中だわ。お邸の小間使にしてもいいやうな」と、可なり欣んで居た。

間もなく啓吉の家の新しい一員たるべき、その女中は、妻に勧められて臺所で少しは時を過ぎた晝飯を喰つて居た。啓吉と、妻とは、臺所の次ぎの三疊の間で、女中を雇つた後の一家の経済の事などを話して居た。

「給金と、喰べるのとで何うしても十圓は餘計にかゝるやうになつたから、夫丈節約して下さらなきや」と、女中を雇ふに就いて幾度も繰返したことを、もう一度繰返して居た。
 暫くすると、女中は御飯を済ましたと見え、茶碗を洗ふ音が流し元で暫く聞えて居た。夫から十分も経つた頃だらう。妻は、

「早速だけれど、ねえ貴君！ 美奈子をお守りして貰ひませうか。お祖母さんに懐かれて電車通へ行つて居るのですよ」と云ひながら立つて臺所の方へ行つた。間もなく、「アラツ」と駭いたやうな妻の聲が臺所から聞えた。

「貴君、女中が居ないわ。はゞかりへ行つたのかしら」さう云ひながら二三分待つた。が幾何待つても出て来なかつた。
 「下駄があるかい」と、啓吉は注意した。妻は裏口の方へ廻つて見た。が下駄は見えなかつた。

「持つて来た風呂敷包があるかしらん」と、云ひながら、妻は臺所の押入れや、縁側などを探して居た。が風呂敷も見附からなかつた。

「一寸買物に出かけたのかも知れない」啓吉はまだ善意に解釋しようとした。が、十分待つても二十分待つても歸つて来なかつた。

「逃げられたのだ」と、啓吉も思つた。妻もさう思つたらしかつた。が、二人とも、夫を口に出すのが淋しかつた。

「飯丈を喰ひに来たのだ。ヒドい奴だ」と、啓吉は可なり腹立しかつた。自分が示した誠意と信頼とが、物の見事に裏切られたのが、腹立しかつたが、女中の候補者からでも、見捨てられると云ふ事は、可なり淋しかつた。

「やつぱり、こんな家へは女中に来て呉れる人はないんだわ」と、妻は可なり悄氣てしまつた。

「あんなヒドイ奴に來られて堪るもんか、飯丈を喰つて歸るなんて、詐欺ぢやないか」と、初て女中を雇はうとして、初て奉公人階級には普通な不信を見せ附けられた啓吉は、可なり腹が立つた。此方が熱心に雇はうとしたに拘はらず、先方

から逃げられたのが、不快でもあり淋しくもあつた。
 啓吉と妻とは、その日は午後から夜迄、女中のことなどは一口も出さずに、お互に不當に傷けられた心を持つて、相對して居た。

その翌日の夜であつた。啓吉が、會社から歸つて來ると、玄關に立つて居る丈の高い男が、妻と話して居た。夫が、友人の江川であるやうに思はれた。

「やあ！ 江川君かい！」と、啓吉が呼ぶと、妻は、
 「いゝえ、此の方が女中があると云つて連れて来て下さつたのよ」と云つた。その男が振向くのを見ると、如何にも見知らない男であつた。

その男は、啓吉が主人である事を知ると、前よりも一層丁寧に頭を下げながら、

「實はお宅の廣告を見て女中を連れて參つたのですが、使つて下さるでせうか。實は一昨日東京へ來たばかりの田舎者ですが、國で繼母と喧嘩をして飛び出して、私を頼つて來た者で、身の振り方に困つて居る者ですが、一つお宅で使つて下さる譯には行きますまいか。年は今年十八になつたばかりです」と、いつた。

其の男の言葉は如何にも慇懃でその誠實を疑ふ所は無かつた。が、其の男の年齢と、女の年とを考へ合せると、國元で關係のあつた情婦が、男の後を慕つて上京したやうに思はれ

て少しは嫌であつたが、女中に渴えて居た、啓吉夫婦は、來る者に對しては何の選擇をも、行ふ餘裕はなかつた。

「結構ですとも、その方さへ辛抱して下されば、私の方では結構です」と啓吉が云ふと、其の男は道を隔てた向う側の電信柱の方を振顧つて、

「おい／＼一寸、出てお出で」と、其處に待たせてあつたらしい女を呼んだ。

「さあお前、此方で雇つて下さるさうだから、御挨拶をなさ」と、言つた。

玄關先の暗い灯影では、はつきりとは判らなかつたが、紺の着物を着て居たその女は、丁寧に頭を下げた。

小柄な瘠せぎすの女であつた。
 「いや私の妻の親類の者で、頼つて來たのですが、なんにも知りませんから、どうか宜しく願ひます」と、其の男は云つた。啓吉はその男の言葉で、二人の關係が普通の關係であるのを知つて嬉しく思つた。かう判つて見ると、この女は女中として、可なり秀れた資格を持つて居る。田舎出である上に、

繼母にいちめられたと云へば、奉公の苦しさに堪へるに違ひない。啓吉は到頭掘出し物が見附かつたと思つたが、まだ一つ訊いて見なければならぬ事があつた。

「家から呼び戻しが來るやうな事はありませんか」
 「いや、親父の方へは此の子の意見も聞いて、手紙を出しま

したから、連戻しに来るやうな事はありません」と、其の男は答へた。かうなつて見ると、もう何も間然する所はないと啓吉は思つた。

「いや、それならば結構です。給金は最初四圓五十錢として置いて、段々上げる事にしませう」

「さうして下されば、結構で御座います」と、其の男も満足らしく云つた。

啓吉の妻は女中を漸く雇ふ事が出来た嬉しさに、少し興奮して居たらしく、

「本當に辛抱して下さいな。着物なども私の古いのでよければ都合して上げますから。私も年が若いのですから、お友達になつて一緒に遊びませうね」と、その女に向つて云つた。夫は啓吉の妻に取つては精一杯のお世辭であつた。その上づつたやうな、懸命の調子が啓吉の心を暗くした。夫程迄に女中に渴えて居る彼の女を啓吉は傷ましいとさへ思つた。

が、その女は啓吉の妻の言葉に對して、抄々しい返事さへしなかつた。併し、さうした無愛想も田舎者らしくつてよかつた。その男が歸つてしまふと、妻はその女を湯に行かす事にした。

「今夜は何もしないでいゝから、お湯に行つてから休んで下さいな、そして明日の朝は少し早く起きて下さいな」と、云つた。

翌日の九時頃、啓吉が目を感じて下へ降りて見ると、臺所には妻と母丈が居て、女中の姿は何處にも見えなかつた。

「何うしたんだ。女中は」と聞くとも妻は聲を低めながら、「美奈子が眠つて居るから、お前も少し休めと云つたら、三疊の間へ這入つてグウ／＼云つて寝て居るのよ」と云つた。妻の言葉を聞いて啓吉が、三疊の間の襖を細目に開けて見ると、其處に昨夜の女は俯向に手足を投げ出しながら、寝そべつて居た。

「今朝起きて顔を見合はした時でも、『お早う』とも云はないのよ。夫に先刻も、お母さんの事を『伯母さん』と、云つて呼んで居るのよ」妻は不平らしく云つた。

「仕方がないよ。田舎から出たばかりだから。段々行儀を教へてやるといゝんだ」

「さう／＼少し位な事は辛抱しても、居て貰はなければ、あれでも逃げたら、本當に代りはないんだから」と、妻はもう諦めてしまつたやうに云つた。

妻が云つた通り、その女は言葉使や行儀作法に於て、極端に無智である事が段々判つて來た。啓吉夫婦の前でも、平氣で足を投げ出して坐つた。また啓吉を妻が呼ぶのを眞似して「父様」と呼び掛けた。女中から「父様」と呼ばれると、啓吉は恐縮したやうな、くすぐつたい心持になつたが、夫を注意して察めてやる氣にもならなかつた。

丁度、その晩に前日の男が來て、女の國元へやつた手紙の返事が來て、親元からも「奉公先へ宜しく頼む」と云つて來た事を傳へた。もうこの女が、落着くことを妨げるものは何にも無いと啓吉夫婦は安心した。

所が、その翌朝であつた。二階で寝て居る啓吉が、不圖目を覺すと、何時の間にか來たのか、女中が枕元に坐つて居た。啓吉が起きて着物を着換へると、女中は「一つ手紙を書いてお呉れんか」と、云つた。啓吉には、その東北辯がハツキリとは判らなかつた。が、何んでもそんな意味を云つたらしかつた。起きたばかりの主人に、手紙を頼みに來るその女中の無躰けを、苦笑しながら然も無智から來る無邪氣さを憎む氣にもなれなかつた。

「ペンでよければ書いてやらう」と、啓吉が云ふと、女中は近所で買つて來たらしい巻紙を出した。

「夫ぢや、ペンで書けないから、之に書いてやらう」と、云ひながら、啓吉は机の上の原稿紙に向つた。

「何う書くんだ。書くことを云つて御覽！」

「一人旅へ來て、毎日あなたの事を思つて涙で暮してると書いてお呉れ」と、その女は云つた。

「そんな事を初から、書くことは出來んから、東京へ着いた時の事でも書いて置かうか」と、啓吉が云ふと、その女は、「あゝ、あなたが考へてえゝやうに書いてお呉れ」と、云つ

た。啓吉が、いゝ加減な停車場の叙景や、初て東京を見る心持を十行ばかり書くと、

「私も國が戀しくなつたから、來月の祭迄には必ず歸りたいと思つてると、書いてお呉れ」と、その女が付け足した。啓吉は夫を聞いて「オヤ／＼」と、思つた。此の女が、女らしい郷愁を感じて居るのは尤もとしても、來月の祭迄に歸ると云ふのは、ホンの手紙の上丈の氣紛れだらうと思つた。が、夫にしても、奉公してから、三日ばかりしかならない主人に、こんな事を云ふ無邪氣さを、啓吉は苦笑せずには居られなかつた。

「祭迄に歸るつて、お前は本當にこんなことを思つて居るのかい」

「ハア、夫迄には歸りたいと思つて居るで」

「何だ。昨日奥様がお前に訊いたら、長く辛抱すると云つたさうぢやないか」

「でも私には脚氣の氣味があるので」

「來月の祭と云へば、何日になるんだ」

「十二日と十三日と續いて居るだ」

「夫ならもう二十日ばかりしかないぢやないか。せめて、今年の暮迄居て呉れたら何うだ。來たばかりで、そんなに早く歸る事はないぢやないか。その裡には、東京の名所も見物させてやるから、もつと辛抱したら何うだ」

「でも脚氣で苦しいから」
「ぢや東京などへ出て來なければいゝぢやないか」
啓吉は、此の小娘の不得要領な心持を理解するのに苦しんだ。如何にも、色が蒼くて病氣らしくはあるが、夫にしても女中としての勞働に堪へられない程でもなかつた。啓吉は手紙を書いてしまつてから、幾度も繰返して長く居るやうに勧めた。が、女は「ハア／＼」と、生返事をして居るばかりだつた。

女中が、子供を背負つて出て行つた後で、啓吉は妻に、

「おい！ あの女は來月の祭迄には歸るのだとさ」

「へえ！ 國へですか。貴君にさう云つたのですか」

「いや、俺には何とも云ひはしない。が、さう云つて俺に手紙を書かしたのだ」と、云つて啓吉は苦笑した。

「まあ！」と、云つたまゝ妻も、暫くは呆氣に取られて居た。

「お前が、もう一度よく訊き質して見るといゝ。兎も角俺にはさう云つたのだ」

「まあ！ 折角安心したのに、またさうですか、此の頃はお米が高くて困つて居るさうだけど、家はまだお米には困らないが、女中には困つてしまふ。本當に歸るのでせうか」と、妻は殆ど色を變へる程に心配し始めた。

夫から四五日の間、啓吉と妻とは代り／＼に、永く居て呉れるやうに頼んだ。妻の言葉には、哀願の口調さへ交じつ

激昂した調子で、

「貴方、あの女中が今日晝ヒドい事をしました。今日自分の荷物を、そつと取纏めてお隣の荒物屋さんへ、そつと預けやうとしたのですよ。何でも、夜になつたら、お湯に行くとか何とか云つて家を出て、隣へ預けた荷物を持つて黙つて逃げる積であつたらしいのよ。荒物屋のおかみさんも、女中の仕打が餘りだと、きつぱり預るのを斷つた上に、私に知らせて呉れたのですよ」と、云つた。

啓吉も、夫を聽いて腹立たしく思はずには居られなかつた。もう五六日丈、居て呉れと頼む哀請に近い願を、縦令無智から出たとは云へ夫程義理知らずに振捨てゝ行かうとする此の女を憎まずには居られなかつた。女中などには決して荒い言葉を掛けまいと思つて居た啓吉も、思はず烈しい言葉を使つてしまつた。

「そんなに此方の頼むのも聞かずに、逃げて歸らうとするなら、直ぐ歸してやるからいい。一刻も居て貰ふことはない」と、啓吉が怒鳴つたと云つてもよい程荒々しく叫びながら、内へは入ると、直ぐ眼の前に、その小娘はケロリとして坐つて居た。凡ての叱責や罵倒に、全く鈍感であるらしいその女の容子を見ると、啓吉は自分が餘りに興奮し過ぎた事が少し馬鹿らしくなつた。が、啓吉の妻は涙ぐむばかりになつて女中の不誠實を罵つたり、皮肉を云つたりし續けたが、女は顔

て居た。その時は八月の下旬であつたが、九月に入ると、啓吉は、母を山陽道の故郷に送つて行かねばならなかつた。が、その女中は八月が終に近づくと、祭迄にと云つて居た期限を急に短縮して、八月の末迄には、是非歸りたいと云ひ出した。啓吉は、殆ど當惑した。母の歸期が迫つて居る上に、母を送つて行く旅行の爲に、まだ二十になつたばかりの妻と幼児とに留守をさせることは、何うしても忍びなかつた。夫かと云つて、後繼（おがら）の女中を、さうした短い時日に得る見込は少しもなかつた。

「おい！ お前も祭迄と最初云つたのだから、夫迄辛抱して呉れないか。來月の五日頃に、俺は國へ歸らなければならぬから、その留守中丈でもいゝから、居て呉れる譯には行かないか」と、啓吉が、事をわけて頼んでも、その女は「ハア」と云ふ掴まへ所のない返事をするばかりであつた。夫かと云つて、さうした無智な女を捉へて、責任論を持ち出して來る譯にも行かなかつた。

「女中の仕打に可なり腹を立て始めた妻は、幾何歸ると云つたつて、後繼がある迄は歸してやらないからいゝ。後繼がない中に歸ると云ふ法はないんだから」と、主張して居た。丁度其の日は、八月の三十日であつたらう。啓吉が、夕方外出先から歸つて來ると、玄關迄出迎へた妻は、啓吉の顔を見ると、今迄胸の裡に堪らへて居た怒が、一時に迸り出たやうに

の筋一つ動かさず蒼白な細面の顔に、ボンヤリとした表情を湛へて居る丈であつた。

其の女が其の夜、啓吉の妻の呪咀の聲を聞き流しながら、荷物を纏めて歸つてしまつた後は、啓吉夫婦は又寂しい心持に囚はれてゐた。此方が出来る丈け誠意を以て接しやうとした相手から、手もなく裏切られてしまつた寂しさが、容易に彼等の心から去らなかつた。遂に何うしても雇はねばならぬ女中が、來る度毎に彼等を裏切つてしまふことが、啓吉の妻の心を暗くしてしまつた。

「こんな家へは女中にだつて來手はありはしない」と、啓吉の妻は女中の落着かない原因を、現在の生活の貧弱なことに歸せしめて、彼女の心を一層暗くしてゐた。

二三日の間、啓吉夫婦は女中の問題には、一言も觸れなかつた。女中のことを云つて、短日月の間に購うた二つの苦い經驗を、思ひ出すのが厭であつたからだ。

が、それにも係らず母が故郷へ歸らなければならぬ日は、段々迫つて來た。故郷から歸國を促す手紙が二三通も重つてゐた。

「桂庵へ頼んで來ようかしら、今は出がはりの時だから、思ひの外に人があるかも知れん」と、妻は最後の手段として桂庵に頼むことを發議した。そして其の晩、彼女の近所の桂庵へ頼みに行つたらしかつた。歸つて來てから「十七八のなら

あるかも知れないと云つてました」と、いくらか希望を繋いでゐるやうであつた。

其の翌日、啓吉が會社から歸つて見ると、妻は何時になく、暗れやかな笑顔で出迎へながら、

「桂庵から女中を連れて來たのよ。よく働いて、子供も可愛がるけれど、何だか眼つきが恐いのよ。何うも素人ぢやないらしいのよ」と、一段聲を低めた。

家へ這入つて見ると、妻の云つた通り新しい女中は、臺所でせつせと洗濯物をしてゐた。小柄ではあるが、張り詰めたやうな筋肉を持つてゐる、如何にも精力的な小娘であつた。が、其のだらしない着物の着方と白眼がちの眼とが、彼女の堅氣な奉公をしてゐなかつたことを、示してゐるやうに思つた。彼女は啓吉を見ると一寸挨拶をしたが、其の人馴れた様子が、彼女の前身に關する疑念を強めた。

二三日経つ内に其の女は、自分の經歷に就て時々話をしたが、生れが東京で、家も東京にあると云ふのにも拘はらず、言葉には名古屋あたりの訛りが混つてゐた。

彼女は言葉使ひや態度などには、下卑た賤しい所があつたけれど、働くことには少しも骨身を惜しまなかつた。其の上、子守をすることも、決して下手ではなかつた。啓吉の妻は、彼女の忠實な働きぶりを見て漸く安心したやうに「本當によく働く女中だわ。これぢやお母さんに、何時歸つ

ていたよいてもいゝ」と、云つてゐた。

其の女中が來てから、一週間も経つた頃だらう。啓吉は或る朝起きてから、寢巻を脱いで、次の間の壁に吊してあつた平素着を着ると、何時もするやうに、其の袂の中に入れてある褌口に觸れて見た。すると、何時になく其の口が開いてゐるので、彼は不審に思つて取り出すと、パチンと音をして、閉ぢるやうになつて居る口の金物が、壊れてゐるのに氣が附いた。啓吉はそれが何うして壊れたか、思ひ出せなかつたが、褌口其の物が、もう餘程古くなつて、革が處々破れてゐるので、口の金物が壊れたことなどは、餘り大したことでもなかつた。彼は近い内に褌口を新調せねばならぬと思ひながら、再び袂の中へ入れた。

朝出懸ける時、彼は其の口金物の壊れた褌口を何氣なく着物の袂から、洋服のポケットへ移して家を出た。

啓吉が、春日町で乗つた電車が、小川町あたりを走つてゐる頃であつた。彼は切符を買ふ爲に、褌口を出して、其の中を覗いて見ると、昨日まで五圓札が四枚と、壹圓札が一枚とあつた筈なのに、何時の間にか、六圓丈け引き去られて、五圓札三枚丈けが取り残されてゐるのに氣が附いた。彼は一寸驚いた。金高は少しはあつたにしろ、自分の家の中で、褌口の中から金が紛失したといふことは、充分彼の驚きに値してゐた。彼は多分平素着の袂の中で、褌口からこぼれてゐた

のに氣が附かなかつたのだと思つた。無論盗まれたのではなにかといふ疑を、起さな譯ではなかつた。盗まれたとしたならば、疑は當然新らしく來た女中に、懸つて行かねばならぬ。が、啓吉は妄りに人を疑ひ度くなかつた。其の上、女中に續けざまに逃げられた上、三度目に雇つた女中が、泥棒を働くといふことは、考へて見る丈けでも厭であつた。従つて彼は平素着の袂の中に、置き忘れたといふことの方を信じたかつた。が、それにしても、どちらであるかを、一刻も早く確めて、其の金の紛失に就て起る色々な疑念から、逃れたかつた。

彼はいつそ引返して、調べて見度いと思つた。彼は神田橋の停留所で降りると、今迄來た路を逆に引き返して、自分の家へ歸つて來た。

啓吉が、不意に歸つて來たので、驚いてゐた妻には言葉も掛けず、啓吉はつか／＼と居間へ這入ると自分の平素着の袂へ手を入れて見た。彼の心は、五圓札の輕かな觸感に依つて、ホツと安心することを豫期してゐた。が、彼が可成りの期待を以て、入れた右の手の指は、何にも這入つてゐない、空虚な袂の底に、寂しく觸れるばかりであつた。彼は新らしい女中に對する疑念が、明かな形態を採つて胸の中に、ぐつと込み上げて來るのを感じた。それは六圓を失つたばかりの問題ではなかつた。六圓と共に、可成りによく働く女中を失ふと

いふ問題であつた。啓吉の舉動を先刻から訝しげに見てゐた妻に、啓吉は可成り興奮した調子で、

「おい、あの女中は泥棒をするぜ。お前も財布を注意しなければ駄目だぞ」と云つた。

「へエ……」と、妻は色を變へぬばかりに驚いた。

「あの女中に違ひない。昨日俺は、家へ歸る途で褌口を調べた時、確かに二十一圓あつたのだ。それを袂に入れた儘で、着物を三疊の壁に吊して置いたのだ。今朝何だかあの女中が三疊の間で、こそ／＼やつてるがと思つたら、こんなことをしやがつたのだ。さう／＼、今朝褌口の金物が壊れてゐるので、變だと思つたが、彼奴が開け方を知らないで、無理にこち開けたから、壊れたんだ」と、啓吉自身、今朝褌口の金物が壊れてゐるのを思ひ出した。啓吉の妻は、

「へエ……まあ」と、開いた口が塞がらないやうに驚いてゐた。

啓吉の荒々しい聲で、何事が起つたのかと二階から下りて來た妻の母は、女中が金を盗んだといふことを聞くと、

「へエ……」と、驚いたが、直ぐ「東京は何うか知らんけれど、故郷では女中と云うたら、盗賊をするのに定まつてゐるやうなものぢや。女中を置いたら、お金の始末に氣を附けるのが第一ぢや」と、何時も家内に事件が起ると、それに就て老人特有の教訓を、啓吉夫婦に與へることを常とした彼女

は、此の時も彼女特有の教訓を云つたのであつた。
「折角よく働くと思つたら、今度は泥棒をする」と、啓吉の妻は、諦めたやうな苦笑を漏した。
「女中は一體何處へ行つたのだ。歸つて來たら、嚴重に調べてやる」と、啓吉は忌々しきやうに云つた。すると母は、

「去なすのなら黙つて綺麗に去なした方がいゝ。喧ましく云うて恨まれたりすると、相手が賤しい者だけに、どんな復讐をされるかも知れない」と、老人に適はしい老婆心を述べた。
啓吉は、母のやうな微温い態度を探るには、餘りに腹立たしく思つてゐたが、それかと云つて女中を警察へ突き出すやうな荒んだ心持もしなかつた。どうせ暇を出すすれば、母の云ふ通り何事も云はずに出す方が、自分の心持を傷けない點から、云つても得策であつた。

「腹は立つが、併し警察へ突き出す譯にも行かないから、黙つて暇を出すことにしよう。ぢや、彼女が歸つて來たら、お前からさう云ふといゝ」と、啓吉は妻に云つた。

が、二三日來、風邪の氣味で健康を害してゐたらしい妻には、今女中を奪はれることは可成り重大な打撃であるらしいかつた。

「だつて貴君、今女中がなくなると、大變ですわ。新らしい女中が見附かる迄、あれを置く譯にはいかないてせうか。用心さへして使へば、働くことはほんとはよく働く女ですか

な、出鱈目な行爲を、妻の口から聴くと、何だか今迄其の女に對して抱いてゐた憎しみが薄れて行くやうに感じた。

「彼奴は、俺が盗まれたことに、氣が附いてゐないと思つてゐるんだな、馬鹿な奴だ。其の敷島や、煙草入れを送るといふ男は大方、彼奴の情夫だらう」

「何だかさうらしいのよ。良太郎とかいふ男で、先刻も私に其の男のことを、自慢してゐたわ」

啓吉は、其の女が低能で、自分の犯した罪が啓吉夫婦の前に、露出しになつてゐるのも知らずに済ましてゐるのが、丁度人間に化けた狸が背後に尻尾を垂らしながら、尙人間を巧に化かしたものと、濟まし切つてゐるのと、同じやうに、それに對して憎惡を感じるよりも、寧ろ憐憫と、一種の滑稽とを感じた。

「まあ、彼奴のする儘にさせて置かさ。が、用心をしなけりやいけないぞ。二度盗まれちや堪らないから」

「今日も随分用心したのよ。全く眼が離せないのですからね。あれが二階へ物干しに上ると、おつ母さんが監督する爲めに、一緒に二階へ上つて下さるのよ。當分の間、皆揃つて散歩にも行けないわ。あの女中を一人で留守させるのは、心配だから」

「それもさうだねえ。まるで泥棒を飼うて置くやうなものだから」と、啓吉も苦笑せずにはゐられなかつた。

ら」と、云ふと、母も賛成したやうに、

「そら、新しい女中を雇つても、用心せんといかん。女中と云うたら大抵は、盜賊するんぢやから、女中にお金を盗られたのは、用心せんもんの方が悪いのぢや」と、母は金を盗まれた啓吉の方に落度があるといふことを、繰り返して主張した。

「そんなら新らしい女中を置くとして、とても東京ぢや駄目だから、郷里から呼び寄せることにしよう。俺も自分の家へ云つてやるから、お前も至急郷里へ頼んでやるといゝ」と、啓吉は妻に云ひながら、引き返した爲めに、出勤時間に酷く遅れたのを、氣にしながら家を出た。

其の日啓吉が夕方歸つて來ると玄關へ出迎へた妻は、聲を潜めながら、

「あの六圓は、女中が盗つたのに違ない事がすつかり判つたわ。今日貴君が行つてから、あの女中が澤山買物をして歸つたのよ。櫛だとか笄だとか、香水だとか、裏口だとか、いろんな物を買つて來たのよ。それに人に送るのだと云つて、敷島を一箱と、男物の煙草入れを買つて來たわ。その値段を計算して見ると、丁度六圓位になりさうだわ。昨日迄空っぽな財布を彼方此方に投り出してあつた癖に、俄にあんな買物をするのを見ると、六圓を盗んだのに違ないわ」と、云つた。
啓吉は其の女の、露骨な、淺墓な、傍若無人と云つたやう

其の晩も、妻と母とが子供を連れてお湯に行く時も、妻は啓吉に小聲で、

「貴君、注意をしてゐて下さいよ。直ぐ歸つて來るから、二階へ上らないで、下にゐて下さいよ。あれが簞笥の中なんかを掻き廻すといけないから」

啓吉は「うん／＼」と合點いたものゝ、妻のゐない内に机に向つて、本でも讀まうと思つてゐた當が外れて、少し悲觀せずにはゐられなかつた。彼は一家の中で氣を許すことが出來ないといふことが、どんなに不便で、且つ不愉快であるかといふことが、そろ／＼分つて來出した。

其の翌日の朝、臺所で働いてゐた妻が、

「あらッ！」といふ聲を立てたので、其前から床の中で眼を覺してゐた啓吉が、二階から下りて見ると、彼女は驚駭と、不安との混つた顔つきで天井の引窓を指さしてゐる。啓吉にも直ぐ其の引窓の紐に異狀がある事に氣が附いた。いつもは、垂直に垂れ下つてゐる二筋の紐が堅く纏はれてゐる上に、天窗の横の棟木に打ち掛けられ、棟木から下へ垂れ下つてゐる。即ち紐に懸る重さが、總て棟木に仍て支へられるやうに仕組まれてゐる。

「誰がこんなことをしたのだらう。家の人は誰もこんなことをする人はない。泥棒が這入らうとしたのぢやないか知ら。私厭だわ」と、啓吉の妻は色を變へんばかりに恐怖に打たれ

「だから、俺が喧ましく戸締りの事を云つてゐるぢやないか。それにしてもこれは、外からやつたに違ひない。昨夜屹度泥棒が這入る仕度をしてゐる内に、誰か眼を覺ましたので中止したに違ひない。兎も角、これから用心をしなければ駄目だ」

「私、恐くなつたわ。貴君引窓を釘付けにして呉れない？」と、妻は深い憂慮に陥つてゐた。

「まるで内憂外患交々たるだ」と、啓吉は次の間で子守をしてゐる女中を、尻目に掛けながら云つた。妻も女中に對する當擦りをも混へて、

「本當に東京は恐い處だわ。私つくづく厭になつてしまつた」と、云つた。

「本當に東京は恐いわ。泥棒が澤山ゐますからねえ」と、女中が次の間から合鍵を打つた。啓吉と妻とは、女中の白ぼくれた合鍵を聞くと顔を見合して苦笑した。

「本當に泥棒が多いので、油断も隙もならない」と、妻は女中を顧みて、半ば揶揄的に云つた。が、女中には全く通じなかつたらしく、彼女はケロリとして子供を扱ひ續けてゐた。

暫くして、女中が子供を背負して出て行つてしまふと、妻は心配さうに、

「貴君、あの女中が泥棒の手引をしてゐるのぢやないか知ら、捨て置くのと段々増長して、どんな事をやり出すか分らないから、今の中にいつその事、暇を出してしまふか知ら」と、云ふと、妻は、

「それでも、よく働くことはよく働くのよ。朝は早くから起きて、御飯は炊くし、おむつは洗ふし、子供は可愛がるし、泥棒さへしなければ、本當にいゝ女中よ。郷里で女中が見附かる迄、もう少しの辛抱ですから、置いてやつて下さいな。私、おむつを洗ふことを考へると、少し位泥棒をされても構はないわ。何だか此頃身體がフラ／＼して、おむつなんか洗へさうにもないから」と、云つた。

如何にも彼女は、夏以來健康を害してゐて少し仕事をしても苦し氣に喘いでゐた。

「ぢや、仕方がない。郷里で女中が見附かる迄辛抱してやらう。併し、一層用心をしなければ駄目だ。もう彼奴には給金以上の金を呉れてやつてあるのだから、もう一文だつて盗られちや駄目だぞ」

それ以來、女中に對する警戒は、一層嚴重になつた。が、それにも拘らず女中は、掃除の時などは箆箆の前で停滯したり、啓吉の衣類などを無暗に疊みたがたりした。

母が五十錢盗られてから、三四日経つてから、啓吉がいつものやうに夕方歸つて來ると、玄關に出迎へた妻は、

「私恐くなつたわ」と云つた。

「眞逆そんなことはありやしまし。が、さう疑つて見ると、何だか氣味が悪いねえ。今晚歸つたら、うんと嚴重に戸締りをし直すから、心配しなくてもいゝ」と、啓吉は妻を慰めた。其の日の夕方、啓吉が歸つて來ると、妻は又、女中に就いて新しい事實を報告した。

「貴君、今度はお母さんがお金を盗られたのよ。昨日貴君が盗られた時、お母さんは用心しない方が悪いと云つて、威張つてゐたのに、今日自分が盗られたので、すつかり、テレてしまつて、可笑しかつたわ」と、妻はもう昨日のやうには驚かないで、面白さうに話した。

「いくら盗られたのだい」と、啓吉が訊くと、

「たつた五十錢なのよ。今朝女中が二階へ上つたので、お母さんが後から上つたのですが、少うし間を置いた爲に、二階の箆箆に入れてあつた財布から、五十錢銀貨を盗られたのよ。お母さんはテレてしまつて仕様がなないもんだから、私に怒つてゐるのよ」

啓吉も母から自分がボンヤリしてゐた爲めに、女中に盗まれたと思はれることが、少しは癪に障つてゐたので、母の盜難を妻と一緒に可笑しがるのが出來た。それにしても女中が最初の收穫に味を占めて、犯行を繰り返したことを、腹立たしく思はずにはゐられなかつた。

「到頭私も盗られたわ」と、啓吉が心配して訊くと、

「たつた十錢よ」と、妻は面白さうに笑ひながら、私が十錢銀貨の入つた財布を、美奈子に玩具の代りに弄らせてゐて、一寸用事に立つてから、歸つて見ると、もう財布が見えないのですもの。ホンの一分か二分かの間に、彼女が盗つたのですわ。その證據に、二三日何にも買はなかつた彼女が、私の財布が失くなると直ぐ、キヤラメルを買つて來て喰べてゐたわ。お金は何うでもいゝけれど財布丈けでも返して呉れゝばいゝのに、本當に油断も隙もならない泥棒猫だわ」と、妻は度々の盜難に馴れつ子になつて、面白半分啓吉に話した。

「泥棒猫かハ、ハ、ハ」と、啓吉も今度は被害が頗る輕少で、且つ相手の遣り方が、餘り露骨であるのもう腹も立たなかつた。女中の行動がすつかり見透しがつくので、恰も檻の中に飼うて置く動物が、其の自由を許された範圍内丈けて、惡戯をしてゐるのを、高所から見てゐるやうな氣安さがあつた。が、それと同時に、種が判つてゐる手品を、それとは知らずに使つてゐる男を、見て居るやうな人の悪い興味があつた。

啓吉は此の人の悪い興味を、少し恥かしく思はない譯ではなかつた。無智な人間が、自分の惡事が悉く露顯してゐるの

にも拘らず、それと悟らないで平氣でし續けて行くのを、見許して置くことが人間として正しいことであるか何うかを、疑はずには居られなかつた。併し事を荒立て、他人の悪事を責めることに依て、自分の感情をも傷けることは、啓吉にとつて可成り不快なことであつた。其の上、郷里からも女中が見附かりさうだと云ふ吉報（此の場合吉報と云つても決して誇張されては居なかつた）があつたので、もう此の女を要するのにも一週間よりは永くはなかつた。其の間成るべく用心して被害のないやうにして、體よく女を出すことが一番得策のやうに思はれた。無論、啓吉が其の女の悪事を懲らさなかつた爲めに、其の女が、將來悪事をし續けて墮落して行かうとも、それに對して自分が道徳上の責任があると思ふ程、啓吉は道學者ではなかつた。

三回の盜難が續いてから、各自其の被害を受けた啓吉夫婦と、其の母とは女中に對して、心の中では嚴重に警戒した。が、女中は家の中の人々が、自分に對して少しも心を許してゐないと云ふことは、氣が附かないと見え、日が経つに隨つて家内の者に親しみ、骨身を惜しまずに働いた。啓吉は早晩暇を出さねばならぬ女中から、段々親しまれて來ることが、可成り心苦しかつた。其の上此方が嚴重に警戒してゐるにも拘らず、夫を知らないで、一家の者に親しまうとする女中が、可憐しく思はれることがないでもなかつた。それに警戒が嚴

に、暇を出さなければならなかつた。

「此の手紙で見ると、郷里からの女中は、何時來るかも知判らないから、早く今の女中を出して置かなければならぬ。郷里の親類の娘が上京することになつたので、家が狭くなるとか何とか云つて、あの女中を體よく暇を出すがいゝ」と、啓吉が解雇の宣告を與へるといふ、嫌な役廻りを、何氣なく妻に押し付けやうとすると、妻は黙つてゐないで、
「私、そんなことを云ふのは嫌だわ。貴君から云つて下さいよ」

「そんな馬鹿なことがあるものか。これは家事に關することだから、當然お前がやる責任がある」

「でも、何だか可哀想で厭だから、貴君から一寸云つて下さいな。ねえ、後生だから」と、妻は哀願せぬばかりであつた。が、啓吉は、自分で宣告を與へるのが、何だか厭であつた。

「お前は何かと云へば直ぐ俺にやらせるぢやないか。一家の主婦たる者が、此の位のこと自分で出來ないで何うするのだ」と、啓吉は、少し憤慨したやうな顔をして見せた。すると妻は、ブツ／＼云ひながらも、黙つてしまつた。

啓吉が其の晩八時頃、歸つて見ると、女中の姿は何處にも見えなかつた。
「到頭出したのだねえ」と、啓吉が云ふと妻は、さも／＼困

重の爲めに、新らしい被害も起らないで、彼女に對して新らしい憎惡を加へることはなかつた。

妻は、女中が朝の五時頃から起きて、朝飯の仕度をしてしまふと、直ぐおむつを洗ひ、それが済むと、家の拭掃除に懸るといふ、甲斐々々しい働き振りを見ながら、

「本當に泥棒さへしなければ、いゝ女中だわ、あゝして一生懸命に働いてゐる所を見ると、暇を出すのが可哀想になる」と、口癖のやうに云つてゐた。

相手がどんな悪人でも、毎朝顔を見合せて居れば、人間として何等かの親しみが、湧かない譯はなかつた。況して其の女中は、悪婦などと云ふ型ではなく、今迄の境遇が悪かつた爲めに、何時の間にか盜癖が附いてゐるのに過ぎないらしかつた。

殊に啓吉の妻は、女同志丈けあつて、一週間許りの間に可成りな親しみを、其の女中に持つやうになつてゐた。彼女は到頭、

「用心さへして居れば、盜まれる氣遣ひはないのだから、もう少し置いてやりませうか」などと、云ふやうになつた。

が、さうして居る内に郷里から、女中が見附かつたといふ知らせがあつた。そして、幸ひ上京をする確かな人があるから、其人と同伴させるといふことが、書き添へられてあつた。其の手紙を受取つて見ると、啓吉夫婦は何うしても今の女中

り扱いたといふやうな顔をして、

「まあ貴君、大變だつたのよ。私がいくら事を分けて云つても、歸ると云はないのですよ。歸つても行く所がないとか、牛込の伯母さんに相談して見るとか、何とか云つて、素直に歸らうとは云はないのですよ。到頭私も腹が立つて喧嘩をしてみましたのですよ」と、妻は言葉を切つて、私と三時間ばかり云ひ合ひをしたのですが、それでも歸るとは云はないので、到頭受人の桂庵を呼んで來たのです。桂庵が來てあの女中にあなたはもう此の家で、御不用になつたのですから、いくらあなたが居やうとしても、仕様がないうすから、兎も角も私の處迄お出でなさい。又外へ奉公するつもりなら、いくらでも口があるのだから、と諭しても未だ歸らうとはしなかつたのですよ。すると桂庵の人が、あなたがいくら居やうとしても仕方がないのだから早く歸る仕度をなさい。仕度の出來る迄此處で待つてゐるから、と玄關へ坐り込んだので、女中も仕方なしに不承無承に歸り仕度を始めたのよ、何でも歸る時には、シク／＼泣いてみましたよ。給金は日割りにして三圓といくらになるのですが、可哀想だから四圓にしてやりました。歸してしまふ迄に四時間ばかりも掛つたのよ。あんなに歸らない／＼と云つて、此の家がそんなにいゝのでせうか」と、可成り興奮して語り終つた。
「そら、いゝに違ひないさ。僅か二十日許りゐる内に盜つた

六圓六十錢と、其の四圓とて、十圓許りも稼いだのだから。こんないゝ家は、何處にだつてありやしない。彼奴が出たがらないのも無理はない。ハ、ハ、ハ、啓吉は苦笑したが、心の裡では、縦令盜癖があるにしても、又啓吉の家を出たがらない内面の理由には、どんな不純なものがあるにしても、兎も角表面では啓吉の家にそれ程の愛着——否、尠く共執着を示した女を、情なく解雇したことを淋しく思はずには居られなかつた。

「手癖さへ悪くなければ、何時迄も置いてやるのに……」と、妻は尙彼女を惜しがつた。

其の次の夕方、啓吉夫婦が夕飯を食べて居ると、表の格子戸の隙間から、

「美奈子さん」と、啓吉の子供の名を呼ぶ聞き馴れた聲がした。啓吉夫婦が振り顧つて見ると格子戸の間から、昨日解雇した許りの女中の顔が覗いてゐた。

「オヤお前なの」と、啓吉の妻は聲を掛けたが、其の聲には、確かに或る感動が伴つてゐた。啓吉も妻も未だ自分の家に未練を持つてゐるらしい其の女を、可憐しく思はずには居られなかつた。

「這入れと云はうか知ら」と、妻は小聲で啓吉に訊いた。啓吉もウンと承諾を與へてやり度かつたが、暇を出すのに四時間も掛つた女を、再び家に入れることに依つて、折角断ち切

つた彼女との交渉が再開するのを恐れた。

「まあ上げない方がいゝ」と、啓吉が小聲で答へると、妻は自分で起ち上つて、玄關へ出て行つて其處で彼女と二言、三言、言葉を交しへた。彼女は強ひて上らうとせず、解雇された恨みなどは、全く忘れたやうに、ニコ／＼と機嫌よく妻と暫く話してから歸つて行つた。

「芝におつ母さんが奉公してゐるので、其處へ相談に行くのですつて」と、啓吉に報告した妻の眼には、解雇されて途方に暮れてゐるらしい女中に對する同情が、歴々と讀まれてゐた。啓吉は妻の言葉を聞き流しながら、夕飯を食ひ續けた。盜癖のある女中を解雇したことを、少しも悪い事とは思つてゐなかつたが、それでも十日なり、二十日なり、同じ家に起臥して、自分達に對して人間的な親しみを持ち始めやうとした女中の執着を、振り切ることは決して心好い事ではなかつた。

R

啓吉は、妙な組合せて晚餐を喰べて居た。京都大學のK博士と秋陽堂の番頭の小山と、同じ出版業をやつて居る榊原といふ男と啓吉の四人であつた。

その日、啓吉が溜つた校正を纏めて、秋陽堂へ持つて行く時、番頭が待構へて居たやうに、啓吉の顔を見ると、

「Kさん！ Kさん！」と云つた。

表通を走る電車の音が烈しいので、何を云つて居るのか、しばらくは判らなかつたが、やつとKさんが、店へ来て居るから會つて行かないかと云ふことであつた。

K博士が、上京して居ると云ふことは、新聞の文藝欄で知つて居た。啓吉は、去年京都へ行つたとき、K博士の口切りで、同期の卒業生達に歓迎會と云つたやうなものを、開いて貰つて居たし又最近は同じ秋陽堂から出版する翻譯の戯曲に序文を書いて貰つて居たので、是非一度訪ねなければならぬと思ひながら、宿が大森なので、其處まで出かけて行く氣にはなれなかつた。

秋陽堂で偶然出會したのは、啓吉にとつて可なり、好い機

會だつた。啓吉は、店員に案内せられて、奥の間に居る博士と會つた。

博士も偶然な會合を喜んで呉れた。

「いや、實は丸善まで買物に來たのだが、急に藝術社の榊原君と會ふ約束があるのを思ひ出したので茲へ寄せて貰つて、今電話をかけたところです。大森へ來て貰ふのも大變だし、いつも東京へ來たついでに、かうして用事のある人に會ふのです。が、君にひよつくり會へるとは思はなかつた」

博士は、何處かに京都風のアクセントのある言葉で云つた。學生時代に、講壇上で見た博士は、孰ちらかと云へば、ツンと取り濟した冷めたい、唇を常に反らして居るやうな感じの、親しみがたい人のやうに思はれた。實際又、トゲのある皮肉が、講義の言葉の中にさへ、時々交じつて居た。が、去年の春上京した博士を、吳服橋の旅館に尋ねたとき、啓吉は、以前のK博士とは全く別人のやうな感じを受けた。以前の冷たさや、皮肉が影も、止めて居なかつた。啓吉は、可なりいゝ感じを受けたその上、博士は作家として啓吉を認めて

激勵さへして呉れた。出身した學校の先生から認められたと云ふことは、丁度錦を故郷に飾つたと同じ意味で、啓吉の心を欣ばした。

啓吉が、しばらく博士と話して居る内に、博士から電話を受けた榊原氏が、急いで駆け付けて来た。

啓吉は、榊原氏とも懇意であつた。榊原氏のやつて居る、藝術社から評論集を出したことがある。有名な詩人を、兄に持つて居る榊原氏は、普通の出版者とは、丸切り違つた感じを持つて居た。「やあ！ 秋陽堂へ、出版の用で來るとは怪しからぬなあ。商賣敵ぢやないですか」

啓吉は、榊原氏の顔を見ると、冗談を云つた。

一時間近くも、雑談をした末に、秋陽堂の番頭を加へた四人で、近くの鳥屋へ晚餐を喰ひに來たのである。

不思議な想ひがけもない組合せの顔觸であつた。が、少しも不愉快ではなかつた。博士も、可なり快くかうした偶然を樂しんで呉れるやうだつた。

談は可なりはづんだ。

「よく、みんなに云つて居るのですよ。木村君のやうな人が出るんだつたら、もつと講義らしい講義をするんだつたとハ、ハ、ハ」

博士は、三四杯を重ねると、機嫌よくそんなことを云つ

愉快な感じではなかつた。

話は文壇の話から出版の話に、本の賣れ高の話などに、移つて行つた。

その時に、鳥料理の取合せとして、酢牡蠣が持ち出された。氣味の悪いほど大きい牡蠣だつた。

番頭の小山が、それを見ると、不思議さうに云つた。

「まだ牡蠣があるのですね」

「四月ですね」博士は一寸考へるやうにして「四月なら、まだ牡蠣の季節ですよ。さう／＼僕が、歐洲へ行つて居たときに、氣が付いたので、牡蠣の季節が來ると、方々料理店にRと云ふ字を貼り出すのですよ」

「なるほど。それは、一體何と云ふわけです」

番頭の小山が、首を傾けながら聴かうとした。が、その刹那に、啓吉はある不愉快な過去の記憶が稲妻のやうに、頭の中にひらめいた。啓吉は、Rが牡蠣と關係があることを、嫌な侮辱された方法で人に教へられたことがある。

大學を出てから、三年近く啓吉は、J新聞社の社會部の記者をしてゐた。三十圓前後の薄給で、彼は勤勉に飛び廻つて居た。文壇的な野心もなかつた。自分に作家としての素質があると云つたやうな自信もなかつた。彼は、可なり忠實な記者だつた。どんな仕事をも、彼は、顔して當つた。I伯が内閣を組織して居る最中には、筭坂の坂の中途にある伯爵家

た。が、啓吉は大學時代に聞いた講義中では、K博士の講義が、今の文壇生活に、多少とも役に立つて居た。それは、現代の英文學を論じたもの丈に、啓吉は評論を書くときとか講演をするときなどに参考に取用して見た。

「もう君なんか、文壇では中老と云ふ氣がしますがね。一體文壇へ出てから何年になるのです」

博士は、しばらくしてから、そんなことを云つた。それは啓吉自身感じて居ることだつた。

「全くさうです。自分でも、中老と云ふ氣がするのです。ついで、此の間も友人の秋山が、支那へ漫遊に行くので、送別會をしましたかね。その席上で、大野寛さんが、祝辭を述べて、「秋山君の過去十年の文壇生活に於て」と云ふのです。ところが、秋山が文壇へ出てから、まだ五年です。僕なんか、三年半にもならない位です」

「なるほど、それぢや新進作家忽ちにして中老となつた譯ですね。が、その勢で直ぐ大家になつちや困りますね。なるべく大家になるまでの期間を永くしなければ、……」

「いや、大家になれば、いゝですが、二三年で落伍者になるかも知れませんか。實際文壇の變遷と云つたものは、目まぐるしい位です。僕なんか、つい此間出たばかりなのに、はや中老どころに思はれて居るのですからね」さう云ふことが啓吉に妙な不安を感じさせた。が、それが現在のところ不

の門前に立ちながら、坂を駆け上つて來る自動車や馬車の中の人物を、一生懸命に物色して居た。○元帥が死んだときには、彼は借物の燕尾服を着て、――それが肥つて居る啓吉には、合ひかねるので、彼は服の下へ襯衣を着ることが出来なかつた。――刺すやうな筑波嵐に頼へながら、日比谷公園の葬場へ參列した。訪問した先々の小使などに、時々「新聞屋さん」と云つたやうな不快な稱呼で呼ばれた。見え透いた居留守を使はれたこともあつた。來客の在りさうもない家に、來客があると告げられた事もあつた。が、然し啓吉は、さうした侮辱を、可なり勇敢に、氣に止めなかつた。さうした侮辱は、社會が新聞事業と云つたものに充分な理解を持つて居ないために起つて來るのである。新聞事業はもつと尊敬され、もつと重視されるべき公共事業であると、彼はさうした自覺で、時々受けがちな侮辱を、拂ひ除けて居た。が、啓吉はさうした自覺でも、拂ひ除けられないやうな侮辱を受けた。それは大正六年の夏の頃だつた。七月の終りて、編輯室に居ても、汗がじく／＼と、にじみ出るやうな暑さだつた。外から、かゝつて來た電話を聞いて居た社會部長が、啓吉を呼んだ。

「あゝ木村さん。今水産講習所から、電話がかゝつて來て、大變面白い記事があると云ふのです。一寸行つて呉れませんか」

窓から見ると戸外の日光は、白く焼き付くやうだったが、啓吉は気軽に社を飛び出した。相生橋で電車を乗り捨てたとき、眼の前にはる／＼と續いてる月島の大通から——そのコークスをでも敷き詰めたやうな道路からは、烈しい熱気が、ムツと感ぜられた。啓吉は歩いて行く元気がなかつた。啓吉は、車に乗った。水産講習所の門へ着いたとき、車夫は流れるやうな大汗を拭いた。

が、校門の生ひ茂つた青葉の蔭を、冷風がそよ／＼と渡つて居た。學生が居ない休暇中の廣庭には雜草が青々と生ひ茂つて居た。啓吉は蘇つたやうな感じがした。

小使に、來意を告げると、

「あゝJ新聞の方ですか」と、云つて案内して呉れた。案内されたところは、實驗室だつた。床は全部混合土になつて居た。壁に添うていくつもの陳列棚があつた。長細い卓の上には、魚類の標本や試験管やアルコール洋燈などが、ゴタ／＼と並んでゐた。その机に向つて、霜降の背廣を着た中背の男が、腰かけて居た。

「君がJ新聞の方ですか」

その男は、立上りながら挨拶した。が、妙に新聞記者などに對して、威儀を繕ふと云つたやうな感じがあつた。「實は、昨日貴君のところに出て居た記事に就てですがね。」

あの傳研の、古賀博士の談話です。あの中に牡蠣には、非常にコレラのパチルスが附着し易いから、牡蠣を喰ふのは危険だと云ふことがあつたのですがね。あゝ云ふことが出ると、牡蠣の養殖を研究して居る我々には非常に迷惑なのです。それで、關係者が三四人集つて、相談したのですがね。私に、その辯明をして呉れと云ふことになつて貴君に来ていたといふ譯ですがね」

聽いて居る中に、啓吉は多少の不快を感じた。面白い記事であると思ふので、啓吉は呼び付けられた譯である。然るにそれは記事でなくして取消である。しかも、新聞社としては何の責任もない古賀博士の談話に對する辯駁である。さうした記事の掲載を頼むためには、向うから新聞社へ出頭して、依頼するのが正當である。それなのに此方を呼び付けて——さう思ふと、啓吉は可なり腹立しかつた。が、先方はそんなことには氣が付いて居ないらしかつた。

「それで、一寸私が書いて見たのですが」
さう云ひながら、彼は机の引出しから、赤い紙に書いた草稿を取出した。

啓吉は、それを手に取つて見た。「牡蠣に就いて……理學士瀨川秀夫」と書いてあつた。理學士に適はしい片假名の堅くらしい文體で、枚数を數へて見ると、十枚を越して居た。貴重な新聞紙面へ、十字二十行の記事でも、編輯者が充分

に考へた後でなければ、決して載せない大事な紙面へ、片假名で書いた十枚以上の論文を載せ様とする相手の無理解さが啓吉をいら／＼させた。

「これを載せて呉れと仰つしやるのですか」

「さうです」

相手は少しもひるまなかつた。

「これは少し無理ですな。新聞にのせるとこれが二段以上になりますからね。こんな長いものはとても載せられません。」

「さうですか」

相手は一寸不満さうだつた。

「こんな長いものは、載せられませんから、これをいたゞいて歸つて、短く書き直しませう」

「いや、それでは困るね。君に勝手に書き直されると困るんだ。古賀博士は先輩だから、議論を吹きかけるやうになると困るんだ。どうも、新聞社はよく學者同志に喧嘩をさせて、欣んで居るからね」

啓吉はムカ／＼して來た。學者同志！新聞社の慣例では學士などは學者としては、取扱はないのだ。名もない理學士などに、紙面で、しかも社會部面で喧嘩させて堪るものか。啓吉は、そんなことを考へながら、顔には出さなかつた。

「それぢや、かうして呉れませんか。僕が話をやるから書いて呉れませんか」

それは不本意だがと云ふやうな顔をして云つた。

「さう願へれば大變結構です」

「僕の云ふ通り書いて呉れませんか」

「貴君の云ふ通りかくのですか？」

啓吉は、憤怒で胸があつくなつて居た。先方の自由な談話の要點を、巧みに書き現はすことが新聞記者の職務でもあれば、其處に創作的な興味もあるのだ。それなのに、向うの言葉通り筆記させる、此方を筆記生にしてしまはうとする。相手の拙い文章を自分に強ひる！自分の記者としての手腕と人格を信じない。しかもそれが取消しの記事だ。本來ならば社へ出頭して掲載を懇請すべき取消しの記事である。啓吉は憤然として席を蹴つて立たうとする衝動を感じた。が、その頃の啓吉は、職務を第一と思ふ忠實な記者だつた。どんなに侮辱されても、とにかくも記事を取つて歸りたいと思ふ忠實な記者だつた。

憤らしい胸を仰へながら、ちつとその瀨川理學士の口授を筆記して居た。

牡蠣には、グリコ何とか云ふ人體に最も大切な滋養素があると云ふことを云つてから、さて、牡蠣の季節のことを話し始めた。

「牡蠣は夏中は喰べられない。英語で月の名前の中に、Rの字が入る時でなければ喰べられない。名前にRのは入つた

月、分るかね。ホラ、セプテムバア九月、SEPTEMBER R、そらしまひにRが、は入つて居る。オクトバア十月、これもおしまひにRがは入つて居る。ノヴェムバア十一月、デセンバア十二月、みんなおしまひにRがは入つて居る。ジヤヌアリー一月、JANUARYこれもちやんとは入つて居る……」

其處まで聽いて居たとき、啓吉はもう堪らなかつた。彼は中學時代から、英語が得意であつた。中學の四年五年とかけて、英語の勉強ばかりをした。高等學校時代にも、彼は英語にかけては、級の誰れにも劣らない自信があり、又みんなからも、さう認められて居た。それなのに、この男は自分に英語の月の名前の綴りを教へて居る。いろ／＼な侮辱も、啓吉は堪へ忍ぶことが出来た。が、自分の學識に對する侮辱に對しては、啓吉は忍ぶことが出来なかつた。この男は、何の權利があつて、自分が英語を知らないものと獨斷して居るのだらう。

「英語の講義をなさるのですか。」

啓吉は、相手の言葉を妨ぎるやうに叫んだ。

「英語の講義！」

相手は、道に下キツとしたやうに云つた。

「何も、月々の綴りまで、云はなくつても、Rのは入らない月と云へば、分つて居るぢやありませんか。それに、月々の

月の綴りを云ふなんて、人を侮辱するにも程があるぢやありませんか。僕は、英文學を専攻した文學士です。英語にかけたら、理學士の貴君なんかより、遙に自信があるつもりです。それに面白い記事があると云ふから、わざ／＼やつて来たのに、貴君方に都合のいい取消しぢやありませんか。おまけに、貴君の云ふ通りに筆記させるなんて、僕の記者としての人格をも、手腕をも、侮辱して居るのです。僕は、これです失禮します」

啓吉は、カツとなりながら立ち上つた。

相手は、明に狼狽して居た。オド／＼しながら、啓吉を追ひかけて来た。

「いや、さう云ふ譯では決してなかつたのです。どうぞ、もう一度お氣を和けて、——どうぞ、お氣を和けて……」

實驗室を出て、渡廊下のところまで、追ひかけて来た。が、啓吉の氣が和らがなかつた。

俥に乗つてからも、啓吉の憤怒は、容易には去らなかつた。自分の一番得意とするところで、侮辱された丈に、啓吉の憤恨は、長く／＼その痕跡を止めて居た。

が、それから五年近くも経つて居る。牡蠣の話が出るときに、啓吉はよく、Rの話をした。それを聴く人は、

「なるほど」

と云つて、それを一つの智識として、興味を感じて呉れ

た。年が経つに連れ、啓吉の憤恨もだん／＼薄れて行つた。たゞ「Rのは入つて居ない月は、牡蠣が喰へない」と云ふ智識丈が、いつまでも／＼明に残つて居る。それは、啓吉が得た智識の中では、最も高價な代價を拂つた智識かも知れないが、それは兎に角、智識である。昔の人の云ひ方を用ゐれば瀬川理學士は、啓吉に取つて、正に一言の師とでも、云ふべきものかも知れない。

盜者被盜者

淳吉は、久し振で歸省した。妻と一人の子供とを一緒に連れて行つた。

旅行に出る前に、彼は身に付けて行く着物と一二枚の衣更への外の衣類は、スツカリ質に入れた。妻にもさうさせた。何も旅費の融通にするなど云ふ譯ではなく、留守中の火難や盗難を怖れたからであつた。たゞ一人留守をさせる女中は心からの正直者で、その點では信用が置けたが、田舎者で機轉が利かなかつた。その點では信用が置けなかつた。目ぼしい着物をさへ質に入れて置けば、火事があらうが泥棒がは入らうが、平氣だと思つた。

淳吉は、衣類と云つても、絹物は五六枚しか持つて居ないので、それに洋服類を併せても、品數は幾らもなかつた。妻は、それでも一通のものは持つて居た。彼女は、簞笥の引出しから着物を次ぎ／＼出しながら、

「まあ！ 質に入れると云ふことを、お母様が聞いたら、眼を丸くしようわい！」
など云ひながら、それでも餘り嫌がつては居なかつた。

に旅行をするもんだから用心のために預けて置かうと云ふんだから、金高には望がないんだ」

さう云ひながらも淳吉は、本當に金に困まつて質に入れる人も、やつぱりこんな體裁のよい事を云ふのではないかと思ふと、此方の云つて居ることも、向うへは體のよい云ひ譯に聞えやしないかと思つて、一寸不愉快だつた。

「手前共では、幾何でもおよろしいのでいます、……」と、先方は淳吉の切り出すのを待つて居た。

「一體幾何まで貸さうと云ふのだ」淳吉は、一寸自分達夫婦の着物が、本當は幾何位の値段があるものかと、好奇心で訊いて見た。

「へえ！ 四百五十圓までお貸し致します。これで新しくおこしらへになれば、千圓以上もかゝりますでせうが」と、手代はまたお愛憎を云つた。

餘り澤山借り過ぎて、十圓近くの利息を拂つても馬鹿らしかつた。それかと云つて代價と丸切り掛けはなれた少額の金を借りるのも、何となく不安だつた。それで、彼は利息が丁度五圓位で止まるやうにと、三百圓だけ借りることにした。

手代は、男物と女物とを別々に、大風呂敷に包んでしまふと、連れて来て居た、小僧に小さい方を負はし、自分は大きい方を背負ひながら、

「へえ！ 歸る時には、北の方を廻つて歸りませうか。隣の

おかみさんが、うるさういますから」と云つた。

淳吉は自分は少しも恥しくないことをして居るのに、手代までが、此方を何か後暗いことでもして居るやうに、庇はうとするのが、不愉快だつた。

「なに！ そんなこと平氣だよ。堂々と歸つて呉れてもいよ」と、云つた。

が、手代は小僧を指圖して、やつぱり北の方を廻つて歸つて行つた。が、淳吉にもその方が氣持がよかつた。

質に入れた後には、二階と下とに一つ宛置いてある簞笥の引出しには、底の方へ木綿物や銘仙の洗ひ晒しなどが、一二枚しか残つて居ない筈だつた。

淳吉は、留守の心配なしに旅行した。二十日あまりで、淳吉は東京に急な用事が出来たので、歸らうと思つた。が、久し振りに娘を見た妻の母親は、彼女を極力引き止めた。その上二人子供のある妻の姉が妊娠して、今にも第三の子供が生まれさうになつて居た。忙がしくて手が足りなかつた。それで手傳ひ旁々、妻丈は滞在を延ばすことになつた。

淳吉は、自分一人東京に歸つた。東京の家へ歸つて見ると、女中は神妙に留守を務めて居た。

「何かあつたかい」

「いゝえ、何もありません」と、女中は妙なアクセントのある言葉で答へた。

淳吉は、簞笥の引出しを一通調べて見た。出立の時に、多少周章^{しゅうしょう}た爲に、鏡の下りて居るのもあれば、下りて居ないのもあつた。が、中には何の異状も見當らなかつた。

彼は、旅行中着詰めて居た外出着を脱いで、衣更へをして寛ぎたいと思つた。ふと妻が仕立て直して呉れたまゝ、まだ一度も手を通したことの無い銘仙が、あることを思ひ出した。たしかに質には入れなかつた。質に入れるほど、惜しくもないし、それかと云つて木綿物ではないので、何うしようかと一寸考へた末、たしかに入れなかつたと記憶して居た。彼は、引出しを一々開けて見た。所が、不思議にどの引出しにも見付からなかつた。たしかに、質には入れなかつた筈だなど、思ひながら行李まで調べて見た。が、何處にも見付からなかつた。それぢや、やつぱり入れたのだなと思つた。質を出せば、きつとあるに違ひない。さう思つて彼は有合せの紡績に着換へた。

二三日経つてから、淳吉は質を受け出した。が、妻の着物は當分必要がなし、自分も外出勝だから、妻の歸るまで捨てて置いた方が安全だと思つたので、男物丈を持つて來させた。

彼は質札に合はせながら、品數を讀んだ。質札の通、和洋

服十七點確にあつた。が、心當にして居た銘仙の着物は見附からなかつた。彼は一寸不思議に思つた。が、多分妻の女物の方へ交じつて居るに違ひないと思つた。その上、仕立直したまゝ、彼是一年も着ないのだから、當分入ることもないだらうと思つた。

彼は、元來その着物を餘り好かなかつた。銘仙とは思つて居たが、純な銘仙でもなかつた。それかと云つて、米琉でもなかつた。銘仙と米琉との合の子のやうな、いやにぞべくとした着物だつた。着物の通人などがよく罵倒する「鯨のやうにピカ／＼光る着物」の一種であつた。が、淳吉には可なり思出のある着物であつた。それは彼が生れて初めて、自分の儲けた金で買った着物であつた。結婚してから、一月目位に妻に勧められて買った着物だつた。借衣の禮服で、結婚した淳吉は、その時知人からお祝ひに呉れた一枚の高貴織の羽織の外は、銘仙一枚持つて居なかつた。

最初は、この鯨のやうに光る着物を着て、高貴の羽織を着ることが、彼の第一の盛装であつた。その中に、彼の収入も少し宛増したので、一二枚宛着物を買つた。従つて一年位前からは、此の米琉とも銘仙とも付かぬ着物などは、少しも顧みられなかつた。それが、急に見えなくなつたので、一寸淳吉の注意を惹いたのである。「あんな着物位どうでもいゝ」と淳吉は高を繰つて居た。五日経ち十日経つ裡に、その着物の

ことは、スツカリ忘れてしまつた。

淳吉より、一月ばかり遅れて、妻は歸つて來た。妻が歸つて來てから、二三日経つた頃だつた。二階の簞笥の引出しを順々に開けて居た妻は、一寸首を捻りながら、

「怪しいのう。一番下の引出しに入れてあつた私の着物が無い！」と云つた。

「お前の着物つて何だ？ 好い物は、スツカリ質に入れたのだらう」と淳吉は云つた。

「けど、もう華美で着られなくなつた紫色のお召と、青い縞の銘仙を、茲へ入れて置いた筈ぢやのに」

「思ひ違ひだらう。質に入れたのだらう」

「いゝや。たしかに茲へ入れてあつたんぢや」と、妻は自分の記憶を少しも疑つて居なかつた。

「下の簞笥を探して見たかい」

「へえ、もう探して見たの。すみに訊いて見ようかしらん、けど悪いのう。疑つて居るやうで」

「なに悪いことがあるもんか。兎に角、すみが留守をして居たのだから、一應訊いて見るがいゝ。さう云へば、俺の銘仙も見えないのだぜ」

淳吉は、さうは云つたものゝ、此の二つの紛失を一緒にして、考へるほど氣には止めなかつた。妻の着物も自分の着物も、きつと何處かに藏ひ忘れてあるに違ひない。探して居

る裡は、却つて見えないで、時が経つてからヒョククリ見付かるに違ひないと思つて居た。

その日女中が歸つて來ると、妻は務めて平靜な口調で訊いた。

「すみ！ もしか、私の紫のお召の羽織を知らないかしら、何處かで見なかつた？」

「いゝえ。私は知りませんです。そんな着物一度も見たことありません」女中は何時ものやうにニコリともせず答へた。

「さう、そんならいゝの。ちよつと、知つて居るかと思つて訊いてみたの」と、妻は可成女中の氣持を、悪くしないやうに、打ち切つてしまつた。それが譬ひ盜まれて居たにしろ、

女中に丈は少しも疑ひはかけなかつたほど、淳吉達はその正直を信じて居た。

五六日して月末になつたので、淳吉は質から女物の方を受け出した。品數は、ちやんと揃つて居た。が、淳吉がぼんやり心當にして居た銘仙はやつぱり交じつて居なかつた。妻の

紫色のお召も、青縞の銘仙も交じつて居なかつた。

「ほんとうに、何うしたのだらう。不思議ぢやのう。やつぱり何處かに、紛れ込んで居るのかしら。盗人が來れば、すみが居つたのぢやから分るし、惜しくないけれども、お召の方は

はお美奈ちやんが大きくなつたら、着せようと思つて居たし、銘仙の方は女學校の時に買ったのぢやから、古いけれども地

はよかつたのぢや。が、無くなつてもいゝ、いゝ。また買つて呉れるでせう」と妻は淳吉に云つた。妻は、皮肉の積では云はなかつたが、結婚して以來、いつか双子の不斷着を買つてやつた以外、一枚も着物らしい着物を買つてやつたことのない淳吉には、それが一寸皮肉に聞えた、淳吉は苦笑した。が、妻も淳吉も、やつぱり見えぬ着物は、家の中の何處かに在るやうに思つて居た。きつと何時かヒヨツクリと出て來るに違ひないと思つて居た。が、ヒヨツクリ出て來ない裡に一月ばかり経つた。

十二月の半頃であつた。日曜で朝から宅に居て、二階で原稿を書いて居た。すると、玄關に誰か訪問者があるやうだつた。淳吉は、それが誰だらうかと、一寸期待を持ちながら、妻の上つて來るのを待つて居た。妻は、何よりも急いで、少し息をはづませながら、二階へ上つて來た。彼女が、興奮すれば何時でもするやうに、烈しく笑ひながら。

「何だい！」淳吉は、妻の態度を、一寸咎めるやうに云つた。

「やつぱり盜られとつたんぢや」と、云ひながら、妻はそれが非常に可笑しい面白いことでもあるやうに、笑ひ續けた。

「さうかい！ やつぱり盜られとつたのか。何うしたのだい、
 巡査が來たのかい？」と、淳吉も一寸興奮しながら、立ち上

つた。

「警視廳の刑事が來て居るの。家へは入つた盜人が捕つたのぢや」と、妻はやつと笑ふのを止めた。

淳吉は、急いで下へ降りた。玄關へ出て見ると、二重廻しを着た、刑事にしては品のいゝ男が狭い玄關先に突つ立つて居た。

「盜られて居たのですか」淳吉は挨拶もしないでさう云つた。

「さうです。何うも、本郷の警察へ紹介しても、盜難届が出て居ないと云ふでせう。それかと云つて、當の犯人は何處其處の家で盜つたと云つて居るのでせう。それで、私が實地に調べに來たのです。随分此の邊を探し廻つたのですよ。犯人が、何でも主人は文學者で大學を出て居ると云ふものですか、それを當に探したのです。丁度此下の町に、私の知つて居る巡査が居ましてね。それに訊いて此方だと云ふことが分つたのです。探すのに骨が折れましたよ」

「へえ、僕の内のことを、そんなによく知つた泥棒ですか。ぢや此の近所の人ですな」淳吉は、自分の職業を泥棒が知つて居ることに、一寸驚かされながらかう云つた。

「なに！ 此方の女中が皆喋べつたのですよ。女中をうまく騙かして持つて行つたのです。たしか下谷に御親類か、何かあるのでせう」

淳吉は一寸考へた。下谷には、親友の樋口が居る外は親類などはなかつた。

「樋口と云ふ友達なら居ります」

「さう／＼その樋口と云ふ人です。犯人は、岡本と云ふ五十七八の老人ですがね、お宅へ來て、その樋口さんとお宅で會ふ約束があると云つて、女中を騙して二階へ上り込んで仕事をやつたのです」

「へえ！ 新手ですね。それにしても、樋口と僕とが友達であることを知つてゐるなんて、よつほど調べた仕事ですね」と、泥棒の頭のいゝのに一寸感心しながら云つた。

「それも、やつぱり此方の女中が話したのです。女中が旅行して居るとか何とか、いろ／＼なことを云つたらしいのです」

「へえ！ それぢやまるで騙される材料を提供して居るやうなものですね」と、淳吉は心の中で、女中の馬鹿らしさを非難しながら云つた。

「いや誰だつて、騙されるのです。此手ぢや大抵の人がやられるのです」と、刑事は女中を辯護するやうに云つた。

「それで品物は何うしたのでせう」と、淳吉は今の場合一番肝心なことを訊いた。

「すつかり、上がつて居る筈です。盜られたものは、判つて居るでせうな。何うして盜難届を出さなかつたのです」

「紛失して居たのですが、盜られたとは思つて居なかつたのです」

「何でも此方で盜つたものが、四五點ありますよ」

「へえ！ 此方ぢや三點しか盜られた積はないのですが」と、淳吉が云ふと、

「随分呑氣ですなハ、ハ、ハ」と刑事は笑つた。

「男物の銘仙が入つて居ますか」と、やつぱり何となく氣になつて居たことを、ハツキリ片づけたかつた。

「たしかにあつたやうです。明日九時迄に警視廳へ來て下さい。判を忘れないやうに」と刑事は歸りかけたが、ふと思ひ出したやうに、

「さう／＼女中さんに、逢つて行かう。今居りますか」と云つた。

女中は家には、その時居なかつた。が、家から半町もない廣場に居ることは、判つて居た。妻は二三間家を出ると、其處から手招きで呼んだ。

女中が歸つて來ると刑事は、馴れた調子で訊いた。

「十月の廿日頃に、此處へ岡本だと云つて、やつて來た老人があるでせう」

「へえ！ 來ました。頭の禿げた……」と、女中はあわてたやうな顔をして答へた。

「さう／＼金齒を入れた。そしてあなたが、その男を二階へ

上げたのでせう」
 「へえ、樋口さんとお宅で會ふ約束をしてあると云うて玄關で十分も二十分も、待つて居ましたが、なか／＼來られんものですか、困つた／＼云うてましたけに、二階へ通したのです」

女中は、切れ／＼に答へた。

「それが、泥棒ですよ。樋口さんなんて云ふ名も、あなたが教へたのでせう。何だか知れない人を二階へ上げたりすると絞め殺されますぞ」

と、刑事は最後の言葉にかなり方を入れた。

「へえ！ あれが泥棒！ あの爺さんが、へえ！ わたしちつとも知らなかつた」女中は頓狂な聲で、云ひながら盗人を二階へ上げた自分の責任などには、少しも氣が付かないで、何か意外な面白いことでももあるやうに、ニコ／＼笑つて居た。淳吉は、女中の平生からの、無智から來る無責任を知つては居たけれども、此時は少し不愉快であつた。

刑事は、訊く丈のことを女中に訊いてしまふと、

「それぢや、明朝來て下さい。盜難の日は此方だ判つて居ますから、時間を正確に訊いて來て下さい」と云つて、歸つて行つた。淳吉は、刑事の丁寧な物言ひや態度が愉快であつた。盜難届を怠つて居るので、普通ならば小言でも聞かされるのではないかしらと思つた。

刑事が歸つてしまふと、女中は盜難の始末をクド／＼と云つた。云ふことに筋道が立たないので、幾度も繰返した。

「私は岡本です、云うて、名刺を突き出しましたから、私は旦那さんのお知合かと思ひました」などと女中は云つた。最初主人が留守だと云ふと、それでは御主人の代理になつて呉れる人を教へて呉れと云つたので、女中が樋口の名を教へたらしがつた。すると、樋口さんに會ふと云つて一旦出て行つたが又歸つて來て、今度は樋口さんとお宅で會ふ約束をしたと云つて、二階へ上り込んでしまつたらしがつた。

「その時お前は、始終下に居たのかい」と、訊くと、

「へえ！ 私の外に近所の子供が、五六人も下へ來て、ワイワイ騒いで居りましたのです。それで、あの人は時々下へ降りて來て、箆筒の前に立つて『こりやい、箆筒だな。東京には珍らしい』云うて賞めて居りましたぜ」と、女中はまだ自分の責任を少しも氣づかないやうに平氣だつた。

「は、二階の箆筒が、空っぽなものだから、下の箆筒を粗ひに來たのだよ。『い、箆筒だな』と云ふのは、何かは入つて居さうだなと云ふ意味だよ。然し、子供が遊びに來て居てよかつた。お前一人だつたら、騙されて樋口の所へ位、使に遣られたかも知れないぜ」と淳吉は女中の愚直を笑ひながら云つた。

「へえ！ 私が樋口さんの所へ行かうかと云ひましたら、そ

れには及ばんと云ひました」と、平氣で云つた。

「何だ！ お前の方から、そんなことを云ひ出したのか」と淳吉は馬鹿らしくなつてしまつたが、留守番の責任丈は、問うて置かねばならぬと思つたので、それはそれでもいゝが、そんな人が來た以上、俺が國から歸つて來た時に、直ぐ云はなければならぬぢやないか」と、淳吉は一寸眞面目になつて云つた。

「ですけど、あの人が歸つて行く時に、『樋口さんは、幾何待つても來ないから、これから樋口さんの所へ行つて、萬事の話をつけるから』と云ひましたから、樋口さんの方から、お話があるだらうと思つて居ました」と、女中が答へた。

「樋口なんか／＼話があるもんか」と、淳吉は苦笑しながら云つた。が、女中の云ひ分にも、一理あるので此上叱る譯には行かなかつた。それに、盜られたものが、スツカリ返つて來る以上何も云ふことはないと思つた。淳吉と女中との問答を黙つて聞いて居た妻は、

「よかつたのう。やつぱり質に入れといて。質に入れてなかつたら、幾何盜られて居るか知れん。それにいゝ物を盜れば向うだつて、とうに賣つて居るかも知れん。さう／＼お母さんに、さう云つてやらう。質に入れたと云うたら、まあ！ そんな事をする人があるもんな云うて、散々叱られたけに」と、淳吉が質屋に預けた處置の効果を、初て知つたやうに云

つた。

「それにしても、何うして持つて歸つただらう。その男が歸る時には、お前も居たのだらう」と、淳吉はまたケロリとした顔をして居る女中に聞いた。

「何かしらん、こんな大きいボール紙の箱を二つ持つて來て一つは此方ですと云つて、一つの方を樋口さんに上げるのだと云つて持つて行きました。後で残した方をあけて見ると何も入つて居ませなんだ」と、女中はやつぱり平氣で答へた。

「ぢや二階の箆筒の上に置いてある水色の箱がそれかい。何だ！ ちやんと道具まで用意して居やがる」と、淳吉はまた苦笑した。

が、妻は女中の先刻からの平氣な態度が、餘程癪にさはつて居たと見え、

「人様から、何かいたゞいた時には、ちやんと云つて呉れないきませんよ。譬へボール箱でも、貰つたものは、ちやんと貰つたと云つて呉れなければいけませんよ、まあ、品物が返つたればこそいゝけれど……」と、一寸語氣を強めて云つた。が、女中は一寸黙つて居た丈で、夫婦が黙つてしまふと、直ぐ負うて居る子供をあやしなから、外へ出て行つてしまつた。

が、無智な女中に責任論をする譯にも行かなかつた。それよりも、品物が悉く無事に返ると云ふのが、何となく愉快で

あつた。従つて、盗人を入れた責任者たる女中に對する心持も、少しも險しくはなつて行かないのだつた。

X X X X X

現在のやうな散文的な、機械的な平靜な生活を送つて居る淳吉のやうなものに取つて泥棒には入られるなどと云ふことは、それが何となく一つの事件であるやうに思へた。尤も之れが強盗などでなく、而も此方が盜難届も出さないのに、警視廳でちやんと被害品を取返して、向うから此方を探し當てわざ／＼知らせに來て呉れた以上、泥棒に對する憎悪などは殆ど無くなつてしまひ、たゞ事件その物の興味だけが残つて居た。警視廳へ出頭する事だけが、一寸億劫だつたがそれでもまだ一度も行つた事のない所へ、その大きいいかめしい建物から、少しの壓迫も受けずに、堂々と出頭し得られると云ふことは、一寸淳吉の好奇心を動かさないことはなかつた。

翌日は、平素より早起して、八時半頃に家を出た。妻は、「風呂敷を持つていかな困らうわい」と云つて可なり大きい風呂敷を出して來ながら、

「四五點云うて外に何を盗られたのか知らん。何か美奈ちやんの一つ身でも盗つて居るのかも知れん」と、云つた。

十二月の半ば過ぎだつたが、暖い好い朝だつた。淳吉が本郷三丁目電車に乗らうとすると、ヒョククリ年下の友達の中川に逢つた。

うまいことを云つたやうな氣がして笑つた。

「泥棒に紅茶はよかつた！」と中川は面白がつて哄笑した。

「それで澤山盗られたのですか」

「此方ぢや、三點しか盗られない積なのだけれども、刑事の話ぢや四五點盗られて居るさうですよ。一體どんなものを盗られて居るのか、一寸樂しみます。その三點以外の品は、只で儲けて居るやうな氣がしますよ」と、淳吉は、自分ながら少し上調子だと、氣の付く位喋いで話した。

「樂しみはよかつたね。随分呑氣だな！」と、中川は話全體を可なり面白がつた。

が、そんなに上調子で話して居る中に、ふと印を持つて來ることを忘れたのに氣が付いた。今迄は、凡てが滑然に行つて居たことが、一寸ひつかゝりが來たやうに不快だつた。印を持つて行かなければ品物を渡して呉れないかも知れない、折返して二度行くことは、一寸嫌だなあと思ふと、彼は一寸悄氣た。

「あゝしまった！ 判を忘れちやつた！」と、淳吉が云ふと、中川は、

「判をね。ハ、益々呑氣ですな」と、云つて呉れたが、悄氣た氣持は恢復しなかつた。

X X X X X
受附て訊くと、刑事課は直ぐ判つた。正面の石の階段を上

「やあ！早いですね」と向うから聲を掛けたが、それは此方から云ひたい事であつた。何時でも十一時頃まで、寢て居る中川がこんな早く街へ出て居る方が、不思議だつた。

「君こそ早いぢやないか。一體何うしたの？」

「急に芝の伯父さんから呼び付けられてね。……貴方は？」

「一寸警視廳」

「へえ？警視廳へ！ へえ！變な所へ行くのですね。一體何うしたと云ふのです。」

と、何にでも直ぐ興味を持ちたがる中川は、熱心に聞きにかゝつた。中川は、盜難の始末などを話すのには一番話し榮えのする相手だつた。

「泥棒には入られてね。その品物を取りに行くのです」

「泥棒！ へえ！ ちつとも聞かなかつた、一體何時です」と、彼は貪ぼるやうに訊きはじめた。二人一緒に向ひ合つて電車に乗ると、淳吉も乘氣になつて、少しは得意になつて、盜難の顛末を話した。下女の馬鹿らしさを、殊に力説しながら、

「正直だけれども、田舎者でね。何時かも松茸を洗はしたら氣を利かした積で、スツカリ皮を剥いてしまつたと云ふ調子だから、まるで赤子の手を捻ぢるやうに泥棒に騙まされてしまつたんだ。二階で待つて居る中に、氣を利かして紅茶ぐらゐるこしらへて行つたと思ふのだが」と云ひながら、自分でも

らないで、左の稍々薄暗い廊下へ曲ると、第一調所、第二調所と云つたやうな札が、その廊下に開かれて居る扉に、順々に掛けてあつた。廊下には木の長椅子が置かれてあつて、呼び出しを受けたらしい學生や、料理屋のお神さんと云つたやうな婦人などが、四五人待つて居た。

淳吉は、昨日尋ねて來て呉れた刑事の名前を云つて取次を頼むと、直ぐ會ふことが出來た。淳吉は相手の顔を見ると、直ぐ判を忘れたことを云つた。

「いやいゝでせう。それでは、貴方を信用して品物を渡しますから、盜難仕末書と請書とを郵便で送つて下さい」さう云ひながら刑事は淳吉を自分の部屋へ案内して呉れた。淳吉は刑事の態度の親切なのが、大變うれしかつた。刑事の部屋には、やつぱり呼び出されて來たやうな、料理屋のお神さんのやうな女が、五六人も控へて居た。刑事は机の中に置いて淳吉と差し向ひに坐ると、

「盜難仕末書ですがね。私が文句を云ひますから、その通り筆記して下さい」と、云つた。盜難仕末書位、もしそれが普通の文法と文章とで、書いていゝものなら、文筆を業として居る俺は、此刑事よりも明瞭にでも、巧妙にでも書けないことはないと思つたけれど、淳吉は相手の親切を思ふと、さう不快ではなかつた。

「盜難仕末書と書いて、貴君の住所と姓名と書いて下さい。」

後で、綴ぢるのですから、端の方を空けて置いて下さい！右者です、大正八年十月十八日關西旅行中……と刑事は考へ考へ云つて呉れた。淳吉が、刑事の云ふ通を書いたのは次ぎのやうな文章であつた。

右者大正八年十月十八日關西旅行中女中山本スミ(十九) 只一人留守居致シ居リ候處、同日午前十時頃、年齡五十七八歳ノ岡本某ナル老人尋ネ來リ、主人友人樋口敏夫ト自宅ニ於テ、會合ノ約アリト女中ヲ欺キ、二階ニ上リ暫クシテ立去リタル後、別紙盜難品目錄ノ品々紛失致シ居ルコトヲ發見シ、百方搜索中ノ所、今回御尋ニヨリ、全ク同人ニ竊取サレタルコト判明シ候ニ付キ、別紙盜難品目錄書相添へ此段御届ケニ及候也

刑事課御中

と云ふ文句であつた。尋常小學校の時以來、永い間人の教へる文章を、書取つたりすることはなかつたので、可なり勝手が悪かつた。「右者」と云ふ字で始まつて居ながら、一體その「右者」が何處まで續いて居るのか、何う收まつて居るのか一番氣になつた。

「一度読んで見て下さい。訂しますから」と、刑事は淳吉が書き了るのを見ると云つた。

淳吉は、また小學校時代に先生から、云ひ付けられたやうに、聲を上げて讀まねばならなかつた。かうした境遇を客觀

撃に違ひなかつた。やつぱり品物が出てよかつたと、思ふと、前に坐つて居る刑事が、非常に頼もしいやうに、有難いやうに思はれ出したのであつた。

が、淳吉が幾何その着物の包みを、探して見ても、あの銘仙、銘仙と米琉との合の子のやうなあの記念すべき着物は見當らなかつた。刑事が何處か外へ藏つてあるだらうと思つた。

「あのう！ 男物の銘仙のやうな着物があつた筈ですが」と淳吉は切り出した。

「あ、さう／＼あつた！ あつた！ 確か彼奴が著て居るのがそれです」と、云つた。それは淳吉には思ひもかけぬ言葉だつた。淳吉はそれを聞くと、急にイヤな氣持がした。今までは、ある興味を以て、無くなつた品物を取返すと云ふ嬉しさを以て、やつて來たことに、急にイヤな不快な部分があるのに氣が付いた。自分の著物を盗んで着て居る者に對する憎悪などとは、違つたヘンテコな不快な氣持が起り始めて居た。

刑事は、淳吉の氣持とは全く没交渉に、

「おい！ 平田君！」と、隣室に居る目下らしい刑事に呼びかけた。「あの八號の留置場に岡本と云ふ頭の禿げた老爺が居るだらう。彼奴の着て居る著物を、ひつべがして來て呉れたまへ！」

と、云つた。それを、聞くと淳吉の心は押し潰されたやう

して面白がれないことはなかつたが、一寸嫌な氣がせぬこともなかつた。

「其處に自宅ニ於テとありますが、それは犯人の自宅に於てと云ふ意味に取れさうです、一層のこと削つて下さい」と、刑事は云ひながら、立つて部屋の隅にある巖丈な開き扉の付いた簞笥を明けにかゝつて居た。いかにも、贓品でも、はいつて居さうな無氣味な簞笥であつた。その中から質屋の品物のやうに、油紙に入れた着物を刑事は取り出した。

「これがお宅の品物ですが、一寸お調べ下さい」と、刑事は淳吉の方へ押しやつた。見ると、果して妻の云つた紫色の華美なお召があつた。青い縞の銘仙があつた、その上、淳吉にも見覚えのある友禪の長襦袢と(それは可なり着古したものであつたが)夏物の帷子とがあつた。やつぱり妻の氣付かないものも盗られて居たのだと、淳吉は思つた。

「これでも六十圓質屋で借して居たのですからね。今こさへると、此のお召丈だつて六十圓以上もかゝりますよ。ねえ！ さうでせう」と、刑事は傍に神妙に控へて居る女達に、合槌を求めた。

「ほんとうに、此の頃はお高う思いますからね」と、その中の一人が答へた。

淳吉は、六十圓と云ふ聲を聞くと、急に品物に對する愛惜を覺えた。六十圓取られることは、彼としては、一寸した打

に暗くなつた。縦令その著物が正當にその人の所有に屬して居るか居ないかは暫く問はず、今の世の中で、ある人間が身に著けて居る著物を、暴力でひつべがすと云ふことが行はれると云ふことは、聞く丈でも一寸堪らないことだつた。而もそれが、自分の利益を擁護する爲に、行れて居ると思ふと、淳吉には誰を喰ふやうな嫌な心持がした。

「著て居るのなら、當人にやつてもいいです」と、淳吉は口に出さうとした。が、五六人も刑事以外の人が居る所でそんな事を口にする事が、如何にも芝居がゝつて居るやうに思はれた。その上、犯罪を飽くまでも懲らし良民を保護しようとする刑事に對して、そんな事を云ひ出すことが相手の氣を悪くすることに成りはいまいかと思はれた。殊に、刑事がいろ／＼好意を示して居て呉れるのに、相手の氣を悪くするやうな事を云ふのは、氣が咎めた。淳吉は黙つて居る外はなかつた。

「さあ！ 盜難品目錄書を書いて下さい。此方で云ひますから、紫色花模様お召但し裏襷紅色羽二重附……」など、よつほど馴れて居ると見え刑事は、淳吉などのとても分らない縞柄や色合を一一云つて呉れた。

その時、部屋の扉があいたかと思ふと、

「それ！」と云ふ聲と一緒に、淳吉の膝の前へ投げられたものがあつた。それは正しく、淳吉には、記念すべき銘仙とも米琉とも分らない例の著物だつた。それを見ると淳吉は、そ

れが何かの罪惡の塊のやうに思はれて仕方がなかつた。岡本と云ふ禿げた老爺のみの罪惡の塊でなく、同時にもつと外のものゝ罪の塊であるやうに思つた。それでも彼は久し振に自分の著物を見たので、オヅ／＼觸つて見た。それは岡本と云ふ老爺のぬくもりを受けて生あたまかつた。

「まだ温いでせう。虱が居るかも知れませんが」と、刑事は苦笑しながら云つた。著物は、もうよほど薄よこれて居た。淳吉は、自分のものでありながら、それを自分のものにすることに、妙な苦痛を感じた。

淳吉は、大風呂敷を持ちながら電車に乗つた。彼は警視廳を出る時に、ふと岡本と云ふ老爺のことを考へた。もう十二月の半過ぎてゐるのに、著物を一枚剝がれて、冷い檻の中で慄へて居るかも知れぬ老人の姿を思ふと、彼は自分の著物を取り返して——もつと適確に云へば奪ひ返してだが——行くことが心苦しかつた。

彼は、何かの雜誌で、「財産は贓品なり」とか何とか、西洋の學者が云つたと云ふことを讀んだことがある。が、彼は自分で働いた金で買つた著物などを、そんな風に自分で考へて見たことなどは、一度もなかつた。が、銘仙の一枚位（刑事は盜難品目録に米琉とかいたが）は、淳吉に取つては、在つても無くてもいいのだつた。妻の四枚の著物も、彼女に取つ

て、在つても無くてもよいものだつた。その中の二つは、彼女は、盜られたことさへ、氣が付いて居なかつた。資産と云ふ資産は、何もない淳吉ではあるが、著物の一枚や二枚位はどうでもよかつた。それなのに、相手の老爺は、その著物を必死になつて盗んで居る。命懸けて盗んで居る。淳吉夫婦に取つては、有つても、無くても格別變りのない品物に、彼は必死になつて居る。牢に叩き込まれる危険を冒してまで、必死になつて居る。必死になつて居る方向は、罪惡の方向である。が、兎に角必死は必死である。

淳吉夫婦は、その品物を失つても、面白半分上調子で、それを取り返す手續をして居る。その間、相手は牢獄に冷たい苦悶の夜を過して居る。淳吉は、英語を習ひかけた時の讀本に、惡戯な子供が、蛙に石を投げ付けることを書いて在つたのを覚えて居る。その時に石を投げられた蛙が、

「貴方に遊びであることが、我々には死である」と抗議することを書いてあつた。あの岡本と云ふ禿げ頭の老爺には牢獄であることが、淳吉夫婦に取つては、何であつたらうか。

殊に、盜られたものを、スツカリ取り返した今では、あの老人と淳吉等との物質上の勘定は済んで居る。たゞ、あの老人は一度盜つたことは盜つたものゝ、直ぐ奪ひ返された銘仙一つの爲にも、何年と云ふ苦役を忍ばねばならないのだつた。淳吉には有つても無くても、何うでもいい、あの銘仙をホン

の一月ばかり著た爲に、何年となく苦しまねばならぬ老人の事を思ふことは彼に取つて、決して快いことではなかつた。家に歸つて、妻に著物を見せながら、いろ／＼な話をする

と、
「まあ！ 著て居たの。それなら一層のこと上げればいゝのに」と、彼女は云つた。著物に就いては、何よりも執着の深い彼女まで、さう云つたことは、淳吉に取つて一寸愉快だつた。

そんな事があつてから、十日ばかりした頃だつた。淳吉はある日外出しようとして、着更へながら、足袋を探したが、見付からなかつた。

「足袋！ 足袋！」と、性急な淳吉は、臺所で仕事をして居る妻を、急ぎ立てた。

「押入れの右の方に、盗人が呉れた箱があるでせう。あの箱に入れてあるの。足袋を入れるのに丁度いゝから」と妻は臺所から云つた。

押入れを開けると、いかにもあの岡本と云ふ老爺が置いて行つた水色のボール紙の箱があつた。淳吉は、その箱から自分の足袋を取出しながら、思つた。品物を取り返したので、あの老爺との物質上の勘定が済んで居ると思つたのは、淳吉の思違だつた。俺の方がお釣を取つて居る。さう考へると妙な

くすぐつたい苦笑ひが、浮んで來るのを淳吉は感じた。

出世

讓吉は、上野の山下で電車を捨てた。

二月の終で、不忍の池の面を、撫で、来る風は、まだ冷めたかつたが、薄暖い早春の日の光を浴びて居る、楓や櫻の大樹の梢はもうほんのりと赤みが、つて居るやうに思はれた。

随分図書館へも来なかつたなど、讓吉は思つた。図書館で、ゆつくりと半日を暮し得るほどの暇もなかつた過去一二年の生活が、今更のやうに振りかへられた。それと同時に、さうした繁劇な生活から、やつと逃れる事が出来て、呑気に図書館へでも来られるやうになつた現在の境遇を欣ばずには居られなかつた。

もう一二年も来なかつたかも知れない。いや職業を得てからは、一度も来なかつたかも知れないなど、彼は思つた。兎の耳のやうに、ひつそいだやうに突立つて居る白い建物、安定を保つて居るやうで、その癖今にも落ちかゝりさうに思はれるあの白煉瓦の建物にも、永い間足踏みもしないなと思つた。

図書館の事を考へ出すと、彼はその中で過したいろ／＼な

その時以來、どんなにあの図書館の世話になつたことだらう。最初入學した専門學校を退學されて、行き所もなくブラブラと半年ばかりの月日を、殺さなければならなかつた時には、どんなにあの建物の有難さが判つただらう。

高等學校へは入つてからも、幾度通つたかも知れない。まだ、そればかりではない。つい二年前、大學を出てから職業に、ありつく迄の半年間を、彼はやつぱり図書館で暮して居たのだ。その時代の図書館通ひは、彼に取つてはみぢめな事であつた。

大學を出ても、まだ他人の家の厄介になつて居て、何等の職業も見つからないのに、彼の故郷からは、もう夙くから、金を送るやうにと云つて来て居た。大學を出さへすれば、直ぐにも金が取れるやうに彼の父や母は思つて居た。またさう思はずには、居られなかつたのだらう。讓吉が學校を出るまでと云ふ言葉を、彼等は窮乏から来る苦しみを逃れる、唯一のまじなひのやうに思つて居たのだから。讓吉は、自分が就職難に苦しんで居る最中に、早くも金を送れと云つて来る母の無理解さに、いら／＼しながら、自分が學問をしたそのために家に負はした経済的な致命傷のことを思ふと、さうした性急な催促も、尤もと思はずには居られなかつた。

それで仕方なしに、彼は何うにかして、金を儲けることを考へた。さうして、こんな場合に、多少文筆の素養があるも

時代の自分の姿が、ひつきりなしに頭の中に浮んで来た。彼が、初めて東京へ出て来てから、六七年間の、暗いみぢめな學生生活の、何の時代の事を考へても、あの図書館の中で暮した半日なり一日なりの有様が、ハツキリと頭の裡に、浮んで来ないことはない。

彼が田舎の中學を出て、初めて東京へ来た時、最初には入つた公共の建物は、やつぱりあの図書館であつた。本好きの彼に取つては、場所にも人にも、何の馴染のない東京の中では、図書館が一番勝手が判るやうであつた。

田舎の中學生に有勝な、東京崇拜に原因して居るいろ／＼な幻影が、東京に於ける實際の建物、文物、風景、人物に接して、悉く崩れて行つてしまつた中でも、図書館に對する満足だけは、何時迄も残つて居た。田舎の設備の不十分な蔵書の少い図書館丈しか知らなかつた讓吉の眼には、あの図書館がどんなに宏大に完成されて見えただらう。その頃の彼には、東京に於けるいろ／＼な設備の中では、図書館の有難さ丈が一番身に染みて感ぜられた。

のが、考へつくやうに、翻譯をやつて見ようと思つた。彼は友人の紹介で、ある書店から出版されて居る「西洋美術叢書」の一卷を翻譯させて貰ふことにした。それは、ガアデナアと云ふ人の書いた「希臘彫刻手記」と云ふ本であつた。金色の唐草模様か何かの表紙の付いた六七百頁の本であつた。又その活字が、邦字の六號活字に比較するほどの小さい羅馬字で、その上ベツタリと一面に組んであるのであつた。一頁を譯するのにも、一時間近くもかゝつた。その六七百頁を、悉く譯したつて、所定の稿料の貰へる日は、茫漠として何日の事だか判らなかつた。それでも彼は、勇敢にその仕事を續けて行つた。その仕事をやる外には、金を取れる當は、少しもなかつたから。彼は、毎日のやうに、厄介になつて居る家からは比較的に近い、日比谷の図書館へ行つて、翻譯を續けてやつた。

その翻譯が、やつと六七十枚程、出来上つた頃だらう。ある日の事、彼は例の「希臘彫刻手記」と原稿紙と辨當とを、一緒に包んだ風呂敷を携けて、日比谷の図書館へ行つたが、図書館へ行つて仕事に取りかゝる前に一休みにと、その日の新聞を讀んで居たときに、ふと自分が携けて来た筈の風呂敷包が、無いのに氣が付いた。彼は、駭いて身のまわりを探し廻つた。が、彼の座席にも、新聞閱覽室の何處にも見當らなかつた。よく氣を落付けて、考へて見ると、電車から降りると

きに、もうあの包みを持つて居なかつたのに気が付いた。電車に乗る時に買った新聞を讀む時に、風呂敷包みが邪魔になつたので、自分の背と車臺の羽目板の間に置いたことに気が付いた。内幸町で周章で降りた時に、スツカリ忘れてしまつたのだと思つた。

彼は、その場合にそれほど大切な品物を、ぼんやり忘れてしまふ自分の腑甲斐なさか、しみじみとなさげなかつた。こんな、ぼんやりとして居て大切な品物を、容易く忘れてしまふやうでは俺は劇しい世の中に立つては、とても存在して行かれない人間ではあるまいかとさへ思はれた。

彼は茫然とした淋しい情ない心持で、先づ三田の車庫へ行つて見た。が、其處に居た監督は「巢鴨行の電車なれば、春日町の車庫か、巢鴨の車庫かへ、車掌が届けて居るでしやう。そんな風呂敷包なら誰も持つて行かないでしやう」と云つた。

彼は、監督の言葉で、やつと安心して、直ぐ引返して春日町へ行つた。三田から春日町迄の、あの長い丁場を、彼はどんなにいら／＼した心持で乗つた事だらう。が、春日町へ着いて見ると「希臘彫刻手記」は、其處へも来て居なかつた。「あゝきつと、本郷廻りの電車でしやう。それだと、巢鴨の車庫へ届けたでしやう」と、其處の監督が、彼の希望を繋いで呉れた。が、巢鴨まで行つて見ると、其處にもやつぱり

「希臘彫刻手記」は、来て居なかつた。

「見付けた車掌が持つて来たんでせうが、出發を急いだので、茲へは届けずにまた持つて行つたんでしやう。それだと、もう一度三田の車庫へ行つて見たら何うです」と、其處の監督が、また彼の消えかゝつた希望を繋いで呉れた。彼は、又巢鴨から三田までの長い線路を——東京の殆ど端から端を、頼りない不快で乗つた。が、三田の車庫にもやつぱり彼の風呂敷は見出されなかつた。

「電氣局へ明日あたり行つて御覽なさい。電車内の遺失したものは、一度は必ず彼處へ集りますから」と、前のと違つた車掌が、又彼に一縷の望みを傳へて呉れた。

誰かに持つて行かれたのだなと云ふ疑が、だん／＼明かな形を取り出した。さう思ふと、自分の横に坐つて居た印袴纏の男が、浚つて行つたのかも知れないと思つた。が、あの男が家へ歸つて「希臘彫刻手記」と原稿紙と辨當とを見出し、一體それを何にするであらうかと思つた。俺に、こんな迷惑をかけながら、向うでは少しも利益をしない、罪惡の中でもかうした罪惡が、結果的には一番性質の悪いやつかも知れないと、讓吉は思つた。

本屋から貸して呉れた原稿を無くした事、それは少しの義理を缺けば、濟むことだが、自分の金儲けの希望を、それほど些細に手輕に、ふいにしてしまつたことが、彼には堪ら

なく不快であつた。が、まだ丸切り失望するには當らない。明日電氣局へ行けば、都合よく届け出されてあるかも知れないと思つた。

が、翌日電氣局へ行つて見たが、やつぱり無かつた。念のため、警視廳の拾得係へ行つて見たが、やつぱり無かつた。もう盗られたのに違ひなかつた。困つて居る俺に取つては、あんなに大切のものを、ホンの出来心で盗る奴があるかと思ふと、讓吉は何となく腹立たしかつた。

が、丸善にでもあれば、さう失望するには當らない。五圓か六圓かの金を、何うにか都合して買へばいゝのだと思つた。彼は、さう思ひ付くと、その足で丸善へ行つて見た。が、やつぱり徒勞であつた。

「その本なら、去年あたり二三部来ましたが、とつくに賣切れてしまひました。御注文なら、取寄せます」と、云つたが、その頃は戦争の影響で、英國から本を取寄せるには、少くとも三四ヶ月、永ければ半年もの、時間がかゝつた。さうした餘裕が、この場合にある譯はなかつた。

彼は丸善を出てから、また新しい希望を見出した。

「あゝ若しかしたら、古本屋にあるかも知れない」
彼は、直ぐ神田へ行つた。そして、多くの古本屋は殆ど軒並に探して見た。が、あの金色の唐草模様は何處にも見出されなかつた。本郷も同じ事だつた。彼が、足と眼とをさんざ

んに疲らせて、その日の搜索をあきらめて、三田行の電車に乗つた時、また彼の頭には、新しい希望が湧いた。

「あゝ圖書館にあるかも知れない」

こんな考へ付き易い事を、今迄考へつかなかつた自分の迂遠さが、少し馬鹿らしくなつた。彼は電車が内幸町へ來ると、急いで飛び降りて、日比谷の圖書館へ行つて見た。が、其處のカタログには、幾度繰り直しても、見出せなかつた。

「あゝ上野、彼處が唯一のしかも最後の希望だ」彼はもう日暮れかゝつて居たにも拘はらず、後へ引つ返した。あの鐵の三層の階段を、どんなに急いで駆け昇つたか。そして、どんなにときめく心と險しい眼付とを以て Fine Arts—Sculpture の項を、探つたことだらう。そこで、運よく本當に運よく Gardner—The Manuscript of Greek Sculpture と云ふ字を見出した時に、讓吉の心はどんなに嬉しかつただらう。

「あゝやつと、救はれたな」と、思つた。

彼は、その翌日から毎日のやうに、上野の圖書館へ通つた。が、その仕事が多くなると、不便であつただらう。自分が本を持つて居た時には、朝起きた時のしばらくとか、床に就く前の二三時間などに執る筆が、どんなに仕事を進捗せしめた事だらうが、仕事の場所が制限され、従つて時間が制限されることに依つて仕事は少しも捗どらなかつた。と、

同時にその仕事そのものが、愈々しくなつて行つた。が、彼は根よく二三ヶ月間、毎日、その仕事をつゞけて行つた。彼が、唯一つの金儲けの方法として、その仕事を續けに行つた。その後、その書肆が、破産した爲に、本當は一文にもならなかつた仕事を、一生懸命に熱心に續けて行つたのだつた。

彼は、大佛の前を動物園の方へと、道を取りながら、そんな事を取りとめもなく考へて居た。その頃のみじめな自分の事を考へると、現在の自分の境遇が、別人のやうに幸福に思はれた。月々貰つて居た五圓の小遣から、毎日の電車賃と、閲覧券の費用とを引いた残り、時々喰つて居た圖書館の中の賣店の六錢のカツレツや三錢のさつま汁の事まで、頭の中に浮んだ。あの憤ましかつた自分の心持を思ふと、その頃の自分が、いとしく思はずには居られなかつた。

晝でも蝙蝠が出さうな暗い食堂や、取つく島もないやうに冷淡に、眞面目に見える閲覧室の構造や、司書係達のセビヤ色の事務服などが頭に浮んだ。その人達の顔も、大抵は宙で想ひ浮べることがあつた。

「あゝさう／＼あの下足番も居るなあ」と思つた。あの下足の爺、あいつの事は、時々思ひ出して居つたと、思つた。それは、讓吉が高等學校に居た頃から、あの暗い地下室に頑張つて居る爺だつた。

にか嫌^{イヤミ}人的になり、口を利くのが嫌になつて居るやうであつた。

二人はまた極端に、利己的であるやうに、讓吉には思はれた。二人は、入場者を一人隔きに引き受けて居るやうであつた。従つて、大男の順番に當つて居る時に、入場者が小男の方に下駄を差し出すと、彼はそしらぬ顔をして、大男の方を顎で指し示した。小男の順番に當つて居る時、大男の方へ下駄を差し出した場合も、やつぱりさうであつた。彼等は、下足の仕事を正確に二等分して、各自の配分の外は、少しでも他人の仕事をするを拒んだ。入場の場合は、それでもあまり大した不都合も起らなかつたが、退場者の場合に、大男の受持の札の者が、五六人もドヤ／＼と續けて出て大男が目の廻るやうに立廻つて居る時などでも、小男は濟し返つて居た。小さい火鉢にしがみつくやうにし、悠然と腰を下して居た。が、大男の方も、小男の手傳ひせぬことを、當然として恨みがましい顔もしなかつた。

讓吉は、その頃よく彼等の生活を考へて見た。同じ下足番であつても、劇場の下足番や寄席の下足番とは違つて、華やかな所が少しもなかつた。その上に彼等の社會上の位置を具體化したやうに、何時も暗い地下室で仕事をして居る。下足番と云ふ職業が持つて居る本來の屈辱の上に、まだ暗い地下室で、一日中齧めて居る。勤務時間が、何う云ふ風であつ

上野の圖書館へ行つたものが、誰も知つて居るやうに、正面の入口に面して、右へ階段を下りると、其處に乾燥床^{ドライベッド}があつて、其處から地下室の下足に、は入るやうになつて居る。その入口には晝でもガスが灯つて居る。その瓦斯の灯の下を潜るやうにしては入ると、そこに薄暗いしかし安瀾な下足があつた。讓吉はそこに働いて居る二人の下足番を知つて居た。殊に讓吉の頭にハツキリと残つて居るのは大男の方であつた。六尺に近い大男で、眉毛の太い一癖あるやうな面構へであつたが、もう六十に手が届いて居たらう。もう一人の方は、頭のテカ／＼禿げた小男であつた。

二人は怖ろしく無口であつた。下足を預ける閲覧者に對しても、殆ど口を利かなかつた。職務の上でも殆んど口を利かなかつた。劇場や、寄席、公會場の下足番などが客の脱ぎ放した下駄を取り上げて預かるやうになつて居るのと違つて、茲では閲覧者自身に下駄を取り上げさせた。又さうしなればならぬやうな設備になつて居た。若し初ての入館者などが下駄を脱いだまゝぼんやり立つて居る場合などに、此の大男の爺は、顎でその脱いだ下駄を指し示した。二人は如何なる場合にも、大抵は口を利かなかつた。二人の間でも、殆んど言葉を交はさなかつた。深い海の底に居る魚が、だん／＼その視力を無くするやうに、かうした暗い地下室に、他人の下駄をいぢると云ふ賤役に永い間従つて居るために、何時の間

たかは知らないが、讓吉が夜遅く歸る時でも、やつぱり同じく彼等が残つて居たやうに思ふ。来る年も、来る年も、来る月も来る月も、毎日々々他人の下駄をいぢると云ふ、單調な生活を繰り返して行つたならば、何んな人間でもあの二人の爺のやうに、意地悪^{イヂワル}に無口に、利己的になるのは當然なことだと思つた。何時まで、あんな仕事をして居るのだらう。恐らく死ぬまで續くに違ひない。恐らく彼等が死んでも、入場者の二三人が、

圖書館の下足の爺何時迄か

「この頃あの下足番の顔が見えないな」と、軽く訝かしげに思ふに止まるだらう。先きの短い年であり乍ら、残り少い月日を、一日々々あゝした土の牢で暮さねばならぬ彼等に、讓吉は心から同情した。

これは、讓吉がいつだつたか、ノートの端にかき付けた歌だつた。もとより拙かつた。が、自分の心持、下足番の爺に對する同情的な心持丈は、出て居るやうに思つて居た。

あの爺も不相變居るに違ひないと思つた。まだ俺の顔も、見忘れては居まいと思つた。高等學校時代に絶えず通つて居た上に、讓吉は彼等と一度いさかひをした事があつた。それは、何でも高等學校の二年の時だつたらう。

彼は、其の日何でも非常に汚い尻切れ草履をはいて居た。その頃、彼は下駄などは殆んど買ったことがなく、大抵は同室者の下駄をはき廻つたのだ。だが、その日は日曜か何かで、皆が外出したので、はくべき下駄がなかつたのであらう。彼が、平素もの通り、その汚い草履を手を取つて大男の方へ差し出すと、彼はそれを受け取つて、直ぐ自分の足のもとに置いたまゝ、しばらく待つても下足札を呉れようとしなかつた。

「何うしたんだ？ 札を呉れないか」と、讓吉は少しムツとしたので、荒つぽく云つた。

「いや判つて居ます」と、大男はいかにも、呑み込んだやうに、首を下げて見せた。

「君の方で判つて居ようが居まいが、札を呉れるのが規則だらう」

「いや間違へやしません。あなたの顔は知つて居ます」

「知つて居ようが、居まいが問題ぢやない。札を呉れたまへ。規則だらう」

「いくら規則でも、あんまりひどい草履ですからね」と、彼は煙管を、火鉢の縁にやけに叩いた。

「人を馬鹿にするな。何だと思ふんだ。幾ら汚くても履物は履物だぜ」讓吉は本當に憤慨して云つた。

あの二人は、やつぱり居るに違ひない。小さい火鉢に、ぶつりとも云はずに、くすんだ顔をして向ひ合つて居るに違ひない。あの生活から脱却する機會は死ぬまで彼等には來ないのだと讓吉は思つた。あの圖書館へ來る幾百幾千と云ふ青年が、多少の落伍者はあるとして、それ／＼目的を達して、世の中へ打つて出るにも拘はらず、あの爺は永久に下足番をして居る。あの暗い地下室から、永久に這ひ出されずに居る。さう思ふと、讓吉は自分の心がだん／＼暗くなつて行つた。

二年前迄は、ニコ／＼の緋を着て、穴のあいたセルの袴を着て、ニツケルの辨當箱を包んで、毎日のやうに通つて居た自分が、今では高貴織の揃か、何かを着て、この頃新調したラクダの外套を着て、金縁の眼鏡をかけて、一個の紳士と云つたやうなものになつて、下足を預ける。自分の顔を知つて居るかも知れないあの爺は、一體どんな氣持で自分の下駄を預るだらう。あの尻切草履を預けて、下足札を貰へなかつた自分と、今の自分とは夢のやうにかけはなれて居る。あの草履の代りに、柁目の正しく通つた下駄を預けることが出来るが、預る人はやつぱり前と同じ大男の爺だ。さう思ふと、讓吉はあの男に、心からすまないやうに思はれた。何うか、自分を忘れてしまつて居て呉れ、自分がすまなく思つて居るやうな氣持が、先方の胸に起らないで呉れと讓吉は願つた。そんな事を思ひながら、何時の間にか、美術學校に添う

何も札を上げなくたつて、間違はないと云ふんだから、いでしよう」と、爺はまだ頑固に抗辯した。讓吉は、自分の方に十二分の理由があるのを信じたが、大男の足の直ぐ傍に置かれて居る自分の草履を見ると、何うもその理由を正當に主張する勇氣までが、砕けがちであつた。下足に供へてある上草履のどれよりも、貧弱だつた。先方から借りる上草履よりも、わるい草履を預けながら、下足札を要求する權利は、本當から云へば存在しないものかも知れなかつた。

その時の喧嘩の結末が、何う着いたか、讓吉はもう忘れて居る。自分の方が勝つて下足札を貰つたやうにも思ふし、自分の方が負けて到頭下足札を貰へなかつたやうにも思へる。

が、兎に角あの事以來、あの爺は自分の顔を、ハツキリと覺えて居るに違ひないと思つた。無論、讓吉はさうした喧嘩をした爲に、あの男に對する同情を、少しも無くしはしなかつた。あゝした暗い生き甲斐のない生活を、あはれむ心は、少しも變つて居なかつた。

彼が、どんなに窮迫して居る時でも、圖書館へ行つて、彼等が昔ながらに、あの暗い地下室で、蠢めて居るのを見ると、俺の生活がこの先どんなに逼迫してもあす迄行くのにはまだ間があると云ふやうな、妙な慰めを感じると同時に、生涯日の目も見ずに、あの地下室で一生送らねばならぬ彼等を、悼ましく思はずには居られなかつた。

て、圖書館の白い建物の前に來て居た。左手に婦人閱覽室の出來て居るのが、目新しい丈で、門の石柱も支關の様子も、閱覽券賣場の様子も少しも變つては居なかつた。彼は閱覽券賣場の窓口に、近づいて十錢札を出しながら、

「特別一枚！」と、云つた。すると、思ひがけなく、

「やあ永い間、來ませんでしたね」と、中から挨拶した。讓吉は駭いて、相手を凝視した。それはまぎれもなくあの爺だつた。あの下足の爺だつた。

「あゝ君か！」と、讓吉も少しあはて、頓狂な聲を出した。向うはその太い肩をちよつと微笑するやうな形に動かしなが、何も云はずに青い切符と、五錢白銅とを出した。

讓吉は、何とも云へない嬉しい心持がしながら、下足の方へと下つた。死ぬまで、下足をいぢつて居なければなるまいと思つたあの男が、立派に出世をして居る。それは、判任官が高等官になり勅任官になるよりも、もつと仕甲斐のある出世かも知れなかつた。獸か何かのやうに、年百年中薄闇にうごめいて居るのは違つて、蒲團の上に坐り込んで、小綺麗な切符を扱つて居ればいゝ。月給の昇額はホンの僅でも、あの男に取つては、どれほど嬉しいか判らない、あんなに無愛想であつた男が、向うから聲をかけたことを考へても、あの境遇に充分満足して居るに違ひないと思つた。人生のどんな隅にも、何んなつまらなさうな境遇にも、やつぱり望みはあ

るのだ。さう思ふと讓吉は世の中と云ふものが、今迄考へて居たほど暗い陰惨な所ではないやうに思はれた。彼は平素よりも、晴々とした心持になつて居る自分を見出した。

が、それにしても、もう一人の禿頭の小男は、どうしたらうと思つて注意して見ると、その男もやつぱり下足には居なかつた。無論、圖書館の中でなくてもいゝが、あの男も世の中のどこかで、あの男相當の出世をして居て呉れゝばいと、讓吉は思つた。

我 鬼

彼は毎日電車に乗らぬ事はない。

従つて、電車の出来事に依つて、神経をいら／＼させられたり、些細な事から、可なり大きい不快を買つたりする事は毎度の事だつた。殊に、切符の切り方の僅かな間違などから起る車掌との不快な交渉は、勝つても負けても嫌であつた。車掌が乗客から、威丈高に云ひ込められて、不快な感情を、職業柄ぢつと抑制して居る所などを見ると、彼は心から、同情せず居られなかつたが、さて、一旦自分と車掌との交渉になると、譬へ自分の理由が不利であつても、大人しく負けて居るのが、不快であつた。また、譬へ自分が絶対に負けた時にも、人間に付き纏ふ負け惜しみは、きつと相手を不快にするやうな捨臺詞となつて、現はれずには居なかつた。兎に角、勝つても負けても不快だつた。日常生活の他の方面では、胸をクワツとさせるほど、憤慨したりする事の稀な彼も、電車の中ではよくさうした機會、或は夫に近い機會に出會す事が多かつた。

もう一つ電車に乗る時に、厄介な問題は座席に就いてどあ

つた。如何なる場合に席を譲るべきかと云ふ事は、毎日電車に乗る彼に取つて一寸した實際問題であつた。彼は、最初心の中で一定の標準を定めて置いて、夫に適合した人達には、直ちに席を譲る事にした。その標準の中には六十前後の老人とか、子供を脊負して居る人とか、外國婦人だとか、荷物を持つて居る人などが、含まれて居た。が、さうした自分一人の内規を守つて、機械的に席を譲つて吊革に掴まつて居ると、彼は席を譲つた事を、後悔する事が、段々多くなつて來た。殊に勤先からの歸りなどで可なり疲労を感じて居る時などは、吊革に掴まつて居る苦痛の方が大きくて、人に席を譲つたと云ふ快感で相殺する事が出来なかつた。さうした事が、度重なるに連れ、彼は自分自身の内規に囚はれて居る事が、段々馬鹿らしくなつた。それで此頃では、自分が本能的に席を譲りたいと思つた時、換言すれば、相手を見た時に、自然に立ち上れるやうな場合の外は、一切席を譲らない事にした。

従つて彼は、此頃では心持よく腰を下して居る時などは、

年寄に近い年輩の婦人などが入つて來ても、容易に席を譲らない場合が多くなつて來た。

次の話も、矢張電車の中で、席を譲るか譲らぬかと云ふ事に就いて起つた出來事である。

其時、彼は須田町から品川行きの電車に乗つて居た。尤も、須田町で乗つたのか、それとも上野廣小路邊で乗つたのか、ハッキリとは覚えて居ない。何でも最初、その電車に乗つた時、入口の所が馬鹿に混んで居た。まだ、勤務に就いてから、日が浅いと見える車掌が、聲を枯らしながら、乗客を中央部へ送るやうに促して居た。が、乗客はかうした場合に、普通であるやうに、平然と銘々その吊皮に、固着してしまつたやうに動かない。こんな時、彼は車掌の依頼に應じない乗客達に面當として自分丈は、グン／＼中央部へ突進するのが、好きであつた。尤も、さうする事に依つて、周囲の乗客に對して、輕微な道徳的優越を感じたいと云ふやうな、子供らしい野心が、幾らか含まれて居ない事もなかつた。

その時も彼は、中央部が、空き切つて居るのにも拘はらず、入口の所でゴタ／＼重なつて居る乗客を、幾何か故意にグン／＼押し除けながら中央部の方へ進んだ。進んで居る中に、彼はふと自分の押し別けやうとする乗客の中に、一人の老婆が混じつて居るのに氣が付いた。彼は、その老婆にならべく衝動を興へないやうに注意して、その傍をすり脱け

のを見て、義憤を感じた事があるが、その場合は、交叉點へ着くと、老婆が直ぐ下車してしまつたので、後から考へると、彼女は下車の用意として立ち上つて居たのかも知れないと思ふと、彼の義憤は餘りに、先走りではなかつたかと、自分で可笑しかつた。

が、今の場合は、下車の用意として立つて居るとは思へなかつた。今川橋の停留場に着いても、老婆は入口の方へ、一歩も近付かうとはしなかつた。

電車が動揺する毎に、老婆の身體は痛々しげに揺れて居た。席を譲るか、譲らぬかは、全く個人の自由であつた。譲らぬ事が必しも道徳的には罪惡でないにしても、七十の老婆が——洞び切つて吊皮に縋る力さへ、充分でないと思はれるほどの老婆が、東京の大通の電車の中で、席を譲られずに居ると云ふ事は、夫は決して愉快なる光景ではなかつた。彼の感情を少しく誇張して云へば、其れは文明の汚辱であつた。淺ましく思はずには居られなかつた。彼は老婆の前後左右、一間ばかりの間に恬然として、腰を掛けて居る乗客を、心から賤しき居るには居られなかつた。之ほど淺ましいことが、行はれて居るにも拘はらず、否自分達が行つて居るのにも拘はらず、老婆の存在には殆ど氣の付かぬやうに、平然として收まり返つて居る乗客の一群を、彼は心から憎み始めたのである。

た。

やつと、乗客の疎な中央部へ來た彼は、一番眞中の吊皮を物色して、夫に掴まつた。自分が、車掌の指示を、否電車内の道徳を、最も正直に遵奉した者であると云ふ子供らしい得意が、彼を少し愉快にしたのは事實であつた。彼は、吊皮を手にしながら、自分が押し別けて來た乗客の群、夫はある意味から云へば、——電車内の道徳の關する限りでは、確に彼自身よりは、劣等者である人々を見顧つた。

その時に彼は、先刻——四五秒前の事を先刻と云へるならば——の老婆を、初て歴然と見たのである。彼女は、よく見ると、七十に近かつた。或は越して居るかも知れなかつた。腰こそ、まだ曲つて居なかつたが、盲目縞の衣類に腰の邊には、もう何等の支持力も残つて居るらしくは見えなかつた。細面の顔立のよい顔は凋びてしまつて、齒の無いらしい口を絶えずモグ／＼動かして居た。

が、彼女の存在が、最も彼に衝動を興へたことは、彼女が、その瘠せ凋びた右の手を、露に延ばして吊皮に依つて、漸く身體を支へて居る事だつた。

老年に近い婦人が、吊皮を持つて居る事などに、可なり無關心になつて居た彼にも、此の老婆が吊皮を持つて立つて居る光景は、何うにも辛抱が出来なかつた。彼は前に一度、日本橋の交叉點近くで半白の老婆が、吊皮を持つて揺られて居る

老婆の立つて居る事に對して、最も責任のある乗客は、老婆が夫に面して立つて居る、運轉手臺に向つて右側の座席の客でなければならなかつた。彼は、可なり熱した眼付をしなから、その邊の乗客を、一々點檢した。老婆の直ぐ前に居る三人は女連れの乗客であつた。そして、眞中に居る女が、丁度物を云ひ始めた位の女の子を膝の上に懷いて居る。その女の子を、左右から二人の女が、交り／＼にあやして居た。此の女の三人連に老婆に席を譲らない責任を負はせるのは、少しく酷であつた。中央に居る子供を懷いて居る女に、席を譲ることを求めるのは、元より無理であつた。子供をあやすと云ふ無邪氣な仕事の爲に、老婆の存在に氣の付かない左右の女を咎める譯にも行かなかつた。彼は、此の三人の女を、心の裡で放免して、女達の兩側を點檢した。彼に近い側に居るのは、相場師の手代らしい二十四五ばかりの男であつた。高貴織か何かの揃を着て、烏打帽を被つて收まつて居る。位置から云つても、年輩から云つても、此の男が、最初に老婆に對して、席を譲らなければならぬにも拘はらず、彼は老婆の存在などは、テンで眼中にない如く、視線を固定したまま、何やら考へて居る。女達の向う側にある男は、もう五十に近い男だが、薄菊石のある顔が、その男の心の裡の冷淡さを示して居るやうに、老婆に席を譲るべき屈竟の位置にあるに拘はらず兩足をフンぞり延ばしたまま、平然と坐つて居る。

彼は、此の二人の男を最も多く輕蔑したが、此の二人の男の右と左にも、彼の輕蔑に價する屈竟な——吊皮に擱まつて立つ能力のある男が、幾人も並んで居るのだ。

又、縦令老婆が背を向けて立つて居ようとも、その向う側の座席の人達も、老婆に席を譲るべき責任を、忌避すべき筈のものではなかつた。而も、向う側の席に居る乗客は、何の男も——皆、吊皮に擱まるにも、少しの故障も持つて居ない人達ばかりであつた。

尤も、老婆の周圍には、乗客がゴタ／＼と、立ち込んで居るので、老婆の存在が、彼等の凡てに意識されて居るか、何うかは疑問であつた。

が、兎に角席を譲る資格——立つて居る彼には、その資格は絶對になかつた——を持つて居る十人に餘る乗客が、一人も衰へた老年の婦人に席を譲らないと云ふことが、彼の心を可なり痛々しく傷つけた。彼は、自分が座席を持つて居ない事を、何れ程残念に思つたか知れなかつた。

此の老婆が、もつとよい衣装をして居たならば、彼女は、とつとくに席を譲られて居たのに相違なかつた。

が、もう十一月の中旬であるのに、薄汚れた袴を着て羽織も着て居ない彼女が、周圍から相當の敬意を拂はれないのも、無理はなかつた。が、彼女が貧しければ貧しい程、席を譲られないで立つて居ることは痛ましい事に相違なかつた。

の爲に席が作られた刹那、老婆の事は全く何時の間にか忘れて居て、自分が其處へ坐らうとしたのである。恐らく老婆が、惶惶として席に着いたのは、彼を競争者として、座席を奪はれる事を、怖れた爲であつたかも知れなかつた。

その時、彼の良心は、明かにペソをかいて居た。彼は不快な齟齬たる氣持にならずには居なかつた。彼の負け惜しみは、老婆の爲に、憤慨して居た方が、彼の心の第一義的な状態で、席が空いた刹那、其處へ坐らうとした心は、夫は發作的な出來心だと解しようとした。が、さうした解釋で以て、彼の心は少しも慰まなかつた。

二十四五の手代風の男や、五十格好の男が、席を譲らないことを憤慨したのが、彼等に對して相濟まぬやうに思はれて仕方がなかつた。

老婆に對して席を譲らない事を、憤慨したのも、夫は老婆其物の爲ではなくして、自分の道德的意識がその事實に依つて、傷つけられた事に依つての憤慨であつて、全く利己的なものであるかも知れないと思つた。

彼が、吊皮を持つ手を放して、座席の方へ近づかうとした事は、たゞ心持丈の活動で、嚴密に云へばまだ行爲と名付けてよいか、何うかさへ分らなかつた。たゞ、上半身丈を僅かにその方向へ動かしたに過ぎなかつたかも知れなかつた。が、其僅かの行動も、彼の心持を根柢から掻き擾すのに充分であ

彼は、老婆が不當に立たされて居ることを、電車が須田町から本石町邊迄走る間、憤慨し續けて居た。婦人が立つて居る間は、男子は一人も席に着かないと云ふ、外國人の習慣なぞを思ひ出しながら、彼は老婆の附近に腰を掛けて居る乗客を思ふ存分蔑すんで居た。殊に、二十四五歳の手代風の男と五十格好の男とが、彼の憤慨と輕蔑との第一の的であつた。その裡に、彼は憤慨と輕蔑と見え、少しぼんやりした氣持になりかけて居た。その時であつた。電車は急に速度を緩めたかと思ふと、日本橋の停留場に止まつた。電車が止まると、車内が急に動揺した。ふと、氣が附いて見ると、例の三人の女連は一齊に立ち上つて降りようとしてゐる。彼は「席が空いたな」と、思つた。さう思ふと、彼は其後へ腰掛けたと思つて、吊皮を持つて居る手を離して、其方へ動かうとした。その時に、彼は自分よりも先きに、先刻の老婆が惶惶として、飛び突くやうに、その空いた座席に縋り付いて居るのを見たのである。

夫を見ると、彼は自分が作つて置いた陥し筈の中へ、落ち込んだやうな絶望的な駭きを感じた。彼は何時の間にか自分自身、老婆の存在を忘れて居たのである。老婆に對する周圍の冷淡さ、無情さを憤慨して居る裡に、その憤慨の基因である老婆の事は、何時の間にかお留守になつて居たのである。あれ程、老婆の爲に席がないことを悲しんで居た彼は、老婆つたのだ。

彼はスツカリ悄氣てしまつて居た。彼の行動が、誰人に見露はされた譯でもなく、誰人から非難された譯でもなかつたが、夫は濟ました顔をしながら、何か悪事を爲ようとした處をうまく尻尾を、擱まれた感じと、少しも異つては居なかつた。

彼は思つた、人間は自分で意識し注意し、警戒して居る中は、どんな道德的な様子でも、爲ることが出来るが、一旦その注意が無くなると、忽ち利己的な尻尾を出してしまふのだ。もし、さうだとすると、その尻尾を露出して、二十四五の手代風の男のやうに、又薄菊石の五十格好の男のやうに、吊皮に揺られて居る老婆を傲然と睥睨しながら、ふんぞり返つて居る方が、何れほど男らしいか分らないと思つた。が、さう考へて來ると、彼は心の裡に漲つて來る落莫たる心持に堪へなかつた。

彼は、ふとAと云ふ友人が「我鬼」と云ふ俳號を付けて居るのを思ひ出した。Aは、俳號の謂はれを訊かれる度に、「君、支那人は自我と云ふ意味を、我鬼と云ふのだ。道は支那人丈あつて、うまく云つてあるだらう」と、何處でも得意になつて説明した。

我鬼！ 我鬼！ さうした言葉が彼のその時の心に、ピシ／＼と徹へて來るのを覺えた。

妻の非難

敬吉は結婚して間もなく、妻が仲人から、敬吉が將來文學博士にでもなつて大學の教授にでもなるやうな、未來のある文學者だと聞かされて來たといふことを、妻が何かの序でに話すのを聞いて驚いた。驚いたといふよりも、つい噴出してしまつた。學生時代を随分放縱に身を持類して、やつと大學を出た敬吉に、文學博士になつて大學の教授になどといふことは考へて見るだけでさへ滑稽であつたからである。

敬吉は、出鱈目を言ふ仲人に腹が立つた。敬吉は、何にも知らない朴訥な家庭の父や母を騙してその娘を貰ひたくはなかつたから。敬吉は結婚する前に、仲人に、相手に自分を買彼らせないやうに幾度も念を押してあつた筈だから。

が、仲人——それは敬吉の義兄に當つてゐたが、——何も悪氣があつて世間でありふれた仲人口を利いたのではないことはよく分つてゐた。小心な律義者の義兄は、中學時代に首席を占めたことのある敬吉は高等學校へ行つても大學へいつてもやつぱり首席を占めるものだと、心から信じてゐたらしいから。が、氣の毒なのは妻であつた。三十圓をこゝの月

給を貰つて新聞社の外交記者をしてゐる敬吉の處へ、將來は大學教授の夫人にでもなれるやうな夢を持つて來たのだから。けれども柔順な彼女は、敬吉の現在や、未來がどんなものであるかといふことを、明らさまに説き聞かされた後も、さう落膽もしてゐなかつた。

が幸運は、敬吉の上にも廻つて來た。無論大學教授にでもなれるやうな方向へ向いて行つたのではなかつたけれど、妻と結婚して一二年のうちに敬吉は、文壇から新進作家として迎へられてゐた。文名といつたものが、だんだん高くなつて行つた。大學教授になれなくても、妻や、妻の父母に對して、幾らか云ひ譯が立つやうになつてゐた。

結婚してから三年目に、敬吉は妻を連れて故郷に歸省した。故郷へ錦を飾るといつたやうな氣持がした。その上、丁度その時敬吉の故郷では勢力を持つてゐる大阪の大新聞へ、敬吉の短篇が載つたので、敬吉の文名は故郷の人々、特に妻の父や母にもはつきり分つてゐた譯だつた。

敬吉は、自分の實家が手狭なので、滞在中妻の家に起臥してゐた。妻の父も母も敬吉の出世を認めてゐて呉れた。所が、二三日中に、妻がこんなことを言つた。

「お父さんがこんなことを言つてゐるのよ。敬吉の小説を読んでゐるが、これから大いに勉強して、今度は、繪入りの方へ書くやうにならなきゃいけない、と言つてゐるのよ。だから、私腹が立つたのよ。繪入りの方は、通俗小説といふんでせう。あれよりも短篇の方が本當は可いんでせう。だから私、お父さんに、さう言つてやつたのよ。でもお父さんには分らないのよ」

妻は一寸憤慨してゐるやうに見えた。元來妻は、敬吉と結婚するまでは文藝に對する趣味は少しも持つてゐなかつた。が、敬吉に薦られるともなく、敬吉の處へ送つて來る雑誌などを讀んでゐるうちに、段々小説に親しんで行つた。無論それも、敬吉の小説や敬吉の友人の吉川の小説は、六ヶ敷くつて詰らないとか、山野さんの小説は奥さんを可愛がつてゐるから好きだ、などといふ程度に過ぎなかつた。それでも何時の間にか、純文藝小説と、通俗小説の區別が分つて來たのだと思ふと、敬吉にもそれがちよつと嬉しかつた。それに、何時もは敬吉の文名を、冷かし半分に低く評價しようとしてゐる妻が、第三者に向ふと、敬吉のために辯護して呉れたことが嬉しかつた。その時敬吉は妻に言つた。

「さうだよ。繪入りの方なんか書くやうになつちやあ、駄目だ。繪入りの方は、小説としては一段格が下がつてゐるんだ。お父さんによくさう言つて置けよ」

妻が、彼女の父親に更めて抗議したか如何かは知らなかつた。

それから一年経つた。敬吉は同じ大阪の新聞に、繪入りの小説を書くことになつてゐた。その新聞社と特別の關係があつた故もあるが、しかし敬吉自身、通俗小説に興味を持つてゐない譯でもなかつた。それを眞面目に眞剣に書きさへすれば、藝術的にも價値が無いことはないと思つてゐた。友人の甲野に薦めて、通俗小説を書かせたのも敬吉だつた。敬吉は、友人や知己や、乃至は文壇からでも通俗小説を書くことを非難されたら、そこに答へるだけの言ひ分は持つてゐた。

自分だけの生活については、敬吉は妻に何事も言はなかつた。妻は、豫告が出ると、敬吉が通俗小説を書くことを初めて知つた。妻はちよつと驚きながら言つた。

「あら、今度は、貴君は繪入りの小説を書くの。そんなら、去年、うちのお父さんにあんなに繪入りの方の悪口を言ふんぢやなかつたわ」

妻は、如何にも何か失策したやうに言つた。

敬吉は、通俗小説を書いたについて、誰からも非難されな

かつた。中には賛成の意を表して呉れた人もあつた。その中で、妻の非難だけが、敬吉の胸に痛かつた。

啓吉の誘惑

「女中に飢える！」
その頃の、啓吉夫婦の女中を求める心持は、飢えて居ると云ふ言葉が、一番よく當つて居た。

三月の初に、一年ばかり居た女中が、暇を取つて田舎へ歸つてからは、女中の居ない不便と不快とが、日にまし深く、感ぜられて居た。

啓吉の二つになる女の子は、一番手のかゝる年頃だつた。もう、母親の仕事をする間、母親の背中などに、ぢつと落着いては居なかつた。それかと云つて、片時も目を離すことは出来なかつた。

母親の手は、朝起きてから床に入るまで——否、床には入つた後までも、子供にかゝり切つて居た。
食事の支度をするときなど、子供は絶えず母親にまづはつて、邪魔をした。そんなとき、母親はいら／＼した聲をして、子供を叱つた。子供は叱られると直ぐ泣いた。母親のいらいらした聲と、子供の泣き聲とが、書齋に居る啓吉を悩ました。

「おい！ 泣かしちや駄目ぢやないか」
さう云つて、啓吉が妻を叱ると、妻はきつと、
「そんなに仰つしやるのなら、御飯の時だけでも見て下さいよ」と云つた。

が、啓吉は、子守など云ふことには、少しの興味も辛抱もない男だつた。彼は、自分の子供を、時々發作的に可愛いと思つて、抱き上げても、抱き上げた瞬間には、もう飽いて居た。

妻は、啓吉が少しも子供を見ないことを、いろ／＼な場合に、溢した。

「文ちゃんのお家なんか、お父さんが文ちゃんと下の坊つちやんとのお守をしとる。坊つちやんをおんぶして、文ちゃんの手を引いて、お風呂へ連れて行く。文ちゃんの父さん丈ではない、みさちやんとこだつて、鈴木さんの家だつて、みんなお父さんが子供を見て居る。女中のない家では、みんなさうぢや。時々、見て呉れな何うすることも出来ません」
啓吉は、妻の云ふことも本當だと思つたが、子守をするこ

とは、何うにも嫌だつた。

「何を云つて居るんだい。俺を文ちゃんのお父さんや、みさちちゃんのお父さんなんかと、一緒にして呉れては困るぜ。子供の世話なんか、女中を雇つて、させればいゝぢやないか」

「だつて、その女中がないんですもの」
「だから、何うかして探してやると云つて居るぢやないか」
「探してやる、探してやる云つて、ちつとも探して下さらないのですもの。たゞ、ぼんやり待つて居たつて、何時が来たつて、ありはしませんわ」

さう云はれると、啓吉は、言葉もなかつた。
妻と、三日にあげず、そんな云ひ争ひをしながら、その癖、女中を抄々しく探す氣には何うしてもなれなかつた。新聞に廣告したつて、友達に頼んだつて、さう急に、見つかる筈はないと云ふ肚もあつたので。

五月になつてからのある日、ずつと以前に頼んだことのある友達が、ひよつくり十六七の小娘を連れて来て呉れた。娘は、一寸小綺麗な身装と、女中には一寸惜しいやうな、可愛い顔をして居た。啓吉と妻とは、急に救はれたやうに欣んだ。

啓吉は、その小娘と應待するときでも、脹れるものにて、觸るやうな心持で、相手の氣に入りさうなことばかり云つた。啓吉は、自分の態度が、少し卑しいと氣が付くほど女

中に飢えて居た。

妻は、その晩、女中に子供を背負はせると、久し振に、いそ／＼と本郷まで、買物に行つた。二つにしては大きい子供を、負はされた女中の華奢な身體は、一寸いた／＼しく見えた。

「おい！ 電車で行くといふ」

啓吉は、妻に注意せずには居られなかつた。啓吉は、妻が氣を利かして、半襟の一つでも買つてやればいゝにと思つて居た。啓吉は、妻が歸つて來ると、そつと訊いた。

「おい！ 何か買つてやつたかい！」

「いゝえ！ 何も買つてやらなかつたわ、その代りおしるこを喰べさせたからいゝでせう」と、妻は答へた。

が、さう云つた啓吉夫婦の心持も、相手には少しも通じなかつたのだらう。その翌日早く起きた女中は、家へ一寸歸らして呉れと、云つて出かけたまゝ、何時まで待つても歸つて來なかつた。氣が付いて見ると、家へ歸る電車賃として彼女に與へた五十錢札が、小さく疊まれて女中部屋の隅に置かれてあつた。

「見ろ！ お前が來た晩に直ぐ、あんな重い子を負はして、本郷なんかへ連れて行くからだ」

啓吉は、さう云つて、女中に逃げられた鬱憤を、妻に洩した。妻は情氣で居た。

裏切られたやうな、寂しいイヤな氣がして、二三日不愉快だつた。

それから、間もない頃だつたから、彼女が突然啓吉の家を訪ねて來たとき、啓吉が手をさし延べて、歓迎したのも當然だつた。

それは、六月に入つてのある日だつた。二階に居た啓吉は、妻があわたゞしく、階段を上つて來る音に、振り返ると、彼女はいつも、嬉しいことがある時に、するやうに、顔全體を崩して笑つて居た。

「何だい！」
啓吉は、一寸叱るやうに云つた。

「今××町の桂庵が來て居ますの。女中があるから、使はないか。而も、當人は是非、家で使つて貰ひたいのですつて！」

「家で使つて貰ひたいつて！ 本當かい！」
啓吉は軽い驚喜を感じた。

「桂庵がさう云つて居ますの、父ちゃんの名前を知つて居るんですつて。是非家で使つて貰ひたいのですつて！ 置いてさへ呉れよば、喰べさして呉れる丈でもいゝんですつて！」
啓吉は、「おや！ おや！」と思つた。彼は女中が見付かつた欣びと、くすぐつたいやうな得意さとして、自分の相恰が崩れ

るのを抑へることが出來なかつた。

「俺の名前を知つて居る。そんなことを云つて居るのかい！」
「さうですつて！ 父ちゃんの名前を、慕つてわざ／＼田舎から出て來たのですつて」

「そりや、是非置いてやらなきや、いけまいねえ。それで、其人は下へ來て居るのかい」

「いゝえ！ 桂庵丈が來て居ますの。もし、家で置いてやる」と云へば、お湯へ行つて髪を結つてから來るんですつて」
「さうかい！ ぢや、置いてやるから、なるべく早く來るやうに云へよ」

啓吉が、さう云ふと、妻は嬉しさうに、
「到頭、女中があつたわね」と、云ひながら、いそ／＼しながら、下へ降りて行つた。

啓吉は、急に明るい華やかな氣持になつて居た。彼は、二重の欣びを感じた。彼が、女中に飢えて居るところへ、喰べさせる丈でいゝから、置いて呉れと云つて居る。それ丈でも可なり大きい欣びだつた。若い女性が、兎に角彼の名前を慕つて田舎から上京して來る。それがまた、他の一つの大きい欣びだつた。

彼は、さうした幸運を——彼は夫をさう感じた——心から、欣ばずには居られなかつた。
無論、彼は文學少女だなど云ふことに、直ぐ氣が付いた。

そして、文學少女が、女中として、必ずしも適任でないことを感じて居た。もし、いやに生意氣で、半可通な女であつたら困るなと思つて居た。が、女中に飢えて居る啓吉には、そんなことは問題でなかつた。此方から、いくら探しても求め兼ねて居る。まして、向うから来て呉れると云ふのであるから、手をさし延べて迎へずには居られなかつた。

それは、午前の十時頃だつたが、それから晝過ぎまで、啓吉夫婦は、彼女の来るのを心待に待つて居た。もし相手の心が變つて急に來なくなつたりしはしないかと、心配したりした。一時頃に、それらしく格子の開く音がした。妻と暫らく下で話して居たらしいが、妻はやがて二階へ上つて來た。

「參りましたから、お會ひになつて下さい」

さう云つた妻は、小聲で附け加へた。

「色の白い綺麗な人。少し綺麗すぎるわ。あんな人使ひにくくはないかしら」

啓吉は、妻の言葉に依つて、可なり興味を唆られた。彼は、軽い興奮を感じずには居られなかつた。

「行つて會つて御覽なさい。女中には惜しいやうな人よ。ちよつとも、田舎者らしくない人よ。それに妾よりも年が上だわ」

「身装は？」

「身装は、どちらかと云へば、悪いわ。モスの幅の狭い帯な

んかしめて居るわ。羽織も、綿セルか何かだわ」

「ぢや兎に角、會つて見るかな」
さう云つて啓吉は、妻の後から、階段を降りたが、女中の目見得をするやうな心持とは、全く違つて居た。そんな用事的な氣持は、少しもなく、田舎から自分を慕つて來て呉れた女性の愛讀者に會ふと云ふ華やかな情味のある氣持だつた。女は、玄關の次ぎの三疊に、——それはやがて、彼女の部屋になるべきものだつたが——桂庵の主人と一緒に、せましく坐つて居た。

見ると、彼女は輪廓の正しい、明るい、田舎者とは思はれないやうな、智的な顔をして居た。やゝ、粗剛な氣がしたが、美しいと云つてもいい女だつた。

彼女は、啓吉の顔を見ると、

「あゝ、先生」と、云つてお辭儀をした。懐かしさうな微笑が、彼女の大きい眼に浮かんで居た。それは啓吉を、認知した微笑だつた。それは、初対面ではあるものゝ、作品を通じては啓吉を知りぬいて居ると云ふ微笑だつた。その微笑を見ると、啓吉は直ぐその女に、好意を持つことが出來た。

「國は何處です」

啓吉は、最初にさう訊いた。女は、少しも含羞まないで、ハキ／＼とした口調で答へた。

「あの長野縣です」

「長野縣の何處です」

「長野です」

「長野市ですか。それで、僕の家を初から目指して來たのですか」

「さうです」と、女は語尾の上る明確な調子で云つた。後から判つたことだが、「さうです」と語尾にアクセントのある言葉使ひをするのが、彼女の口癖だつた。

「あの、實は昨夜飯田町の驛へ着くと、直ぐ傳でお宅へ伺つたのです。ところが、もう十一時を過ぎて居たものですから、表をお閉めになつて居たのです」

「それで、そのまま歸つたのですか。まあ叩き起して下さればいゝのに、表は閉つて居ましても、十二時頃までは、いつも起きて居るのです」

妻が、横から口を入れた。

「あの、それでお宅の前で、何うしようかと思つて、うろろろして居ますと、此方の三軒目のお家の娘さんが通りかゝつて、もう今夜は遅いから、初てのお宅へ上るのは失禮だから、兎に角近所の桂庵へでも行つて、一晩止めて貰つて、明日早くお願に行けばいゝと云つて、桂庵へ案内して呉れたのです」

「ぢや、近藤さんの初ちゃんが、連れて行つて呉れたんですわね。まあ親切ですわね」と、妻は啓吉に云つた。が、それ

よりも、啓吉は女の可なり突拍子なやり方に、驚いて居た。「それにしても、上京する前に、僕の家へ一度は問ひ合はして呉れなければ困るですねえ。丁度女中が居なかつたから、よかつたやうなものゝ、女中が居たら、貴女を置いて上げる譯に行かなかつたのですもの」

啓吉は、一寸相手をたしなめるやうに云つた。が、相手は少しも悄氣なかつた。

「でも、お宅の番地が判らなかつたのですもの」

「ぢや、何うして飯田町から、直ぐ來られたのです」

「汽車を降りますと、直ぐ自動電話で××社へ訊き合はせたのです」

「まあ！」妻は驚いて聲を揚げた。内氣で、カラ意氣地のな妻には、彼女の行動が、驚異に値したのだらう。

「随分大膽だな！」

啓吉も、相手の無謀と云つてもよい程の、大膽さに驚かすには居られなかつた。まだ二十を過ぎて間もないと思はれる若さで、しかも妙齡の女の身として、啓吉の名前を當にして、飛び出して來る。停車場で、雑誌社へ電話をかけて、宿所を知つて、傳で乗り付けて來る。この大膽な、恐れげのないやり方に、驚かすには居られなかつた。それと同時に、「こりや悪くすると、大變な女かも知れないぞ」と云ふ警戒の念を起さずには、居られなかつた。

「それで、今まで何處に居たのです」
 啓吉は、今までの経歴を、出来る丈、訊き質さねばならぬと思つた。

「この三月まで、長野の製絲會社に居たのです。でも、急に不景氣になつて、仕事がなくなりましたから」

「ぢや、女工をして居たのですか」

啓吉は幻滅に似た氣持がした。

「さうです」
 女は、少しも恥かしがらないで答へた。彼女自身で肯定して居る言葉を、疑はねばならぬほど、彼女には少しも、女工らしいところはなかつた。都會的で、智的で、相當の教養がある女性としか見えなかつた。

「女工！ はあ！ それで僕の小説なんか読んで居るのですか」

「はい」

女は、一寸恥しさに微笑しながら答へた。

「單行本で讀んだのですか。雑誌で讀んだのですか」

「主に雑誌で讀みました」

「一體どんな雑誌を讀んで居るのですか？」

「『新潮』と『女の世界』は、毎號缺かさず、讀んで居ます。『人間』も大抵讀んで居ます」

啓吉は、心の裡で可なり駭いた。長野縣は、豫てから文化

の進んだところだとは、聽いて居たが、製絲會社の女工が、高級な文藝雑誌を讀んで居ようとは夢にも思つて居なかつた。そんな人達にまで、自分達の作品が讀まれて居る以上、作家なども、ウカ／＼しては居られないと云ふ氣がした。

「それで、貴女の東京へ來たのは、女流作家にてもなる志望なのですか」

「いゝえ！ 私なんか、そんな天才はありませんわ。たゞ、文學者の方の生活を見たいと思つて參つたのです」

「文學者の生活を見る！ そいつは、駭いたな。文學者の生活なんか見たつて、仕様がないうちやありませんか」

啓吉は、あるくすぐつたさを感じて、苦笑せずには居られなかつた。

「いゝえ。私はそれが志望なのです」

女は、眞面目な顔で云つた。

「ぢや、僕の家でもよかつたら、ゆつくり見て居て下さい。その裡、何か勉強でもしたかつたら、出来る丈便宜を計つて上げますから」

それから、啓吉は給金の話をしたが、女はそれに對しては、いくら強ひても、何の要求もしなかつた。

啓吉は、やがて妻に委して、二階へ上つて來た。

啓吉は、急に何だか新しい生活が、自分の前に開けたやうな氣がした。手不足で困つて居た家庭が、急に此の華やかな

一員を加へる。自分を崇拜して居る若い女性が、女中として仕へて呉れる。さう思ふと、住み馴れた家の中が、急に明るくなつたやうに思はれた。

二階へ上つて、暫くすると、急に階下から、女同士の高笑ひが聞えて來た。妻と彼女とが、一緒に笑ひこけて居るのだつた。啓吉は、どちらかと云へば、人見知りをする妻が、彼女とこんな早く親しんで居るのを欣んだ、すると、やがて妻が、階段の下から啓吉を呼んだ。

「まあ、父ちゃん！ 一寸降りて來ない？ お岸さんは（彼女）は、もうその女の名前を呼んで居た）父ちゃんの『N夫人の遺品』や『父の愛』などを、みんな讀んで居るんですつて、家の事なら何でも知つてをるんですつて。それに、何時か『新潮』に出た寫眞を知つて居るのですつて。まあ、妾恥しいわ」

さう聽くと、啓吉も二階から降りずには居られなかつた。降りて見ると、妻と彼女とが、顔を眞赤にして笑ひこけて居た。

小説を書く者には、共通して居る心持だらうが、自分が名を成した後の作品を讀んで呉れる愛讀者よりも、自分の無名作家時代乃至は、文壇に出たばかりの頃の古い作品を、讀んで居て呉れる愛讀者が、一番嬉しかつた。丁度自分の作品を、最初に活字にして呉れた編輯者の好意を、いつまでも有難く

思つて居るやうに。

『N夫人の遺品』も『父の愛』も、二つとも啓吉に取つては、出世作とも云ふべきものだつた。兩方とも自分のことや、自分の家庭のことを書いたものだつた。愛着もあれば自信もある作品だつた。啓吉は、自分の作品を愛して呉れる者、それを本當の知己だと思つて居たが、殊にかうした古い物を、讀んで居て呉れることに對して、感激せずには居られなかつた。

「あんな昔の物を讀んで居て呉れるのですか」

女は笑つて肯づいた。

「先生のお作の中でも、あの二つが、私一番好きなのです」

さう云はれると啓吉の女に對する親しみと好意とは、一時に深くなつた。

「あの、いつか『新潮』に出た寫眞を、お岸さんはよく覺えて居るんですつて。妾と美奈ちゃん、寫眞よりも、實物の方が綺麗ですつて。父ちゃんは、實物より寫眞の方が、綺麗ですつて。もつと若い人かと思つて居たんですつて」

妻がさう云つて笑ふと、彼女も一緒に笑ひこけた。

「おや！ おや！」

啓吉は苦笑した。が、心の裡では可なり愉快だつた。自分を尊敬して呉れる女性が、女中として働いて呉れる。こんな、自分に取つて、理想的な女中は無いと思つて居た。今度こそ、何時までも居て呉れるのに違ひないと思つて居た。

妻は、その晩、また子供を、お岸さんに負せて、一緒に本郷へ買物に行かうとした。
 啓吉は、冗談半分に云った。
 「おい、来た晩に、直ぐ本郷へ連れて行くのはよせよ。縁喜でもないぜ」
 「なに、今度は大丈夫ですわ」
 妻はさう云つて出かけた。初めて東京の夜の街を見に行くお岸さんも、可なり嬉しさうだつた。
 * * *
 が、その翌朝、啓吉が二階で、原稿を書いて居ると、妻が蒼い顔をして上つて来た。
 「あの、お岸さんがやつぱり、國へ歸るのですつて」
 「えつ！」
 駭いて啓吉は、妻の顔を見た。實際、妻の言葉を怪しきまには居られなかつた。
 「歸る！ 本當かい！」
 「本當ですわ」
 啓吉は、暫く妻と顔を見合はした。妻の顔にも、失望が讀まれた。暫くは、お互に言葉が出なかつた。
 「だから、本郷へ連れて行くのはよせと云つたんだぜ」と、啓吉が云つたけれども、妻も啓吉も笑へなかつた。がつかりして居た。情ない氣がした。

「そんなに早く歸るのなら、何うしたつて出て来たのだらう」
 啓吉は、誰に對してともなく、腹立しかつた。
 「お岸さんは、三月に女工を廢してから、赤倉と云ふ温泉へ行つて、女中をして居たのですつて、それが、此の頃、春と夏との境で、暇なものだから、つい東京へ出て来たくなつたのですつて。でも、直ぐ夏になるから、歸らなきやいけないのですつて！」
 「そんなら、初からさう云つて呉れ、ばいゝのに」
 啓吉は、可なり堪らない氣がした。無論、相手は啓吉が、女中に飢えて居ると云つたやうな心持を知らずに来たのであるから、向うに多くの責任を負はせられることではなかつたけれども、向うの一寸した出來心のために、無用に欣ばされたり、その欣びをたつた一晩で、裏切られたりすることが堪らなかつた。
 「ぢや、兎に角、俺が話して見るから、二階へ上げて呉れよ」
 啓吉は、自分が説きさへすれば、事情を云つて頼みさへすれば、屹度歸ると云ふ決心を、翻すだらうと思つて居た。
 妻と入れ代りに、女が上つて来た。
 「本當に歸るのですか」
 さう云つた啓吉の言葉に、一寸相手を怒むやうな響の籠るのを、何うすることも出來なかつた。
 「私、あの本當に歸らせていたゞきたいのです。もう望みを

達したのですもの。先生にお目にかゝつて、一日でも置いて下さつたのですから。それでも本望を達したのです」
 女の云つて居ることに、嘘はないやうだつた。
 「そら、貴女はそれでいゝかも知れないけれども、僕はもう少し居て貰ひたいな。貴女の都合ばかりを考へるのは、少しひどいな」
 「でも、先生！ 私初から、二三日しか居ないつもりだつたのです」
 「それなら初から、さう云つて呉れなければいけないなあ。僕も家内も、女中がないので、困りぬいて居たときに、貴女が来て呉れたものだから、妻も僕もすつかり欣んで居たのです。それなのに、直ぐ歸るなんて、まるで貴女に裏切られたやうな氣がするな」
 女は、一寸情氣たやうに、顔を赤くして居たが、なか／＼頑強だつた。
 「でも、私先生にお目にかゝる外には、何にも目的がなかつたのですもの」
 「でも、折角来たのだから、方々を見物して歸つたつて、いぢやありませんか。赤倉へ歸つたつて、やつぱり奉公をするのでせう。ぢや、僕の家で、奉公して呉れたつて同じぢやありませんか。もつとも、貴女が東京で、何か外の職業を求めようと云ふのなら、僕が出来る丈便宜を計つて上げますよ」

が、不思議に、相手は執拗だつた。
 「でも、先生！ 私本當に、赤倉へ歸りたいのです」
 「そんなに、赤倉へ歸りたいのですか」
 「さうです。私本當に赤倉の自然が氣に入つて居るのです。赤倉はいゝところですよ。先生にも是非來ていたゞきたいのです。是非赤倉へ來ていたゞきたいのです」
 「そら、赤倉へだつて行かないことはないけれども、折角東京へ來たのだから、せめて三月か半年でも、東京を見て行つたらどうです」
 啓吉は、東京生活に就いて、又もし彼女が、希望さへあれれば、得られさうな職業に就いて、いろ／＼彼女を説いた。が、啓吉がいくら説いても、彼女は歸ると云ふ意志を翻さなかつた。啓吉は、到頭諦めずには居られなかつた。
 「ぢや、一體何時歸るのです」
 「國から、お金が着く筈ですから、それが來たら、歸らうと思つて居ますの」
 「さうですか、ぢやまあ仕方がないから、出来るだけ、ゆつくりして行つて下さい。東京見物でもして、それから僕の仲間の河野や芳川などの顔も、見て行つて下さい！」
 さう云つて、啓吉は女を下へやつた。「掌中の玉を失ふ」、大げさに云へば、そんな氣持がして居た。が、相手が、何うしても、決心を翻さない以上、出来る丈好遇して、歸してや

らうと思つて居た。

金か来れば、歸ると云つて居るにも拘はらず、彼女のところへ、金は仲々来なかつた。そのうちに、彼女は妻や啓吉と、日にまし、親しんで行つた。

彼女は快活な、自由な、話ずきの女だつた。つまらないことにも、直ぐ笑ひこけてしまふ女だつた。内氣な話下手な啓吉の妻は、彼女に感化されたやうに、二人でよく笑ひ合つて居た。二三日経つうちに、彼女は少しお轉婆ではあるが、女工や女中をしたやうな卑しさが、微塵もないことが判つて来た。その上段々話して見ると、彼女は駭くほど、文壇の消息に通じて居た。

「先生！ 井口さんは、良友ですわえ」

彼女は不意にそんなことを、訊いたりした。

「あゝさうだよ」

「ぢや、岡島さんは」

「ありや、僕の仲間だけれど、良友悪友に關係なしだよ」

啓吉は、内心可なり可笑しかつた。彼女は、またこんなことを云つた。

「先生！ 此間私達の友達の間で、何々するよさがあると云ふ言葉が、流行つて居ましたの。今でもあんな言葉お使ひになつて！」

啓吉は、彼女が下らないことまで知つて居るのに驚いた。よさがあると云ふ言葉は、『×××』と云ふ同人雑誌をやつて居た若い連中の仲間語で、文壇の一部に、ホンの一寸流行して居る言葉に過ぎなかつた。

彼女は、またこんなことも訊いた。

「先生！ 芳川さんは、銀座を散歩していらしたとき、蝙蝠傘の柄で、女の袖をひつかけたことがあるつて、本當ですか」

「いや、僕はそんなことは知らないね」

「でも『ある日の芳川欣一郎氏』の中に、そんなことがありましたわ」

そんなことまで、覚えられて居るかと思ふと、作家であることも、一寸叶はないやうな氣がした。

そればかりではなかつた。彼女は、二階の掃除に上つて居る時など、よく掃除をしをへて、「先生！」と、甘つたる口調で呼びかけながら、啓吉にいろ／＼な話をした。それが凡て、作家に就ての話だつた。啓吉の友人の河野と某女流畫家との結婚の噂は何うなつたとか、新進作家の久野さんの奥さんは、本當に藝者だつたのかとか、工藤秀雄さんは、今でも女優だつた奥さんと一緒に居るかとか、彼女は文壇の事及び人について、表面裏面のあらゆる消息に通じて居ると云つてもよかつた。

が、啓吉は最初、彼女に對して、全然心を許しては居なかつた。啓吉を突然訪ねて来た大膽な行動や、直ぐ歸ると云ひ出したことが、なんとなく氣になつて居た。その上、彼女は自分の姓名をハッキリとは、名乗らなかつた。生家の所在も、ハッキリとは教へなかつた。打ちとけて居ながら、ある程度まで来ると、それ以上は、得體の知れないところが残つて居た、啓吉も相手に對して、最後の警戒は解いて居なかつた。なるべく、彼女に一人留守をさせるやうな機會は作らなかつた。

が、彼女が来てから、三、四日目の晩だつた。啓吉は、妻と彼女とを連れて、神樂坂へ散歩に行つた。神樂坂の通の本屋の前へ来たときだつた。啓吉は、いつもするやうに、足を止めて、店頭の雑誌などを、素見かして居た。

すると、彼女は、啓吉の子供を負ひながら、つか／＼と店の中へ、は入つて行つたかと思ふと、新刊書の並べられてある書棚を見て居たが、突然、

「あら！ 先生の御本がありますわ！」と、頓狂な聲で叫びながら、その書棚の中に、飾られて居た啓吉の『出世』と云ふ、創作集をとんと、勢よくつつ突いた。

其處に居た學生らしい四五人の客が、駭いて啓吉と彼女とを見比べた。啓吉は赤くなつた。彼は、妻を促すと、コソコソとして、本屋の店頭を離れた。

が、啓吉は彼女の行動を非難して居るのではなかつた。否、彼は却つて、彼女の愛讀者としての純眞を感じずには居られなかつた。彼女の頓狂な聲の中には、啓吉の本を發見した欣びが、子供が珍らしい物をでも見付けたやうな欣びが、明かに響いて居た。彼女が勢よく、とんと突いた動作は、純眞そのものだつた。其處に何の作爲も技巧もなかつた。それは、啓吉の作品を心から愛して呉れる者の、偽らざる所作に違ひなかつた。

啓吉の彼女に對する疑惑や警戒は、その時以來、少しも残つて居なかつた。啓吉は、彼女を信じ切つた。いな、彼女に對して、ある愛着をさへ感じ始めた。

歸る歸ると云ひながら、彼女の滞在は、一日一日延びて居た。金は、彼女に着いたらしいが、彼女は歸るとは云はなかつた。東京生活の、彼女の所謂よさが、段々分つて来たのだらう。彼女は到頭、七月の初まで、啓吉の家に止まつて居てもいいと、云ひ出した。

彼女の滞在が、永引くに連れ、啓吉の彼女に對する愛着は、だん／＼明かな形を、とり始めて居た。啓吉は、彼女が自分の近くに居ることを、いつも明かに感じて居た。彼女の一舉一動に、自分の注意が、異常に惹き付けられて行くのを感じた。「先生！」と、呼びかける彼女の甘つたるい言葉や、大き

い眼に湛へられる微笑などが、彼にとつて、可なり魅惑的に感じられて来た。

啓吉のさうした心持に、油を注ぐやうに、彼女は、啓吉の妻が、子供を連れて湯に入つた留守などにも、二階へ上つて来て、啓吉の机の傍に、坐りながら、何時までも話しこんだりした。

そんな場合に、彼女はこんなことを云つた。「先生の作品には、戀を扱つたものが一つもありませんね」

それは、彼女の云ふ通りだつた。

「さうだねえ。さう云へば戀愛そのものを、書いたものは一つもないねえ」

「先生は、戀をなさつたことが、お在りにならないの？」

「ないね。僕は十何年来、女性に戀したことはないね」

「まあ！」彼女は、駭きながら、啓吉の顔をぢつと見詰めた。

「でも、先生は美人から戀せられたら、奥様がお在りになつても、一苦勞して、御覽になりますか」

その時、彼女の眼に、魅惑的的微笑が漂つて居るやうに、啓吉には思はれた。

さうした啓吉にとつて、彼女は兎も角も、彼に興味を持つて呉れた最初の女性に違ひなかつた。兎に角も（それが戀でなくとも）彼に向つて、動いて呉れた最初の女性に違ひなかつた。

彼は、自分の心に、十何年もの間、絶えて居た女性に對するある感情が、徐々に甦つて来るのを感じた。

啓吉が、彼女のことを友人の河野に話すと、彼は一寸駭きながら云つた。

「ええ。そんな女が来て居るのかい。然し、感心に君の家を選んだものだね。野口の家へなんかへ、飛び込まうものなら頗る危険だが、君の家なら、何時まで居ても安全だねえ」

友達の中でも、啓吉の品行を、盲信して呉れて居る河野は、さう云つて呉れたけれども、啓吉は自分自身、自分の安全を信ずることが出来なかつた。妻が、湯から歸つて来て、

「そら、お岸さんの肌は、綺麗だわ。色が、眞白で、キメが細かくて」と何氣なく云つた言葉などが、何時までも、啓吉の耳の底に残つて居るやうになつた。

啓吉が、彼女を連れて淺草へ、オペラを見に行つたのは、彼女が啓吉の家へ来てから、一週間も経つた頃だつた。

『女の世界』の讀者である彼女は、オペラ女優の生活なども、憧れて居るらしかつた。彼女は、口癖のやうに淺草へ行つて、

た。

啓吉は、中學時代に、誰人にも経験の、ありがちのやうに、ある女性に、ロマンチックな片戀をして以來、十幾年と云ふもの、女性に對しては、一度も興味を動かしたことはなかつた。友人の間でも、彼は女性に對して、少しの興味も、持つて居ない者のやうに、扱はれて居つた。が、啓吉のさうした態度は、彼の心の底から根ざして居るものではなかつた。ただ、啓吉は、自分の青年期を通じて、自分の醜い容貌や貧しい境遇のために、如何なる女性からも、興味を持たれないことを知つて居た。否知ることを、餘儀なくされて居た。さうした氣持は、だん／＼彼を反抗的にした。女性から興味を持たれない以上、自分も女性に對して、興味を動かすまいと思つて居た。

彼は、結婚してから、妻の愛を知つた。彼も妻を愛して居た。が、それは家庭的な、眞實な、當り前の愛であつた。戀ではなかつた。

その頃、彼は時々、一生涯如何なる女性とも、戀をしないで終る男の淋しさを考へて居た。女性から戀せられる氣持、さうしたものを、少しも知らずに、死んで行く男の、寂しさを考へて居た。さうして、三十を越して、さう云ふ望みが、もう殆ど無くなつて居る自分のことを考へると、一寸致命的な、救はれないやうな、寂しさを感じた。

オペラを見たいと云つて居た。

妻に對する手前もあり、啓吉が自分から、連れて行つてやると、云ひ出しかねて居ると、啓吉を信じ切つて居る妻は、

「そんなに、行きたいなら、先生に連れて行つて貰ふといわ」と、彼女に云つた。

それを機會に、啓吉は彼女を淺草へ、連れて行くことにした。それでも、啓吉は彼女とたつた二人で夜に入つてから行くことが何となく氣がさした。彼女も、或は同じことを考へて居はしないかと思つた。それで、彼は彼女と晝飯を喰べると、直ぐ誘つて見た。すると彼女は意外にも、

「先生！ 私、淺草の夜の氣分が味ひたいのですわ。先生にお差支へなければ、夕方から連れて行つて、いたゞきたいわ。何か先生にお差支へがあつて」と、云つた。

啓吉の本當の心持も夜の方がよかつた。若い女性と二人限で、夜の淺草へ行く。それ丈でも啓吉の生活には、絶えてなかつた経験だつた。

が、愈々出かける時になつて、啓吉は彼女の身装が、可なりみすばらしいのに氣が付いた。

「貴女が、介意なければ、家内の着物を、借りて行くといふ」

さう云つて、啓吉は妻に、着物を貸してやることを勧めた。

妻は、

「私のもよかつたら、どれでも着ていらつしやい」と、云

ひながら、夏物のお召と夏羽織と、帯とその他一切の身の廻りの物を出してやつた。
彼女は、妻の好意を感謝しながら、少しの躊躇もしないで、直ぐに着換へた。

啓吉の心は、一寸興奮せずには居なかつた。何となく、ロマンチックな氣持だつた。何となく自分の心が、浮々して居るのを感じた。二人で一緒に、夜の淺草へ行けば何か華やかな出来事が彼を待つて居るやうな氣持がした。

が、彼は何か妻に、濟まない氣持がした。妻の着物までを、彼女に着せて、妻を一人残して、たつた二人丈で、出かけて行くことを、可なり氣が咎めた。

が、啓吉の妻は、邪推だとか、嫉妬など云ふことを、夢にも感じて居ないやうだつた。彼女は、子供を背負ひながら、啓吉を十間ばかりも、送つて来て、其處で立ち止まると、
「さあ！ 父ちゃんに、ハイチャするのですよ」と、背中に負うて居る子供に云つた。

捨て置かれるのだと氣が付いた子供が、わあつ！と泣き出した。

すると、妻は、

「ぢや、美奈ちゃんも行きませうねえ！」と、云ひながら足の眞似を始めた。足を互に上げて、走るやうな恰好をしながら、前へ少しも進んで來なかつた。さうすることが、少し

恥しいと見え、顔を眞赤にして笑ひながら、それでも、子供はそれに紛らされたやうに、泣き止んでしまつた。

啓吉は、妻の無邪氣な態度に、心を打たれずには居なかつた。妻が、これほど、自分を信じ切つて居るのに、他の女に對して、少しでも心を動かして居ることを、恥ぢずには居られなかつた。

が、彼女と一緒に電車に乗り、灯のつき始めた淺草公園の中を、ざつと一廻りして、日本館の一等席には入るまでに、啓吉の心持は、だん／＼彼女に對して、緊張して行くのを感じた。

彼女は、啓吉と、擦れ／＼に坐つて居た。彼は彼女が、直ぐ傍に居ることを、全身の感覺で感じて居た。殊に、舞臺丈が明るくされて、觀客席が暗くなつたときなどに、可なり烈しい誘惑を感じずには居られなかつた。彼は、知らず知らず、闇の中にも白い彼女の襟足を、ぢつと見詰めて居たりした。

彼女は、淺草の夜の景物に酔つたやうに、言葉少なになつて居たけれども、時々啓吉の方を見て、微笑した。

五分、十分、彼女と肩を並べて坐つて居る中に、啓吉は自分の心が、だん／＼もどかしくなつて行くのを感じた。これが、お前に少しでも、興味を持つた最初の女だ。そしてまた、最後の女かも知れない。お前が、ホンのもう少し大膽になれ

ば、其處に、お前が少しも知らなかつた世界が生れるのだ。ホンのもう少しの大膽だ。ホンのもう少しの大膽だ。何も道徳的に反省する必要なんかありはしない。その位なことは、世間であり觸れたことだ。相手が、お前とたつた二人で、かうした場所へ來て居る以上、ある程度は、お前に許して居るのだ。もう少し大膽になつて、お前の生涯には、二度得がたいかも知れない機會を掴んでしまへ。啓吉は、自分の心に、そんな囁きを聞いた。

が、それと同時に、啓吉は自分の心に、他の別な心が、叫んで居るのを感じた。相手は、お前の作品を通じて、お前の人格を信じ切つて居るのだ。お前を信じ切つて居ればこそ、田舎から單身お前を頼つて、上京して來たのだ。お前を信頼して居ればこそ、お前とたつた二人、こんな場所へでも來て居るのだ。それなのに、その信頼を裏切ると云ふことは、お前が作家として、自殺してしまふと云ふことだ。お前の作品が、悉く嘘であつたと云ふことを、此の女に自白してしまふと云ふことだ。此女が、お前を慕つて來て居る理由を、自分で、蹂み躪つてしまふことだ。

さう考へると、啓吉は、彼女に對して、一足も踏み出すことは出來なかつた。

日本館を出ると、仲店の裏の鳥屋で、啓吉は彼女と一緒に、少し遅くなつた夕飯を喰つた。彼女と差し向ひて、飯を喰つ

て居る間も、啓吉は彼女に對する二つの心持の争に、惱んで居た。

が、其處を出て、厩橋まで、電車通を歩いて、其處から電車に乗らうとしたとき、彼女は直ぐ傍を、隅田川が流れて居るのを、啓吉から、教へられると、彼女は急に隅田川が見たいと云ひ出した。

啓吉は、彼女に隅田川を見せるために、厩橋を渡つて、外手町の停留場へ行かうと思つた。

橋の上は暗かつた。彼女は、啓吉と手が觸れ合ふほどに、寄り添つて歩いた。

初めて、東京の夜を見た彼女はロマンチックな恍惚たる氣持になつて居た。その氣持が、厩橋の上に立つて、夜の隅田川を見たときに、高層に達したのだらう。

「私、ほんとうに夢のやうな感じがするのです。先生と一緒に、こんなところを歩いて居るなんて、本當に夢のやうな感じが、するのです」

彼女の聲は、センチメンタルな感激に浸つて居た。啓吉は、今こそだと思つた。その、夜目にしろい手を、ぐつと握りしめるか——彼女の肩——それは、少しいかり肩だつたが——に、そつと手をかけさへすれば、と思つた。

が、啓吉の最後の理性は、醒めて居た。その上、彼女の借着して居る妻の着物が、啓吉の眼をいまして居た。彼は、

妻以外の女性に接近することを、罪悪だと思ふほど、道徳家ではなかつたが、どんな場合にも、家庭だけは、亂したくなかつた。妻と同じ家に起臥して居る彼女に……

その裡に、厩橋は盡きて居た。
啓吉は、何事もなく家に歸つた。家に歸つたとき、妻の顔を正視することが出来たのは、嬉しかつた。が、それと同時に、彼にとつては再び得がたい機会を、永久に逸したやうにも思つた。よく考へて居ると、平穩無事の家庭生活を送ることが、本當に人生の幸福であるか分らないと云つたやうな心持が、動かないでもなかつた。

それから後も、啓吉のその女に對する愛着は、だん／＼深くなつて行つた。その女の存在が、啓吉の心に、日にまし喰ひ入つて居た。が、啓吉はそれが不純な方角へ、募つてゆくのを制した。自分の愛讀者として、信頼し、慕つて來て居る以上、何んなことがあつても、その信頼に背くまいと思つて居た。

その頃、啓吉は著書の印税が、は入つたので、何に使つてもいい金があつた。啓吉は、身装の見すばらしい彼女に、着物を買つてやらうと思つた。實際、啓吉は彼女に對する愛着を、さう云ふ形式で洩す外はなかつた。

啓吉は、彼女を三越へ連れて行つて、新形の小紋の銘仙を

どで、彼女と接したら——。無論、強ちに、悪いとは思はなかつたが、今までプラトニクに支へて來た以上、このまゝ、何事もなく分れてしまつて、彼女の淨い記憶を、いつまでも持つて居る方が、いゝやうに思つた。

彼女が、歸る二三日前だつた。啓吉は妻の口から、彼女が一度結婚したことがあると云ふことを聞いた。「處女でなかつたのか、さうと知つたら」と、彼は一寸後悔したやうな氣持がした。が、處女でないことを、今になつて知つたのを欣ぶやうな氣持もした。

愈々歸るときになつて、彼女の着物と身の廻りの物は、悉く新しいものになつて居た。蝙蝠傘も、彼女は妻から、古い方を譲られて居た。たゞ帶丈が、——啓吉が新調してやつた着物に對して、あまりにみすばらしかつた。

「お前、わるいのを一つやれよ」と、云つた。が、妻は今年になつてから、その所持の帯を二本も、啓吉の命令に依つて、人に與へて居た。一つは困つて居る啓吉の親類の者に、一つは貧しい近處の娘に、——柔順な妻も道に、うんとは云はなかつた。

啓吉は、彼女に對する最後の好意として、中元の大賣出しがあつたのを幸に、安い羽二重の片側と裏とを買つてやつた。それは彼女が立出する朝だつた。彼女は嬉しがりながら、それを大車輪で、半日の裡に縫ひ上げた。

買つてやつた。啓吉は、彼女に對して野心を懷いて居ない以上、自分を慕つて呉れるものに、さうした好意を見せることを、少しも疚しいとは思はなかつた。

啓吉の妻は、その銘仙を見ると、

「柄はい、けれども、何うしてお召を買つて上げないの。銘仙は、何と云つても、不斷着ですわ。一寸何かの時には、着られないのですもの」と云つた。

が、女は啓吉の好意に可なり感激して居た。

「いゝえ！ 私なんか、銘仙だつて、ろく／＼着た事がないのですもの」と、云つた。

その後も、啓吉は出来る丈、彼女を好遇した。妻も、彼女を買物に連れて行く度に、きつと彼女に、身の廻りのものを買つてやることを忘れなかつた。浴衣を一二枚も與へた。

その裡に、到頭七月が來た。その五日に、彼女は赤倉へ歸ると云つた。そして、その三四日前から口癖のやうに云つた。

「先生！ 是非赤倉へ來て下さい。本當に赤倉の自然はいゝですわ。原稿なんかいくらでも書けますわ。私が、出来るだけ、お世話して上げますから、是非いらつしつて下さい」

啓吉は、それを口では約束した。が、心の裡では行かうとは思はなかつた。彼は、心の中で自分の心持が、彼女に對して、安全でないことを知つて居た。家庭を離れて、温泉宿な

「まあ！ お岸さんにばかり買つてあげるの」

妻は、初めて不平を云つた。

「いゝぢやないか。俺をはる／＼慕つて來たのだから、出来る丈のことはしてやつたつて」

啓吉は、心の裡でも、さう思つて居た。自分に對して、兎に角にも、興味を持つて呉れた最初の——同時に最後かも知れない女に、この位なことをしてやるのは當然だと思つて居た。

彼女が出發するとき、啓吉はわざと、見送りに行かなかつた。妻が、啓吉の家によく出入する男の子と一緒に見送りに行つた。啓吉は、自分で見送りに行つて、赤倉へでも行きたくなるやうな執着を残すことを恐れて居たから。

赤倉から、彼女は一度電報で、啓吉に來ることを促した。手紙も二三本よこした。

が、啓吉は最初から行くつもりではなかつた。その裡に、避暑の季節は過ぎた。彼女からの消息も絶えた。もう赤倉に居るのかどうかさへ分らなくなつた。

十月には入つてからの頃だつた。啓吉は、帝劇の廊下でひよつくり、舊友の法學士に會つた。彼は啓吉の顔を見ると思ひ出したやうに云つた。

「さう／＼君に會つたら、話さうと思つて居た。今年の夏、僕は赤倉温泉で君を知て居ると云ふ女に會つたぜ」

啓吉は直ぐ思ひ當つた。

「あゝさうか、お岸さんと云ふ女だらう」

「いや、さうぢやなかつたよ。何とか房子とか云つて居たぜ。何だか東京へ行つて、君に着物なんかこさへ貰つたさうで、君とお安くなかつたんだと云ふやうな評判が立つて居たぜ。君も、随分變つたもんだね」

さう云つて、友人は啓吉の肩を叩いた。

啓吉は苦笑した。が、啓吉の彼女に對する氣持などは、説明しても、普通人には分るまいと思つたから、それを甘受した。

「一體あの女は、赤倉ぢや何をして居るんだい」

啓吉は、それを本當に知りたかつた。

「よくは、知らないが、あまり評判はよくなかつたぜ。避暑客相手の高等淫賣ぢやないかと云ふ噂があつたぜ」

「さうかねえ。僕も少し變だと思つて居たよ」

啓吉は、友人の手前、口でさう答へたけれども、心の裡では砂を噛み潰したやうなイヤな氣がした。

幕が開いた後も、彼は喫煙室に残つて、考へて居た。高等淫賣——純眞な愛讀者、そんなことを考へると自分の彼女に對したプラトニックな態度などが、忽ちにして、一個のカリカチュアになり了るのを感じた。彼は、暫らくの間、頭の中で幻滅の苦さを、噛みしめて居た。

が、相手が何であらうとも、自分に對して純眞な愛讀者として近寄つて来た以上、それを純眞な愛讀者として扱ふことは當然な正しいことだと思つた。たとひ、他人から見れば、それが高等淫賣に弄ばれたことにならうとも。

が、啓吉は不快な幻滅に堪へながら、彼女が果して、そんな卑しい女かと、心の底から考へ直して見た。

その時にふと、彼女が神樂坂の本屋の店頭で、啓吉の創作集を見付けると、

「あら！先生の御本がありますわ！」

と、叫びながら、とんと勢よく突いた姿を思ひ出した。ワイルドであるけれども、純眞な彼女の姿が、マザ／＼と啓吉の頭の中に浮かんで来た。それは、愛讀者の面を被つた高等淫賣などには、逆さまになつても出来ない事のやうに、啓吉には思はれた。

さう思ふと、啓吉ははれ／＼と、救はれたやうな氣持がした。彼女の「淨い記憶」は、自分の頭の中丈では、永久に汚されずに残るだらうと、啓吉は思つた。

肉親

私は、肉親と云ふものに多くの親愛を、感じ得ない人間だつた。義務や責任を感じて、——その義務や責任が、あまり重すぎるせゐか、私は親愛を感じる餘裕がないと云ふやうに、自分で云ひ譯をしたのだつた。

今、生きてゐる父母に對してさへ、その生活を保證しなければならぬと云ふ重くしい義務を感じる外は、私は無關心である。

今、私が去年亡くなつた兄のことを書くのも、弟としての特別な愛情があるのではない。今私の心に、外に何にも書くことがないので、亡くなつた兄の事でもかいて見ようかと思ふ丈である。

私達の兄弟は、不思議に親密でなかつた。それかと云つて、仲が悪いのでもなかつた。兄弟が親しくすると云ふことが、妙にテレくさいと云つたやうな、氣づまりだと云つたやうな氣持からいつの間にか、疎々しくなつて行つたのだつた。私は、兄弟と永い間同じ家に居て、ロク／＼向ひ合つて、話し合つたことがなかつた。お互に用があるとか、訊き

たいことがあると、大抵は母を通じて辨じたのだ。

「お母さん！ 寛の試験は、どうだつたの？」

兄は、私が目の前にゐても、私には訊かないで、母に訊いても趣味が、何處か似てゐたので、時々一緒に釣に行つたりすることがあつたが、仲兄とは何處へも一緒に行くことがなかつた。一緒に行つたことがないばかりでなく、同じ中學に兄が通つてゐると云ふことが、私は何だか嫌だつた。私は學校で赤ちやけた小倉の服を着てゐる、兄の姿を見ても、何だか氣の引けるやうな恥しいやうな氣持がした。人から、兄のことを云はれても私は嫌だつた。

何故、そんなに兄が嫌だつたのか、私にも十分分らない。が、恐らく一番近い原因は、兄があまり自分に似すぎてゐるためであつたらうと思ふ。

兄は、容貌も私に似てゐた。歩き態や眼の近いところなども同じだつた。兄は、つまり客觀化されてゐる私だつた。その兄の無恰好な歩き態や容貌が、私に絶えず「お前もあんな